
Happy Star's

八神カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy Stars

【Nコード】

N2682P

【作者名】

八神カイト

【あらすじ】

それは些細な出来事。何でも無い、日常的にある事……だった。でも、『俺』はそれで恋をした。でも、『私』はそれから恋をした。これは、そんな『俺』と『私』の物語。

ブログ side：孝介

衝撃だった。

只、その一言でしか言い表せない程、あの時の自分は驚いていた。

その抗い難い事実には。

いや、そして何よりも。

その事実を認識した瞬間、認めてしまった自分自身に。

あの日。あの時。

この陵桜学園高等部の入学式の日。

編入生として外部から入った俺を襲った衝撃は。

その日から、『俺』という存在をまた変えてしまった。

これは

そんな俺とアイツの

俺達の物語だ。

ブローグ side : かがみ

特に何とも思っていなかった。

あの時の自分は、特に彼を気に掛ける事も無かった。

唐突に、自分に話し掛けて来た彼を、

(何か、変な奴……) というぐらいの認識でしか見ていなかった。

そう。その時は思いもしなかった。

真逆、彼が私にとって何よりも。

そして、誰よりも大切な人になるなんて事は。

未だ入学式を迎えたばかりの私には……。

到底、想定外の事だったのだ。

これは

そんな私とアイツの

私達の物語です。

出逢い

S i d e : 孝介

陵桜学園じょうおうじやまとはある県内にあるマンモス校。

一学年、凡そおおよそ13クラスも有るといふ巫山ふみやま戯た馬鹿でかい高校。

其処の高等部に、外部から俺は編入して来た。

そして、今日はその高校の入学式当日。

今日も俺は、トースト一枚・ハムエッグ・ブラックコーヒー二杯で軽く済ませ、

何時もの通り、余り気乗りしない気分アパートを出た。

「お　おはよ、孝介君。今日は珍しくパリッと粧めかし込んでやってどうしたの、一体？」

そう、憂鬱な朝から元気な声で声を掛けて来た人は、このアパートの管理人、櫻井澪。さくらいみお

確か、未だ20代後半だった筈。

今迄も何度か彼氏は居たらしいが、何れも何故か長続きせず三ヶ月以内に別れているらしい。

しかし、端から見ても美人で明朗快活な彼女に、惚れる男は未だ後を絶たず。

今日も今日とて、道行く知らない人に告白されるのだろう。最早、名物……否、迷物だ。

「……ああ、澪さん。昨日言っただろ？ 今日から彼処の高校に通うんだよ。

んで、今日はその入学式。新品の制服なんだから、そりや当たり前だろ？」

「おろ？ …………… あ〜そっかそっか。そういや、そんな事言っただけ。

いや、すっかり忘れてたよ、あたしや。って、コラ！ その前にすべき事があるでしょ？」

もうボケが始まってしまったのだろうか？ と少々心配しながら話すと、

人差し指を立てながら、「コラ！」と叱り諭す様に顔を近づけて来る。

彼女の良くも悪くもある癖だ。これの所為で勘違いして惚れた男も多い。……らしい。

俺も正直、迷惑だ。例えこっちにその気が無くとも、彼女はどう鼻^ひ真^ま目^めに見ても美人だ。

その上、今は余り時間に余裕が有る訳でも無い。

「は？ すべき事？ そんな事有ったっけ？ ああ、そうか。朝のキスが未だでしたね。」

だからか、少し意地悪でもして戸惑ってる隙にさっさと行こうと思っただけだ。

そして、俺は目の前にある彼女の顎に手を掛け、顔を近付けた。

……しかし。矢張り、俺も未だ寝惚けていたのかも知れない。

「お　朝から大胆だねえ　そんなじゃ、戴きます。」

「ん！？　んんっ！（し、しまった！　そういや、そうだった！）」

そう、そうなのだ。彼女は自他共に認める程のキス魔……いや、キス好きだったのだ。

昨夜も迂闊な事はしないようにしようと、自身を戒めたにも拘わらず^{かが}の所行。

どうやら、自分も初日と言う事で少し緊張していた様だった。

そんな事を^{cub}熟熟と考えると、何時の間にか長いキスは終わっていた。

彼女は、キスを始めると自分が満足する迄、決して離してくれない為、

只管、待ち続けるしかなかったのだった。

「プハッ！ …… 全く、朝っぱらから舌入れないで貰えますか？」

「何言ってるのさ。そっちから誘って来たんでしょ？」

「そう言う事を言っているんじゃない！ アンタ、解つてて言うてるだろっ！」

「そりゃモチのロンロンって奴 うん、朝から美味しい思いをありがとう」

「って、違うわよ！ 私が言いたいのはそうじゃ無くって！！」

「……………ハア。それじゃ、時間も無いのもう行きますね。」

「あ、ちょっと！ 未だ忘れもの、言って無いわよ！」

「……………ハアア。オハヨウゴザイマス、管理人サン。」

「うん、宜しい。それじゃ行ってらっしゃい」
「ブン……！！ノシ」

そう。彼女は、朝の挨拶を忘れていたのだった。

妙な所で律儀というか、義理堅いというか、お堅いというべきか…

…。
そんなこんなで、こっちも朝から美人なお姉さんとのフレンチキスという、

世の男子が血涙を流しながら悔しがる程の、美味しい思いをしながら初登校をした。

その日が、自分にとって正に運命の日になるとも知らずに。

side: 陵桜学園

「はあ〜〜〜……………本当にでっかいな。てか、広いな。」

「じりゃ、早目に地図を覚えなきゃ、最悪迷子になっちまうぞ……」

「まず、そのでつかさに俺は思わず気圧された。しかし、そんな事で怯んではいけない。」

「何せ、これから三年間は通う予定なのだから。早い内に慣れておかなば。」

「そう気合いをこっそり入れながら、クラス表が貼ってある掲示板まで歩いて行く。」

「其処は一発で判った。何せ、物凄い人が集^{たか}っているのだから。アレで判るなと言う方が難しい。」

「一応、俺は視力が両目共2.0はある為、離れた所からも自分の名前がバツチリ見えた。」

「……ふん。俺は1-Aか。……ん？」

「自分の名前を早い内に見付けてしまい、少々時間を持て余し、何をしようかと考えていると、」

「視界の端に、何か飛び跳ねている物体…基、人が見えた。」

忙しい奴だなあ……と思いながら、ソイツを何気なく見た。……見て、しまった。

「んっ、よっと……あゝもっつ！ 全然、見えないじゃないのよっ
！！」

ツインテールという奴だろうか。両端で髪を結び、跳ねる度にその髪が同様に跳ねる。

そして、其処から見える横顔は綺麗ながらも、少々キツめの性格を思わせる。

そして、身体も御世辞にもグラマラスとは言えない。まあ、平均的なものだろう。

これと違って、特別な事は何も無い。……そう。何も、無い、筈だった。

だが、気が付いた時には、俺は彼女に声を掛けていた。

「……見えないなら、俺が代わりに見ようか？」

「は？ ……アンタ、誰？」

「君と同じ新入生だ。飛び跳ねている様が可哀相で、思わず声を掛けた。」

一応、両目共2・0はあるんで、こっからでも名前は見える。

………君の名前は？」

「……何か、今一気に入らない言葉だけど……仕方ないか。」

うん、それじゃ御願ひするわ。私は柊かがみよ。」

俺の余計な一言が少々腹に据え兼ねた様だったが、背に腹は代えられないと思ったのか。

俺の提案に乗り、名前を覚えてくれた。

「……柊かがみ。………判った。1 - Bだそうだ。」

「あ、ホント？ 有難う！ あ、出来れば序ついでで妹も見てくれない？

柊つかさっていう、私の双子の妹なの。」

「柊つかさだな、判った。………見付けたぞ。1 - Aだ。」

俺は、心の中で何度も彼女の名前を反芻し、その名前を探した。

だが、それも直ぐに見付かった。俺の隣のクラスだった。何故かそれが少し嬉しかった。

それを隠して、見付けた事を告げると、今度は彼女の妹を見付けて欲しいとの事だった。

妹？ と一瞬訝しんだものの、双子というのならばそれも納得だ。

その子も探すも、また直ぐに見付かった。俺と同じクラスだった。

「あ………そう………なんだ。そっか、あの子とは別々になっちゃったかあ。」

あ、本当に有難うね。助かったわ。」

「いや、気にしないでいい。只の気紛れだ。」

「…そう。あ、妹が呼んでる。じゃあ、私もう行くね。……っと、
そうだ。」

アンタの名前は？ 私だけ知らないのも何か、アレだし。」

彼女からの礼を受け、思わず照れ臭くなり少々ぶっきらぼうに返している。

何処からか泣き声に近い声が聞こえた。どうやら、彼女の妹の声だと言っ。

どうも、何時の間にか人の波に没まひわれて、逸はくれていたようだ。

その声のする方へ駆け出した彼女が突如振り向き、俺の名前を聞いて来た。

……何故かは解らないが、何時に無く硬い……緊張した声で俺は自身の名を告げた。

「……草薙。草薙孝介。」

「……そう、草薙ね。それじゃね、草薙。本当に助かったわ。」

そう最後に言うと、彼女は妹らしき女の子の許へ駆けて行った。

……成る程。確かに、彼女と同じ髪の色で、姉にべったりなお姉ちゃん子って所か。

ん？ ……へえ、あんな笑顔も出来るんだな。優しい……柔らかな笑顔。

ドクンッ！

え？ ……そんなばかな。これ……この感覚は……。アイ
ツの時と同じ……。

そんな。そんな事、あつてはならないというのに。こんな
事は、もう。

でも、これは……この事實は、認めなければならない。

其処から逃げては何も解決しない事は、骨身に染みて良く知っているから。

俺は。

彼女……柊かがみに
。

一目で、恋をした。

友達…？（前書き）

初めましての方は初めまして。八神カイトと申します。

私のもう一つの世界『無限にして無窮なる旅人』を御覧下さっている方は、

改めまして、有難う御座います。

此方は、『無限にして無窮なる旅人』とは違い、

息抜き・気紛れによる、本当の不定期更新になります。

故に、今日のように一日3〜4本投稿する事もあるれば、

一月……下手をすれば一年投稿しない事もあり得ますので、どうか御諒承下さい。

では、拙作を御覧下さい。

友達…？

side：孝介

あの後。驚きと懐かしさが入り交じった衝撃を受けた後。

何とか再起動出来た俺は、落ち着きながら昂揚するという、何とも不思議な気分の儘、

自分に宛がわれた教室へと足を向けた。

……これはついている。俺の席は、窓側の一番後ろの席の様だ。

後は、出来ればクラスに……せめて周りに騒がしい奴がいなければ、最高に万々歳なのだが。

「よっ。俺は久坂拓海くさかたくみっていうんだ。お前は？」

「……………草薙孝介。」

「そうか、結構格好良い名前だな。俺は拓海でいいぜ。宜しくな！
孝介！」

「……ああ、取り敢えず一年間は宜しく。」

「ん？ 一年間なんて水臭い事言わないで、三年間。いや、もっと
大学出ても宜しくしようぜ！」

何か分かんねえけど俺、お前が気に入っちゃまったみたいだしな！」

「……フ。変な奴。」

席に着いた途端、目の前に座って居た奴が声を掛けて来た。

少々患わしくはあったが、一人ぐらいい仲の良い奴を作っておいて
損は無いだろう。

そう思い、一応の挨拶はした。

……だが、俺が思ったよりは、どうやら少しは面白い奴の様だ。

そう結論付けると、ふ……と、何となく、久し振りに笑みが零れた。

すると、どうした事だろう？

握手した儘、目の前の奴が固まってしまった。……意味が解らん。

そついや、アイツラも初めて会った時、こんな反応してたなあ…。

あの時は、今と違ってもつと良く笑ってたからな。

アイツに至つちやあ、未だに俺が笑つと顔を赤くしやがる。

アイツは、俺とちゃんと血の繋がった兄妹だと言つ事を、最近忘れてはいやしないだろうか？

そんな事を熟熟思カウブい出していると、ようやくと目の前の奴が動き出した。

「お、お、お前…／／／ その笑顔は反則だろう？／／／／／」

「何だよ。男が照れても、ちつとも可愛く無いぞ？

それに気にするな。どうせ滅多な事じゃ笑わないよ、俺は。」

「そ、そつか。……それは良かった。いや、うん、本当に良かった。」

「……………なんだってんだ、全く。」

顔を赤くして独りごちる目の前の奴に、俺も聞こえない様に愚痴を一つ零しながら、

次々入って来る全く見知らぬ人達を眺めていると、一人だけ見た事のある人が現れた。

「…………えくと…………私の席は……………あ、あつた。ここだ」

ん？ あの娘は……………ああ、そつだ。あの子、柊かがみの妹。…………え
…と、名前は……………そつ。

「…………柊つかさだ。」

「ん？ お前、あの子と知り合いなのか？」

「…………いや。彼女とは一切、面識が無い。」

「いや、お前、面識が無いのに、名前も誰かも知ってるとか……………ハ
！まさか……………！」

お前、ストーカーか?!」

「だから、何でだよ！ その突飛な発想は一体、何処から湧いて出て来る?!」

「何だ、違うのか。なら、何で知ってたんだよ？」

「……違うに決まってるだろう。さっき、彼女のお姉さんと少し話をしたんだよ……偶々。」

「へえ……そんなとこ、k w s k!!!」

「だが断る。……そんな事より、そろそろ先生らしき人が来るぞ？」

思わず声に出してしまった彼女の名を、耳聴く聞き咎めた目の前の奴が、しっこい。

しかも、人をストーカー呼ばわりかよ。

一応、良いタイミングで先生が来てくれ、その追求も直ぐ様止んだ。

……そんな事応えられるかってんだ。

こちららだつて、未だ心の整理が出来てないっていうのに。

その後、みんな揃って入学式に出、戻って来てから自己紹介を始めた。

……てか、此のクラスの担任……なんだろうな。あの関西弁の先生が。

何だが、今年は……いや、今年から五月蠅い一年になりそうな予感がありました。

然^そう斯^こうしている内に、俺の番が回^こって来た様だ。

名前順の逆から回^こって行くから、メン^こドイ事この上無い。さっさと

終わらせてしまおう。

「…おし！ ほな、次は窓際が一番後ろからや！ ほれ、其処で頬杖突いとるアホ。お前や。」

…ガタツ ……草薙孝介。 …ガタツ…

“……………え？ それだけ？”

「い、いやいや。もっと他に言う事あるやろ？」

「いいえ。早く次、どうぞ。彼が今か今かと待ち侘びている様ですので。」

「ほ、ほづか。友達思いの良い奴なんやな。」

「いえ、真っ赤な他人です。」

“……………”

何か、物凄くシンとしている。だが、そんな事、俺の知った事か。
そんな俺の思いを汲んだのか、はたまた将又、只我慢出来無くなっただけか。
目の前の奴が、勢い良く立ち上がり注目を一身に集めた。

「はいはい！ 次、俺俺！！」

「あ、ああ。せやな。ほな、次頼むで。」

「イエス！ 俺は、久坂拓海！ みんな拓海って呼んでくれ！

後、野郎共みんな俺とダチになろうぜ！ 女の子達は、俺ともつと仲良くなるうー！！

三年間と言わず、大学行ってもみんな友達でいようぜ！！！！」

何か、今度は妙にハイテンションな奴が現れたな……。

そんなみんなの感想が、顔に如実に表れていた。

そして、どう反応したらいいのか全く解らず、その儘でいると……。

「いやいや、大学って気が早過ぎるやろ?! 未だ高校に入ったばかりで、ウチら!」

突然、目の前の奴の、隣の奴が立ち上がり、行き成り漫才を始めやがった。

「何を言ってるんだ、涼子。常に先の事を考え行動するのは、当たり前だろう?」

「いやいやいやいや!? それとこれとは全くちやうやろ!

……え? 何、この空気。間違っとするのウチ? ウチが間違っってるん?!」

「其処なりア充漫才師共。入学初日から廊下に立たされるんと、大人しゅう座んのと

……………どつちがええ？」

「「……………すみません。」

「つて、次はアンタやる！ 座ってどないすんねん！」

「そんな理不尽な！」

「それが社会や。早くに知って良かったなあ。アツハツハツハツハ……………」

何時までも終わらなそうな二人の息の合った漫才に、痺れを切らした……………というか、嫉んだ担任教師らしき人が、ドスの利いた声で二人を黙らして座らせた。

……………てか、次がその騒がしい片割れだろう？ 座らせてどうすんだよ？

とか、思っていたら、先生？ 本人からそれをノリツツコミした。

……俺、この学校に入ったの失敗だったかもしれない。

「……はあ。んじゃ、改めて自己紹介。私は香椎涼子。かしいりょうこみんな、これから宜しくね

あ、特に拓海の後ろに居るアンタ！

その協調性の欠片も無い所、この私が直々に徹底的に直してやるからね！！」

……やっぱり、とても騒がしい一年になりそうだった。

今日の終わり side：孝介

「……で？ 一体どうしてくれる？」

「別にええやん。入学初日に親友が二人も出来たと思えば。……なあ、拓海？」

「そうだな。俺は一向に構わんツ！」

「俺が構うんだよ、阿呆共。」

何故、俺がこんなに怒っているかというと、先程の自己紹介の所為だ。

アレの御陰で、俺がこの目の前の二人と一括り扱いひとくくにされてしまったのだ。

この先の事を考えると、これからずっとこいつらと一緒にいなきゃなんないのかと、

少々憂鬱になってしまっても、俺は責められないと思う。……そう、思いたい。

「全く……。そもそもだ。高々二丁三言話ただけで気に入ったとか、

どうかしてるんじゃないのか？ 正直、気が触れたとは思えない。」

「……いや、お前結構酷くね？ だってしょうがないだろ？

本当に、あれだけで何か、お前が気に入っちゃったんだからさ。」

「……………本当に変な奴。」

「それには同意するけど、絶対アンタにだけは言われたくない言葉やね。」

あー言えばこー言つとでも言う奴か。一応、会話は弾む様だ。

そんな阿呆な事を久し振りにしていると、誰か教室に入って来た。

「つかさー。準備終わった？ 私、もうそろそろ帰るわよ？」

「あ、お姉ちゃん、待って〜……えっと、これと、これを入れて……よしっ。」

「あ、ほら慌てないの。また転こけちゃうでしょ？」

「あ、うん、ごめんなさい。……よっと。……えへへ。」

「全く、もう。それじゃ行くわよっ。」

「うん！」

そう。彼女……柊かがみだった。どうやら、妹を心配して迎えに来た様だ。

……確かに、あの自己紹介時の慌てっ振りといい、今の落ち着きの無さといい、

心配になる気持ちは、非常に良く解る。

成る程……それならば、これからは毎日彼女の姿を拝める訳か。

それならば、この教室を宛がわれた事も悪くは無いな。

そう思いながら彼女達の事を、ずっと眺めていた。

彼女に気付いて欲しい気持ちと、気付いて欲しくない気持ちの狭間で揺れながら。

そんな事をずっと考えていたからか……俺は気付けなかった。

目の前に居たアノ二人が、ニヤツと笑いながら何かを画策していたなんて。

それにもっと早く気付いていれば、あの暴走は止められたかも知れなかったのに。

そうすれば、此奴等と親しくなる必要も無かったのに……。

いや、きっと、遅かれ早かれそうなる運命だったのだろっ。

アイツと同様に。

きつと、俺とコイツラはそうなる運命だったのだ。

でも、この時の俺には、そんな風に共に居る気は微塵も無く、予感すらもしていなかった。

side : 紫陽花莊^{あじぎこそう}

彼女達を見送ったその後。

何やら変な雰囲気を漂わせている一人を後目に、俺は一人で帰った。

……と言っても、今俺が帰る家は直ぐ其処だったりする。

のんびり歩いて20分前後の所にあるマンションが建ち並ぶ閑静な住宅街。

……では無く。その側にあるあからさまに古ぼけたボロアパート。其処が俺の住処だ。

少し話し込んで居た為か、昼過ぎになってしまった帰り時刻。

取り敢えず、俺の為だけに昼御飯を作って待っていてくれる、

管理人の滲さんに一言断りを入れ、着替えて来た。

途中、他の住人達に擦れ違い様、一応の挨拶をしたり。

滲さんに惚れ込んでいる大学の浪人生に睨まれたりと、今日も何時も通りだった。

その後は、今日は特に何もする事が無いので、その儘、管理人室に居た。

そして、今日も何時も通り、互いに慰め合った。

彼女に出来た彼氏との間が長続きしないのは、俺の所為でもある事は知ってはいたが、

それでも尚、この関係を止める事は出来無かった。

俺達は……互いに傷を舐め合う者同士なのだから。

そうして、今日も又、一日が過ぎた。

何時も通りの、変わり映えしない毎日と……。

ほんの少し。……それでいて、とても大きな変化を俺に齎^{もたら}して。

今日の終わり side：孝介（後書き）

如何でしたでしょうか？

御覧の通り、この『Happy Stars』：通称ハピスタ
r はぴ すたは、

短い文字数を書き連ねる小説にしたいと思っています。

精々長くても、5,000文字程度。

私のもう一つの世界『無限にして無窮なる旅人』が主に長文な為、

此方は短文にしようかと思っっている次第です。

長い方が良いと仰る方々は、申し訳有りませんが、どうか御諒承下
さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

今日の終わり side：柊姉妹

side：かがみ

最初のアイツの印象は（何か、変な奴…）だった。

行き成り話し掛けて来て、名前を見てやるだの、自分は名乗らずに教えるだの。

しかも、自分の名前を言う時に、何かおかしかったし。

……一応、見た目は……その、悪くは無かった。うん。というか、まあ……格好良かった。

十人中九人は確実に、格好良いと言うだろう。

美人と言う訳じゃない。美少年ともまた違う。格好良いんだ。うん、他に言い様が無い。

だからか、何となく覚えていた。名前も、アイツの顔も。

草薙孝介。後でつかさと一緒に、名前が貼ってある掲示板を見た時。

アイツの名前がつかさと同じ場所に書いてあった。

そっか……アイツとつかさは同じクラスなのか。

何となく、いいなあ……と羨ましく思った。

その後、私はつかさと別れて緊張しながら一人で教室に入った。
…でも、幸か不幸か。

「あ、おっす、ひいらぎ。」

「柊ちゃん。高校でも、又直しくね」

「……日下部に峰岸。あんた達も同じ教室だったんだ。」

「えへへ〜！これで中学からずっと一緒だな！」

「まあ、そっね。とんだ腐れ縁になりそっね。」

「しっふふ」

良かった。正直に言えば、心細かった。一人でも知り合いが居てくれるなら、とても嬉しい。

そんな思いで三人で話していると、先生がやって来て、滞りなく入学式は終わった。

そして、通例通りの自己紹介の時。

隣の教室……アイツが居る教室がヤケに騒がしく、楽しそうだったのが気になった。

その後。日下部達と別れて、隣の教室に行つてつかさを迎えに行った。

その時、ちよつとぐるりと教室の中を一通り見回して……アイツを見付けた。

でも、何故か直ぐに目を背けて、つい、つかさを急かしてしまった。

……なんか、アイツからずっと視線を注がれている様に感じたから。

……ちょっと自意識過剰な気もするけど、でも気になってしまつものは仕方ない。

危うく転びそうになるつかさに注意しながら、私達はその儘、帰途に着いた。

side:つかさ

何か、お姉ちゃんの様子がおかしかった。多分、私の教室に来てからだと思つ。

まるで、誰かから逃げる様に急いでた。……なんかあつたのかな？

でも、聞いても多分、お姉ちゃんは教えてくれないと思う。

だから、私もその事は聞かないで、今日あつた事を沢山話してた。

「へえ〜。日下部さんと峰岸さんも一緒だったんだあ〜。」

「うん、そうなの。御陰で少しホツとしちゃった。」

「へえ〜いいなあ。あ、でもね。こっちの教室にも面白い人達がい
たんだよ。」

「面白い人達？ それってどんな人？」

「えっと……あのね。確か久坂君って人と、香椎さんって人と……
後、草薙君って人。」

「……草薙？」

「え？ う、うん。そうだよ？ あのね。何かね。余り喋らない人
でね。」

自己紹介の時も、自分の名前だけ言って、すぐ座っちゃったの。

でもさっきの人達がね。その人と初対面なのに、何か親しくてね。

それで、先生がその三人を一括りにしちゃったの。」

「……………そ、そう。……………大丈夫なの？ その先生。」

「うん。何か面白い先生だったよ？」

「ふーん……………」

何かお姉ちゃんの様子がやっぱ変だ。多分、さっきの……………あの人だ。

「……………ね、ねえ、お姉ちゃん。」

「……………え？ な、何、つかさ？」

「お姉ちゃん、草薙君の事何か知ってるの？」

「へ？」

「だ、だって、何かお姉ちゃん、さっきから変なんだもん。」

「あ、ああ。そういう事。あのね？ あのクラス表の掲示板見たでしよ？」

あの時に、私達のクラスを覚えてくれたのが、彼なのよ。

「だけど、お礼を言わないで来ちゃったから、ちょっと気になっちゃって…ね。」

「あ、そうなんだ。それなら、ちゃんとお礼を言わないといけないよね。」

私も、明日一緒にお礼言うね。お姉ちゃんと一緒に。」

「え、ええ。そうね。やっぱりそうよね。お礼は言わないといけないわよね。」

「うん」「！」

なあ〜んだ、良かった。お姉ちゃんに何か酷い事でもしたのかと思っ
っちゃった。

それなら、明日はお姉ちゃんと一緒にお礼言わないとだめだよな。

でも、草薙君……いつ頃来るんだろう？ もし遅かったら……帰り
でいいよね？

何か、明日が少し楽しみになって来ちゃったなあ〜

でも……草薙君ってどういう人なんだろう？

今日の終わり side: 柊姉妹(後書き)

如何でしたでしょうか？

所で、つかさってみさおとあやの事、何て呼ぶんでしょうか？

これで合ってれば良いのですが……………；；；；

私は、アニメと桜藤祭しか知りませんので、今一其処等辺が判らず

………… orz

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

プロフィール 一年次

各オリジナルキャラ プロフィール紹介

草薙孝介（くさなぎこうすけ） 一人称：俺 イメージc v：緑川光

高一 男 1 - A所属 178cm 58kg 黒髪黒目 ショートヘア

好きなモノ：物静かな雰囲気 嫌いなモノ：協力させられる雰囲気

好きな食べ物：何でも喰う 嫌いな食べ物：無い

好きなタイプ：???? 嫌いなタイプ：騒がしい奴・人に干渉して来る奴

趣味：身体を鍛える事・勉強 特技：武術一般（剣道五段相当、空手・柔道・合気道・三段相当）

主人公。外部からの編入生。編入試験を満点通過したが、答辞はメンドイので辞退した。

本人は気付いていないが、実は可成り格好良い。そして、笑顔が綺麗。

親友達ですら未だに彼の笑顔は見慣れない。況^ましてや、初めて見た拓海では言わずもがな。

本来の彼の性格は、今と昔とで少々違う。彼自身も自覚してはいるが、直す気は毛頭無い。

酒と煙草は二十歳から。という、実は少々お堅い性格でもある。

両親は外国で働いて居り、一人居る妹が共に向こうで暮らしている。

その他の親友達も、皆外国で妹と共に居る。孝介だけが日本に残った。

武術の腕が、相当と書いてあるのは、段位に受かった直後、何れも辞退しているから。

理由は、段位持ちがその腕を振るうと過剰防衛になってしまう爲、身を守れないから。

勉強は好きだが、予習・復習はしない。というか、する必要が無い。でも好き。

今居るアパート『紫陽花荘』^{あじやんかそう}には、中学二年の頃から住み着いてい

る。

その頃から既に、管理人の漣とは身体の関係がある。

入学式の時に出逢ったかがみに一目惚れする。

何やら、可成り暗い過去がある様だが……果たして。

久坂拓海（くさかたくみ） 一人称：俺 イメージcv：小野坂昌也

高一 男 1 - A所属 175cm 60kg 茶髪黒目・ツンツン頭

好きなモノ：楽しい事 嫌いなモノ：湿っぽい雰囲気

好きな食べ物：涼子の料理 嫌いな食べ物：不味い料理（但し涼子の失敗作は除く）

好きなタイプ：香椎涼子 嫌いなタイプ：涼子にちょっかい出して来る奴・親友に絡む奴

趣味：スポーツ全般 特技：人助け

主人公の友達その一。スポーツ特待生。勉強成績の方は今一つ。但し赤点は今の所無し。

涼子とは幼稚園時代から恋人関係。御互い一目惚れして即時告白した。

性格は、可成りサバサバしており、所謂クラスのムードメーカー。

涼子との漫才は、最早クラス名物。後に学年迷物へと進化する予定。趣味・特技にある様に、スポーツ全般が得意で色んな所に助っ人としている。

その爲、本来必要とされているバスケットに居る方が少なく、学校側から怒られているが、

バスケット共々助っ人として入った所では必ず好成绩を残している爲、余り強くは言われていない。

初めて会った孝介を何故か直ぐ様気に入り、自分の中で親友と認識した。

孝介に何か人に言えない過去が有る事は薄々勘付いているが、本人から話してくれる迄、

自分からは聞かない様になっている、非常に友達想いの良い奴。

果たして、孝介の口から彼の過去を聞ける日は、本当に来るのだからか……。

香椎涼子（かしいりょうこ） 一人称：ウチ イメージc v：池澤
春菜

高一 女 1 - A所属 160cm 体重・3サイズ共に国家機密
（……らしい）

淡い栗色の髪・黒目・肩までぐらいのセミロングヘア

好きなモノ：面白い事 嫌いなモノ：面白くない事・いじめ

好きな食べ物：大抵は大丈夫 嫌いな食べ物：所謂下手料理（ケテモ）

好きなタイプ：久坂拓海 嫌いなタイプ：拓海を狙っている奴・親
友にちょっかい出す奴

趣味：家事全般 特技：家事全般

主人公の友達その二。久坂拓海の彼女。勉強成績は普通……よりは少し上。

将来の夢は拓海の嫁。既に同棲中。高校卒業後、直ぐ様婚姻届を提出する予定。

性格は姉御肌で友達思い。クラスの相談役で主な相談内容は恋愛関係。

但し、頼まれ事や先生からの信頼などはみゆきの方が厚い。こちらはほぼ生徒専門。

趣味・特技で判る通り、家事関係には特に五月蠅い。

例えば、掃除時間にサボる奴には色んな意味で容赦しない。孝介にとっては傍迷惑はためいわくな存在。

拓海同様、孝介を何故か一目で気に入った。

但し、涼子は拓海一筋であり、そういう意味では無い。

今は、孝介に好きな人がいる事が一発で判明した為、拓海と悪巧み中。

その暴走の結果……………。

葛城唯（かつらぎゆい） 一人称：ボク イメージcv：花澤香奈

中二女 145cm 体重・3サイズ共に（ry 黒髪黒目・さらさらのロングヘア

好きなモノ：孝介 嫌いなモノ：孝介の敵

好きな食べ物：甘い物・孝介の手料理 嫌いな食べ物：苦い物・辛い物・美味しくない物

好きなタイプ：孝介 嫌いなタイプ：孝介を狙っている奴・孝介にちよっかい出す奴

趣味：孝介の秘密を知る事 特技：孝介の事を全て知っている事

孝介と血の繋がった実の妹。唯自身が戸籍謄本を調べた為、間違い無い。

因みに、名字が違うのは孝介だけであり、それ自体が孝介の過去と直接関わり合いがある。

ボクっ娘にしてロリっ娘。極度のブラコン。最近は少し危ない発言・行動が見られる事も。

だが、孝介の親友の内の一人と恋人同士。

でも優先順位は孝介>彼氏>>>>超えられない壁>>>>友達>その他。

両親と共に海外に居る爲、電話でしか孝介と会えない事が何よりの、そして唯一の不満。

百人中百人が可愛いと断言する程の美少女。でも重度のブラコン。

実情を知る彼女の友人からは、残念な美少女NO.1の称号を貰っている。

……事を彼女は知らないが、例え知っていても何も変わらないだろう、との友人達の結論。

孝介の過去を知る人物その一。その爲、彼が一人で居る事がこの上無く心配なのだが……。

櫻井漣（さくらいみお） 一人称：基本的には私（他にはあたし・

あたしや等々)

イメージcv：皆口祐子 女 168cm 体重・3サイズ共(r
y 黒髪黒目・ロングヘア

好きなモノ：朝の気怠さけだる 嫌いなモノ：自身の過去を思い出させる物

好きな食べ物：何でも食べられる 嫌いな食べ物：酸っぱい物(理由あり)

好きなタイプ：キスの上手い奴 嫌いなタイプ：女に暴力を振るう奴

趣味：孝介を擲揄からかう事 特技：キス

孝介が住み込んで居るアパート『紫陽花荘』の管理人。20代後半の一見大和撫子。

しかしてその実態は、酒に煙草に男と寝る……所謂ギャップ萌え？

住人の一人、浪人生に惚れられている事は知っているが、今は孝介と同じ布団で寝る関係。

自他共に認める程のキス魔、且つキス好きであり、酔うと殊更酷い。

酸っぱい物が嫌いな理由は、とある事を思い出してしまうから。

その事を孝介が知った為、互いに傷を舐め合い、慰め合う今の関係になった。

プロフィール 一年次（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、此の様な所でしょうか。

未だ其れ程、登場人物は居ませんが他にも知りたい人のプロフィール等がありましたらば、

どうぞ御遠慮無く御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

会話再び

side：孝介

「ん……ふわあ〜っ……んにゅ……もう……あさあ？」

……………げ。」

ん……なんだ……五月蠅いな……。昨日は疲れさせられたんだ。
もう少し…寝かせてくれ。

「コラ！ 寝言言ってる場合じゃ無いわよ！ ほら、早く起きて！
もう完璧に遅刻よ!？」

今、何時だと思ってるの!?!」

んん…? 知らねえよ。……俺は今、兎に角眠いんだよ、他ならぬ
アンタの所為で。

もう少しでいいから、寝させてくれよ……スウ……。

「って、だからコリアァッ!! 寝るな!?! もう九時過ぎてるの
よ!?!……」

「…………んあ？ 九時？ 別に九時ぐらいなら未だ…………平…………気…………
…………じゃねえ！！！！！！」

その言葉を聞いて慌てて飛び起きた俺は、急いで自分の部屋へ行き
着替えを済まし、

食パンを啜えながら、走って学校へ行った。畜生…………授業初日から
大遅刻になるとは…………orz

そして、勿論大目玉を喰う羽目になっちまった。

…………因みに。誰ともぶつからなかったからな。

その後。ニヤニヤ顔でこっちを見てくる目の前の奴二人を無視しな
がら、席に着き外を眺める。

…………どうやら今日も、快晴の様だ。…………仕方ない。

昨日は、漣さんがヤケに頑張ったから、凄く疲れてるんだ。

この陽気な天気の所為にして、一眠りするとしよう。…………オヤスミ。

side：三人称

「なんやなあ〜……こいつは妙に起こす気がせえへんのやけど……
どないしようか?」

“ どないしようか? って言われても……”

今、黒井先生の目の前にスウスウ寝息を立てている生徒がいる。

本当に気持ち良さそうに寝ているその姿に、思わず頭を叩こうと振り上げた手を降ろし、

繁繁しげしげと観察する先生……と生徒達。その綺麗な寝顔に、思わず皆して見惚みとれていた。

しかし、その儘ままでは埒らちが明かない。どうしようかと考え倦あぐねた挙句あげく
……結局諦めた。

「……ハア。まあ、ええやろ。別に軒搔こひいとる訳や無いしな。」

「え〜…先生、それちょっと鼻肩過ぎない?」

「……しゃーないやんか。ほな、お前、こいつ起こせるか?」

「……いえ、無理ですけどお……。」

確かに無理だ。そう皆が結論付けた時、又別の生徒が手を挙げた。

「でも、せんせー。それだと、彼だけ勉強遅れるんじゃないですか？」

「ああ、それなら何も心配ないやろ。」

「へ？ 何で？」

「……………ああ、みんな知らへんのやったな。こいつな……………？」

編入試験、満点で通ってん。せやから、何の心配もいらへんわ。」

“……………は？ ま、満点なんん~~~~~!!??!!??
!??”

「せやで。せやから、みんなも勉強で困った事あったら、ウチが草薙に聞くとええで。」

(キーン…コォーン…カァーン…コォーン……)お、どうやら

もう終わったみたいやな。

ほな、みんな御疲れさ〜ん。」

後程、それを聞かされた孝介が黒井先生を恨んだ事は、想像に難くなかった。

side：孝介 in 昼休み

……………ハア……………。今日は、災難だった。

何で、まるで転校生の様に、今更質問攻めにされなけりゃならん。俺は寧ろSだつっーのに。

「……………で？ お前等は何故、其処迄ニヤついている？」

「「いやいや。……………なあ？」「

「なあ？ じゃねえよ。つたく……………他人事だからって。」

「「まあまあ。「それより、どつやらお前にお客さんの様だぞ？」

「ああん？ 客だあ？ 今度は何処の誰……………だ……………よ……………。」

「……悪かったわね、私で。」

「アハハ……； お、お姉ちゃん……」

「………柊……かがみ？ それと、柊………つかさだったか。」

そりゃもう、驚いた。能^{あた}う限りに驚いた。真逆、向こうから俺に話し掛けて来るとは。

しかし、一体何の用だろうか？ 俺には全く身に覚えが無いのだが。

「え？ アンタ良く覚えてたわね、私達の事。妹の事まで。」

「……記憶力は悪くないと自負している。それより、一体何の用だ？ 姉妹揃って。」

隣（柊姉妹に身体を向けている為）からの視線が鬱陶しく、居心地が可成り悪い為、

事は早く済ませようと、彼女達を急かした。……腹も減ってるしな。すると……思い掛けない言葉を聞いた。

「えっと……その……あの……ね。この前……って言うか、昨日は……その……あ、ありがとう。」

「……………は？」

「い、いや……だから……！ 昨日の事よ！ 助かったって言うてんの……！」

「あ、ああ。その事か。それなら気にするなと言っただろう？ 只の気紛れだと。」

それに、礼ならば既に昨日受け取っている。改めて礼を言われる程の事じゃない。」

「う……そ、そういう問題じゃないの！ いいから、黙って受け取んなさい！！」

「……あ、ああ。分かった。」

何故に、そんなに怒る？ 何かそんなに怒らせる様な事でも言っているだろうか？

首を傾げていると、今度は妹の方が話し掛けて来た。

「えへへ。あ、あのね。草薙君。私からもありがとう！」

「いや……。君のお姉さんにも言ったが、気にしないでいい。只の気紛れだからな。」

「うん。でも、ありがとう！」

「いや、だから………まあいいか。用はそれだけか？」

……天然か？ 何とも不思議な妹との会話を終えた後、もう用は無

いかと聞いた。

早くしないと、売店の物が売り切れちゃうからな。

普段は、湊さんに弁当を作って貰っていたのだが、今日はそれも無い。

幸い、親から金はそれなりに貰ってるので、さっさと売店にでも行って買いたいのだが。

だが、そんなこちらの都合などまるで知らないこいつらは、

顰^{しか}めっ面と不機嫌な声で、俺を問い詰めて来た。

「……何？　なんか、私達がここにいちやいけない訳でもあるの？」

「いや、今日は未だ飯を買ってないんでな。早く買いに行きたいんだが。」

「あ、そ、そう言う事ね。」

「……あ、でも、今の時間帯だともう、コッペパンぐらいしか売ってないんじゃない？」

「……それだけあれば十分だ。」

もう話す事は何も無い。それだけ話すと、俺は席を立った。

……余り話していると、こちらもヤバイ。そろそろ……馬脚を現し
そうで危なかった。

……一応、何とかコッペパンは買えた。五つ程買って来て喰ってる
と、何か変な目で見られた。

??? 一体、何だったんだ、あれは？

妹

side:孝介

何となく、居心地の悪い昼食を終え、さつさとあのボロアパートに帰った時。

湊さんから、俺宛に電話があったと聞いた。

その相手を聞き、何となく足取りも軽く部屋に戻り、備え付けの電話で長話を始めた。

トゥルルル……トゥルルル……トゥル……ガチャッ！

「孝ちゃん…」

「ああ、唯。元気そうだな。」

「うん！ 孝ちゃんも元気だった？ ボクがいなくて寂しくない？」

葛城唯^{かつらぎゆい}。俺と血の繋がった実の妹。唯は今、外国に居る為、国際電話になっっている。

少し高くはあるが、唯と話せるならば、その程度は苦にもならない。

「ああ、そうだな。やっぱり、唯が居ないと寂しくはあるが、

一応こっちにも友達らしき奴等が出来たからな。少しは、マシになったださ。」

「え？ そうなの？ もう？」

妹の驚いた声に、思わず声を弾ませながら、あいつらの事を少し話した。

「ああ。何か、喧^{やかま}しくて変な奴等だけどな……まあ、悪くない。」

「……へえ……。孝ちゃんがそんなに褒めるなんて珍しい。

ボクも、その人達に一回、会ってみたいなあ……。」

「そうだな……。一度、お前と会わせてみるのも悪くない……かもし

れないな。」

「……………うん。（本当に珍しいなあ。……達以来じゃないかな？）」

何故か少し声のトーンが落ちた唯に訝しみながらも、話を続けた。

「？……………唯。アイツラは元気か？」

「…え？ あ、うん。みんな元気だよ。あ、代わる？」

「いや、いいさ。アイツラが元気な事さえ判ればな。後は、俺も元気だと伝えてくれ。」

「うん、それは勿論だけど……………」

……………うん？ 本当に、一体どうしたってんだ、唯の奴？ 妙に気落ちした声出しやがって。

……………つたく。兄というのは、大変だな。

「……で？ どうした、唯？」

「……え？」

「え？ じゃない。何を落ち込んでいるんだ？」

「う……。やっぱり、孝ちゃんには判っちゃうか……。うん。あのね。やっぱりね。」

ボク……孝ちゃんに……。お兄ちゃんに会いたくなっちゃったよ……。

……ひっく……。おにいちゃん……。あいたいよう……。！」「

……ハア。やっぱりか。全く……。しょうがない、甘えん坊な妹だな。

「……そうか。それなら、今度のゴールデンウィークにでも、こっちに来るか？」

「……ひつく………え？ ほ、ホントに？ いいの？」

ボク、おにいちゃんに会いに行ってもいいの？」

「ああ。但し！ ちゃんと、あの万年バカップル夫婦に許可を貰ってからだぞ？ いいな。」

「うん……うん……！ うん！！ ボク、絶対に会いに行くからね！

絶対だよ！ 孝ちゃん！！」

「ああ、俺も楽しみにしてる。ちゃんと、連絡は寄越せよ？」

サプライズとか考えるんじゃないぞ？ お前、こっちの地理に明るくないんだからさ。」

「うん！ 勿論！ 孝ちゃんにしっかりエスコートして貰うからね！！」

全く……現金な妹だな。……まあ、元気になったんならいつか。

唯に元気が無いと、俺達もいやだしな。……こいつには絶対に教えてやらないけど。

その後、結局アイツラと入れ替わり立ち替わり話し続け、深夜になっても終わらなかった為、

俺は澪さんに、アイツラは俺達の両親に怒られ、強制的に電話を切らされた。

翌日。どうしても上機嫌に成らざるを得なかった俺に訝し気な視線を超越す、

興味津々な目の前の奴等を、俺が只管ガン無視したのは、態態言う迄も無いだろう。

妹（後書き）

如何でしたでしょうか？

書いてて、私は改めて思いました。……何だろう？ このリア充。

可笑しいな……。確か、この主人公……心に陰がある設定だった筈なのに……；……；

何か、段々と極普通の人になっていってる気が……；……；

自身に疑問を抱きつつ。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

邂逅

side: 孝介

「Turn right here and go ahead
around 300 meters .

And turn left there , and go
straight on . There is the station
on .

「Oh , thank you !」

「You're welcome .」

「Bye .」

「Bye .」

「.....いやあ、本当に助かったよ.....」

「うん、草薙君ありがとう！」

「……いや、気にしないでくれ。只の気紛れだ。」

そう、これは只の御節介。本の……気紛れだった。

だが、この本の気紛れが、後に俺の人生を変えらるとは、夢にも思わなかったんだ……。

事の発端は、妹からの電話だった。

「孝ちゃん！ OKだった！ お父さんもお母さんも行って来なさいだってー!!」

「そうか、そいつは良かった。で、何時から来るんだ？」

「ゴールデンウィーク中ずっと！」

「……………は？」

「だから、ゴールデンウィーク中ずっと！ ずっと一緒に居られるよー！」

「……………そうか。で、何時頃こっちに来るんだ？」

「えっとね……………。日本時間の四月の二十九日の朝九時頃に、成田空港に着くんだって。」

「……………チョットマテ。その翌日の金曜日は平日だ。つまり休みじゃ無い筈だが……………？」

「うん。だから、孝ちゃんが学校休んで、案内して？」

「……………俺にサボれ……………と？」

「うん！」

「……………ハア。分かった、分かったよ。一日ぐらいなら構わないだろうさ。」

「やった！ だから、孝ちゃん大好き！……！」

「はいはい。俺も唯が大好きだよ。」

「…………えへへへへへ／＼／＼／＼／」

とまあ、そんなこんなで、早速俺は上機嫌で唯用の物を、幾つか買
いに出掛けた訳だ。

その帰り道で、偶々見掛けてしまった。

あいつの妹…………柊つかさが、外人に絡まれているのを。

どうするべきか、一瞬逡巡している内に、やたらちっこくて、やた
ら髪が長い…………女？

あれは確か…………同じクラスの…………泉…………こなた…………とか言ったか？

そいつが代わりに話を聞いている様だが、どう見ても通じてる様
には見えないな。

……………しょうがない。今日は丁度気分も良い。偶の気紛れぐらい
構わないだろう。

「What happen?」

で、冒頭のような事になった訳だ。だがその日は、御互いその儘別れた。

問題はその翌日だった。

side:1 - A教室 in放課後

此処最近の俺の上機嫌振りに、只管ひたすらニヤニヤして来る目の前の奴等を無視しながら、

さっさと帰り支度をしていると、珍しい事に声を掛けられた。

「あ、草薙君。」

「ん？ ……ああ、柊に……泉…だったか？」

「うん！ 昨日はありがとう！ あ、じゃなくて…昨日もありがとう！—！」

「うんうん。本当に、おかげで助かったよ。なんせ全く意味がわからなかったからね。」

「……ああ。昨日も言ったが、気にしなくていい。あれは只の気紛れだからな。」

「……草薙君って、もしかしてツンデレ？ リアルでしかも男にやられても萌えないよ？」

「は？」

……全く以て意味が解らん。こいつは一体、何語を話して居るんだ？
本当に日本語か？

「……なんだ、草薙君は一般人か？……。」

「アハハ……私もちよつと分からないかも； 泉さんは一般人じゃ無いの？」

「私は純粋な誇り有るオタクだからね！ ていうか、こなたでいいつてば。」

私、あんまそついう堅つ苦しいの苦手だしさ。」

「う、うん。……じゃ、じゃあ……こなちゃんです。」

仲良くなる事は構わないんだが……俺、もう関係ないよな？
もう帰っていいよな？

「……それで？ もう俺に用は無いやな？ 帰ってもいいか？」

「え？ あ、えつと、う「つかさー？ 迎えに来たわよ。」あ、お姉ちゃん！」

……柊かがみ……か。面倒な事になる前に、早々に退散するとするか。

「……じゃあな。俺はもう帰る。」

「あ、ちょっと待って。」

「……何だ？」

「あゝ、えっ……と、昨日も妹を助けてくれたって聞いて……その……有難う。」

「……いや、気にしないで良い。既に礼はお前の妹から受け取っている。」

「うん、まあ、そうなんだろうけど、一応姉として……ね。」

「……そうか。だが、彼女を助けたのは、俺だけじゃない。其処にいる泉も同様だ。」

「いやいや、私何の役にも立たなかったしね。」

「それでも、つかさを庇ってくれたんでしょ？ 有難う。姉として礼を言っわ。」

「いやいやいやいや、ドモドモノノノ」

「うん！ こなちゃん、本当に有難う！」

「あれ？ 何だ二人共もう仲良くなったんだ？」

……俺が此処に居る意味はもう無いな。気付かれると面倒だ。今の内に帰ろう。

何とかばれずにその場を後にする事が出来たみたいだ。

翌日聞いた……というか、久坂と香椎が勝手に話し始めたんだが、あの後、同じクラスの高良が、学級委員同士での話し合いが有るとかで、柊姉に話し掛け、

その儘、久坂と香椎が会話に入って、六人で仲良くなって、

互いに名前で呼び合う仲になったそうさ。

「お前の名前も教えてやったぞ。いい渾名あだなを考えて来るそうさ。」
とか言いやがった。

……余計な事を。だが、結局『草薙O「草薙君」』で統一する様だ。
大いに助かる。

それでも、目の前の奴等は俺を『孝介』と呼びやがるが……………。

……まあ、それぐらいなら構わない。……とは、絶対にあいつらには
言ってやらないがな。

そして、時間は中間テストを控えたゴールデンウィークに差し掛か
る。

邂逅（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、十話目にしてやっところさ原作主人公達が全員登場です。

……遅っ。

一年次である今は未だ、名字で呼び合う仲。

御互いに名前で呼び合うのは、どんなに早くとも二年次に上がって
から……と考えています。

……まあ、書いている内に早々と名前呼びになる可能性もあります
が……、……、……

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

妹の来訪

Side: 孝介

「あ、草薙君。おっはー。」

「……………ああ。」

「草薙君、お早う。」

「……………ああ。」

「草薙さん、お早う御座います。」

「……………ああ。」

「オッス！ 孝介！」

「……………ああ。」

「おはよつ、孝介！」

「……………ああ。」

……朝っぱらから、みんな元気な事だ。こちとら色々疲れてるとい
うのに。

「……なんやねん。気乗りせえへん生返事しよってからに。」

「……ちゃんと返事はしてるし、話も聞いている。問題無いだろう
?」

「大有りや、ドアホウ!!」

「まあまあ、涼子。孝介も、今日は特にそわそわしてるみたいだし、
しょうがないだろ?」

「せやけどな! でも程度ってモンがあるやろ?!」

………そんなにそわそわしていたか? 俺。………そうか。少しは
気を引き締めなけりやな。

唯に、浮かれてる所を見られる訳にはいかないしな。……俺にも一
応、兄の威厳とやらがある。

こんな感じで、最近はいつも俺の周りに何故か集まって井戸端会議

を始めやがる。

……全く何奴も此奴も。俺は基本的に騒がしいのは嫌いなんだが……。

しょうがない、我慢するか。これも、明日迄の辛抱だ。……つとそ
うだ。

一応は担任に休む事を伝えて置くか。……これも礼儀だ。

side：放課後

ガタツ：「あれ？ 草薙、どっか用事？」

「……柎か。ああ、ちよつと職員室にな。」

「え？ 何で、草薙君が職員室に？ 草薙君、何か悪いことでもし
ちやつたの？」

「幾らなんでも極端過ぎよ、つかさ。多分先生と何か話す事でもあ
るんでしょ？」

「……まあ、そんなものだ。じゃあな。」

さて。下手に勘付かれる前に、さっさと済ませて明日以降の準備でもするか。

流石に、今日ばかりは澁さんにも自重して貰わないといけないしな。

side：職員室

「失礼します。黒井先生はいらっしやいますか？」

「お？ おー、草薙。なんや、何かウチに用か？」

「ええ。今度の金曜日に、俺が休む事を御伝えしようと思ひまして。」

「は？ 何でや？ まさか、学校来るのが怠たるいとかがやったらシバくで？」

「いえ、その日は家族での行事がありました。どうしても休まなければいけないんです。」

「……ほづか、家族の用事か。せやったら、しゃーないわな。」

まあ、草薙の事やから大丈夫やとは思うけど、予習・復習はきっちりしとくんやで？」

「はい。それでは済みませんが、今週の金曜は休ませて頂きます。」

「おー。でも、あんまり何度も休まれても困るからなー。程々にせいやー。」

「分かりました。……では、失礼します。」

良し。ミッション・コンプリート。これで、心置き無く唯を迎えに行けるな。

……早く、明日にならないだろうか？ ……ああ、成る程。確かに浮ついてるな。

明日、妹と久々に会える事に、思わず笑みを零した孝介。

それを偶々見てしまった幾人かの女子生徒が彼に一目惚れした事など、彼が知る由もなかった。

その後。直ぐ様帰った彼は、即座に管理人に話を通し、さっさと明日の爲に寝てしまった。

そして、翌日。朝早く起きた彼は、誰も起きて来ない未明の中で、一人出掛けた。

side：成田空港

「……………ちよつと早く着き過ぎたかな？」

……………未だ、八時を過ぎたばかりだ。……………うん、早過ぎだな。

少しぶらぶらして暇でも潰すか。

……そろそろ、あいつの乗った便が到着する頃の筈なんだが……
……お、居た。

「(キヨロキヨロ)え……と……あ！ 孝ちゃ……ん……!!」

「お……唯。」

「孝ちゃん……!」 ギュウツ!

「おっ……と。よしよし、お疲れ様。良く一人で来れたな、唯。」

「もう！ ボクだってもう子供じゃないんだからね!」

「はいはい。」 ポンポン

「……むう……。やっぱりなんか子供扱いされてる気がする。」

「気の所為だよ、唯。」

「むう……………エへへ 孝ちゃんの匂いだあ〜／／／

それに孝ちゃんの暖かさに、孝ちゃんの優しくて大きい手に、孝ちゃんの厚い胸板／／／／／

うにゆ〜……………間違い無く、ボクの孝ちゃんだ ．／／／

「……………はいはい。取り敢えず、此処で何時迄もこうしてる訳にもいかないしな。

取り敢えず、今の俺の住処に行くか？」

「うん！ 今日是一日中、孝ちゃんの家ですつと孝ちゃんとゴロゴロ口してるう〜」

「そうか。んじゃ、観光案内は明日にして、今日は家でのんびりするか。」

「うん！……！」

相変わらず、可愛い妹の儘で安心したが……………唯？ 何故に漣さんと睨み合う？

後、其処な浪人生！ お前は漣さんに惚れてるんだろう！？ 唯を見て顔を赤らめるな！！

全く……油断も隙もありゃしない。

結局。その日は、唯の言った通り、俺の部屋で一日中引っ付いてゴロゴロして終わり、

その儘、眠くなった唯と一緒に俺も寝た。

翌日。こっそりマスターキーを使って覗きに來た澪さんと唯に、

又、一悶着あった事は……正直、誰にも言いたくはないな。

妹の来訪（後書き）

如何でしたでしょうか？

私は書いてて、更に改めて思いました。……なんだ、このバカツプル兄妹は？

あるえ〜？ おっかしいなあ〜…？ 血の繋がった単なる普通の兄妹の筈なんだが……；……；

ダメだ、このシスコン&ブラコン。早くなんとかしないと……orz

少々、自分自身で愕然としつつ。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

デート? ver. 唯

side: 孝介

「ふわあ~~~~」……………全く。唯も滲さんも、少しは自重してくれ。」

「……………はい、ごめんなさい。」

只今、二人を説教中。そして、今の言葉を締めに関、終わった所だ。時間を見ると、凡そ二時間程正座させていた様だ。……………はあ、しょうがない。

「唯。昼ちよつと前に、昼食がてら出掛けるぞ。その頃には足の痺れも収まってるだろ?」

「う、うん。あ、ありがとう……………!」

「あ、こら、無理に動くな。下手に転んだりしたら目も宛てられないぞ?」

ほら、俺に掴まれ。取り敢えず、ベッドまで運んでやるから。」

「……………うん／＼／＼／＼」

足と脇に手を差し入れ持ち上げて、唯をベッドの上に寝転がした。
……………何故顔を赤らめる？

そして、何故に澪さんは俺を睨みながら待ち続けている？ ……さ
っぱり解らん。

その後、澪さんは這々の体で管理人室へと這いながら帰って行き、
俺達は時間まで、昨日みたいにのんびり過ごしていた。

「唯……………もう終わったか……………？」

「あ、あとちょっと……………うん」と……………よし！ OK！ 孝ちゃん
くん、お待たせ ……！」

「ああ……………うん、似合ってる。今日は特に可愛いな、唯。」

「え？ ……えへへへへ……………／＼／＼／＼／＼／＼／＼、孝ちゃん
も格好良いよ？」

「そうか？ 有難う。少なくとも、唯と並ぶのに釣り合う様にはしないとな。」

「う、うん……／＼／」

「んじゃ、行くか。取り敢えず、都会に出て何か喰うか。何はともあれ腹拵えた。」

「うん！！」

取り敢えず新宿に出て、駅前のお店で昼食に舌鼓を打ち、

その儘ウィンドウショッピングと洒落込んだ。

一応、親から仕送られてくる金は結構貯めているので、問題は無い。途中で、唯が気に入ったであろうネックレスを買ってやった。

六桁とちよつとお高かったが、買えない額では無かったし。

それに何より、その太陽をモチーフとした物は、活発で元気な唯には似合ってると思ったから。

それを店から嬉しそうに着けてる唯を見れば、この程度の出費は何

の苦にもならない。

その後も、あつちを見てはこっちに興味を惹かれ、そっちに目を輝かせる唯を眺め、

その儘、外で夕食を食べ、九時頃になってようやくと帰って来た。

その翌日も、その翌々日も、その翌々々日も、彼方此方歩き回った。

…… 本当に、良く疲れないな、唯の奴。

その際。唯と腕を組んで連れ歩いて居た俺を、あいつらが見ていたとは、思いもしなかった。

事前に気付いていれば、少しは対策が出来たものを……。

そんなこんなで、ゴールデンウィーク最終日。その日の便で唯は両

親の許へ戻る事になった。

「うつく……………ひつく……………うう……………おにいちゃん……………」

「あ……………はいはい、泣くなよ唯。もう会えなくなる訳じゃ無いんだ
じゃ。」

俺とは、又何時でも会える。そうだろ、唯？」

「ひつく……………うん。」

「うん、良い子だ。アイツラにも宜しく伝えて置いてくれ。」

唯が家に着く頃には、土産もアイツラの所に着いている筈だから
な。」

「うん……………わかった。……………ねえ、孝ちゃん。」

「ん？ 何だ？」

「……………やっぱり、孝ちゃん……………日本こっちに居続けるの？」

「……ああ。それが、今の俺がアイツにしてやれる、最低限度の……唯一の事だからな。」

「……でも……！ あの人は……！」

「唯……！」

「……！」

「……唯、頼む。俺の最後の我が儘だ。……頼む。」

「……うん。ごめんなさい、お兄ちゃん。」

「……いや、悪いのは俺だ。……そう、悪いのは……全て……。」

「……おにいちゃん。」

「……いや、済まない、唯。つい湿っぽくしちゃまって……俺なら大丈夫だよ。」

「言っただろう？ 何時でも俺とは会える……と。……大丈夫だよ。」

「うん……。……じゃあ、孝ちゃん。ボク、もう行くね？」

「ああ。気を付けて……な。又、会える日を楽しみにしている。」

「うん、ボクも。それじゃ、又ね！ 孝ちゃん！！！」

そして、唯は帰って行き……。又、俺は一人になった。

なあ、玲れい。

俺、
やっぱり間違ってるのかな？

弾劾裁判……？

Side：三人称

「さて。では、これから草薙孝介の弾劾裁判を始めようと思う。」

“異議無し”

「……唐突に何事だ？ そして、何故に全員揃って俺を囲む？」

「それは、自分の胸に聞いてみい！」

「……………聞いても尚、解らないから聞いているんだが？」

只今、ゴールデンウィークが終わった翌日の放課後。

拓海・涼子・柊姉妹・こなたにみゆきまで勢揃いし、孝介の居る机を囲んでいる。

試験目前であるにも拘わらず……皆、暇人である。

極一部の面白くなさそうな顔を除けば、皆笑顔を浮かべていた。
…それが又、気味悪い。

一体全体何事かと、孝介が訝しむも、中々理由を話さず、終いには弾劾裁判ときた。

本気で理解不可能だった孝介の態度を、しらばっくれていると思つた拓海は、

此処に至る迄になつた経緯を示す証拠を、孝介に突き付けた。

「そつかそつか。飽く迄も知らず！ 解らず！ と逃げるか。」

「……いや、本当に分からないんだが………もう帰って良いか？」

“ダメに決まつてるだろう（でしょう・やろ）？！”

「………お前等、何時の間にそんなに仲良くなつてたんだ？」

「出会つた時からの運命だ。それはさておき！ 見る！ これが、お前を断罪する証拠だ！！」

そう言っつて、拓海が見せた物は、携帯の写メで撮った写真。

其処には、誰も見た事の無い程の綺麗な笑顔の孝介。

……と、その腕に引っ付いてる、古今稀に見る程の美少女。

どっからどうみても只のカップルである。……もう御解りだろう。

……そう！ 何と！

実は、あの時の唯との観光案内と言う名のデートを偶々目撃した拓海・涼子のカップルが、

こっそり写メでベストシーンを撮っておき、それを皆に見せ、今に至るのである。

それを見た孝介が、ようやくと全てを悟った。何故に今自分はこんな目に遭ってるかを。

「ああ、お前達も居たのか。それにしても良く撮れてるな。全く気付かなかった。

後で、俺にもその写真プリントしてくれないか？ あいつが喜ぶ。

「

「それは構わないが……つまり、お前は認める訳だな？ この時デ
ートしていたと言っ事を！」

「というか、わざわざプリントなんかしないで、お前の携帯から画
像送ればいいだろ？」

「ああ、俺携帯持ってないから。」

「え！？ 持ってないの?!」

「……私も持ってないんだけど……そんなに变かなあ？」

「いや、つかさの場合は意味が違っでしょ。」

「よし、分かった。写真の件は承知した。だが、肝心な事を聞いて
いないぞ！」

「さあ、さっさと答えろ！ この可愛い子ちゃんとは、一体何処で
どうやって知り合った?!」

「ん？ 産まれた時から。」

“……………は？”

「その写真の可愛い娘は、唯。俺の実の妹だ。」

“い、い、妹おおー？！？！”

「……………何故に其処迄驚く？ 俺とて家族はちゃんと居るぞ？
親友共々、皆海外に居るが。」

“海外！？ てことは、草薙（君・さん・孝介）は帰国子女？！”

「いや。俺は一度も日本を出た事は無いよ。」

“そ、そうなんだ……………”

「ああ。この前のゴールデンウィーク中に妹が、日本こっちに遊びに来て
な。

それで、俺が観光案内していた…という訳だ。」

“成る程。”

「……………にしても、お前等息ピッタリだな。」

“友達だからな（ね・ですからね）！”

「そうか。」

取り敢えず、孝介の彼女疑惑（？）は晴れ、霽^はれて自由の身となった孝介であった。

中間テスト

Side:1 - A教室

「はう〜。……。やっぱり、高校の勉強は難しいよう〜……………」

「そうですね……………。私も、最初の試験という事で、少し緊張していたのかもしれない。」

「むう〜…………。一夜漬けの効果は余り出なかったか…………。」

「……………くっ…！ やられた…！ 山勘を殆ど外された…！！ ちっくしょう…！！」

「アホウ！ ちゃんど、勉強せえへんからや！」

「幾らスポーツ特待生やからって、赤点だらけやと、（じり）陵桜学園おん出されるで？」

「……………そういうお前はどっただったんだよ？」

「へ？ う、ウチ？ ウチは…そのう…あのう……………う、ウチの事はええんや！」

拓海が赤点採り続けて、学年が離れ離れになる方が、よっぽど問題やる!？」

「……………誤魔化したな。」

「……………誤魔化したよね？」

「……………誤魔化しましたね。」

「うん、バッチリ誤魔化してるね。」

「……………う、五月蠅いっ／＼／＼」

「全く……………。みんなして、だらしないわねえ。」

「むう……………。そういうかがみんはどうなのさ？」

「ふっふっふん…。ホラ! どうよ!」

「わあ……………お姉ちゃん、凄くいい」

「むむう……………かがみに負けるのは、何か悔しい気がする……………」

「うおっ! まぶしっ!」

「……………てか、何で拓海はそんなにネタ知ってるん?」

「気にしたら負けだと思ってる。」

「……………さよか。」

「アハハ。でもねえ……………それでも、未だみゆきには負けてるのよね。」

「い、いえいえ。そんな私なんてとても／＼」

「全くだよ。平均九十点台とか、漫画やアニメの世界だけだと思ってたよ。」

流石に、御解りだろう。そう、かがみ達は中間テストの結果を報告し合っているのであった。

どうやら、明暗がはっきり現れた様で、上と下の差が可成り激しい様だった。

と、其処で只一人沈黙している人に気付いたこなたが、水を向けて来た。

「あ、そういやさ。草薙君はどうだったの？ テスト結果。」

「あ、そう言えば聞いてないわね。ほら、恥ずかしがらずにちゃんと教えなさいよ。」

「そつだぞ！ 俺達だって恥を忍んでわざわざ教えただ！ お前のも教えるー！」

「（……本当に騒がしい連中だな）ほら、全員で答え合わせするといい。」

それは暫く貸しといてやる。……じゃあ、俺は帰る。」

「あ……。本当に置いて帰っちゃったよ。」

「まあまあ。あいつが好きにしていって言ったんだから、好きにしちゃおうぜ。」

そんで……？ こいつの平均点は……と。……ん？ ……んん？

……んんんん？？？？？ な、な、なんだっ

てー……」

「うわっ！ お、驚いたあ〜……。なんやねん、拓海！ 急に大声出しよってからに！」

せめて『出すよ』って宣言してからにしいや！……」

「あ……あ……あ……（パクパク）」

「？ なんやのん、一体……………え？」

「ん？ 涼子までどうしちゃったのよ、一体。どれどれ……………つて……………嘘。」

「かがみさん？ あら……………これは……………凄いですね……………」

「ゆきちちゃんまで固まっちゃった。みんな一体どうしたんだろう？
ね？ こなちゃん。」

「うん、そうだねえ……………。どれどれ、ちょっとはいけん……………
な！？」

「嘘っ？！……」

“ぜ、ぜ、ぜ、全教科満点————ッッッッ!?!?!?”

その絶叫は、校舎内に響き渡ったとか、渡らなかったとか。

少なくとも、驚いた黒井先生が駆け付けて来るぐらいの騒ぎには、なっただろうな。

孝介の部屋

side:1 - A教室

あの絶叫の翌日の放課後。孝介はまたもや、みんなに囲まれていた。但し、前回の様に威圧感に囲まれたものでは決して無く、寧ろ何て言うか……その。

みんなして、孝介に頭を下げてお願いしていた。何をお願いしていたかと言うと……。

「神様仏様孝介様。どうか、俺達に勉強を教えてください。」

“お願いしま〜す!”

「……………」

と言う訳である。まあ、あのテスト結果を見れば、こうなるのも想定内ではあったが……。

当の孝介本人は、本当に嫌そうな顔をし、どうやって断ろうか考え
倦ねている所であった。

……だが、其処に（孝介にとっては要らぬ）天の助けが舞い下りた。

「お。何や、みんな草薙に教えて貰うんか？ ほんなら一安心やな。

あ、そついや草薙の家って、確か此処から近いよなあ？ 其処で
したらええんちゃう？」

「……………先生。（何と言う、余計な事をorz）」

「な、なんや……………なんで、ウチを睨むんや？ ほ、ほな、草薙。後
は頼んだでえ〜！」

「……………チツ。（危険を察知して、早々に逃げやがったか）」

と言う鶴の一声により、みんなで孝介の家にて勉強する事に相成っ
てしまったのであった。

side…『紫陽花荘』

「これは……趣のあるアパート……ですね？」

「いや、正直に言っただけ構わない。このオンボロアパートでは、心許ないとな。」

“あ、アハハハハ……”

で、早速孝介の今の住処『紫陽花荘』に来た訳だが。

皆、その想定外の家正直、可成り戸惑っていた。……が、好奇心には勝てず。

その儘、二階にある孝介の部屋まで行こうとした時であった。

「おろ？ 今日又、団体さんだねえ。しかも可愛い女の子の多いこと。」

「……モテモテだねえ…孝介君？」

「……揶揄わないで下さい、澪さん。皆、同級生です。」

「これから勉強会をする事になってしまっただけです。」

「……又、邪魔をするのだけは止めて下さいね？」

「あ、アハハ……；；；だ、大丈夫だよ、今回は…うん。」

「そうですね？ それならいいのですが。では、失礼します。」

「あ、うん。頑張つてねえ」

side：孝介の部屋 in 紫陽花荘

「………で？ さっきの物凄い美人さんは、一体誰？ 孝介とどんな関係で？」

「………勉強しに来たんじゃないのか？」

「あの人が気になってそれ所じゃ無い。こんな状態で勉強なんて、出来る訳無いじゃないかっ！」

まあ、当然の如く、行き成り現れて親しく話す美人さんに、興味津々の皆。

そして、当然の如く、溜息を付く孝介。何せ、部屋に皆入った途端の台詞だからだ。

しょうがないので、渋々差し障りの無い様に話すのであった。

「……………ハア。あの人は、このアパートの管理人の櫻井澪さんだ。」

一応、二十代後半。今は彼氏無し。序でにキス魔の上に、両刀だ。命惜しくば近付くな。」

“い、イエッサー……!”

孝介の嘘を織り交ぜた言葉をあっさり信じた皆は、

その儘大人しく、勉強会を始めるのであった。

只今、休憩中。

「いやあ〜……………疲れた〜……………。こんなに勉強したのって何時以来だろっ?」

「受験以来なんじゃない? あ、でもそれだと、あんまり時間経ってないんだから違うわよね。」

「あ〜、それやそれ。ウチ、受験勉強以来や〜。もう三ヶ月も経ってりゃ十分昔やで〜……………」

「アンタ……………ジジクサイわよ?」

「……………女性なのにジジクサイとはこれいかに。」

「……………まあ、気にしたら負けだと思ってるから。」

「お前は気にしろよ!」

「まあまあ、よいではないか、かがみんよ。てか、本当に助かったよ、草薙君。」

何時もこんなに分かり易い授業なら、大歓迎なのに……。」

「ほんまやな。いつその事、教員にでもなった方がええんちゃう？」

「……一人一人、性格と傾向を見極めて対応しているだけだ。大衆向けの教え方じゃ無い。」

「それでは、塾の講師などは如何でしょう？」

「……あれは好みじゃない。」

「ほな、ウチらの専属講師で頼むわ。」

「それが最も疲れると断言させて貰おう。」

“……ごめんなさい。”

「にしても……あなたの部屋って、本当に何も無いわねえ……。」

「……ちゃんと冷蔵庫はある。洗面所も風呂も台所も机兼食卓テーブルも電話もある。」

問題無い。」

「大有りやっちゅうねん！ てか、テレビもPCも無いって可笑し過ぎるやろ！？」

しかも、今時黒電話って……。アンタ、一体何時代の人間やねん！！」

「……新聞は取ってある。テレビは電気の無駄だ。パソコンは学校のを使えばいい。」

その電話はお下がりだ。只だったのな。有り難く貰った。」

「もしかして、盗聴器とか仕掛けられてたりしてんじゃない？ W W」

「既に除去済みだ。部屋に仕掛けられた盗撮カメラも同様にな。」

だから言っただろう？ 何も問題は無いと。」

「……どんだけー。」

「お。女物のコップと歯^{ムブラシ}刷子めっけ」

「こら。何を人の家を勝手に漁っている？」

「ええやん、別に。見られて困る物とかあるん？」

「ある。」

“……………え？”

「だから止める。結局俺に実害が回って来るのでな。」

「……………それって、もしかして、この二つの女物のコップと歯刷牙の事？」

「……………。」

「さあ。一体、どついう事がキリキリ説明して貰おうじゃ無いのよさ。」

「……………何処の方言だ？ その語尾は。」

「気にしたら負けだよ、ワトソン君。さあ、それよりも早く教えて欲しいなあ……………。」

「……………（目が笑ってない。……………何故に？）そっちのピンクのは妹のだ。」

この前来た時に何れ又、来た時の爲にと置いて置いた。

そつちの赤いのは……漣さんのだ。」

「漣さんって……確か管理人さんよね？ 何で管理人さんのコップと歯刷牙が此処にある訳？」

「……あの人は酔っ払って帰って来ると、何故かしょっちゅう間違えて俺の部屋に来るんだよ。」

それで、その儘玄関で爆睡して、翌朝此処で飯を食っていくんだ。

だから、もう面倒臭いから此処に置いておくと行って、漣さんが持って来たんだよ。

因みに、其処の箆笥には漣さんの下着一式も入っている。」

“……………どんだけー。”

で。結局、この日は、その儘駄弁たへって終わり、今後は週に2〜3度孝介の家に来て、

勉強会を（強制的に）開かれる事に相成ったのであった。

しかも、毎回ほぼ必ず全員で来る為、已む無く、

孝介が大きめのテーブルを買った事は、かがみ達の中での公然の秘密となった。

電話

side: 孝介

「あ、孝ちゃん！ 写真有難う！ すっごく嬉しい！！ でもこれ、本当に良く撮れてるね。」

「ああ、そうだな。俺も初めて見た時は驚いた。全く気付かなかつたからな。」

「うん。でも……やっぱり孝ちゃんの写真って綺麗だね／／／／／」

「そうか？ 有難う。でも、唯の笑顔の方がよっぽど可愛いぞ。」

「う……／／／／／（もう……孝ちゃんのバカ……／／／）」

今、家で唯と電話中だ。この前、久坂から貰った写真を早速唯の許へと送った。

序でに、アイツラと両親の分も送ったので、さっきから入れ替わり立ち替わり五月蠅い。

で、ようやっと、最後に唯の番が来たと言う訳だ。……アイツラ、後ろでも五月蠅いな。

「……にしても、後ろの馬鹿共、五月蠅いな。未だ騒いでるのか？」

「ふえ？ ……あ、うん。未だ写真見てニヤニヤしてるよ？」

「……そうか。なら唯。後で其処の阿呆共に言っておいてくれ。」

今度会ったら、絶対ぶん殴るってな。」

「あ、アハハ……；……う、うん。一応、伝えておく……；……」

「ああ、頼む。是非にもな。」

「……；……；……；……」

全く……アイツラにも困ったもんだ。人の笑顔がそんなに珍しいか？
アイツラの前では、今でもそれなりに笑えていると思うんだが。

「あ、そうだ、孝ちゃん。」

「……ん？ どうした、唯？」

「あのね？ 今度の長期夏休みなんだけどね？」

ボク、また孝ちゃんの家遊びに行きたいんだけど……。」

「ああ、構わないよ。でも、ちゃんと親父達に許可は貰う事。それは絶対だぞ？」

「うん！ 勿論！ お母さん達に心配掛けたく無いモン」

「（……それでも、親は心配するものなんだがな）そうか、それならいいよ。」

それで？ 何時から来る予定になってるんだ？」

「えとね……日本での夏休みって、いつからだっけ？」

「ん？ 七月二十日からだ。……基本的にはな。」

「じゃあ、その日から！」

「……俺は構わないが……そっちは大丈夫なのか？」

「うん、無問題！ ボク、物凄く優秀なんだよ？」

だから、少しぐらいの我が儘は大目に見て貰えるんだ。

ちゃんとお父さん達と孝ちゃんの血を継いでる証拠だね！」

「……………そっか。それならいいんだが。」

「うん！ あ、後……………ね？」

「ん？ 他にも未だ何かあるのか？」

「うん。……………あの……………ね？ その……………ね？」

「何だ？ 構わないから、はっきり言いな。」

「う、うん……………。そのう……………アルスも一緒に来たいって言うんだけど……………。」

なん……………だと……………?!

「アルスも来るだと!？」

「ひうつ! う、うん。アルスがどうしても行きたいって……そのう………やっぱダメ?」

「……唯。其処で未だ騒いでるドアホウに替われ。」

「ひゃ、ひゃいつ!! あ、アルス……! 孝ちゃんがカンカンだよ……!」

「あいつも来るだあ!?! ……にやろつめ……マジで俺に喧嘩売ってんのかあ?!」

「はい、御電話替りました。本当に良い写真を有難う御座います、カイ。」

「まあな。……って、そんな事はこの際どうでもいい!

おい、アホアルス……!! てめえも来るたあ一体、どういう了

見だ？ ああん？！」

「ワタシ、ニホンゴムツカシクテワカラナイデスネ。 H A H A H A
！！」

「今迄、流暢に話してただろうが！ 大体、今更俺にその手が通じる訳ねえだろうが！

いいから、キリキリさつさと吐け！」

「いやですねえ……カイ。そんなにカリカリしては、直ぐに禿げて
しまいますよ？

ちゃんとカルシウム採っていますか？」

「牛乳は適宜飲んでいる。小魚も忠実まことに採っている。…ってだから、
そうじゃない！！！！

………てめえ………マジで俺に喧嘩売ってんのか？ ああん！？
！？」

「おやおや、これは怖い怖い。(少々、擲揄い過ぎましたかね；)

では、早速本題に入りますが、今唯が言った通りですよ。

私も彼女に付いて日本に行きたいだけです。正確に言えば、あな

たの家に……ですがね。」

「……そりゃ又、何故に？」

「勿論、唯の恋人としても当然ですが、基本的には純粋な興味です。」

「……ハア。あのなあ……例え来るにしてもだ。寢床はどうすんだ？」

まさか、お前も俺の部屋で寝泊まりすんのか？ 唯が帰る迄？」

「ええ、そのつもりです。あ、でも安心して下さい。」

流石に、兄である貴方がいる前でコトに及ぶつもりは全くありませんから。」

「そんな事は当たり前だ……！」

……テムエ……まさか、もう唯に手え出したりしてねえだろうなあ？ あああん……！？」

「いやですねえ……大丈夫ですよ。流石に未だ手は出していませんよ。信用して下さい。」

……まあ、キスぐらいはしていますが……それぐらいは良いでしょ……」

「…………… テメエは来んな。」

「…………… ハア。これだから、シスコンは手に負えなくていけませんねえ……………」

「…………… やっぱり、テメエは何時かブッコロス。」

「おやおや、恐い恐い。物騒ですねえ。では、そういう事ですので。

私も唯と一緒に其方に御邪魔致します。宜しく御願いますねはい、唯。」

「あ、ちよつ、テメエ!!!!」

「ひううつつ?! ご、ゴメンナサイ!!!」

「あ、いや、スマン。唯に言った訳じゃ無いよ。…………… あんのアホアルスめえ……………!」

「あ、アハハハ……………、そ、それで孝ちゃん…………… いい…………… かな?」

「…………… ハア。」

しょうがない。……唯は、一緒に来て欲しいんだろ？」

「……う、うん／＼／＼／」

「なら、いいさ。俺も諦めるよ。二人で一緒に来な。」

「あ、うん！！ 本当に有難う！！ お兄ちゃん大好き！！！！ 愛
してるう！！！！！！！！」

「ああ。俺も愛してるよ、唯。」

「………はう／＼／＼／＼／＼／＼／」

何故に、家族間で愛してると言うだけで照れるんだ？ この妹は。

そもそも自分が言い出しっぺだろうに。

……にしても、アルスも来やがる……か。……今年は少し、賑やかに
なりそうだな。

電話（後書き）

如何でしたでしょうか？

やっと出ました。孝介の親友その一にして、唯の彼氏。アルス＝ク
ライス。

そして、アルス達が孝介をカイと呼ぶ理由とは？ それは又、何れ
の機会に。

……まあ、大した理由では無いんですけどね；

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

期末テスト

side: 孝介

“有難う！！ 草薙（君・さん・孝介）！！！”

「……………何だ、唐突に？」

「いやあ、お前に色々教えて貰った御陰でさあ。何とか赤点と補習を免れたんだよ！！」

「いや、本つつつ当に助かった！ マジ有難う！ 神様仏様孝介様！！！！ ハハア〜ツ。」

「……………んな、大袈裟な。」

「いやいや、それがそうでも無いのだよ、明智君。私も平均十点は上がったからね。」

「うん！ 私も前よりも授業が分かる様になってきたの。本当にありがとう、草薙君！」

「……………そうか。それは何よりだ。」

「そついや、お前は今回どうだった？」

「……ん。」

「……バサッ……」

「……所でさあ……お前って一体どうやって普段勉強してるんだ？」

「……うんうん、凄く気になる。全教科満点採れる秘密を是非共……！」

「……特にこれと言って特別な事をしてる訳じゃ無い。」

「……じゃあ、普段家でどれくらい勉強してるの？」

「……していないが？」

「……は？」

「……だから、家では一度も勉強なぞしていないと言っている。」

「……それで、一体どうやって満点を採れると？」

「……最初の授業で、教科書の内容を一通り眺めて頭に入れてある。」

「……後は、その後の授業中に教科書の問題を解いているだけだ。それも五月中に全て終えた。」

「……これが、その全教科を終えたノート全種類だ。」

“……………なんなんだ、あなた
一体……………”

「てか、そのノート見せてくれっ！！！」 ガタッ！！

ひょいつ……………ガスッ！ 「アホウ。そう簡単に見せてやる訳が無い
だろう。」

「……………ま、まあ、それはそうよね。ちょっと惜しいけど……………」

「……………ちょっと待って下さい。」

「ん？ どうしたの、みゆき？」

「今、草薙さんは『そう簡単には見せられない』…と、そう仰い
ましたよね？」

「ああ、そう言ったな。」

「……………つまり、何か其方の提示する条件を呑めば見せて頂ける。

……………と言う事では無いのでしょうか？」

“……………（ポクポクポクポク……………チーン！）おお！
成る程！”

「流石は高良、耳敏いな。その通りだ。」

「こちらからの、とある条件さえ呑めば、このノートを夏休みの中、貸してやらんでも無い。」

「う……それは、確かに魅力的だけど……何か、厳しそうな条件なんでしょうね。」

「いいや、至極簡単な事だ。夏休みの間中、俺の部屋には遊びに来るな。それが条件だ。」

“………え？ それだけ？”

「ああ、たったそれだけだ。どうだ？ 簡単だろう？」

“………でも、何故に？”

「（………さつきから異口同音なのは何故だ？）夏休み期間中にな。」

妹と親友が遊びに来るんだよ。しかも夏休み中ずっとだ。

「只でさえ狭いと言うのに、唯の他にも来るとなると、更に狭い事の上無い。」

その上、お前達まで更に来るとなると、俺は自分の部屋では無く、

「 溇さんの部屋に泊まらざるを得ないからな。流石にそれは俺も困る。」

「ま、まあ、確かに。それならしょうがないわね。うん、私は構わないわよ。」

「そうですね。私も承知致しました。」

「うん。一緒に遊べないのはちょっとつまないけど……しょうがないよね。」

「いやいや、つかさ。草薙君が言ったのは、家に来ないでって事ですよ？」

「だから、遊びに誘えばいいんだよ。外なら大丈夫でしょ。」

「あ、そっかあ。うん、それなら私も無問題！」

「て訳で、私もokだよ。」

「ウチも構へんよ。」

「んじゃ、俺もそれで。だから、早くノート見せる！」

「……分かった。約束は守れよ？ ほら、ポチ。くれてやる。」

「わんわん！ って、何させてくれとんじャゴリアー！……！」

「おお！ 拓海、今はええノリツッコミやで！ グツジョブや！
「！」

「そ、そうか？ まあ、涼子がいいならいつか」

「（……バカップルめ）じゃあな。そういう訳なので、俺はこれから迎える準備だ。」

「これで帰らせて貰う。あ、そのノートは二学期が始まったら返せよっ。」

“了解（です）！”

さて。これから少し忙しくなるな。俺は少し弾む気持ちを抑えなが

ら、諸々の準備を始めた。

プロフィール 追加

オリジナルキャラ 追加プロフィール

アルスⅡクライス 一人称：私 イメージc v：速水奨

高一 男 175cm 53kg 金髪・翠と蒼のオッドアイ
口
ングヘア・ポニーテール

好きなモノ：親友・恋人 嫌いなモノ：不幸

好きな食べ物：唯の料理 嫌いな食べ物：無い

好きなタイプ：葛城唯 嫌いなタイプ：友や恋人に仇為す者

趣味：孝介を揶揄う事・読書 特技：ピアノ

主人公の親友その一。孝介の過去を知る人物その二。孝介をカイと呼ぶ一人目。

唯の彼氏だが、孝介は未だ認めていない。だが両親公認な為、基本的には無駄な努力である。

生粋のイギリス人だが、専ら英語より日本語を好む。

唯には、初めて出逢った時から一目惚れ（本人談）。

唯が小学校を卒業した日に告白し、（何とか孝介に邪魔される事無く）OKを貰えた。

周りの口さがない連中からはロリコンと陰口を叩かれているが、本人は全く気にしていない。

恐らく、作中で最も孝介の心情を理解している人物。

孝介を良く揶揄うのは、それで怒らせて元気付けるアルス特有の励まし。

自身の趣味と実益を兼ねている為、しょっちゅう孝介にちよっかいを出す。

孝介もそれを理解している為か、本気で怒った事は過去一度も無い。

向こうの高校に通う傍ら、孝介の両親の手伝いをしている。

アルスの両親は既に他界している為、将来は唯に婿入りするつもりである。

それ故か、孝介の両親の経営する会社に就職する事が既に内定している。

その為、唯に告白した時から、孝介の両親の秘書になる為の猛勉強中である。

筋は極めて良く、もう既に幾つか仕事を熟^{こな}している。

今度の夏期休暇中に孝介の家を訪ねに来るそうだが、果たして……。

時任渡（ときとうわたる） 一人称：俺 イメージc v：神奈延年

高一 男 182cm 70kg 黒髪黒目 ツンツン頭

好きなモノ：大騒ぎ 嫌いなモノ：説教

好きな食べ物：肉 嫌いな食べ物：野菜

好きなタイプ：一緒に居て楽しい奴 嫌いなタイプ：静かな奴・ノリが悪い奴

趣味：運動全般　特技：早食い・大食い

主人公の親友その二。孝介の過去を知る人物その三。孝介をカイと呼ぶ二人目。

がっしりした体格のあんちゃん。食べた物が脂肪にならず殆ど筋肉になるある種の特異体質。

恋人は未だ居ない。二つ下の従弟が居る。アルスや孝介とは、産まれた時からの付き合い。

孝介とは何故か妙に馬が合う。恐らく最も孝介と仲の良い親友。

又、孝介と本気の喧嘩をして、唯一対等に渡り合える人物。

小さい頃は、孝介としょっちゅう騒ぎを起こしては、御互いの両親にこっぴどく叱られ、

強かに拳骨を何度も喰らったりした。

その頃に崖から滑り落ち、頭を十針も縫う大怪我をしたが、本人はケロツとしており、

寧ろ男の勲章だと、今も残っているその傷跡を誇りに思っている。

純粋な日本人ながら、アルスと共に海外で親と一緒に暮らしている。唯と従弟は両隣の家で暮らして居り、アルスは唯の家に居候している。

アルスと唯が、二人だけで孝介の許へ行つたと、二人がいなくなつてから聞いた渡は……………。

米倉真人（よねくらさなと） 一人称：僕・俺 イメージc v：釘宮理恵

中二 男 165cm 50kg 黒髪黒目 xキノコ頭 まこと
ちゃんカット

好きなモノ：みんなと一緒に居る事 嫌いなモノ：別れ

好きな食べ物：野菜・コーンスープ 嫌いな食べ物：苦い物

好きなタイプ：自分を好きな人 嫌いなタイプ：自分が嫌いな人

趣味：裁縫　特技：誰とでも直ぐに仲良くなれる事

主人公の親友その三。孝介の過去を知る人物その四。

孝介をカイ兄、アルスをアル兄、渡を兄さん、唯を唯ちゃんと呼ぶ。ものっそいサラサラ髪の美少年。だが、その素顔は前髪に隠れ、覗き込まないと見られない。

人見知りでは無いものの、照れ屋。従兄の渡と同じく、恋人は未だに居ない。

唯と同年代の男で唯一、唯と話ができる人。恐らく最も孝介に可愛がられてる（唯は別格）。

因みに、『唯と話ができる』とは、唯の綺麗さに怯まず話せるという意味……よりも、

孝介に、唯と話しても良いと認められたという意味合いの方が強い。皆には、そのちょこちょこ付いてくる様を、子犬の様に見られている。

真人の父が米倉家に婿入りした為、姓が違う。渡同様、純粋な日本

人。

真人も両親の仕事の関係で、海外生活を余儀無くされた。

当初は物凄く嫌がっていたが、今となっては昔の事である。

アルスと唯の話聞いた渡の暴走を止めるべく、真人は……………。

夏休み 初日

Side: 孝介

「……………お、見付けた。おーい、こっちだ！」

「あ、孝ちゃ〜ん」 「ムギユツ！」

「おっと…御疲れ様、唯。」 「ナデナデ…」

「うん！ あ、でも、アルスも一緒だったから退屈はしなかったよ」

「……………そっか。」

「……………カイ。」

「……………久し振りだな、アルス。息災か？」

「ええ。貴方も御変わり無い様で安心しました。未だ、大丈夫な様です…ね？」

「……………ああ。そうだな……………未だ、大丈夫だ。しかし、矢張りお前には解るか。」

「当然です。私は、貴方の親友ですよ？ 伊達では無いのです。」

「……ああ、そうだな。本当に。」

「……うにゅ〜……。ねえ、孝ちゃん。早く、孝ちゃんの家に行こ
う？」

「ああ、そうだな。何時迄も此処に居る訳にもいかないしな。」
ポンポン

「……エへへへ」

「ほら、行くぞアルス。ちゃんと唯の荷物も持てよ？」

「ええ、勿論ですとも。貴方に恋人と認めて貰う迄は、何でも致しますよ……お義兄さん？」

「……テメエは野宿してろ。」

「いやですねえ……。こういつの、此方では何と言ったのですか？」

「……ああ、そうでした。確か、ツンデレと言ったのですか？」

「……それ、この前もクラスメイトに言われたが、どういう意味だ？」

「何となく、良い意味では無い事は解るが。」

「何を仰いますか。立派な褒め言葉ですよ？ 最近日本では大ブームだそうですが……。」

「……俺は知らん。それより、もう行くぞ。荷物も揃っただろ？」

「ええ。では、向かいますか。この長期夏期休暇中の私達の別荘へ。」

side：紫陽花荘

「……此処が、私達の別荘ですか。」

「そうだ。……なんだ？ 唯から聞いてなかったのか？」

此処は古今稀に見る程のボロアパートだぞ？ 何時壊れるか、誰にも全く解らん。

寧ろ、何故未だに残っているのか、其方の方が余程疑問だ。」

「………じ、事前に知っておけば、少しは私も協力出来たのですが……」

「協力つて……ああ、あのお前の豪邸別荘の事か？ 彼処なら俺は行かんぞ？」

あんなでかい所は、性に合わん。」

「まあまあ。でも、せめて一回くらいは良いでしょう？ 私も唯の水着姿は見たいですし。」

でも、他の男性達には見せたくありませんからね。彼処なら、その点全く問題有りません。」

「……………まあ、一回くらいはな。」

「はい では、早速御邪魔させて頂きますね。」

「……………此処は……………本当に部屋ですか？」

「そうだ。どう見ても、只のアパート部屋だろ？」

「……………しかし、余りにも物が無さ過ぎませんか？」

これでは、本当に必要最低限の生活しか出来ませんよ？

娯楽を少しでも増やす気は無いのですか？」

「……………有ると思つのか？ この俺が。娯楽などすると言つ事が。」

「……………そうでしたね。済みません、失言でした。」

「……………」

アルスの言いたい事は解る。……………だが。少なくとも、今の俺にはもう無理だ……………。

「ふみゆ……………。あ、孝ちゃん。荷物は此処に置けばいいのかな？」

「あ、ああ。其処で構わない。一応、部屋割りは此処にアルスが布団を敷き。」

俺と唯が、俺の部屋で雑魚寝だ。」

「ひうつ／＼／＼ ぼ、ボクが、孝ちゃんと同じ布団で寝るの？／＼／＼／＼／＼」

「ああ。兄妹なんだから、別にそれぐらい構わないだろ？」

それとも、唯は俺とはもう一緒に寝たくないのか？」

「う、ううん！ そ、そんな事は全く無い……………無い……………けど……………／＼／」

「？ まあ、大丈夫ならそういう事で。アルスの意見は聞かん。」

「……………相変わらずの御無体ですねぇ。」

「まあ、寝床を提供して貰うのですから、文句は言えませんがね。」

「当たり前だ！ 誰が唯とアルスを同じ布団になぞ寝させてやるものか！！」

「そんな巫山戯た事は、俺の眼の黒い内は絶対にさせん！！！」

「で。その日も結局、唯が黄金週間に来た時同様、一日中部屋でゴロゴロして終わった。」

「唯一違った事は、アルスが態態、溇さん呼びに行って、四人で夕飯を食った事ぐらいか。」

学校見学（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて。今回は、会話が弾み過ぎて、ちよつと長くなってしまいました……

明日からは又、仕事の方が多いと思われるので、皆様、夜更かしには御気を付け下さい。

では、拙筆を御楽しみ下さい。

学校見学

side: 孝介

「それで？ 取り敢えず、何処に行きたい所とかは有るのか？」

「うん……ボクは、孝ちゃんと一緒なら何処でもいいよ？」

「私も同様ですね。唯やカイと一緒にならば、何処であっても楽しいですから。」

「……それが一番困るんだがな。献立と何も変わらん。唯なら分かるだろう？」

「あ……うん。確かにそうだよね。『何でも良い』ってのが、一番困るのに。」

「うん……それじゃ、何処にしよう？ アルス。何処か候補とがある？」

「そうですねえ……。海は何れの御楽しみとしまして……。

ウインドウショッピングは、それこそ何時でも出来ますし……

……あ、そうだ。」

「ん？ 何処か有ったか？ 行きたい所。」

「はい。ちょっと御耳を拝借。」

「あん？ 別に他に誰も聞いてる訳じゃ無えんだし、普通に話せばいいだろ？」

「まあまあ。其処は、ことう……秀困気って奴ですよ」

「……つたく、面倒な奴だ。……ほれ。」

「（何だかんだ言いながら、結局最後にはこちらの言う事を聞いてくれるのですから……）。

やっぱり、カイはツンデレさんですね（では、失礼して……）
ゴニョゴニョ）……………

ではどうですっ。」

「な、なにに？！？！」

「あ、それいい　ボクもそれに賛成！　大賛成！！　さっすが、アルス！　よくわかってるう」

「御誉めの言葉を有難う御座います　それで……カイ？　如何でしようか？

一応、此の場では多数決でも此方が勝ってる上、

貴方の妹と親友兼その彼氏が、態態休みの日に訪ねて御願いでいるのですが……。」

「……………て、テメエ……………。最初^{ハナ}つからそのつもりでいやがったな？」

「……………はて？　一体、何の事でしょうか？」

「……………なら、その最初の沈黙は一体何なんだよ！」

「まあまあ、いいじゃありませんか。別に減るものでは無いでしょうっ」

「……………俺の神経が磨り減るんだよ。……………ハア、しょうがない。……………一回だけだぞ？」

「はい。有難う御座いますね、カイ」

「フン！ 良くも言いやがる。」

「エへへ……ボクからも有難う！ 孝ちゃん！！」

「……………ああ。（まあ、唯が喜んでるからいいか。）」

「（……………本当に分かり易い思考ですねえ。）では、早速明日御願いますね。」

「チツ……………分かったよ。んじゃ、早速学校側に連絡入れて来る。」

「おや。相変わらず律儀ですねえ。」

「いや、彼処結構五月蠅いんだよ、校則とかな。」

「それでなくとも、突然行くよりも、一報入れておいた方がトラブルの対処もし易いし。」

「何より、その方が礼儀に適っているし、面倒が少なくて済む。」

「そうですね。では、宜しく頼みますね。」

「……………ああ。」

side：陵桜学園

で、翌日。しよつがないから、早速アルスの提案により、この陵桜学園に来た訳だが。

「……ほら。此処が俺が通ってる高校だ。」

「……ほえ〜〜〜……………こりやまた、結構おつきいねえ〜……………」

「……そうですね。ちよつと意外で驚きました。」

「と言うか寧ろ、高校の大きさとカイのアパートの酷さとのギャップに……………ですがね。」

「……………まあ、そんな事はどうでもいい。それよりも、取り敢えずは職員室に行くぞ？」

「何はともあれ、報告はしておかないとな。」

「了解」「です」

side：職員室

「失礼します。昨日御電話しました、草薙ですが。」

「ん…おお。草薙かー、入りや〜。」

「はい。黒井先生、今日当直だったんですか？」

「そうなんや〜。ウチが独身で暇やからって…酷いと思わんなあー！」

「…俺には何とも。それよりも、先生。昨日の件ですが。」

「…うう…ウチの味方は誰もおらんのか…ん〜あーええよ〜。勝手にし〜や〜。」

あ、でも、トラブルとかはゴメンやで？ ホンマに頼むで？」

「ええ、それは勿論。此方もそんな事は本意ではありませんから。」

では、失礼しました。」

よし、取り敢えずOKっと。

「スマン、待たせたな。OK貰って来たぞ。取り敢えず何処を回りたい？」

「あ、じゃあボク、孝ちゃんの教室見たい！！！」

「では、私もそれで。」

「分かった。それじゃ、こっちだ。」

「エツへへへへ／＼／＼／＼／」

ん？ 今日はやけに御機嫌だな、唯。腕に引っ付いて来るぐらいだしな。

まあ、いつか。アルスに引っ付かれるよりは、遙かに何万倍もいいからな。

「で。此処が俺が宛がわれた教室。で、あっちの窓側の一番後ろが俺の席だ。」

「ほう。これは中々良い席に着きましたね。」

「うん。春とか冬とか暖かそう。」

「まあな。御陰で何度も睡魔に負けている。」

「（クスクス……）さしものカイも、睡魔には勝てませんか。」

「そりゃ流石に無理だ。アレは人類史上でも、攻略最難関と呼ばれた最強者つわものだぞ？」

「プツ……本当に孝ちゃんらしい　あ、それで孝ちゃんが電話で話してたお友達の席は何処？」

「ああ。俺の目の前の席が、久坂拓海。その隣が久坂の恋人の香椎涼子だ。」

「それで、そっちの席が泉こなた。そっちが高良みゆき。で、其処が柊つかさ。」

「後は、隣のクラスに居る柊の双子の姉の柊かがみ。それで全部だ。」

「ほうほう。男性一人に女性五人ですか。カイ……貴方も中々やりますね。」

「ドアホウ。向こうから何時の間にか、勝手に集まって来やがったんだよ。」

「……………それも貴方の人徳と言う事ですよ、カイ。」

「……………フン。」

その後も、彼方此方眺め歩いた。俺も知らない所とかも、懐かしい探検気分で歩き回った。

だからだろうか？ ついすっかり失念して、警戒を怠ってしまっていた。

真逆、来ている筈は無いだろうという思い込みもあったのだろう。

……………それは、再び俺の宛がわれた教室に戻って来、少し休憩している時の事だった。

「はふう〜……………結構おつきいね〜。外から見た時も相当なモンだと思っただけど……………」。

これは流石に一日じゃ、全部見て廻るの無理だろう……………。疲れた

あゝ……。

「孝ちゃん……帰り負ぶって……。」

「何を阿呆な事を。大体、唯が疲れるぐらいなら、俺達はもうとっくに虫の息だよ。」

「ぶう〜！ ひど〜い！ 孝ちゃんのバカ！ もう、知らないモン〜！」

「……全く。」おやおや。臍を曲げて仕舞いましたか。」

そう。そんな風に、何時も通りにこいつらと雑談していた時だった。

……此処の教室の扉が開け放たれたのは。

ガラッ……。「……あら？ 草薙さん？ ……と、何方でしょう？」

「え？ 草薙？ あ、本当だ。何でアンタがこんな所に居るのよ？ てか、其処の二人は？」

「……………（チッ！ しまった…！ まさか学校に来てるとは……………！」

「ええ、それで合っていますよ。」

「「に、日本語喋った?!」「」

「……おい、アルス。俺達相手じゃ有るまいし、あまつさえ初対面の相手を余り揶揄うな。」

「いえいえ、済みません。つついカイが面白い顔をしていたもので。」

「………デメエ………! やっぱり生かして帰す訳にはいかねえなあ………!」「」

「おや、恐い恐い。そんな事より、彼女達のフォローをしなくても良いのですか?」

「あん?! ……あ。」

「「「………。」」

「……んにゆ? 寧ろ、流暢に日本語を話すアルスに驚いてるんじゃないの?」

「ああ、そうかも知れませんね。」

「……………ハア、全く。本当に面倒臭い。」

Side : 1 - A教室

「さて。では、キリキリと吐いて貰いましょうか？」

「……………それについては、もう諦めてるが……………そもそもお前達は
何故に此処に居る？」

「へ？ 私達？」

「ああ、そうだ。(……………お前達さえ来なければ、この儘穩便に今日
が終わったものを)」

「私達は、学級委員の関係で、今日収集されました。」

「それで、ついでにみゆきの忘れ物を取りに、此処に来たのよ。」

「……………そういう事か。……………何と間の悪い……………orz」

「……………で？　そういうアンタは何で此処に居る訳？　それに其処の二人の説明もね。」

「……………（本ツツ当に面倒臭い奴等だな）この二人が、この前言った奴等だ。」

「え、と……………確か、妹さんと、御親友がいらっしやるんでしたよね？」

「……………ああ。ほら、唯・アルス。挨拶。」

「あ、初めまして！　ボク、葛城唯14歳で、孝ちゃんの妹です！　宜しく御願います！」

「（うわぁ……………物凄く可愛い……………）あ、うん。宜しく。私は柊かのみよ。……………孝ちゃん？」

「こちらこそ、宜しく御願致します。高良みゆきです。……………葛城さん……………ですか？」

「……………細かい事は気にするな。そんな事より、次アルス。」

「はい。アルス＝クライスです。年は、カイや貴女達と同じ16ですよ。」

今後共、宜しく御願いますね。カイ共々　あ、それと私は純粹な英国人ですから。」

「（うわっ……こつちも物凄く綺麗）あ、は、はい。よ、宜しく御願います！」

柊かがみです……………カイ？」

「これは御丁寧に。こちらこそ宜しく御願致します。高良みゆきです……………今後共？」

「……………だから、細かい事は気にするな。……………っておい。今後共とはどういう意味だ、アルス！」

「いえ、特に他意はありませんよ？　今後共、夏休みの度に御会いするかもしれませんね。」

「……………本当にそれだけだろうか？　お前の事だからな……………信用が置けん。」

「おやおや、酷い言い種ですねえ。曲りなりにも親友に対して……………ねえ、唯？」

「ふえ？ あ、う、うん。まあ、でもアルスが信用出来無いのは、何時もの事だし。」

別に気にする事無いんじゃないのかな？」

「……貴女といい、カイといい……この兄妹は、本当に辛辣です
ねえ……」

「「自業自得だと思う。」だ、バカモノ。」

「……………OTL」

「……マジ、こいつ面倒臭え。唯、何とかしてくれ。」

「あ、うん。」とてて……

「で。アンタはこの二人の学校案内をしていた……と。」

「まあ、そういう訳だ。それより、柊、高良。二人共、もう帰るのか？」

「え？ うん。私はもう特に用事は無いけど。」

「はい、私も今、済みました。」

「そうか。所で二人共、家は遠いのか？」

「へ？ ま、まあそれなりにでは有るけど。私、鷹宮だし。」

「ええ、私も申し訳有りませんが……。東京都内ですので、少々掛かりますね。」

「そうか。なら、駅まで是一緒に行こうか？」

「……え（へ）？」「」「」

「……何故に、皆して其処迄驚く？ というか、唯にアルスモか？」

「い、いえ、可成り想定外の台詞だったもので……」

「う、うん。ボクも孝ちゃんが自分から言ったのなんて、初めて聞いたかも……」

「……そうか？」

「そ、そうよ！ あ、アンター体、どんなつもり?!」

「どんなって……。」

只単に、この儘唯とアルスを駅前に連れて行って、夕飯にするつもりなだけだが？

行く方向が同じだというのに、別々に行く意味は無いだろう?」

「あ、そ、そう。そういう意味ね。……そ、それならそうと早く言いなさいよっ! / / /」

「む……? (何故に又、怒る? そんなに変な事言っただろうか?)
それでどうだ?

構わないか? 柊、高良。」

「ええ、私も御一緒させて頂きます。かがみさんも構いませんよね?」

「え? え、ええ。い、良いわよ、私も! / / /」

「……そうか。なら、早速行くか。(……だから、何故に俺を睨み付ける?)」

あ、その前にちょっと職員室に寄ってからで構わないか?」

「……それは構いませんが……どうかなさったんですか?」

「いや、担任に一言告げてから行かないとな。来た時も挨拶していったからな。それが礼儀だ。」

「分かりました。では、みんなで一緒に行きましょう。……かがみさん?」

「へ? あ、ああ、うん。そ、そうね。一緒に行かないとね。」

「……………(変な奴。……でも、その変な奴に今、俺は惚れてる訳だよな……?)行くぞ。」

「あ、ちょっと! 待ちなさいよ! 自分で誘っというて置いて行く訳!?!」

「……なら、早くしてくれ。唯、アルス。お前達も早くしろ。置いて行くぞ?」

「あ、うん。今、行く! ほら、アルスも!」

「そ、そうですね。行きましょつか。」

その後、職員室を経由後、駅前に行き、かがみ達と別れた孝介達は、その儘夕食を取った。

そして、少し夜の駅前をぶらついてから、家に帰って来、精神的に疲れた孝介は、二人に断りを入れ、さっさと寝てしまったのだった。

……ちゃんと、アルスに釘を刺す事を忘れずに。

その夜。唯とアルスの間で、夜を徹しての孝介についての話し合いが行われた。

その為、翌朝起きた孝介が勘違いして、唯にしこたま怒られる羽目になったが……。

それは又、別の話。

そして、それによって起きた騒動も、この時点では未だ誰にも分かりようも無かった。

渡と真人

side:???

「ぐううう……！　ぐおおお……！！　離せ！　真人さなと！！　HA
NA　SEE……！！」

「だ、ダメだよ、ニーサン！！　きっとアル兄にも何か考えがあつたんだよ……！！」

「……本当にあると思うか？　あの悪戯大好きやんちゃ野郎に？」
「そ、それは………僕も否定出来無いけど………；……；……」

「だろう！？　あいつの事だ………きっと、帰って来てから、俺達に自慢しやがるんだぜ？！」

「………しかも、あの嫌らしい満面の笑みで！！　ぜってえ間違い無え！！……」

「………うう………ごめんよ、アル兄。僕じゃ、全く否定出来無いよ………」

「て訳だから、俺も行くんだよ！　あいつ一人にだけ美味しい思い

などさせて堪るか!!

それに真人！ お前だって、アイツに会いたいだろう?!」

「う……そ、それはそうだけど……で、でもやっぱダメだよ、兄さん!!」

さて。この兄弟は、一体何を騒いでいるのか。それをこれから説明するとしておこう。

事の発端は、アルスと唯が、孝介の夏休みに併せて日本に旅立った翌日の事だった。

side:唯(とアルス)の家

「おっさん！ 遊びに来たぜー！！ アルスの奴は何処だー！！」

「おー！ 渡わたるかー！ (ドスッ！ ドスッ！) …… よう！！」

てか、お前は何を言ってるんだ？ あいつらなら、今日から日本に居るんだぞ？」

「……………なに？」

「あん？ 何だ…知らなかったのか？ ぶわっはっはっはっは！！！！」

お、お前……………ま、又、アルスに出し抜かれやがったな？！ アッハッハッハッハ！！！！！！」

「くっ……………そ、それより、オッサン！ アルスの奴が日本に行ったってマジか？！」

「おお、大マジだとも！ 唯と一緒にこっに孝の所に小旅行だぜ？」

「ハア？！ お、俺そんな事聞いてねえぞ？！」

「あ……………んじゃ、まあ、真まことの奴も聞いてねえだろうな W W W W W

まあ、アルスの奴の土産話でも、我慢するんだな！ アッハッ

ハッハッハ！！！！！！！」

「ぐっ……ち、チックショー……オオオオオ！！！！！！！！」

side：時任家ときとうけ

「兄さん。……あれ？ 兄さん、どうしたの？ 急に旅行の準備なんか始めちゃって。」

「おう、真まな！ お前も早く支度しろ！ 今直ぐ、日本に行くぞ！！！！」

「………は？ ちよ、ちよっと唐突にどうしたのさ、一体？」

「どうしたもこうしたもあるか！

あんのアホアルスの野郎が、俺達に黙って日本に行きやがったんだよ！！！！

しかも、唯同伴の小旅行だよ！ オマケに、カイの所に泊まり掛けだとき！！」

「えええええ！？！？ そ、そ、それ本当？！」

「おお、勿論本当だとも！ 今し方、オッサンの所へ行って直接聞いた事だからな！」

オッサンの野郎、マジで大笑いしやがってえ……！

まあ、でもオバサンにその後、フルボッコにされてたけどなあ！
！ アツハツハ！

いい気味だぜ……！」

「……； あ、相変わらず仲が良いなあ……；

で、でもだからって、僕達も行くのはどうかと思っけど？」

それに、僕達はアル兄達と違って、お父さん達に許可貰った訳じゃ無いんだしさ。……ね？」

「……； やだ。俺は行く！ ぜってえ行ってやる！
！……！」

「に、兄さん！？ だ、ダメだってばあ……；……；……；……；」

で、冒頭に至るのである。つまり、アルスに出し抜かれて置いてけ堀にされた渡が、

我が儘を言い出し、自分も今直ぐ行くと行って支度を終え、今にも出掛ける所だったのである。

それを、何とか必死に止める真人であったが、生半なまなかな事では止められない。

その爲、真人は……………。

「……………！！！！ あーもうっ！ 本当に兄さんのバカッ！
頑固者！ 我が儘！！！」

「俺は、真に何と言われ様とも、絶対に行ってみせるぞ！！！！！」

「ううう……………ツツツツ！！！！！！ ハア。もう、分かったよ。

いいよ、もう、兄さんの好きにすればいいでしょっ！

その代わり、帰って来ても家に上げてなんかやらないんだからねっ！！！！！」

「う…………………………そ、そこは、ほら、さあ……………な？」

「何が『な？』だよっ！ 兄さんがこっちの言う事を全く聞かない

のが悪いんだろっ！

「僕は本当にもう、知らないからねっ！ ふ~~~~んだツツツ！！」

「くっ……………わ、分かった、分かったよ。それなら、せめてオッサン達に言ってから行くよ。」

それなら良いだろ？ な？ それでいいだろ？」

「むう~~~~……………行かないという選択肢は、無いんだね？」

「無い。(キリッ)」

「……………ハア。もういいよ、分かったよ……………もう。本当に兄さんのバカ。」

それなら僕も行くよ。兄さんだけじゃ、余りにも心配過ぎるもん。

「おお！ 有難う、真！ 俺は良い従弟を持ったよ！

んじゃ、俺は早速オッサン達に言って来るぜ！！！！ 真も早く支度しとけよ！！

お前が出来次第、直ぐに行くからな！！！」　　ダツ！　ガチャツ
！！　ボタンツツ！！！！

「あ、ちょっと、兄さん！！　……………もう。

おじさん達だけじゃ無くて、ちゃんと孝兄にも伝えないとどうにもならないでしょうに。

……………はあ、しょうがないなあ。僕から電話するしか無いか。

……………あ、でも僕、孝兄の今の家の電話番号知らないや。まあ、い
つか。

後で、おばさんに聞こうと。」

その判断が、後に間違いであったと真人が気付くには、未だこの時点では早過ぎたのであった。

そして、丁度この時。誰が知ろうか、急に来た悪寒に震えていた孝介であった。

柊家 初訪問

side：孝介

あの超冷や汗ものの学校見物も、何とか無事に熟し、

その後も都心を中心に、ウインドウショッピングなどをしていた七月も終わり掛けの頃。

さて、明日は一体何をしようか？ と丁度考え倦ねていた時に、電話が鳴った。

ジリリリリリ……！ ジリリリリリ……！

「ひゃいっ！？ び、びっくりしたあ〜……。」

もう、孝ちゃん……この電話、心臓に悪いよ〜………！

ジリリリリリ……！ ジリリリリリ……！

「そう言うな。これはこれで、中々に悪くない。」

「……ボク、偶に孝ちゃんのセンスが解らなくなる時があるよ……。」

「……それには、私も同意しますね。」

「五月蠅えよ、アルス。つと、はい、草薙です。」

「あ、草薙君？ 私、こなただけど。」

「泉？ 良く此処の電話番号を知ってたな。」

「うん。みゆきさんに聞いたー。あ、それよりさあ、明日暇？」

「明日？ ……一応、今の所予定は無いが。」

「じゃあ、明日かがみんなの家にみんなで集まって、夏休みの宿題しようよ。」

「……あれは、個々人でやるものであって、協力してするものではない筈だが？」

「んもう、固いなあ。こういうのは、友達みんなで一緒にやった方が楽しいんだよ。」

「じゃ、そゆことで。あ、かがみんなにはこっちから言っとくね。」

「んじゃ。」

「あ、おい！ 泉！ ……………断られる前にさっさと切りやがった。」

「早くも、カイの扱い方を心得始めましたねえ。」

「うん。孝ちゃん、ちゃんと断らない限りは、例え一方的な約束でも必ず守ってくれるモンね。」

「…………五月蠅いぞ、其処。…………ハア。ツチ…………しまった。よりもよって…………。」

「あ、ボク達なら大丈夫だよ、孝ちゃん。」

「そうです。流石に十日程もここいらを歩き回ったのですから、地理は頭に入っていますよ。」

「そうそう。例えアルスが迷っても、ボクに一日の長ありつてね。」

「…………そっちの心配じゃない。お前達二人切りにさせておいたら、危ないだろう？」

「主に、アルスの理性的な意味で。」

「う……………／／／／／／／／／／／／／／／／　そ、それなら、だ、大丈夫だヨ……………／／／　ね、ねえ、アルス？／／／」

「え、ええ。も、勿論ですとも／／／　ですから、安心して行つて来て下さい、カイ。」

「……………一番、信用のならない奴に言われてもな……………。ハア、でも仕方ないか。」

一応、信用するが……………もし！　万が一！　何かあったなら……………分かるな？　アルス。」

「え、ええ、も、勿論ですとも。で、ですから、そのとても恐い顔と、

ドスの利き過ぎた声は、止めて頂きませんか？……………」

「……………ハア、しょうがない。取り敢えず、俺は柵の家に電話を掛ける。」

何時に何処に集まるかも聞いていないしな。……………そろそろ、電話も終わつてる頃だろう。」

その後、俺からも柵の家に電話をし、泉の話の真偽と集合場所を確認した。

その時、俺の後ろで二人が小さくガッツポーズをしていた事など、俺が知る由も無かった。

にしても、最近の俺……溜息がヤケに増えてるんじゃないだろうか？

side : 糟日部駅前^{かすかへ}

「よう！ 孝介、ちゃんと来たみたいだな！」

「……泉が人の話も聞かないで、電話を一方的に切りやがってな。……後味悪いだろう？」

「ホンマに律儀やねえ、アンタ。まあ、ええわ。御陰で今日は助か

るんやしな。

「こなたん、様々やな！」

「……俺にとっては散々だ。」

「誰が上手い事言えと言った?!」

「……上手い事？」

「気にすんな。気にしたら負けだ(や)。」

「……そうか。そろそろ、行くぞ。」

泉と高良とは、柊家のある駅前集合と聞いている。好い加減、時間だ。」

「お。ホンマにそろそろ危ないかもな。ほな、行くで拓海！ウチに着いて来いや！」

「ほいさ、涼子。ほら、孝介！何をグズグズしてるんだ！早く来いよ！」

「……言い出しつぺは俺なんだがな。……気にしたら負け……か……?」

Side：鷹宮駅

「オッス！ こなた&みゆき！」

「こなたん、みゆみゆ、オッハー！」

「おっはー、たくみにりょうちん。あと、草薙君も。来てくれて助かったよ。」

「御早う御座います。拓海さん、涼子さん、草薙さん。」

「……ああ。御互い、時間には間に合った様だな。」

「せやね。未だ時間もある事やし、のんびり歩きながら行こうで？」

「」「賛成！」」「

「……………ハア。」

徒歩にて向かう最中

「……所で、柊家の家族構成と、今日居る人達は？」

「？ どうしてですか？」

「……こっちは、余所様の家に初めて行くんだ。情報は多い方がいい。」

その方が失礼が少なくて済む。それが最低限の礼儀だ。」

「……相つつ変わらずお固いなあ、孝介は。にしても、そんな理由かい。がっかりやで。」

「ホントだよ。ひょっとして、かがみんかつかさ狙いかと、一瞬期待したのに……。」

「……勝手な想像をするのは構わないが、本人達に言うのはやめろ。」

それによって実害を被るのはこっちなんだ。」

「「ブーブー！ つまんない」……。「」「」

「……………（こいつらは……………）。」

「まあまあ。それで、かがみさんとつかささんの御家族ですが……。

確か、御両親とお姉さんが御二人いらっしやると聞いています。

今日は……確か、地鎮祭で御父様とお姉さん達がいらっしやらないそうです。」

「……それなら、今日は母親一人と柊姉妹のみか。」

「そついう事になりますね。御参考になりましたか？」

「ああ、大いに助かった。」

「ほな、最初の挨拶は全部、孝介に任せても構へんよな？

なんや、何時の間にか土産も買ってるしな。」

“異議無し！”

「……………お前等。まあ、それぐらいなら構わないが。」

「おおきに！ ……やっぱりツンデレやよなあ？」

「うん、間違い無くツンデレだね。」

「……………ついこの前も、親友に言われたんだが、その『ツンデレ』とはなんなんだ？」

「「「まあまあ、気にしない、気にしない。基本的に誉め言葉だから(やし)。(」」」」

「……………何奴も此奴も、同じ台詞を……………」

side: 柊家

「あ、着いたみたいやな。多分此処や無いか？ 表札は間違い無いで。」

「うん、多分そうだね。実家神社だって言ってたし。あっちに鳥居見えるし。」

「……………そうか。地鎮祭とはそういう事か。主催者側という訳だな。それならば納得だ。」

「そんじゃ、孝介。挨拶頼むわ。俺達はお前の後に復唱するだけだからさ。」

「……………出来るものならばやってみろ。入るぞ。」

ピンポーン……ガチャッ！」「みんな、いらっしやーい！」「

「……御邪魔します。」「御邪魔しまーす！！」

「流石に、この人数じゃ私達の部屋で勉強は無理だから、居間でね。」

「……分かった。」

「まあ、流石に五人も押し掛けちゃあ……ねえ？」

「そら、家の人にとっては迷惑やろうしなあ……」

「大丈夫だよ。今、家にお母さんしかいないし。お父さんもあんまり怒らないし。」

「……そういう問題でも無いんだが。……まあいい。済まないが、案内してくれ。」

「あ、うん。こっちよ、みんな。」

side:居間 in柊家

「あら、いらっしやい。」

「初めまして、つかささんのクラスメイトの草薙と申します。」

昨日は夜分遅くの御電話、申し訳有りませんでした。」

「あら、いえいえ。これは御丁寧な挨拶をどうも。気にしないでゆつくりしていつてね？」

「はい。では、御言葉に甘えさせて頂きます。」

どうやら、俺の急な口調と態度の変わり様に皆して驚いている様だ。

……失礼な。俺とて最低限の礼儀は弁わかえているつもりだ。(そこじゃない。)

「ええ。……そう、あなたがあの草薙君ね？」

「……？ はい、私が草薙ですが……娘さんから何か聞いていらっしやいましたか？」

「(……娘さん？ いやに大人びてる子ねえ……。) え、ええ。良く聞いているわよ。」

最近のかがみとつかさの話題は、何かに付けあなたの話が一番に出て来るぐらいなもの。」

「「な！？／／／お、お母さん！！／／／／／／」

柊母の言葉に、二人して真っ赤になって慌てている……？

何かよっぽどの悪口でも言っていたのだろうか？

「あはは……良い話だと有り難いのですが。」

「それは勿論。二人共、いつも楽しそうに話しているわよ？」

「「あ……う……／＼／＼／＼／＼／＼／」

「それは良い事を聞きました。有難う御座います。」

「いえいえ。それじゃあね、かがみ、つかさ。私は神社の方、手伝って来るから。」

「も、もう！／＼／ 行くなら早く行ってよ！！／＼／＼／」

「はいはい」

母親の背中をぐいぐい押しながら、早々と居間から退場させた柊は、興奮か疲れの爲か、息を切らして顔を赤くしていた。（ 違います。

)

……しかし、そんなに母親を邪険にする様な話でもしていただけるか？

だが、少なくとも俺にとっては、悪い話は無い様で一安心はした。

で。結局、そんな何故か微妙な雰囲気の中で宿題もやり難いらしく、

暫く、(俺を除く)皆で駄弁つてから、何とか勉強に漕ぎ着けた。

だが、その結果……出来た量が散々だった事は、俺が言う迄も無いだろう。

そうして帰って来た俺を、唯とアルスがニヤニヤ顔で出迎えた事が、その日一番の謎だった。

その頃の渡と真人。

「いよっし！！ 着いたぞ！ 日本！！ 待ってるよ！ アルス！
そして、カイ！！！！」

「に、兄さん、声が大きいわ； 恥ずかしいから、せめてもう少し
声を落としてよね？」

此処は向こうじゃ無いんだから、あんまり大声は好まれ無いんだ
よ？」

「ごまけえこたあいいんだよ！！！！ そんな事よりさっさと行くぞ
！！！！」

「あ、ちょっと何処に行くのさ?! カイ兄達は何処に住んでるかも聞いて無いんだよ?」

「あん? 何で聞いてないんだよ?」

「僕が聞こうとしたら、兄さんがさっさと僕を引っ張って此処迄来ちゃったからだろ?!?!」

もう……! 今からでも遅くないから、電話で聞いて来るよ。」

「ま、待て、真!^{まな}」

「……どうしたのさ?」

「今更聞くなんて、恥ずかしい事、出来る訳ないだろう?! いいから、行くぞ!

そんな必要は無い! 俺の勘がこっちに行けばアイツラに会えると言っているんだ!」

「な!?! ちよ、ちよつと兄さん! 冗談でしょ?!」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って言葉知らないの?! 今こそ聞くべき時でしょ?!」

ちよつと、兄さん! 兄さんつてばあ~~~~~!?!?!?!」

従兄を必死に諫めるも、全く聞き耳を入れて貰えず、

ズルズルと連れて行かれる可哀相な従弟であつた、まる。

柗家 初訪問（後書き）

如何でしたでしょうか？

御覧の通り、夏休み期間中は孝介達の行動と併せて、

渡達の珍道中の模様も、同時中継したいと思います。

その為、この期間中は少々文章が長くなりがちですが、どうか御諒
承下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

泉家 初訪問〜前編〜

side：孝介

八月に入ったが、俺達はまだまだ遊んでいた。

近くでやってる夏祭りに行ったり、中旬頃にはアルスの別邸に行き、唯の水着姿に二人して目を細めたりしていた。あ、勿論、その間に宿題は既に終えている。

最近では流石に慣れたのか、唯とアルスが二人で彼方此方デートしに行っている。

その間、俺は暇を持て余し、のんびり昼寝していたり、

人が寝ている隙に滲さんのおれおれの奇襲を受け、その儘済し崩し的に……な事になったりしていた。

そして、今日もあの二人がデートから帰って来てから、今日一日の

話をしていた。

「……それでね？ とっつっても可愛かったんだから！」

「そうか。余程気に入ったんだな。」

「うんっ ……！」

「私も連れて行った甲斐がありますよ あ、それですね、カイ。」

明日は浅草に行こうと思ひまして。」

「浅草？ そりゃまた、渋い所に。」

寧ろ、お前は真っ先に行きそうな気がしたが……未だ行っていなかったのか？」

「ええ。楽しみは後にとっておくべきかと思ひましてね。」

そろそろ夏休みの終わりも近いですからね。今の内に行きたい所を巡らなくては。」

「……そうか。もう後、十日程度しか無いものな。」

「ええ。それに何と言っても、浅草は物凄い所なのです？

何せ、地下には巨大な鯨の様な空翔ぶ蒸気船があったり、

遊園地の地下にも、巨大な人型ロボットがあつたりするのですか

ら！」

「……………アルス。お前は、色んなものに影響され過ぎだ。」

と言うか、一体何処からそういう知識を拾って来る？」

「……………アハハ； ぼ、ボクも時々アルスが分からない時があるよ……」

「気にしたら負けですよ、御二人共」

「……………ハア。」

二人してアルスに呆れ溜息を同時に付いた。丁度、そんな時だった。

或る意味運命の電話が鳴った時は。この時、この電話を断っていれ

ば、あんな事は……………。

俺は、この時の俺の判断を、後で心底から叱責した。

ジリリリリリ……………！ ジリリリリリ……………！

「うひゃいつ！？ ううう……………だ、だから、この電話、やっぱりやめようよ……………」

「まあまあ。私は可愛い唯の音が聞けて、寧ろ嬉しいのですがね」

「う……………／／／も、もう／／／／／アルスのバカ……………／／／／／／／／／／／／」

ジリリリリリ……………！ ジリリリリリ……………！ ジリリリリリ……………！

「そのバカツプル。この家を追い出されなくなかったら、今直ぐ黙れ。そして引っ付くな。」

（ガチャッ……………）はい、草薙ですが。」

「あ、草薙君？ こなただけど」

「……泉か。どうした？ 未だ宿題は終わってないのか？」

「う……そ、それはさておき！ 明日、暇？」

「（誤魔化したか…… 凶星だったようだな）一応、暇だが…… 又、丸写しでもするのか？」

「いやあ……それはそれで物凄く魅力的だけど っと、そ、そうじゃなくてね。」

単純にウチに遊びに来ない？ ってお誘いな訳だよ、明智君。」

「（明智？ 小五郎の真似か？）…… 因みに、他のメンバーは？」

「あ、かがみんにつかき。後、みゆきさんも来るよ。」

「……久坂と香椎は？」

「二人共、お泊まりデートだってさ。…… あゝあ、やだねえ…… くれだからリア充って奴は。」

「（りあじゆう？）…… そうか。まあ、構わない。丁度、こちらも暇だった所だ。」

「それじゃ、明日ウチに…… 十時頃集合って事で んじゃ、よろ

」。

「んにゆ？ 孝ちゃん、明日どっか行くの？」

「ん、ああ。この前話した、泉という奴の家に招かれた。

一応、他にも柊姉妹と、高良も来るらしい。念の爲、電話して確認しておく。」

その後、高良と柊家に再度電話し、待ち合わせの時間と場所と家族構成を確認した。

にしても、泉がウチに電話を掛けてくる頻度が妙に多いのは何故だろうか？

そう三人と、其処な居候の二人に聞くと、四人分の呆れ声と、

一人、妙に恐い声になった姉が居たが……何故に？

そして、矢張り居候の二人は、俺が気付かない所で、二人でガッツポーズをしていたそうなの。

その幾日か前の渡と真人。

「いよっし！ 取り敢えずは、東京に着いたぞ！ ………………んで、こっから何処に行くんだ？」

「って、兄さん！？ 勘で判ったんじゃ無いの?! カイ兄が呼んでるんじゃないの?!」

「お、おう、も、勿論だとも!! で、でもだな。」

情報は、一つでも多い方が間違いくくて良いだろ?」

「……………今更、それを兄さんが言うの?」

「い、いいじゃねえか、別に! あ、それと家に聞くのは無しだぞ?
? いいか?」

絶対にダメだからな! 絶対だぞ!! フリなんかじゃぜってえ
ねえからな!?!」

「……………はいはい、分かってるよ……………もう。」

確か、前に唯ちゃんが伊勢……………何とか線って電車に乗ったって言
ってたっけ。」

「それだ!…!!…!!…!! その伊勢って所に行きやあいいんだよ!

うん、俺の勘も間違い無いつて告げてるぜ! よし、そうと決ま
りやあ、早速出発だ!…!!…!!」

「あ、ちよっと、待ってよ兄さん!!…!! もしかして、伊勢そのもの
に行く気じゃあ……………!?!?」

ち、違うよ!!…!! 兄さんの今、考えてる事は絶対に違うツツ!!…!!

ちよっと、兄さんツツツ!!…!!…!! ねえ! お願いだから、ボクの
話も聞いてっば!!…!!…!!

兄さ……………んツツツツ!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!

道行く人々は、その騒々しくも奇異な兄弟には、誰一人として声を掛けようとはしなかった。

……まあ、そりゃそうだ。

泉家 初訪問〜前編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

所で。確かアニメなどでは、柊姉妹が泉家に訪ねるのは二年次に上がってからです、

この小説上では、早くに皆が仲良く、且つ親しくなった為、

幾つかのイベントなどが、前倒しになったり、後になったり、時期が違ったりと、

色々、原作・アニメ・ゲームなどと齟齬が発生致します。

その為、違和感が多少なりとも生ずるかと思われませんが、どうか御諒承下さい。

では。何れ彼等が、主人公達に合流出来る事を願いつつ。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

泉家 初訪問〜中編〜

side: 孝介

「あ、此処がこなたの家ね。」

「うん。ちゃんと『泉』って表札があるよ。」

「では、時間も丁度良い様ですし、早速御邪魔致しましょう。」

「……（ピンポン……）失礼します。」

「ああ、はいはい。みんないらっしやうい。ささ、あがってあがって
て」

「ん、いらっしやい。」

「初めまして、こなたさんのクラスメイトの草薙と申します。」

本日は御招き頂きまして、有難う御座います。「」「」「有難う御座います……！」「」「」

「ん……うん。みんな、ゆっくりしていつてくれよ。」

「」「」「はい……」「」「有難う御座います。御言葉に甘えさせて頂きます。」

「ほらほら、固い挨拶はもうそのぐらいで。ほら、こっちだよ。」

「では、失礼致します。」」「」「失礼しま（ゝ）す。」」「」

「……むう。まさか、こなたが男連れとは……ハッ！ いや、いかん、いかんぞ！」

「そ、そんな事、お父さんは絶対に認めましえゝゝんツツツ……！」

「ぐぬぬ……！ し、しかし……ヤケに礼儀正しい……いや、正しい……過ぎる子だったな。」

「確か、常時満点を採る物凄く頭の良い子で、身体も丈夫らしいが……。」

「うゝゝゝむ……だがしかし！！ ウチのこなたを任せるには、まだまだだな……！」

何か、偉く盛大に勘違いしているこなたパパこと、そうじろつであつたとき。

side:こなた私室

「……………な、何か下でおじさんが叫んでるけど……………いいの?…」

「あ……………いいの、いいの。どうせ何時もの事だからb」

「何時もかよ! (流石、泉父。娘に負けじ劣らず変人って訳ね)」

「まあ、取り敢えず適当に座つてよ。」

「……………じゃ、失礼する。」

「よつと。しっかし、アンタの部屋って、本当に想定内っていうか、何て言うか。」

「うわぁ……色んな漫画がいっぱいだね……。あ、この子可愛い」

「本当に……沢山の可愛いお人形があるんですね。それに至る所にポスターも。」

「まあね！ あ、草薙君。ゲームどれやる？」

「……済まん。俺はゲームは余りやらないんだ。何時も見ているだけだからな。」

精々パーティーゲームといった、大人数でするものしか基本的にはやった事無い。」

「そうなんだ……。んじゃ、かがみん、何か対戦ゲーでもしよう」

「いいわよ。」

「あ、じゃあ、私も見てる。」

「では、私も後ろから失礼します。」

「ま、負けた……。しかも、こんなにあっさり……。くっ……。やっぱ、やり込み度が違うか。」

そ、それならこのクイズゲームで勝負よ!」

「ふふん。いいとも、掛かってきたまへ。」

「……………嘘。」

「エッヘン。」

「うわぁ……………こなちゃん、すごい!」

「こなたさん。博識なんですね。」

「ハッハッハ。もっと誉めてくれたまへ。」

「……………くっ……………知識を競うゲームで、こなたに負けるなんて……………」

ハッ! ま、まさか、アンタ。ゲームの出題内容を全部丸暗記しているとか……………?」

「エッヘン!」

「……その貪欲な暗記力を普段の勉強でも活かせよ！」

「……なら、仇は俺がとってやるっか？」

「え？ やってくれるの？」

「ああ。少しは楽しめそうだからな。」

「ふっふん。例え、草薙君と言えども、ことゲームにおいては百戦錬磨の私に勝てるかな？」

「勝負はやってみなければ分からん。戦う前から勝敗の付いた勝負など面白く無いだろう？」

「……言ったね？ なら、賭をしようじゃないか。」

「……良いだろう。泉が勝ったら、俺の終わった宿題を丸写しさせてやるっ。」

「何と!？」

「但し。俺が勝ったら……そうだな。今年度一杯は、宿題は一切他人の手を借りない事だ。」

「……………フッフッフ。言ったね？ もう待ったは聞かないよ？
さあ……………！」

「……………いざ、勝負！」

「……………う、嘘……………っ！」

「俺の……………勝ちだ。」

「す、凄いもの見ちゃったわね。」

「う、うん。問題が出る前に答えが分かるなんて……………。」

「お、お二人共……………本当に凄いです。」

「では、約束は守って貰おうか。」

「ま、待った！」

「待ったは聞かない。他ならぬ、泉自身が言った言葉だが？」

「ぐ、ぐぬぬ……………な、なら！ さ、三本勝負だ！ い、一本だ
けなんて言っていないもんね！」

「ちょっと、こなた！ 往生際が悪いわよ！ 潔く諦めなさい！！」

「……いや、それで構わない。丁度良いハンデになるだろう。」

「ちょっと、草薙！」

「フッフッフ……！ 言質は頂いた！ じゃあ、二回戦……！！」

「「行くぞ（よ）ッッ！！」」

「……成る程。中々にやるな。」

「フッフーン　これが、私の本気だよ。さあ、この儘三回戦も貰おうじゃないか！」

「……勘違いして貰っては困る。今のが本気だと、俺が何時言った？」

「……何ッ？！」

「篤と拝め。今から魅せるものこそが、俺の本気だ……！」

「……フッ、フッフッフ……！　いいだろう！　さあ！　かかってきたまへー！！」

「「最終ラウンド……ファイッッ！！！！」」

「……………お、お姉ちゃん。」

「……………分かってる。皆まで言うな、つかさ。」

「う、うん。でも……………二人共ノリノリだね……………」

「……………そうね。まさか、草薙があんなにノリの良い奴だとは思わなかったわ。」

「うん。……………でも草薙君、格好良いから、ああいう言葉も似合うよね?」

「う……………そ、そうね。まあ……………悪くは無いんじゃない?」

「そつだよね! お姉ちゃんもそつ思つよね」

「ま、まあね……………////」

(シンデレレG)……………(と、それを見たこなたが思ったのは、秘密である。

「これで……最後だ……！！ 答えはAのフェルマーの最終定理！」

《ピンポン 正解です！ 優勝者は、一番のクサナギさんです！
おめでとう！！》

「そ、そんな……。わ、私がゲームで負けるなんて……！」

「フツ。修行が足りんな。顔を洗って出直して来い。」

「くううツツ！ も、もっ……！」

「もう一回は聞かんぞ？ 今度こそ、泉から言い出した事だ。三回勝負だとな。」

さあ……約束は守って貰うぞ。残りの宿題と、2・3学期の宿題
全て、自力で解く様に。」

「そ、そんな殺生な……！！！！！！OTL」

其処には、常に頂点に君臨する王者にして勝者と、崩れ落ちる敗者。

そして、後ろで拍手するつかさとみゆき。こなたの負け姿に、外か

ら見て涙するパパと。

それに気付いた後、再度部屋の中を見回して呆れ返るかがみが居た。

「……………これ、何て混沌^{カオス}？」

一方、その頃の渡と真人。

「……………で？ 兄さん、何か弁明は？」

「う……………しょ、しょうがねえだろ！？ おんなじ名前が多すぎ

「んだよ、日本はよ……！」

「しかも、逆ギレ……。本ツツツツ当に救えないね、兄さんって人は。」

「……う、うるせえよっ！ くそっ……！ なにか……！ なにかないのか……！」

「なにか手掛かりになりそうな物は…………！」

「……ある訳無いでしょ？ ここ何処だと思ってるの？ 伊勢だよ？ 三重県の伊勢だよ？」

「兄さんが僕の話を、全く一ミリたりとも聞かずに、勝手に行動するからこうなってるんだよ？」

「そこんどこ、ちゃんと解ってる？」

「だあっ……！ ごちゃごちゃとうっせえな！」

「小姑か女みたいに何時迄もグチグチ言ってるなよな！？ 大丈夫だ！ きつと何かある……！」

「……兄さん。今、貴方は確実に世界中の全ての女性を敵に回したよ？」

「それに、そりゃ何かはあるでしょうよ。何かはね。」

「チツ……！ ……ん？ 此処は……河崎かわさきっていうのか。

「！…？ こ、これだアアア……ツツツ……！！！！！！」

「う、うわっ？！ に、兄さん？ 行き成り大声あげたりして、どうしたのさ？

御近所迷惑になるんだから、やめてよね？ それとも到頭、気が触れちゃった？」

「……お前も何気に酷いよな？ そういう所はアルスに負けず劣らずだぜ。

ってそんな事はどうでもいいんだ、問題じゃ無い！ ほら、これだよ、コ・レ……！！」

「……やっぱり、兄さんとは、後でしっかり話し合う必要があるそうだね。

って、これって……これ？ この河崎って文字？ 此処の地名だよな？」

「そう、そうだよ、そうなんだよ！ だからつまりこれは、字違いなんだよ……！！」

「……………は？」

「何だよ……鈍い奴だなあ。だ・か・ら・つ・ま・り・だ。

かわさき違いだった訳だよ！俺達が行くべきは川崎で、河崎じや無かったって訳だ、うん！」

「……………それ、本気で言ってるの？」

「おお、勿論だとも！そもそも、アイツが都会辺りから離れる方が可笑しいってんだよな！」

「つたく、誰だよ、こんな所に来たと言って言い出した奴は！」

「……………あゝ……………メンドイから突っ込まないけどさあ。」

「じゃあ、本当に其処で間違いないんだね？ 今度こそ絶対なんだね？」

「おう、勿論だともよ！！ 俺を信じろ、真！」

「お前が信じる俺じゃ無く、俺が信じるお前でも無く、お前が信じるお前でも無い。」

「俺が信じる俺を信じろ！！！！ ガッハッハッハッハ！！！！！！！！！！」

さあて、そんじゃ行くぞ!!

遅れるなよ、真！ 遅れたら置いて行くぞ！ 俺に付いて来い！

!!」

「……………ハア。多分、唯ちゃんの言っていたのって、伊勢崎線だよな。

それに、川崎には、そもそも伊勢崎線は通っていなかったよね？ ……今更だけどさ。

そして、どうせ言っても、きっと兄さんの事だから、

僕の話なんて絶対聞いてくれないんだろうなあ……………ハア。」

従兄に付いて来た事を本気で後悔しつつも、黙って律儀に従う従弟なのであった、まる。

泉家 初訪問〜中編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、可成りはっちゃけましたw 個人的には後半の珍道中がメイン話だったり。

さて。今回、大分御巫山戯おひびけをした分、次話は可成りのドシリアスにする予定です。

少々ギャップに驚かれるかもしれませんが、次回こそが一つのターニングポイントになる予定です。

どうぞ、楽しみに御待ち下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

泉家 初訪問〜後編〜（前書き）

皆様、いつも御覧頂きまして、有難う御座います。

さて。今回は、前話の後書きにて申し上げました通り、所謂一つのターニングポイントです。

その為、少々本来のキャラとは違っているかもしれませぬ。

ですので、御不快に思われた方に対し、予め陳謝致します。申し訳有りませぬ。

それでも構わないと仰って下さる方は、どうぞ拙筆を御覧下さい。

泉家 初訪問〜後編〜

side：孝介

「……ふう。ちょっと、久し振りで^{はし}燥ぎ過ぎちまったか。もう少し自重しないとな。」

取り敢えず、一端方が付いた為、俺は席を立って手洗いを借りた。

しかし、危なかった。泉か……。こと、ゲームに関しては、絶対強者に近いな。

アルスやサナが居れば、もっと^{はし}燥いで居ただろうがな。

そんな事を考えながら、泉の部屋に戻ろうと仕掛けた時だった。

………泉の父に声を掛けられたのは。

「………草薙君………だったよね。ちょっといいかな？」

「あ、はい。構いせんが……どちらへ？」

「ん……ちょっと、こなた達には聞かれたく無い事だね。

済まないけど、ちょっとこっちの部屋に来て貰えないかな？」

「……はい、分かりました。」

一体、何の用だろうか？……まあ、男親が娘についての話と言え
ば、相場は決まってるが。

side…そつじろつ

「……まあ、取り敢えずそこらに腰掛けてくれ。」

「はい、失礼します。」

「うん……。」

「……それで、御話というのは？」

「うん………実は………こなたの事なんだがね。」

「……はい。」

「そのう……なんだ……。こなたは学校で楽しくやってるのかな？」

そう。僕が聞きたいのは其処だった。

友達も直ぐに出来たみたいだし、毎日笑顔で帰って来てくれるのを見れば、それも良く判る。

でも……。それでも、気になるのが親心って奴な訳で……。

「……それを申し上げるのは構いませんが……何故、私に？」

「いや、こなたから君は、誠実というか、律儀な人だと聞いているからね。

だから、君なら齒に衣着せないで教えてくれるかと思ってね。

結構、君の話題は家に居ても、親戚の家に行っても良く出るんだよ？」

そう。僕が彼を指名したのは、それもある。ほぼ毎日と言ってもいいぐらい出る、彼の話題。

そんなにこなたが信用している彼ならば、何かを聞けるんじゃないかと思つて。

もし……。もしも、こなたと彼が……。なんて事があれば、僕は……。

「……………ハア。先ず、始めに申し上げておきますが、私とこなたさんとは只の友達です。」

貴方の御考えになつてゐる様な事は有りませんよ。」

「そ、そうか！ それは良かった。うんうん。」

それは一安心だ。どうやら、未だこなたには彼氏とかはいないらしい。うん、それは何よりだ。

……親として間違つてゐると思つけど、

でも可愛い一人娘を、任せるに足る男じゃ無いと……やっぱり、ね。

その後は、胸の支えが取れた様で、幾つもこなたの学校での様子を

聞いた。

……それにしても、良く見ているな。ひよっとして、草薙君は……。

「……という所ですね。ですが、こなたさんと最も仲が良いのは、

かがみさんと、担任の黒井先生だと思えます。」

「そっか、それは本当に良かった。」

……こなたから聞いたかどうか分からないけど、ウチは早くに妻を亡くしていてね。

それで、こなたを男手一つで育てて来たから……つい、ね。」

「……いえ、初耳ですが……御気持ちは解ります。」

「……じゃあ、君も親御さんを？」

「いえ。私の両親は未だ健在ですが、私の親友が早くに両親を亡く

しています。

私も、彼の御両親には大変可愛がって頂きましたので……その御気持ちは解ります。」

「……そうか、うん。僕としては、完璧に僕好みの娘に育ってくれた事にとっても感謝してる。

でも、妻がね……。こなたが産まれた時に言ってたんだ。

『見た目は自分に似ず、性格は僕に似ないで欲しい』ってね。

まあ、実際は見ての通りだけど。だから、かなたにはいつも済まないってね。

……アハハ； やっぱ、贅沢な話だよね。あ、かなたってのが妻の名前なんだけどね。」

……僕は、何で彼にこんな話までしているんだろう？ 単なる娘の同級生なだけなのに。

幾ら娘の友達で、良く話題に上るからって、少しお喋りし過ぎたかな？

そう思っていた。……今、この時までには。……そう。僕は、そう思わなかったんだ。

「……………そうですね。とても、贅沢な話だと思います。」

「あ、やっぱり、そう思うかな？　アハハ……………いやあ、参ったな。」

そう。この時、こんな事を言ったことを後々、後悔するなんて、思いもしなかったんだ。

「　　嗚呼。貴方は、本当に贅沢だ。」

だって。

「アンタには、未だ、娘が居るじゃ無いか。」

「え？」

僕は、この時、とても驚いた。彼の言葉に、自分の耳を疑い
自分の目を疑った。

何故なら 彼の眼から、一筋の雨が頬を流れていたのだから。

そして。

僕はこの時の事を後に思い出し、彼の言葉の意味を理解し、後悔する事になった。

しかし、今の僕には全く解りようも無く、只、驚く事しか出来無かった。

その儘、御互い固まっていると、彼の方が急にハツとし、

まるで自分自身に驚いた様に目を丸くし、直ぐ様頭を下げ、部屋を出て行った。

「…………ツ!? 申し訳有りません。今の暴言は、どうか御忘れ下さい。では、失礼致します。」

僕は、その日、何も書く気を起こせなかった。

side：孝介

チツ……！ しまった……。最近、たが箍が緩み過ぎているな。少し、きつく締め直さないと……！

みんなには済まないが、今日は早々に帰らせて貰うとしよう。

「あ、草薙君！ 遅いよ。何してたの？」

「…………… ああ、済まない。ちょっと、泉のお父さんに呼ばれてね。少し御話してたんだ。」

それよりも、申し訳ないんだが、今日はこれで帰らせて貰うよ。」

「え？ な、何で？」

「ちょっと今、妹から連絡があつてね。何か、困ってる事になつて
るみたいなんだ。」

「どうも、急いで帰らないと不味いみたいだね。」

「そ、そう……なんだ。それなら仕方ないよね、お姉ちゃん。」

「え……う、うん。そうね。そうよね。仕方ないわよ……ね。」

「ああ、そういう訳だな。済まないが失礼させて貰うよ。」

「あ、ちょっと待って頂けますか？」

「ん？ どうした、高良。何か用か？」

「ええ。妹さんとは、一体どうやって連絡を取り合ったのですか？」

「こなたさんの家の電話は一度も鳴ってはいませんでした。」

「あ、そう言えば……。」

「ああ。ついこの前にな。妹に強請^{ねだ}られて、携帯を買ったんだよ。ほら、これだ。」

「あ、ホントだ。しかも、最新版の奴。」

「そういう訳だ。マナーモードにしていたら、話している最中にメ

「ルが来てな。」

「そうでしたか。では、御急ぎ下さい。妹さんが待ってらっしゃるのではありませんか？」

「ああ、じゃあ済まない。これで失礼する。埋め合わせはいつかする。」

「……何とか、上手く誤魔化せたかな？ ……しかし、柊達も何か可笑しかったな……。」

もしかして……。いや、あれぐらいじゃ、流石に気付かないだろう……。と思いたい。

兎に角。今は一刻も早く、家に帰りたい。……一刻も……。早く。

そして。疲れ果てた顔で帰って来た（らしい）俺を見て、

唯とアルスは思わず悲鳴をあげそうになったそうだ。

俺は、玄関に着いた途端、意識を失ったみたいで、全く覚えていなかったのだが。

その頃の渡と真人。

「

.....。

」

「い、いや、ほら、その………なあ？　しょ、しょうがねえだろ？
アイツラの情報なんて、何一つ聞いてないんだからさあ！　な？
な？　なあ？」

「………僕は、何一つ喋ってはいないんだけどね。」

「い、いやあ………そのう………なあ？」

「………ねえ？　もう、そろそろ家に電話して聞いても良いよね？
答えは聞いて無いけど。」

「な？！　だ、だ、ダメだ！　そ、そんな事してみろ！」

俺が、オッサン達に笑われちまうじゃねーか！？　そんな事だけは絶対にダメだ………！」

「………ねえ、渡兄さん？　俺、そろそろ好い加減にキレそうなんだけど………どうしてくれる？」

「………うげ。(ま、マジでやっべえ………；………；………ほ、本気でキレ掛かってる!?)」

「もういいよね？ 大分、渡兄さんの我が儘を聞き続けて来てあげたんだからさ。」

もう、ここいらで潮時にしようよ。て訳で、俺はおじさん達に電話するからね。」

邪魔だけはしないでよ？ したら、今度こそ本気で怒るからね？」

「ううっ……………；；OTL」

「あ、おじさん。御久し振りです。…………ええ。ええ、そうです。」

この、今俺の側にいる大馬鹿兄の所為で、可成りの珍道中をする羽目になりました。

そういう訳で、カイ兄達の今の住所と行き方を教えて頂けませんか？

…………ええ。…………ええ…………はい…………はい。…………成る程、解りました。」

はい、有難う御座います。ええ、勿論です。

この超大馬鹿糞兄貴は、俺が直接きつくオシオキしておきますので、御安心下さい。」

はい…………はい。それでは。……………何してるの？ 往来の邪魔だから止めてくれない？」

「うっうっう……お、俺のプライドが………OTL」

「……………そんなもの、どうだっていいんだってば。ねえ、渡？

俺、今本気で、もうぶち切れてるんだけどさあ……………どうしたらいいと思っっっ」

「……………ガクガクブルブル」

「うん、言い震え方だね。とっても俺好みだよ さあ……………逝こっか？

地獄の片道切符を手に……………さ」

「……………ドナドナドゥナ……………ドゥ……………ナ……………」

その後の、渡の姿を見た者は皆、こっと思ったそうなの。

「ライオンに噛み砕かれながら、象に踏みしだかれた……かの様だ
った」……と。

泉家 初訪問〜後編〜（後書き）

……如何でしたでしょうか？

ドシリアス（の筈）の後の、悲劇と言つ名の喜劇。……これってどうなんだろう？……

次話は、『泉家 初訪問』のかがみsideの予定です。それが1〜2話程度。

それに、後1〜2話加えて……大体3〜4話程で、夏休み編は終わると思います。

因みに、孝介・アルス・渡・真人・唯の五人の中で、最も怒らせる
と恐いのは、御覧の通り真人です。

彼がキレた瞬間、皆の親でさえ思わず正座をし、彼の説教に只管耐
え続けるしかありません。

所謂、陰の支配者という奴ですw 普段温厚な人って、怒らせると
物凄く恐いですよね……

作者も自身の過去を思い出しgkbrしつつ。今話も御覧頂き、有
難う御座いました。

泉家 初訪問 side : かがみ 〔前編〕

「 嗚呼。貴方は、本当に贅沢だ。」

だって。

「 アンタには、未だ、娘が居るじゃ無いか。」

何も、知らなかった。

……そう、そうなのだ。

私は……私達は、アイツの事なんて、殆ど

いや。

何一つと言っていい程、何も知らなかったのだ。

だから、アイツがこの時言った言葉の意味が、全く解らなかった。

それなのに

いや、だからこそ。

……私は、この日。この時の事を、忘れる事が出来無かった。

事の発端は、この日……夏休みも、もう後十日程になった頃の、前日。

こなたから来た、電話からだった。

Side: 柊家

「はい、もしもし。柊ですが。」

「あ、かがみん。こなただけど。」

「おっす、こなた。どうしたの?」

「ん〜……いやあね、明日かがみん暇かなって思ってた。」

「ん? ん〜……まあ、暇と言えば暇だけど……。」

まさか又、宿題写させてって言うんじゃないでしようね?」

「いや、まあ、それも御願ひしたいんだけど、今日の予定はそれじゃ無くて。」

「じゃあ、何よ一体。」

「いや、単にウチに遊びに来ない？　っていうお誘い。あ、草薙君も来るよ」

「……………は？　ま、まあ私は構わないけど……………っていつか、良くアイツからOK貰えたわね？」

「あーうん。かがみんな来るって言ったら、即OK貰えたよ」

「ふえ？！　わ、私？！／／／　な、何でそこで私の名前が出て来るのよ！！／／／／／／」

「むふふふ……………　さて、なんででしょう？」

「し、知らないわよっ！／／／　（寧ろこっちが聞きたいぐらいよっ！！／／／／／／）」

と、とにかくっ！　私とつかさも明日あんたン家に、行けばいいのねっ」

「うむ。……………ムッフッフ　んじゃ、そゆことで〜」　ガチャッ
……………！

「も、もっ……………／／／　なんなのよ、一体／／／／／／」

暫く顔を赤くした儘立ち尽くしていたら、お姉ちゃんに突っ込まれて慌てて部屋に戻って……

何とか心臓を落ち着かせてから、つかさにも伝えて、行く事になったんだけど……………。

あゝもうっ！！ 明日、どんな顔してアイツに会えばいいのよっ！！？／／／／／／／／／／

side：駅前 in翌日

「お、オッス、草薙！」

「……………ああ……………？ どうした、柊？ 妙に顔が赤いが……………風邪か？」
「へっ！／／／ い、いや、なんでもない、なんでもない！！／／／」

「……………そうか？ ならいいが……………。無理だけはするなよ？」

「……………う、うん。」

な、何、こいつ？／／／ みよ、妙に優しくくない？／／／ こんな奴だっけ？／／／

うう……だ、ダメだ……ま、まともな判断が出来無いよ…… / / /

そんな感じで、ちょっと私が参ってる間につかさとみゆきとも挨拶を終えて、

何時の間にか、一緒にこなたの家に向かっていた。……あれ？ 本
当に何時の間に？

ますます、草薙に心配そうな声で尋ねられちゃった……orz

い、いけない。しっかりしないと！ つかさとみゆきも何か不思議
そうに見てくるし……。

と、私が一人で気合いを入れ終わった頃に、丁度こなたの家に着い
たみたい。

「あ、此处がこなたの家ね。」

「うん。ちゃんと『泉』って表札があるよ。」

「では、時間も丁度良い様ですし、早速御邪魔致しましょう。」

「……（ピンポン……）失礼します。」

「ああ、はいはい。みんないらっしやうい。ささ、あがってあがって」

何とか平静を装い終えながら、こなたのお父さんにも挨拶をして、こなたの部屋に上がった。

……その直後、階下から聞こえて来たおじさんの叫び声に、

矢張りこの父にしてこの娘ありという言葉を、まざまざと見せ付けられたけど……

この後は、こなたの予想通りの部屋に、私は呆れて、つかさとみゆきは楽しんで、

草薙はやっぱり無関心らしくて、何故か早くもリラックスしてるみたいだった。

或る程度、みんなが落ち着いてから、こなたとゲームで対戦したけど、

やっぱりこなたには勝てなかった。……でも、まさかクイズゲームでも負けるなんて……orz

そんな風に落ち込んでいたら、草薙が「仇を取ってやる」って言うてくれた。

……やっぱり、何か変。何か、今日の草薙は何処か変だった。何時もの草薙じゃ無いみたい。

少なくとも私の知ってる草薙は、そんな事絶対言わない。それに朝から何か妙に優しかったし。

……ま、まさか。こなたが昨日電話で言ってた事って……ほ、本当の事？ / / / / /

……う / / / / / だ、だったらどうしよう / / / / /

わ、私はどうしたらいいんだろ？ どう…したいんだろつか？ / / / / /

少なくとも、こんな……極普通の少年みたいに無邪気に楽しんでいる様な。

……こんな草薙、私は知らない。……だからか。

つかさの言葉に珍しく素直に答えてしまった。……き、聞こえてなければいいんだけど / / / / /

結局。草薙はこなたの往生際の悪さにも負けず、勝ってくれた。

「これでいいか？」なんて、私だけに聞こえる様に小声で……し、
しかも笑顔付きで…… / / / / / /

うづうつ…… /
/ / / / /

あんなに優しい……まるで悪戯が成功した時の、子供の様な笑顔な
んて…… /

絶対反則よ /

でも。そんな優しく、嬉しくて、楽しい時間は此処迄だ
った。

この後、私は……私達は思い知る事になる。

アイツの想いを。……アイツの事を、私達は何も知らないと言う事
実を。

他ならぬ、草薙自身の言葉に思い知らされる事になった。

泉家 初訪問 side : かがみ 後編

「……草薙、やけに遅いわね。」

「ん？ あれれ？ 何、かがみん もしかして、草薙君の事が気になる？」

「う……べ、別につ！／／ た、ただ、人に待たされるのが嫌いなだけよっ！！／／／」

「へえ〜 …… ふう〜ん …… へえ〜」

「………な、何よ？」

「んう〜んん ……でもさあ ……かがみん？」

「………な、何よっ！」

「………その真つ赤な顔と、そんなそわそわした動きで言われても、全く説得力無いよ？」

「！！！？／／／／／／／／／／ ……う、五月蠅いっ／／／／／」

しょ、しょうがないでしょっ！／／／ か、勝手に身体が動いちゃ
うんだからっ！！／／／／／

今、私達が何をしているのかと言うと、草薙を待っていた。

草薙がゲームでこなたに勝った後、私達は休憩も兼ねて、代わる代
わる御手洗いを借りに行き、

最後に草薙が借りに下に降りて行った所だった。……でも、妙に遅
い。

男の人ってそんなに時間掛からないよね？　ウチのお父さんもそう
だし。

そんな感じで待っていたら、こなたが押揃ってきて、

その内に、何時の間にかみんな確認しに行く事になっていた。

side…そうじろくの部屋の前

「……本当に何処行っただろう、草薙君。」

「そうですね……。他に心当たりは無いのですか？」

「そうだねえ……後は、ここかな？」

「ここは……何の部屋？」

「お父さんの仕事部屋。」

「「「え（は）？」「いやいや、流石にそれは無いでしょ？」

「いやいや、分からないよ？ 何せ、草薙君は私が初めて連れ込んだ男の子だしね。」

「連れ込んだとか言うな！ でも、だったら尚更私達が聞いちゃいけないんじゃない？」

ほら、男同士の話とかあるって、良く聞くし。」

「ん〜……でもさ、かがみん。気にならない？」

只でさえ、草薙君って自分の事は余り話さないし。

それに何か、不思議っていうか、みんなに隠し事してるみたいだしわ。」

「……ま、まあ、そりゃ確かに気にはなるけど……って、あ、こちら！ こなた！」

「まあまあ。それより、静かに！ ……中の二人にばれちゃうよ？」

「……（ムグツ）！ ……ていうか、ホントにいたのね。」

「……そうみたいだよ？ ……ほらほら、かがみん。こっち来て聞いてみなって。」

つかさとみゆきさんも静かにね。」

「「……（コク）。」「」

「……ふ、二人共……！ ……もう、私も知らないからねっ。」

「……（とかなんとか言いながら、結局気になって一緒に聞くかのみ萌え）。」

……何となく、こなたの言いたそうな事が分かって殴りたくなっ

けど、ここは我慢、我慢…！

……どうやら何とか、声は聞こえるみたい。

「………という所ですね。ですが、………良いのは、

かがみさんと、………先生だと思います。」

「そっか、………良かった。」

………こなたから………けど、ウチは………てね。

それで、………男手………だから、………ね。」

声が小さいのか、余り良くは聞こえなかったけど、

少なくとも、剣呑な雰囲気では無い事は分かってホッとした。

………どうやら、未だ話は続いている様だ。

「………いえ、………ですが、………解ります。」

「……じゃあ、君も……を？」

「いえ。私の両親は……ですが、……親友が早くに……て
います。」

私も、……には大変……頂きましたので……御気持
ちは解ります。」

「……むう……良く、聞こえないなあ……。」

「……ちよつと、こなた。静かにしてよ。肝心な所が聞こえないじ
やない……！」

「……なんだかんだ言っつて、実はかがみんが一番気になってノリノ
リという……。」

……しょうがない。こっそり……バレ無い様に……と……スス
ス……とな。」

「ちよ、ちよつと、こなた！ 流石に、それはバレるわよ！」

「大丈夫だつて……ほら、話に集中してて気付いてないみたいだよ
？」

「……………どうやら、そうみたいね。でも、これ以上は流石に無理だからね。」

「分かってるってば。……………うん、どうやら良く聞こえるみたいだね。」

「……………そうか、うん。僕としては、完璧に僕好みの娘に育ってくれた事にとっても感謝してる。」

でも、妻がね……………。こなたが産まれた時に言ってたんだ。

『見た目は自分に似ず、性格は僕に似ないで欲しい』ってね。

まあ、実際は見ての通りだけど。だから、かなたにはいつも済まないってね。

……………アハハ； やっぱ、贅沢な話だよな。あ、かなたってのが妻の名前なんだけどね。」

「……………むう。」

「こなた……………。「こなたちゃん……………。「こなたさん……………。」

「……大丈夫だよ、みんな。私は私だもん。お父さんだって、それぐらい分かってて言ってるし。」

「……そう。そうよね、アンタの事だもんね。」

「うむ ……あれ？ 草薙君、どったのかな？」

そうこなたに言われて気付いた。……なんか、草薙の様子がおかしい。

まるで、何かを堪えている様な……。こっちらじゃ、後ろ姿しか見えない。

……アイツは、今、どんな表情をしているんだろうか？

……でも。それは、今の私達が知っていい事では無かったと、この後、後悔した。

「……………そうですね。とても、贅沢な話だと思います。」

「あ、やっぱり、そう思うかな？ アハハ……………いやあ、参ったな…」

「 嗚呼。貴方は、本当に贅沢だ。」

だって。

「アンタには、未だ、娘が居るじゃ無いか。」

「……………え?」「……………」

この時、私達は全く同時に、同じ言葉を呟いた。

……だって、アイツが言ったその言葉の意味が解らなかったから。

……だって、アイツが握り拳を作ってまで、何に耐えているのか解らなかったから。

……だって……だって! 何で……何で、アイツが……あんなに泣きそうなの……うっん。

あんなに辛そうに、今にも私達の前から消えてしまいそうな声で言ったのか……………。

今の私達には……全く、解らなかったのだから。

この後、私達は草薙が戻って来る前に、何とか部屋に戻る事が出来た。

その直後、戻って来た草薙は、直ぐに帰って行ってしまった。

……何か、物凄く慌てている様子で。

結局、私達はその日、草薙の話をずっとしているだけで、一日を終えていた。

そして、その日に草薙が倒れたと知ったのは、その一週間後。

草薙の家に電話した日、妹さんに聞いてからだった。

ねえ、草薙。アンタは一体、何を隠して……何を抱えて生きているの？

アンタの過去に一体、何があったの？

私は、最近、そんなアンタの事が気になって気になって、仕方がないんだから。

だから 早く、私にも全部教えなさいよね。

緊急会議 in 紫陽花荘

side：孝介

あの後、倒れ込んだ俺は暫く目を覚まさなかったらしい。

どれくらいかと言うと、凡そ一週間以上。

ようやくと目を覚ました俺の見た日付は、八月二十九日になっていた。

一応、特に身体にこれといった問題は無かった。記憶も欠如していない。

恐らく精神的に疲れ果てたのだろう。そう、来診した医者が言っていた。

唯は、起きた俺に飛び付いてずっと泣きっ放しだし、アルスは怒り出すし、散々だった。

念の爲、大事をとって俺は、夏休みが終わるまで絶対安静だと、二人に釘を刺された。

……んな大袈裟な。……とでも言おうものならば、激怒するのは目

に見えてたしな。

仕方なく、大人しく二人の言う通りに従った。……そんな日の翌日の事だった。

ウチに懐かしい珍客を迎えたのは。

side：紫陽花荘

ピンポーン……ピンポーン……

「あ、はいはい。どなたですかあ……って、え?! 嘘っ!？」

「? どうしましたか、唯。……これはこれは。御久し振りです、二人共。」

「……うん、久し振り、アル兄。唯ちゃん。」

「ええ。……所で、その足元に引き摺られながら転がっている物体Xは、一体?」

「ん? ああ、これ渡兄さんだよ。」

「……ま、まあ、取り敢えず上がって?……」

「うん、御邪魔します。」

」

……。

「

……

「……んぐっ……んぐっ………プハア~~~~ツ!!!」

あ~~~~っ、生き返ったあ~~~~ツツツツ!!!」

「……兄さん、静かに。又、オシオキされたい？」

「!?!?(ブンブンッ!!!!!!)」

「アハハ………ま、又、さな君に怒られちゃったんだね、と
き君。」

「……まあ、全部兄さんの自業自得の所為なんだけどね。

その御陰でこっちはイイ迷惑を被ったよ。」

「………ま、まあ、想像は容易に付きますが……」

「全くだよ。そもそも、アル兄の所為なんだからね？」

僕達に内緒で唯ちゃんと二人だけで、カイ兄の所に来たりなんてするから。」

「あゝ……矢張り、そうでしたか。それは、素直に済みませんでした。」

ですが、カイのことですからねえ。

私達みんなで来るなんて言ったら、それこそ断られてしまいますので。

私が行くだけでも大分渋りましたからねえ。何とか、無理矢理強引に認めさせましたが。」

「……カイ兄だもんね。」「……孝ちゃんの事だもん。」「……まあ、今のカイの野郎じゃな。」

「……ええ、そういう訳です。……丁度良い機会です。御二人の御耳に入れておきたい事が。」

「ん？ 何、アル兄。」 「なんだなんだ？ 何か、あんまり楽しそうな雰囲気じゃねえな？」

「……はい。実は……… カイが、倒れました。」

「「な、何（だって）?!?!」」

「丁度、昨日。凡そ一週間振りに起きた所です。今も大事をとって休ませていますが……。」

「……そうなんだ。そっか、それで……。さっきからカイ兄の姿が見えないと思ったら。」

「……あの野郎。でも、一体なんでだ？ アイツ、ここ最近そんな事は無かっただろう？」

「ええ。……恐らく、新しく出来た、高校での友達の所で何事があったのでしょうか。」

「……アイツにダチ？ ……まさか、今のアイツに自分から関わっていく様な奴がいるたあな。」

まさかの高校デビューとかいう奴をした訳でも無いんだろっ？」

「ええ、それは勿論。 ……ですが、一番の問題は恐らくそこでは無いでしょう。」

「……というっ？」

「……恐らくですが。 いえ、でもほぼ確実に、正しいと言えるでしょう。」

唯と話し合って、ほぼ間違い無いと確信しましたから。」

「何だっというんだよ。 早く言えよな？ 俺が焦らされんの嫌いな、知ってるだろうが。」

「……では、先に結論から言わせて頂きますが……。」

カインに、どうやら惚れた人が出来た様なのです。」

「……なん……だと（だって）……?!」

「そ、そんな……！ だ、だって、カイ兄は……カイ兄には……!」

「ええ。私も、自分を疑いましたよ。まさか、あのカイに限ってそんな事は……とね。」

「ですが、どうも事実みたいなのです。……それも恐らく、彼女以上かもしれない。」

「んなアホな!! そんな事、ある訳ねえだろうが!!! だって……!」

「アイツは! アイツの事で、あんなに苦しんでるあいつは!!」

「一体、何だったって言うんだよ!!!……!」

「……解っています!! ですから……だからこそ! 私達も未だに驚きを隠せず……。」

又、それを信じたくない気持ちの方が、強いのですよ……。」

「……………チツ！！！！ あの……………大馬鹿野郎が……………！！！！」

「……………仕方ないでしょう。こういう事は、本人の意志とは別のもの。意図してそうなった訳では無いのですから。」

「……………そんな事は、解ってる！……………だから……………！……………こんなに困ってんじゃねえか……………！」

「……………ねえ、アル兄。カイ兄は、その事自覚しているの？」

「ええ、恐らくは。ですが矢張り、敢えてその気持ちを押し殺している様です。」

「……………カイ兄。……………ホントに、バカなんだから。」

「取り敢えず。今の私達に出来る事は、今のカイの現状を見守る事。

そして、私達の親にこの事を報告する事だけでしよう。」

「……うん、そうだね。今の僕達じゃあ、カイ兄には何もしてあげられないもの。」

「……………クソッ……………!!」

「……………グスッ……………孝ちゃん。」

「……………ふわあ〜っ……………。あんだよ、さつきから五月蠅えな。」

人に安静にしとけとか言っときながら……………御陰で目が覚めちまつたじゃねえか。

……………あん？……………もしかして、渡にサナか？」

「あ……………カイ兄。」

「……………よお、カイ。」

「どうしたんだ、お前等。お前等までウチに来るなんて。」

「「……い、いやぁ……ちよつと……」」

「??? 変な奴等。まあ、いや。しかし、久々だなあ。全員揃うなんて……な。」

「……まあ、そうですねえ。カイが何時も、こっちにいるもんですからねえ。」

「……済まん、アルス。まあ、でも取り敢えずゆっくりしてけや。」

俺は、もう少し寝させて貰うよ。今は、トイレに起きたただけだしな。

まあ、と言っても、明日にはもう唯とアルスは帰っちゃまうけどな。んじゃ、オヤスミ。」

どうやら、俺が寝たその後。四人で、夜遅くまで色々話し合ってた

らしい。

その翌日。みんな、同じ飛行機で帰って行った。

それを見送った俺は、又一人になり……………。

そして、二学期が始まった。

緊急会議 in 紫陽花荘（後書き）

如何でしたでしょうか？

これにて、夏休み編は終了です。次回からは、二学期に突入します。

二学期もイベントが目白押しですからね。孝介とかがみの進展の方も、色々考えていますよ〜w

ニヤニヤイベントもある予定ですので、どうぞ御楽しみにw

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

体育祭　そして……

Side：孝介

「お早う、草薙。」

「……ああ。」

「あ、草薙君。おっはー。」

「……ああ。」

「草薙君、お早う。」

「……ああ。」

「草薙さん、お早う御座います。」

「……ああ。」

「オッス！　孝介！」

「……ああ。」

「おはよう、孝介！」

「……ああ。」

今日も今日とて、変わり映えの無い毎日。そんな日々を過ごして行くものだと思っていた。

……未だ、この頃は。だけど……多分。この頃から、俺は少しずつ変わっていった様に思う。

「……何や、相変わらず気乗りせえへん返事やなあ……。」

「……そうか？ 何時も通りなら、何も問題は無いだろう。」

「……せやから、大有りやっちゅうねん。何回言わせればええんや、このドアホウ。」

「……???」

「……あゝ……マジであかんわ、こいつ。拓海……パス。」

「いや、俺に渡されても……あ、そうだ、孝介。お前、体育祭、何

に出る？」

「体育祭？ ……何時だ？」

「確か、十月の……日曜だっけ？」

「……………そうか。」

「ん？ どうかしたか？」

「……………いや、なんでもない。その体育祭だが……………何でも構わんが、
「一つだけにしてくれ。」

「……………何で？」

「……………まあ、色々あって……………な。余り、体力を使いたく無いんだ。」

「……………まあ、いつか。んじゃ、適当にエントリーしておくぜ。
本当に何でもいいんだな？」

「ああ。何でも構わない。但し一つだけで頼む。」

「了解」

結局、俺が出るのは男子対抗1,000mリレーで、第五走者のアンカーだそうだ。

因みに、第四走者には久坂がエントリーしていた。何でも、他の奴には任せておけないらしい。

そして、体育委員の久坂の指導で皆、張り切って練習していた。…当然、俺はサボったが。

そして、然^そう斯^こうしている内に、体育祭当日本番になった。

「……ほう。泉は結構足が速いんだな。」

「そうなのよね……。宝の持ち腐れというか、なんというか。」

「うん、こなちゃん、足速いよね。私、凄く羨ましい。それにゆきちゃんもだよな？」

確か、リレーでアンカーだった。」

「いえ、そんな／＼　お恥ずかしい限りで／＼」

「ふい〜……。」

「お、こなたん、おつかえりい〜」

「りょうちん、ただ〜ノシ。いやあ、疲れた疲れた。」

「普段、家に籠もりっ切りだったのに、良くそんなに走れるな、こなた〜」

「まあね〜。一応は、たくみん達と一緒に練習もしてたしね。」

294

「……それにしても……泉？　お前、何か武術でも学んでたのか？」

「ふえ？　あ〜うん。小さい時にちょっと格闘技的なものをね。でも、良く分かったね？」

「いや、普通の所作とかでも何となく思っていたんだが、つい聞きそびれてな。」

それなりに規律のある動き方だが、少し鈍っていた。昔していたのだろうとは思っていた。」

「むう……鋭い。って事は、草薙君は今も何かしてるの？」

「……まあ、それなりにはしている。」

「へえ〜……。因みに、どんなの？」

「剣道・剣術・柔道・柔術・空手・合気道その他、色々だ。」

「……それ、それなりって言わないわよ。ガチでやってんじゃない；
……」

「……そうか？ まあ、色々あってな。それなりには鍛えてある。」

「……学園祭とかで、異種格闘技戦とかやったらおもしろそうやな。」

「俺はそういうものには出んぞ？ 師匠に堅く戒められている。」

「……アンタの師匠って……何か物凄いのを想像しちゃったんだけど……」

「いや、極普通の気の良いおっさんだったか？ 今は全国修行の旅に出て日本にいないがな。」

「……十分にイロモノよ。」

「アハハ……； あ、でも、拓海が一人抜いたわよ。」

「ゴウウラ、アア！！！！！！ 拓海イイイ！！ たった一人しか抜けんのかいッッッ！！！！」

しばらくで、ホンマに！！！！！！」

「『『『な、なんて厳しい……；……；……；』』』」

「……ハアハア……！ す、スマン、孝介！ あ、あとは、頼んだ……！！」

「………分かった（高が高校の体育祭で何をそんな必死に………）。」

「コラーッ！ 草薙！ 何をちんたら走ってるのよ！ もっと頑張んなさいよねーッッ！！！！」

「………チッ。俺も男ってことか。………仕方ない……！」

「………嘘ッ！？」

そんなこんなで、体育祭は終わった。総合優勝は1-Aが何気に貰っていた。

そして、MVP賞とやらは、何故か俺が貰う事になった。(そりゃ、そうだ。)

俺が本気で嫌そうな顔をして貰っているのを、

後ろで何人かが笑いを堪えているのが良く判った。

そして、とある日。某所。

side:???

「……………てな事があったんだ。いや、あの時は本当に参ったよ。

教室に戻ろうとしたら、みんなに捕まって、何故か胴上げされるしさあ。

いやはや……………何とも騒がしい連中だよ、全く。……………クスクス。」

其処には、誰も見た事が無い様な、年相応の男の子が笑っていた。

まるで側にいる誰か……………恋人に話し掛けるかの様に、楽しそうに学校での事を語り掛けていた。

そんな光景がどれくらい続いていただろう。

三十分……………いや、一時間……………いや、もっとかもしれない。

その間、もう段々と冷え込む様になって来た時期にも拘わらず、暗くなるまで話していた。

その内、もう話す事もなくなったのか……その物言わぬ相手に対し、彼は話を止めた。

……そして、只じっとソレを見詰め続けていた。

そうしている内に、その少年に声を掛ける者が現れた。

「……………孝介君。そろそろ中に入りなさい。もう、流石に外は冷える。」

「……………はい。有難う御座います。」

「……………うむ。今日も彼等には内緒にしておいてある。今の内に早く入るといい。」

彼等にバレたら事だ。」

「……………はい、済みません。もう少ししたら、そちらに参ります。」

「……………うむ。」

そう言って、その人は建物の中に入っていった。

一人残され、佇んでいた少年は……………。

「　　じゃあな、玲。又、来るよ。君の命日に……………ね。」

最後に、いつもの台詞をその墓石に投げ掛け、和尚さんの後を追った。

中間テスト明け（前書き）

皆様、いつも拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

実は、アクセス数を見てみたら、何時の間にか……

10,000アクセス&ユニーク1,000人突破していました。

皆様、心から感謝致して居ります。いやぁ……全く気付きませんでした……

もしも、何か御要望などが御座いましたら、何なりと仰って下さい。

私に出来る事でしたらば、頑張らせて頂きます。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

中間テスト明け

Side：三人称

「……ハア。今回は何か、今一出来悪かったわ。」

「へえ〜……かがみんでもそういう時つてあるんだ。」

「まあ、そりゃあね。そういうこなたはどうだったのよ？」

「ふっふ〜ん。今回も一夜漬けはバッチシ！」

「納得いかねー！」

「うわぁ……こなちゃん、凄ーい。でも、私も大分あがったんだよ。ほらー！」

「あ、つかささん、ホントに凄いです。前回より、軒並み五点以上は上がってますね。」

「えへへへ〜 草薙君が、私が解らない所を解るまで何度も教えてくれた御陰だよ。」

「そうでしたね。草薙さんは本当に凄いです。私も幾つか解らない

所があつたのですが、

「そこも草薙さんの御陰で、ようやく理解出来ましたし。」

「ほんとよね。私も草薙の御陰で、余り点数を落とさずに済んだ様なもんだしね。」

「うんうん。本当に草薙君様々だね　私もおかげでゲームに費やせる時間が増えたし」

「アンタは結局それか。」

「あれ？　それで当の本人は？」

「あゝ……それがねえ。」

あの体育祭の後、どうも前からあつたファンクラブってのが急成長したみたいでね。

その上、あれで目を付けた体育系の部活の両方が、今、彼を追っかけ回しててね。」

「うん、あれ凄かったよね。」

「ええ。私もファンクラブの方達というのを見るのは初めてでしたが……あれ程とは。」

「……そ、それは又、災難な事で……」

「あ、そうだ。今日で試験も終わったんだし、みんなで遊びに行こうよ。」

草薙君も誘って……ね？」

「あ、うん。それ賛成。どうせならみんなで行った方が楽しいモンね。」

「そうですね。今日は私も御付き合ひさせていただきます。でも、一体何をしましょうか？」

「そうねえ……今、何か映画とかやってる？」

「うーん……今やってるのって……確か、あの超有名アニメと恋愛映画とかぐらいじゃない？」

「そっか……まあ、マイナーアニメは最初から除外するとして。」

「酷っ！？ てかマイナーは無いでしょ！ あれ超メジャーだよ！」

「別にいいじゃない。どうせ、アンタあれDVDが出たら買うんでしょ？」

それに断言させて貰うけど、あれはマイナー。マイノリティー。

絶っつっ対に一般人は、あんなの知らないわよ。」

「ブーブー……そりゃまあ一ファンとしては買うけどさ。てか、逸いっ般人なら常識なのに……。」

「明らかにお前の言ってるのって、字が違うだろ。」

「アハハ……；、そ、それじゃあ、その恋愛映画って事でいいの？」

「まあ、それしか無いんじゃない？」

……で、そこで一度も会話に参加せず、ずっと落ち込みっ放しのカップルはどうするの？」「

「……OTL お供させて頂きます……（っ）」「」

「……そ、そう。まあ、いいわ。で、肝心のアイツは一体何処？」

「あ……草薙君なら、携帯で連絡を取り合っって現地集合した方が
確実でしょ」「

「……………そんなに凄いの？」

「うん、そんなに。」

「……………どんだけー。」

side: 映画館前

「あ、草薙！」

「おーい、こっちだよー ノシ」

「……………済まん、待たせてしまったな。」

「いやいや。草薙君の苦勞は、普段から目にしてるから大丈夫だよ。」

「……………本当に凄いのね。」

「……………いや、あれはえげつないと呼んだ方が相応しいだろう。」

……勘弁して欲しいもんだ。」

“あ、アハハハハ……；；；；；；；；；；；”

「ま、まあ、時間には間に合ってるんだし、さっさと中に入って落ち着こうよ、ね。」

「……ああ、そうだな。取り敢えず、泉。」

「ん？ 何、草薙君？」

「……子供料金で入る事は、俺が許さない。ちゃんと高校生料金で入る様に。」

「……何故にバレたし。」

「……アンタ……普段、思いつ切り子供体型なのを気にしてる癖に、ここぞとばかりに。」

「ブーブー……。だって、映画代って意外と食つんだよ？

他に欲しい物が沢山有るってのに。」

「……………それぐらいいけちるな。……………ハア、しょうがない。序でだ。俺が四人分纏めて出しておく。久坂、香椎の分はお前が出してやれ。それも男の甲斐性だ。」

「ああ、そりゃ勿論さ！」

「おおきに、拓海」

「ええ！？ わ、悪いよ、そんなの。」

「そ、そうよ。それぐらい自分で出すわよ。」

「……………気にするな。大した出費じゃない。」

「……………ですが……………」

「んじゃ、私の分は宜しくね」

「ちょ、ちよっとこなた！ アンタ、少しは遠慮しなさいよ！」

「まあまあ、かがみんや。折角奢ってくれるって言うんだし。」

「……ああ、問題無い。」

「ほじね」

「うう……。じゃ、じゃあ、悪いけど……あ、有難う。」

「……ああ。」

「ひっく……ぐすっ……ううっ……ひっく……」。

「泣き過ぎよ、つかさ；ま、まあ、気持ちは分かるけどね。」

「うん、結構いい話だったよね。みゆきさんもしっかり泣いてたし。」

「お、お恥ずかしい限りですノノノ」

「いやいや。美人の泣って、こう……そそのものがあるよね」

「オヤジか、あんたは!」

「……ふむ。意外と恋愛映画というのも悪くは無いもんだな。

……アイツが気に入ったのも分かるな。所で、香椎。久坂は泣き止んだか？」

「うおおおお~~~~ん…………….;.;。」

「……御覧の通りや。普通、逆なんちゃう？」

「……全くだな。ほら、久坂。好い加減泣き止め。そろそろ、周りに迷惑だ。」

「うっく……………ずずずっ…！ ち~~~~んッ！！ ツハア…
…あ~~~~。」

「……落ち着いたか？」

「あ。あ……………。いやあ……………よがった。本当によがった。」

「……………未だ、微妙に続いているな。まあ、でも大分落ち着いた方が。」

「アハハ……；ほんで、次はどないする？」

「そうだねえ……みんな、少しお腹空かない？」

「そうねえ……ちよっと空いたかな？つかさ達は？」

「うん、私も。何か沢山泣いたら、お腹減って来ちゃった。」

「はい、お恥ずかしながら、私も。」

「せやね。ウチもぺこぺこや。」

「あゝゝ……俺は何でもいいや。」

「……じゃあ、飯にするか。何処か御薦めの店でも在るか？」

「あ、うん。近くにケーキバイキングとか在るんだけど、どうかな？」

「私達は構わないけど……。」

「草薙君達は大丈夫かな？」

「そうですね……男性は余り、甘い物やそういう所は好まれないと聞きますし。」

「あゝ拓海なら構へんよ。しょっちゅうウチに連れ回されとるしな。

それに適度な甘味は身体にええし。体調管理はばっちしや。」

「……流石はりょうちん。既に旦那を尻に敷いてるな。」

「……俺も問題無い。妹に良く彼方此方連れて行かされたからな。慣れた。」

「……あ、相変わらず意外性はつちりだな。」

side: ケーキバイキング店

“ いただきますーす んー甘ーい！ 美味しーい ”

「……頂きます。……ズズツ。」

“……え？ それだけ？ しかも、ブラックコーヒー？”

「……そうだが……何か問題でも？」

“いや……別に……。”

「???.?」

「……うつぶ……ちょっと、最初の勢いで同じ量を取り過ぎたわね；
……」

「……でも、確か残したら別途料金を取られるのでしたよね？」

「……今、店員さんがチラッと見て行ったよね？」

「……うつぶ……でも、もう入らないよお……。」

「せ、せやけど……もうウチも拓海も一杯一杯やし……。」

「……て事は。」

「後、残ってるのは……。」

「……ん？ どうした、みんな。」

「あ……その、草薙は、甘い物平気？」

「……。」

「え……と、その……どう、なのかな?…」

「……………」

「……あ〜……え〜とお……………出来ればいいんで、食べて欲しいなあ……………なんて。」

「……………」

「……その……大変、申し上げ難いのですが、私達は……………もう……………」

「……………」

「た、頼むわ、孝介! 友達を助ける為やと思ってな? な?!」

「……………」

「孝介エ……。お、俺はもう、ダメだ。あ、後はお前に託す……………ガクツ。」

「た、拓海……………ツ!…!」

「……………ハア。お前達……………自分の限界や程というものを弁えないからこうなるんだぞ?」

幾ら試験明けで気が緩んでいたとはいえ、自身を律せられない者の末路。

その身にしっかりと刻み付けておけよ。」

“……………ハイ。”

「……………全く。お前等と言い、唯と言い……………。ほら、それを全部一つ所に集める。」

纏めて食ってやる。」

“あ、有難う（御座います）！！！” シュババババ……………！！”

「……………ハア（俺も大分甘くなったものだ）。」

「す、凄い……………。」

「……………あれだけの量、全部食べちゃった。」

「嘘お……………。あれ、私達が食べた分より、下手したら多かったんじゃない？」

「……………こいつ、ホンマに鉄の胃袋でもしとるんちゃう？」

「……いや、寧ろ宇宙になっているんじゃない？」

「……只単に、消化スピードが人より早いだけだ。」

「い、いえ……それにしても……凄いです。」

「……だから、言っただろう？ 慣れている……と。妹が良く食べ切れず残すのでな。」

良く、その残りを俺が全て、両親に食わされていた。皆の食べっ振りを見るにデジャヴがな。」

“………ゴメンナサイorz”

そして、この日はこの儘、現地解散した。

こんな賑やかで騒々しい毎日も、これはこれで悪くない。

まるであいつらと……そして、お前と一緒に居た頃の様だ。

そう思ってしまった俺は、やっぱり罰当たりなのかな……玲。

【休憩時間】

「……………ですよね。」

「あはは……………だよー」

「んむ？ ……………へえ〜かがみん、結構登録数、多いんだね」

「あ！ ちょっと！ 勝手に見ないでよ！！」

「んう〜？ 何か見られたら困るものもあるの？」

「な、何も無いわよ！ た、ただ、何となくよ！」

「……………男だ ていうか、絶対草薙君へのラヴメールだ」

「ち、違うわよっ！……………」

「ん？ 呼んだか？」

「!? / / / よ、呼んでないっ！ 絶対呼んでなんか無いんだから！ / / /」

「いやあ、実は今かがみんに、草薙君と何回くらいデートしたのか聞いててね」

「ちょ、ちょっとこなたあ!!! / / / / /」

「? いや、デートなんてした事は一度も無いが?」

「ほ、ほらね。私の言った通りでしょ?」

「ちえ……なんだ、つまんないの。」

「ただ、二人だけで出掛けた事は何度かあるが。」

「んなあああつつ?!?!? / / / / / / / / / / /」

“えええええつつつつつ!!!”

「それをデートって言うんだよう　それで、どんなデート内容だったの?」

ねえどんなのどんなの?　ねえねえってばあ　「

「……そうか?　只、参考書などを買いに幾つか書店を回っただけだが。」

【デート(?) 中】

「そう言えば、柘。」

「な、何よ……?」

「……そう警戒されても。」

「う……しょ、しょうがないでしょっ！ アンタの所為なんだから
っ！！！／＼／」

「……さっぱり分からん。それよりも、今更なんだが……。」

「……何よ。」

「良く此方のクラスに来るが、そっちのクラスにも友達はあるのだ
るっ?」

彼女達はいいのか？ …… 確か …… 日下部に峰岸と言ったか。

「は？ な、何でアンタがあの子の二人の事を知ってんのよ？」

「 …… 情報というものは、身内から漏洩するもの程、危険で確
実なものはないよな。」

「 …… つゝかゝさゝゝ！ …… ！」

「 …… 他にも、俺と出掛ける時は決まって、服を選ぶのに時間が掛
かったりとか、

妙に上機嫌になったりとか、良く失敗やドジをするとか …… 色々
と …… な。」

「 …… う、五月蠅いっ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
… 後でとっちめてやる …… ！／＼／／」

「 …… 所で、柊。」

「 ん？ 何？ 」

「 …… 別にダイエットとかする必要は、全く無いと思っただが。」

「 んな？！／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／
そ、それも …… ？／／／／」

「……いや、聞かなくとも、何となく身体が不調そうなのは見てとれるからな。」

「う……相変わらず鋭い……。で、でも、ほら、何と言っか……少しでも……ね？／／／」

「……俺には分からんが……。だが、一般的には、余り細身の女子は男には好まれないぞ？」

「……そ、そういうものなの？」

「……まあ、少なくとも、俺の周りでは皆、大概そうだ。」

「……ま、まあ、少しは控えておく……／／／／／」

【ゲーム】

「そっぴや、草薙君家ってPCだけでなく、他にも何も遊べる物が見当たらないけど、」

ゲームとか色々した事無いの？」

「……いや、あるにはあるが……基本的に、俺の所に皆して持って来るのが常でな、本体ごと。」

「本体ごと?! そ、それは凄いわね……;」

「……まあ、俺が余り物に執着しない分、周りが…な。その御陰で俺は更に……という流れだ。」

「あゝ……そういう事かあ。あ、じゃあ、PCゲームとかはやった事無いの?」

「いや、一応あるぞ。マインスイーパーとかソリティアとかな。」

「……いや、それゲームって……そりゃ、確かにゲームだけどさあ……」

「アハハ……; でも、あーいう単純なものって、ついついはまっちゃうんだよね。」

「そうですね。私も、この前ついついのめり込んでしまって、気が付いたら、

マインスイーパーの上級編を百秒切って……お恥ずかしい話ですがノノノ」

「あゝ……やり込む人って、何処にでもいるもんだよね。……困み

に草薙君の自己ベストは？」

「俺か？ ……確か……………上級編最速が、79秒だと記憶している。」

（ 作者最速記録です。実話 ） “……………どんだけー。”

【孝介の拘り^{こたわ}】

「草薙君への公開質問状コーナー！」

「わーい。どんどんぱふぱふ。」

「……………何だ？ この頓痴^{とんち}気騒^{さわ}ぎ……………というか、茶番は？」

「まあまあ、細かい事は気にしない、ない。そんなじゃ、先ずは質問その一。」

苺ショート苺は先に食べる？ それとも後？」

「……………先だ。後で食うと酸っぱくなる。」

「じゃあ、チヨココロネの頭って、細い方と大きい方どっちだと思
う？」

「……………大きいほうかな？ 考えた事も無いが。」

「それじゃあ、葱タン塩はどう焼く？ 片面？ それとも両面？」

「……………両面…かな？ 正直葱はあっても無くてもいい。寧ろ邪魔だ
と思う。」

「……………むう。後で、君とは話し合う必要があるそうだね。」

「それじゃ、次。シュークリームはどうやって食べる？」

「……………その儘、齧^{かぶ}り付く。」

「じゃあ、棒アイスの最後の部分って、どうやって落とさないで食
べる？」

「……………残りを丸ごと口に入れる。」

「じゃあ、ソフトクリームの最後のコーンとかは？」

「……………俺は寧ろその部分を食べる爲に、アイスを食べているのだが。」

「

「……じゃ、じゃあ、目玉焼きには何を付ける？」

「日本人なら醤油だ。他は認めん。」

「……………」

「じゃ、次は私から。焼き鳥とかはどうやって食べる？」

「……一人の時はその儘。皆で食う時は、一言断ってから串から全部取って、銘々食う。」

「好きな色は？」

「……黒。」

「ふ、ふん………私と同じ……か／＼（そっいや、アンタもやっぱり歯医者とか怖い？）」

「……いや、歯医者には懼かった事が無いのでな………良く分からん。

只、親友が泣き喚わめいているのを見ると、余程恐いのだろうなあとは思っている。」

「……そ、そう。あ、ピアノとフロラならどっち？」

「……ピア カだな。長年付き添った者を見捨てる事など、俺には
出来ん。」

「……むう。そこまで同じとは……。」

「……最早、運命共同体だね、かがみん」

「……う、五月蠅いっ／＼／＼／＼／」

「あ、他のみんなからも、色んな質問受け付けてるからね。どし
どし」応募待ってます

あ、そうそう。勿論、草薙君以外への質問もおkだよ」

「……誰に向かって言ってるんだ？」

「え？ そりゃ勿論、画面の向こうのみんなだよ」

「???.?」

「じゃあ、バイニーッ ノシ」

「……全く以て、訳が解らん。」

年末年始

side：孝介

今年も、この季節が来てしまった……か。

今日は、学園祭……桜藤祭というらしい……も終わり、実力・期末、
両テストも終了し。

迎えた終業式。その日と翌日の皆からの遊びの約束も断り、

俺は独りで又、玲の所に来ていた。

「……………なあ、玲。俺、又一つ、歳とっちゃったよ。

これで又、お前より、一つ離れちゃったな。

……………どんどん、俺も、世界も、お前から離れて行っちゃうんだな。

……………まさか、クリスマスが、この世で最も嫌いな日になると
は、想いもしなかったよ。

……ねえ、玲。俺はね。今でも、君の事が好きだ。……いや、愛している。

……でも。……でも……ね。……俺、やっぱり節操無いのかなあ？

前にも、玲に言われた事あったよね？

『みんなに好かれ過ぎ！ もっと自分だけを見て！』ってさ。

……確かにそうだよ。俺は……今の俺は、君だけを見ていないもの。

……俺には、又、好きな人が出来ちゃったんだから……さ。

あ、でも安心してよ。俺は、彼女に告白する気も、付き合っ気も全く無いからさ。

……まあ、玲に操を立てる事は出来なかったけど……；；；

……うん。でも、それでも、やっぱり。俺は、君と……彼女に恋しているんだよね。

じゃあね、玲。又、来年。君の命日に会いに来るよ。」

その夜は、ホワイトクリスマスだった。……その儂い淡雪は、まるで……彼女の様で……。。

「……ねえねえ、お姉ちゃん。」

「ん？ どうしたの、つかさ。」

「……あれ、草薙君じゃない？」

「え？ ……あ、本当だ。でも……隣に居るのは……確か、管理人さんだっけ？」

「うん……確か、そうだと思うよ。……何か、二人共大人びてて似合ってるかも。」

「……そうね。」

「あ、ごめんね、お姉ちゃん。わ、私……えと、あの……その……」

「……ぷっ。何て顔してるのよ、つかさ。」

「あ……う……はう……。」

「……私なら大丈夫よ、つかさ。元々、アイツとは何でも無いんだからさ。」

「え？ ……で、でも、お姉ちゃん……草薙君と……その……。」

「言ったでしょ？ 別に何でも無いんだってば。」

告白した訳でも、恋人になった訳でも、付き合ってる訳でも無いんだしさ。

アイツが何処の誰と、どういつ関係になるうが、何処に何をしに行こうが、

私には何の関係も無いわよ。」

「…………お姉ちゃん。」

「ほらほら。折角の一年の初めに何て顔してるのよ、つかさ。」

「…………うん、そうだよね。未だ始まったばかりなんだから、もっと笑っていないとね。」

「そうそう。一年の計は元旦にありよ。」

「うん」

「……あやや？ あれ、確か孝介君の同級生じゃ無かったっけ？」

「……ああ、そうだ、間違い無い。」

「……はあく……本当だったんだねえ。現役女子高生の生巫女……。

マニア達なら、垂涎の極みだね。」

「……漣さん。そういう事を言わないで下さい。」

「おろ？ ……ムフフ も・し・か・し・て 二人が気になつて帰れない……と・か？」

「………一人で帰って下さい。」

「あくん、もう嘘、う・そ ちょこごとと擲掬っただけでしょ？」

「……ハア。……柊。」

「……あ、草薙。え……と……こ、コンバンワ！」

「……いや、その前に言うべき事があるだろう。」

「へ？ な、何かあったっけ？」

「………変な奴。取り敢えず、明けまして御目出度う。今年も宜

しく御願います。」

「あ、ああ。そう言えば、そうだったわね； お、御目出度う。」

「やつぷ。かがみちゃん……だったよね？ 今年も孝介君を宜しくね

いゃあ……御存知の通り、融通も何もかもきかない子だからさあ。。」

「へ？ あ、はい。」

「……あ、あの……。」

「んう？ なあに、つかさちゃん……だったよね？」

「は、はい！ あ、あの……えっと……澪さん？ ……は、その……。」

「ん？ なになに？ もしかして聞きにくい事？ いいよ、なんでも

お姉さん、そんな細かい事、ぜんぜん気にしないから。」

「は、はい。あの……えっと……澪さんは、その……草薙君の、彼女さん……とか？」

「……へ（は）？ ないない。それだけは、絶対に有り得ないよ（な）。」「」

「……息びったり。」

「偶然だ（よ）。」「」

「……それ、なんて漫才？」

「アハハ……； あ、それより、御神籤おみくじ引きたいんだけど、何処？」

「あ、こっちです。」

「よっし！ そんなじゃ、今年一年の運試し！ ジャ〜ラジャ〜ラ……ほいっと！」「」

「あ、凄〜い！ 大吉ですね！ おめでと〜うございます！」「」

「いやいやあ！／＼／＼ 今年は幸先がいいねえ あ、孝介君は？」

「……ああ、思った通りのものが出てくれましたよ。」「」

「……って、大凶?! ……これは、又、両極端なのが出たわね。」「」

「……いや、これでいい。……これでなきやいけないんだ。」

「？　なんでよ？　………も、もしかして、マゾ？」

「……………」

「……？　ちょっと、本当に一体どうしたの？　何か、変よ、アンタ。」

「……柊に言われるとは……………」

「……アンタの中の私が、何となく解ったわ。」

「……まあ、いい。じゃあな、柊。又、今月、学校で会おう。帰りますよ、遷さん」

「え？　あ、うん……………。ちょっと、待ってよ、孝介君。」

「……………草薙君、何かやっぱり変だったよね？」

「……そうね。」

彼女との間に、僅かに凝りしこを残した儘、年は過ぎ、二学期はあつと言つ間に始まっていた。

バレンタイン+

Side: 孝介

「……草薙、オッス。」

「……ああ。」

「草薙君、あけおめことよろ。」

「……ああ、宜しく。」

「草薙君、おはよう。」

「……ああ。」

「草薙さん。明けまして御目出度う御座います。」

「……ああ、明けまして御目出度う。」

「よう、孝介！ あけよろ！」

「……あ、ああ。宜しく。」

「孝介！ よろ！」

「……………ああ。」

何人か、物凄く返答に困るのだが……………まあ、いいか。

しかし、この学校も進学校というだけあって、試験が多い。一年で併せて……………七回か。

そして、時は進み……………今日は、その六回目の試験結果が全て出た所だ。

【テスト明け】

「うゝ……………この学校、無駄に試験、多過ぎるよあゝ……………orz」

「まあ、気持ちは分かるけど……………でもそれ、普段勉強してない故の弊害よね?」

「アハハ…；で、でも、これでも、大分解る様になって来たんだ

よっ。」

「…………草薙の御陰でね。」

「そうですね。私もとても感謝していますし。」

「ホンマに、孝介様々やな。」

「あんまり頼り過ぎもどろかと思うけどね。」

“………………”

「…………でも、そういうかがみだって、孝介に色々教えて貰ってるんだろ？」

「……………わ、私はそれ程じゃ無いわよ。」

「え〜…………あ、そっかあ」「ニヤニヤ…………」

「う……………な、何よ？」

「ん〜……………かがみんは、勉強以外の事を草薙君から教えて貰ってるもんね？」「ニヤニヤ…………」

「んなつ?!/!/!/!/!/」

「で……………一体、孝介とは何処までいったん？　ねえねえ、お姉さんに教えてみ？」「ニヤニヤ…………」

「う……べ、別に、アイツとなんて、何も無いわよっ！／＼／＼／
／＼／＼」

「……へえ……。で、そこんとこ、どうなん？ こ・う・す・け」

「どう……と言われても……な。特にこれと言った事は、何もしていないが。」

「ほ、ほら見なさいよ。私の言った通りでしょ？（ガルル…余計な事言ったらコロス！）」

「……………だから、何故に睨まれる？」

「ふう〜ん……。じゃあ、何処にも出掛けなかったの？」

かがみんが家に遊びに来たのかも無く？ 二人だけで過ごした事も一度も無し？」

「……いや、何度か待ち合わせをして、一緒に出掛けた事はあるが、

家に何度か来た事もあったな。確か、隣のクラスの日下部達と遊ぶと言って出て来たとか。」

「ふう〜ん……へえ〜……ほおお〜……なあ〜んだ、かがみん。」

「ちゃあ〜〜んと、やる事はやってんじや〜ん」

“ニヤニヤニヤニヤ……”

「ううう……………// // // // // // // // // // //」

「ほな、恒例のお姉さん達との会話しようか？ 取り敢えず、あっち行こか」

「ううう〜……ドナドナド〜ナ〜、ド〜ナ〜……; ; ; orz」

「……………何時の間に恒例に？ というか、毎回何処に連れて行かれてるんだ？」

「まあまあ、細かい事は気にしない、気にしない」

【甘いモノ】

「草薙君！ ハッピーバレンタイン」

「……………ああ、そうか、今日は……………。……………有難く頂戴する。」

「ん〜じゃ、私も…………ハイ」

「……………ああ、有難う。」

「では、私も。どうぞ、つまらない物ですが。」

「……………ああ、有難う。」

「……………い、一応、私も……………ハイ。い、言っとくけど、義理だからね、義理！／＼／＼

……………か、形が歪ひずで悪いかったわね！／＼／＼／＼

「……………いや、何も言っていないんだが。……………だが、まあ、有り難く頂く。」

「いやあ〜……………今年からは、草薙君が居てくれる御陰で、

私達も、女としての面目躍如が果たせそうだよ」

「……………そういうものか？」

「アハハ…；ど、どうなんだろう？」

「ですが、男の方に送るといっのは、中々に気恥ずかしいものがありますね／＼／」

「まあ、ウチは毎回拓海にしかあげた事無いしな。そういうの、よく分からんで。」

「そうだな。俺も涼子以外の子からは、毎回必ず断ってるしな。」

「……………それに引き換え……………」

「……………ああ、うん。凄いやね……………」

「……………言っな。」

「其処には、机の中にも、外にも、下駄箱にも、超大量のチョコの山が……………」

「……………頼むから、言わないでくれ。」

「……そ、そんなに、色んな人から貰ってるんなら、

私達から態々貰わなくても良かったんじゃない？」

「……いや、それとこれとは違うだろう。柊達からののは別物だと思っ
っている。」

「………そ、そう／＼／＼／」

「……おやおや、こっちは相変わらずお暑い事で」「ニヤニヤ……」

「……う、五月蠅いっ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

「………?」

【質問その一】

「草薙に質問です。」

自分が凄い事を知っていて、色々と行動しているのですか？

もし自覚してなかったら、もうボコボコにしますね？　ね？　だつてさ。」

「……凄い？　俺がか？　師匠に比べたら、俺なんぞ鎧袖一触なんだが。」

勉強が出来るというのは……まあ、遺伝だろう。

親父はさておき、母さんは科学者だしな。唯も、可成り頭が良いしな。

……それと、俺をボコボコに？　……いいだろう。

強い奴と闘えるのは、俺としても望む所だ。」

「……アンタの師匠って、やっぱり絶対イロモノだわ……」

「それじゃ、次の質問　え〜と、何々？　……あ〜と、これはりょうちん、パス。」

「ほえ？　ウチ？　どれどれ……あ〜……成る程、これね。え〜と。」

こなたん、かがみん、ひーちゃん、ゆきつちに質問。4人は孝介の事をどう意識している？

多分……というより絶対、かがみんは大好きな人だと判るけど、他の三人は好きなの？

好きなら、それが友達レベルなのか、男の子レベルなのか？

この辺りどないでっしやる？ ……やて。で、そこんとこ、どうなん？」 ニヤニヤ……

「『『『ええええええ？！？！／／／／／／』』』」

「……何故に、こなたんまで驚くの？」

「い、いや、最初の答える人の所しか見てなかったからさあ／／／」

「ふう〜ん……そ・れ・で？ みんな、どうなのかな？ （ニヤニヤ）

あ、かがみんは、答えるの最後ね。やっぱ、ラスボスは^{おおとし}大取で」

「誰がラスボスか！／／／」

「まあまあ。んじゃ、ゆきつち こなたん ひーちゃん かがみんの順でヨロ〜

あ、因みに、とっくに孝介は外に出してあるから、ちゃ〜んと本

いんじゃない？／／／」

「え？ なになに　なにが？　なにか、あれからまた、進展あったの？」

そこんとくくわくwsk!」

「べ、別に……なにもないわよっ／／／　た、ただ……その……ちよつと……／／／」

「ちよつと……なあに？」

「う……た、ただ、この前、やつと……その……手を……
…／／／」

“手を？”

「その……て、手を……繋いだ……ただけど……（ボソッ）／
／／／／」

「~~~~~ツツツ！……！　あ〜っ、もう堪らんわあ〜、もう
っ！……／／／

可愛いなあ、もっつっつ！……！／／／／／」

「くっはあ〜……この物凄く甘酸っぱい雰囲気、がまた、なんとも……

.....

それでそれで？　他には？」

「ほ、他には……って……も、もう、何も無いわよっ／＼／＼／

も、もう、これでいいでしょっ！／＼／＼／

「……いやあ、まだダメだよ、か〜がみ〜ん……」

「……な、なによ……気味悪いわね……さっきから。」

「だあ〜ってさあ〜……まだ肝心な事、聞いてないよ？　かがみんの・気・持・ち」

「うっ……／＼／＼／　（ば、バレてたか……！／＼／）」

「むっふっふ……　逃げようったって、そうはいかへんで……かがみん」

「そ、そ、そんなの………い、言えるわけないでしょ……！！……！！／＼／＼／／／／／／／／／／／」

「……あ、ホントに逃げた。」

「……まあ、しょうがない。今回は、こんぐらいで見逃してあげよ
か。」

「ん〜……まあ、そうだねえ。一応、かがみんの可愛いところは沢山
見れたし。」

ちゃんと、写真もバッチシ撮れたしね。」

「よしよし ほな、後でそれを売り捌きまひよか。」

「「ピッピッピッピ……」」

で、結局。真つ赤になって逃げ出したかがみを、孝介が途中で掴ま
え、慰めていた。

その光景を収めた写真がまた、とある人の手によって回っていたが、

それらも全て、孝介の手によって摘発され、没収されたのであった、
まる。

秘密

【携帯電話】

「……………だよなー。」

「アハハ……………臭いよなー。」

「せやろ〜？ 孝介もそう思うよなー？」

「……………まあ、それが普通だと思うが……………ん？ 済まん、電話だ。」

……………？ はい、もしもし。どうした、唯？」

「……………唯……………て誰？」

「ああ、そーいや、知らない人も居たんだけ？ 唯ってのは、草薙の妹よ。」

「へ？ あいつに妹いたの？」

「ええ。とても可愛らしい方でしたよ。」

「……何時の間に、会ってたん？」

「あれは、確か……夏休み入って直ぐでしたよね？」

「そうそう。教室にみゆきの忘れ物を取りに来たら、

草薙が妹さんと親友って人と一緒に居たのよ。もう、ビックリしちゃった。」

「へえ……で、その親友ってのは、どんな人なん？」

「え〜と……なんか、物凄く綺麗な外人さんで、名前が確か……ア……ア……ア……？」

「……そうか、母さんが又やったのか。流石……凄いな。」

……
……っておい、アルス、テメエ！ どさくさに紛れて、唯に抱き付いてんじゃねえ！！」

「ああ、そうそう。アルスさんて言うのよ、確か。……て言うか……
……」

「……う、うん。草薙君……なんか、違うよね……」

「あ……まあ、アレなんじゃない？ ほら、親友の前だと素の自分になるっていうヤツ。」

「ああ、成る程……って事は、孝介はウチラの前では、未だ猫被つとるっちゆうことか?!」

「あゝ……ま、まあ、そういう事になる……の、かな?」

「……ほほう……ええ度胸やなあ……あんのアホウ。」

「ああん?! 五月蠅えぞ、バカ渡! おい、サナ! 聞こえてんだろ!

其処の糞五月蠅えバカを黙らせる!」

「な、何か物凄く怒ってるよ……; ; ; ;」

「そつだねえ……。でも、あんなに感情的な草薙君は初めて見たよ; ; ; ;」

「そつ言われてみりゃ、そつだよなあ……。普段のアイツって、何と言つか……。」

「無口系……は違うか。結構喋ってるし。じゃあ……クール系?」

「ああ、そんな感じやね。……でも、アレ、クール系とは程遠い熱血系やな。」

「ああ！？ 喧しいぞ、アホアルス！！ うっ……………わ、分かった、分かった。」

俺達が悪かったよ……………だから、泣くなよ、唯。」

「あ、今度は謝った。」

「しかも、あんなに情けない声で……………」

「流石の草薙君も、妹には弱いんだねえ。」

「ああ……………ああ……………分かった。母さんに、御目出度うって言うといてくれ。」

……………え？ ………………はあ……………な、何いっ！！？ ………………ま、マジか？！」

「……………ど、どうしたのかな？ 急に大声出したりして……………」

「何か一大事が起きた雰囲気だけど……………」

「……………そう、そうか。まあ、ガンバレ。俺は、それには全く関係無いからな。」

「……………なんか、物凄い事が起きたみたいだね。」

「せやな。……………なんや、ものっそいおもしろそうやないか??」

「……………これは、後で問い詰める必要性がありそうだなw」

「ん? ……どうした、お前等。何かあったのか?」

「それはごっちのセリフや! 一体、何事があったん?」

「……………ああ、今のか?」

“うん!-!”

「……………それはな……………」

“うん、うん!-!-!”

「……………内緒だ。」

“……………（ズコツ）！？”

「なんやねん、それはっ！！ 誰が漫才せえ言ったんや！！！」

「……………まあ、気にするな。何れ分かるさ。その内、全国的に知れ渡るだろうしな。」

“???? 全国的？”

「……………今は、もう何も言わん。」

「……………ドケチ。」

【暴露】

《あ、それから数日後》

「ねえねえ、昨日のTV観た？」

「みたみた 私、すっごい驚いちゃった！」

「ホンマにな。まっさか、あの世紀の大発見とやらをした科学者の姉ちゃんが、」

あの俳優兼社長の六道大祐りくどうだいすけの嫁さんやったなんてなあ。そら、絶対分からん訳や。

科学者って言うぐらいやし、どうせ滅多には出えへんのやろ？」

「だろつねえ……。それに、何と言っても更に驚いたのは、あの物凄く可愛い娘だよ。」

「本当よね。あんな可愛い娘が、此の世にいたなんてね……」。

でも、あの子どもで見た事あるような……？」

「かがみさんですか？ 実は私もなんです。でも、何処で見たの
か思い出せなくて……」。

「え？ ゆきちちゃんも？ お姉ちゃんも昨日からずっと分かんない
って考えてたんだよ。」

「へえ……みよんな事もあるもんだ。

でも、あんなすごい可愛い子ちゃんを忘れるもんかねえ？」

「そうなのよね〜……。でも、なんか、どうしても思い出せなくて……。」

あ、草薙。あんたも昨日のあのニュース見た？ って、アンタの部屋にはTV無かったっけ。」

「いや、昨日は遷さんの部屋に行って、一緒に見ていた。」

「へえ〜……。あ、それならさ。アンタ、あの科学者の……え……と、何て言ったっけ？」

「確か……葛城雪かつらぎゆきさんとか仰ってましたね。」

「そうそう。その葛城って人の側にいた女の子！ アンタ見覚えある？ ……葛城？ あれ？」

「……そう言えば、何処かで聞いた事あるような……？」

「……そりゃ、聞いた事はあるだろうな。柊と高良は。少なくとも、本人から。」

“……え？”

「六道大祐。本名は葛城大祐。名は同じ字だ。身長190cm、体重80kg。」

好きな物は子供。嫌いな物は大人と犯罪。

好きな食べ物は妻の手料理。嫌いな食べ物は冷凍食品。

趣味は旅行で、特技は御存知、役を演ずる事と、人心掌握術に長けている事。」

“……………え?”

「一方。妻の葛城雪。身長160cm、体重・3サイズ共秘密だそ
うだ。」

好きな物は子供と研究。嫌いな物は家族を除いた、研究を妨げる
モノ。

好きな食べ物はパスタとピザ。嫌いな食べ物は冷凍食品。

趣味は研究で、特技も研究な、生粋の研究者。」

“……………え?”

「最後。あの可愛い少女は、葛城唯。身長145cm、体重・3サ
イズ共、母と同じく秘密。」

「好き嫌いは、趣味・特技含め、全て兄関係で埋め尽くされている。」

「……………な、なんで、アンタは、そんなにあの人達の事、詳
しいのよっ?!」

「せ、せやで!? あの人達、突然出て来て、『ウチラ家族どすえ
?』とか言い出して、」

あの場にいた人達全員驚かした上、全く何の経歴も分からん謎軍
団の筆頭やのに!」

「……………いや、少なくとも、男の方は素性が割れてるんじゃないのか
?」

「とんでもない! あの人は、六道大祐って名前と、俳優兼社長つ
て事ぐらいしか」

世間に全く何も知られていない、超トップシークレットなんだぞ
?!」

「……………それは、本当か？ 俺を揶揄っている訳では無く？」

“ 勿論！！！！！！ ”

「……………あの万年バカップル夫婦め……………。其処迄秘密にしていたのか……………」

「……………バカップルなん？」

「……………あの会見を最後まで観ていなかったのか？ 最後にキスしていただろう？」

「……………ああ、してたしてた／＼／ 私、家族みんなで観てたから、物凄く恥ずかしかったよ／＼／」

「……………だろう？ あれを所構わず、人も構わずそんじょそこらでしているんだぞ？」

傍迷惑な事、この上無い。アレは見させられているこちらの方が、余程恥ずかしい。」

「……………だから、なんでお前は其処迄詳しいんだよ？ もしかして、ストーカー？」

「……………寧ろ、俺がストーカーされている様なものだな。……………生まれ

た時から。」

“……………へ？ じゃ、じゃあ……………も、もしかして……………？”

「ああ、あれが俺の親父と、母さんと、妹。俺の家族だ。」

“……………ええええええええええええ……………
……………ええええええええええええ……………
……………ええええええええええええ……………”

「……………」
「……………」。……………」
「……………」。……………」
「……………」。

「……成る程……何処かで聞いた事があると思ったら……。」

「……え、ええ。御本人に、この場所で直接御聞きしましたね……
確かに……。」

「……むう………そう言えば、草薙君もどことなく似てるよね。」

「……顔とか？」

「いや、それもあるけどさ……色々、人に言えない秘密を持つてる
所とかさ」

「………そうか？ 俺には余り自覚は無いのだが。」

「……今、認めたね？ 人に言えない秘密があるって事を！」

「……人間、生きている限り、大なり小なり、他人に言えない事な
ど幾らでもあるものだ。」

「……むう。又、^{かわ}躲されたか。」

「……まあ、そういう訳だ。つまり以前の携帯での会話は、

母さんが何やら受賞するという、妹からの報告だった訳だ。」

“……成る程。”

「そう言えばさ。さっき、草薙君、妹を紹介する時、可愛いつて付け加えたよね？」

「……そう言えば、そうやね。アレで何気シスコンかいな。妹専用クーデレ？」

「……かもね。しかも、妹の紹介の中身が……ねえ？」

「せやな。殆ど兄関係で埋め尽くされとるって……惚気かつちゆうねん。」

揃いも揃って、ブラコン&シスコンバカップル兄妹が。」

「……しかも、本人気付いてないよね……アレ。」

「間違い無いな。アレは絶対に天然やる。じゃなきや、素面シラフでなんか普通言えへんわ。」

「……つまり、結論としては……。」

「ダメだ、このシス&ブラコン、早くなんとかしないと……」

OTN「」

孝介エ・・・

【いったい、どっち柊〇「柊？」】

「……そういやさあ……今更なんやけど……。」

「ん？ どつたの、りょうちん？」

「いや、草薙って何時もみんなの事、名字で呼ぶやん？」

「……まあ、そうよね。でも、私達も草薙の事、名字で呼ぶわよ？」

「それはええねん、別に。それにウチと拓海は孝介て呼んどるし。問題はそこやないねん。」

「……涼子さん？ では一体、何が問題なのでしょうか？」

「名字で呼ぶうちゅう事は……や。かがみんとひーちゃんの区別……付かないんちゃう？」

“……………あ。”

「……そう言われてみれば、そうよね。」

「あ、アハハ……全然気にした事無かったけど……確かに、困っちゃうよね。」

「せやろ？　なあ、孝介。そこんとこどうなん？」

「……どう……と聞かれても……な。今迄、一度たりともそれで困った事は無いぞ？」

「そんな訳ないやろ！？　単に気付かなかっただけか、忘れとるだけや！」

ほんなら、試しに今、呼んでみい？　どっちでもええから、好きな方呼びい？」

「……何故にそんな事を……まあ、いいか。じゃあ……柊。」

「……何よ。」

「……え？　今のがみん、呼んだの？」

「え？　そうよね、草薙？」

「……ああ、そうだが。どうかしたか？」

「いやいや？ 今、どっちも見てない上に、終しか言つてへんやないかぁ！……！」

「……それでも、最初に呼ぶのはかがみなんだね。」

好きな方呼ぼうとすると、まずはかがみなんだね。」

「うなっ？！……………」

「まあ、惚気はまた、後で聞くとして。

ほんなら、今度は（かがみんを向きながら、ひーちゃん呼ぶ）で、よろ。」（カンペ）

「……だから、何故にそんな面倒な事を……。……………柎。」

「え？ なあに、草薙君。……………て言うか、私こっちなんだけど。」

「……せやから、なんで今ので判んねん。今、明らかにかがみん向いとつたやないか。」

「ふえ？ え、で、でも、今呼んだの、私だよね？」

「ああ、間違い無い。」

「せ・や・か・ら……！　なんで、判んねんって聞いとんねん……！」

「え……と、何となく……？」

「……ウチに聞くな。判るか、ドアホウ。」

「……本当に不思議だね。あ、それなら……おい、かがみん。

戻って来ないと、草薙君がキスしちゃうぞだって」

「ええええええ?!?!?!　い、いや、まだ、私達、そ、そんな関係にはあ……そのう……」

「……これこれ、かがみんや。今は、嘘だよ？」

「でも、アンタがそれで良いなら……その……へ？
嘘？」

「……うんむ。」

「……だ、騙したわね……こーな……」

「……………あゝ…ソウデスカ。」

「ほな、頼むで、孝介！ つ（カンペ）」

「……………。」

「よし、ほなごぞ〜。」

「……………ハア。柎。」「……………何よ。」

「……………柎。」「何？ 草薙君。」

「……………柎。」「……………何度も呼ばないですよ。」

「……………俺に言われてもな。柎。」「あ、また私だ」

「……………最後。柎。」「あれ？ 最後も私なんだね。」

「……………以上だ。」

「……………完璧やん。だから、なんでやねん……………。」

「「さあ？ なんとなく。」」

「……………「……………やっぱ、この双子テレパシーとかあるんじゃないか……………？」……………」

「で？ 結局、納得はしたのか、香椎？」

「……微塵もでけへんかったけど……でも一つだけ判った事はあるわ。」

「え？ 何が判ったの？」

「孝介とアンタラは一蓮托生……いや、一心同体やって事や。」

孝介とかがみんのバカップルは言わずもがな。ひーちゃんともええ兄妹になれるで、ホンマ。」

「えへへへ な、何か嬉しいな／／／」

「……う、五月蠅いつ……！！／／／／／」

だ、大体、私と草薙は、まだカップルなんかじゃ無いわよ……！！
／／／／／／／／／／／／／／／／

「……かがみん。今、ポロツと本音が出たね。『まだ』……ねえ？」

「（ボフウツ……！！）……！！……！！……！！……！！……！！
／／／／／／

「いや〜っはあ〜っ……御熱い事です」

「……結局オチはバカップルかい。」

【ホワイトデー】

「……柊。」

「え？ なぁに、草薙君。」

「……先月貰った、チョコの御返しだ。」

「あ、わぁ……有難う！」

「……次、泉。」

「あ、有難う」

「……次、高良。」

「有難う御座います、草薙さん。」

「……最後に、柊だ。」

「あ、ありがとう……／＼／＼」

「ねえねえ、開けてみてもいい？」

「ああ、構わない。」

「えへへ……何が入ってるのかな？ ……あれ？ これって……マシユマロとマフラー？」

「ああ。市販の物で悪いが、一応それぞれ好みそうな物と、似合いそうな物を買ってみた。」

「わあ……！ すごーい！ これもふもふしててあったかーい！ 本当にありがとうー！」

「いや、気に入って貰えたのなら、それで充分だ。」

「へえ……どれどれ、私のは……と。クッキーと……コレ何？」

「髪留めだ。泉は只でさえ髪が長いから、それを束ねる何かを、と

思ってたな。

流石に女性にゴムだけでは、華が無いだろう？

どれが気に入るか判らなかつたのでな。一応、幾つか買っておいた。」

「お〜……成る程。ありがたく貰っておくよ　いやあ、センスいいねえ、ホントに」

「そうか。邪魔にならずに済んだのなら良かったが。」

「邪魔だなんて言わないよ。折角ちゃんと選んでくれたんだしさ。」

「……そうか。それは良かった。」

「では、次は私ですね。……これは、和菓子と、イヤリングと……宝石ですか？」

「ああ。一応、日持ちのする和菓子詰めを探してみた。」

後、それは、穴を開けずに耳に嵌めるタイプの奴だ。

それと、そっちの宝石の方は、付け替えタイプという奴らしくてな。

何でも、その飾りの宝石の部分を付け替えられるそうだ。セットで売っていたのでな。

纏めて買った。序でに、それはオパールとトルマリン。高良の誕生石だ。」

「こんな……とても素敵なお物を……本当に有難う御座います！大事にします！！」

「……そうか。少し凝り過ぎかと思っただが、喜んで貰えた様で良かった。」

「私達でこれだけ色々貰えるんなら、かがみんはさぞかし凄いいんだろっねえ？」 ニヤニヤ

「う……べ、別に、私だってみんなと何も変わらないわよっ／／／／／」

ま、まあ、ちょっとぐらいは、期待しなくてもないけど……／／／／／」

「はいはい、いつものツンデレ御馳走様 それより、早く開けてみてよ」

「う……／／／／／ わ、わかったわよ／／／……これは……？ ……！！／／／／／／／／／／／」

「御覧の通り、ホワイトチョコレートと、ネックレスだ。」

「う……………／／／／／で、でも、このネックレス二つあるけど…
…？／／／」

「ああ。それ、箱の外からでいいから、良く見てみるといい。」

「え？ ………………あ、これ、半分欠けてる？」

「正確には、それは半月のネックレスだ。今、柎が持っているのが、左の半月。」

それで、こっちのが右の半月。これを二つ合わせると、ちゃんと満月になる様になっている。」

「へえ……………これ、良く出来てるわね……………」

「ああ。それで、この半分を、柎に。」

「ふえ？ わ、私？ で、でも、私、もう貰ったよ？」

「いや、これはこれだ。元々、一番最初に目を付けたのがこれだったからな。」

双子の柊達には、一番相応しいんじゃないかと思ってな。」

「うわぁ……………あ、ありがとう!!…これ、ホントに嬉しいノノノノノ」

「う、うんノノノ あ、ありがとう……………草薙ノノノノノ」

「いや、喜んで貰えたのなら何よりだ。」

「はぁ〜……………しっかし、まあ……………孝介もようやるなあ。」

まさか、こんなとんだプレイボーイやとは思わなかったぞ?」

「……………プレイボーイ? そうなのか? 俺は只、皆が喜びそうな物を買って来たただけだが。」

値段も大した物じゃ無いぞ?」

「値段とかはどうでもいいんだって。ようは、気持ちだからな……………特に孝介の場合。」

まあでも、そういう事、言っちゃまってーのは、確かにプレイボーイとは程遠いなw」

「……………? 良く分からんが、まあそういう事なんだろう。」

「ハア〜……。こんなら、ウチも孝介に何か贈っとくべきやったんかなあ？」

「ちよ、ちよっと、涼子?!」

「……いや、もし万が一、そうだった場合は、久坂に返している。

流石に他人の恋人から、そういう物は貰えない。」

「……そうやな、そーいや、コイツこーいう奴やったわ。」

「……本当に律儀っていうか、融通が利かないっていうか……。」

まあ、だから俺達も、お前と友達やってられるんだけどな。」

「……………そうか。」

そんなこんなで、二学期もあっという間に終わり、春休みもすぐに過ぎ……………。

又、出会いの春が……………一年生が始まる。

孝介エ・・・（後書き）

如何でしたでしょうか？

これにて、一年次は終了です。次回からは、ようやくと原作？ 少なくともアニメ本編に入れます……；

あ、所で。どうでもいい事なのですが、みゆきの誕生日を調べていた時の事です。

みゆきの誕生日は10/25なのですが、その日は実は、

某のび太君と某静香ちゃんが婚約した日だそうです。私は普通に知りませんでした；

あ、後。某勇 王で、超 神が巨大隕石ごとESUI ドウに消えた日だそうです。

いやあ、調べてみると色々面白いものがありますね。

皆様も一度ならず、御調べになられるのも面白いかもしれませんよ？

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

プロフィール 二年次 変更&追加

各オリジナルキャラ 追加&変更プロフィール

草薙孝介

高一 2 - D所属 180cm 55kg

好きなタイプ： 玲・柊かがみ

主人公。一年次の試験は全て満点通過。入学当初に比べ、大分表情や感情も増えて来た。

同学年でファンクラブに入っていない女子は居ない、と噂われている学年一の有名人。

自分自身で家族の事を暴露した。……が、内容が内容の爲、友達内の秘密になっている。

かがみとは、クラスが同じ事も手伝い、最近特に良い仲になっている

る。

未だ恋人になってはいないが、やっている事は長年付き合っている恋人以上。

でも、進展具合は手を繋ぐまで。どんだけ初心つひいねん、オマイラ。

しかし、未だに漣とは関係を持っている模様。

因みに、漣も孝介がかがみに惚れている事は、女の勘で気付いてはいる。

一言「……………俺は……………俺には……………未だ……………無理だ……………」。

久坂拓海

高一 2 - E 所属 180cm 62kg

主人公の友達その一。勉強成績は孝介の御陰で、何とかぎりちょんセーフレベル。

二年に上がってからは、本来呼ばれたバスケットに本腰をようやく入れ始めた。

涼子との漫才は既に学年迷物。後に学校迷惑物へと真化する予定。というか過程。

今年からは、孝介とクラスが違ってしまった為、少々落ち込み気味。しかし、かがみが孝介を引っ張って2 - Eに連れて来る為、今迄と余り変わらなかつたり。

孝介がちよこちよこ自分の事を話してくれる度、良い笑顔になる。

しかし、肝心な所は未だに暈ほかしている為、まだまだヤキモキは続く模様。

一言「孝介エ・・・頼む……また、テスト助けてくれえ」……TA
「」

香椎涼子

高一 2 - E 所属 162cm

主人公の友達その二。拓海とは相変わらずの鴛鴦夫婦^{おしどり}。

相談役としては既に学年レベル。そろそろ、教員の恋愛相談にも乗り込む予定だとか。

みゆきが公^{おおみや}での最重要相談役なら、涼子は私^{わたくし}での最重要相談役。

段々と孝介が自らの事を色々と話し始めた為、その機会を逃さない様に良く一緒に居る。

その為か、事情を全く知らない人達からは、浮気では無いかと囁かれているが、

当の本人達は全く以て気にしていない。

因みに、最近の最大の趣味は、かがみと孝介の仲を揶揄う事。主な標的はかがみ。

そして最近、某青髪のちびっ子の影響で、萌えを理解して来た模様。

一言「くっくっくっく」 かがみくん さあ、今日も萌えさせて

ね
「

葛城唯

中三 145cm

孝介と血の繋がった実の妹。全く成長してくれない身長や身体に少し落ち込み気味。

相変わらずの超ブロン。だが、恋人のアルスとの仲は極めて良好。

以前、TVに両親と出、注目的になった……が、マス ミは誰かが権力で握り潰した模様。

その為か、平穏な学校生活を今でも送っている。

何やら、今年は孝介断ちをして、何かを画策しているらしいが……。

一言「うづ〜……孝ちゃんに会いたいよう……孝ちゃんに触れたいよう……」。

櫻井澪

孝介が住んでいるアパート『紫陽花荘』の管理人。未だに孝介とは関係を保っている。

しかし、最近は澪から誘う事が多くなった様だ。だが、彼女の過去は未だ明らかにならず。

どうやら、孝介に本気で惚れた娘がいるらしいと気付いてはいるが、孝介本人から直接言われないう限りは、この関係を止めるつもりは無いらしい。

一言「……………そう簡単に逃がしてなんかやらないんだから。」

アルス・クライス

高一 178cm 55kg

主人公の親友その一。相変わらず唯との仲はとても睦まじい。

しかし、未だキス止まり。年齢……というよりは、孝介の許しが未だ出ない為。

今回、唯の孝介断ちとやらに一役も二役も買って出たが、果たして……。

一言「フッフッフ…… カイ……楽しみに待っていて下さいね」

時任渡

高一 185cm 75kg

主人公の親友その二。最近残念な筋肉脳になりつつある。……作者の意図とは別にorz

夏休みに強行した事で、自身の両親と真人の両親の四人にこっぴどく叱られ、今は自粛中。

一応、アルスや唯に協力しているが、寧ろいつバレるのかと皆を冷や冷やさせている。

一言「お、俺は何も知らねえ！ ぜ、絶対、何も喋らねえからな！」

米倉真人

中三 168cm 52kg

主人公の親友その三。実は怒らせると誰よりも恐い人。でも、唯の涙が何と言っても最強。

以前の夏休みでの強行軍にて、耐久力とキレ易さを手に入れた！

何やら、唯と一緒に孝介断ちをして、画策している様子だが……。

従弟の渡の協力の所為で、却って危機意識を募らせている毎日だったりする。

一言「……………ハア。兄さんに知らせたのは……………やっぱ、拙かったかなあ……………」

かつらぎだいすけ
葛城大祐

一人称：俺 イメージC.V：関智一

36歳 男 190cm 80kg 黒髪黒目 セミロングヘア・
ポニーテール

好きなモノ：子供 嫌いなモノ：悪い大人・犯罪

好きな食べ物：妻の手料理 嫌いな食べ物：冷凍食品

好きなタイプ：葛城雪 嫌いなタイプ：家族に敵対する奴・害を加える奴・不幸を齎す奴

趣味：旅行 特技：人心掌握・演技

主人公と唯の父。孝介の過去を知る人物その四。万年バカップル夫婦。

家族を誰よりも愛し、妻・雪をこの上無く溺愛している。豪放磊落を絵に描いた様な人物。

実は俳優兼社長の六道大祐。自身でプロダクションを立ち上げ、現在に至る。

所謂、良い意味での人誑し。人徳……というよりも、カリスマ性が高いタイプ。

自分達の事は極力秘密にし、極々一部の人にしか知らせなかった。

それは、大祐達が人を驚かせるのが好き……と言う事もあるが、

それ以上に孝介の過去が関係している。

尤も、孝介はその事を知らず、本気で只のバカップルの悪戯好きが高じたものだと思っている。

今回、態々TVに顔を出し、正体を少しでも曝したのには訳があり
.....。

一言「孝.....お前は未だ、玲ちゃんに.....」。

葛城雪かつらぎゆき 一人称：私 イメージcv：折笠愛

36歳 女 160cm 体重・3サイズ共（ry 白髪赤眼 ポ
サボサ髪・ロングヘア

好きな物：子供と研究 嫌いな物：家族を除いた、研究を妨げるモノ

好きな食べ物：パスタとピザ 嫌いな食べ物：冷凍食品

好きなタイプ：葛城大祐 嫌いなタイプ：家族以外の男全員

趣味：研究 特技：研究

孝介と唯の母。孝介の過去を知る人物その五。万年バカップル夫婦。家族を誰よりも愛し、旦那・大祐をこの上無く溺愛している。

正直、とてもじゃないが36には見えない。どう頑張っても20代前半。

髪と目の色は生まれ付き色素が薄かった為、自前のもの。

趣味も特技も研究という、生粋の研究者。だが実は、良く買出しに行っている極普通の主婦。

孝介に新たに好きな人が出来た事を、誰よりも嬉しく、また誰よりも心配している。

孝介の近況は、とある情報網を使って、ほぼ逐一把握していたりする。

孝介のストーリーカー発言は強^{あなが}ち間違いでは無い。……が、本人は全く知らなかったりする。

今回、TV出演を計画したのは、他ならぬ雪だったりする。その意図とは……………。

一言「孝。例え何度後悔してもいい。でも、止まるな。決して止まるな。

止まったら……其処で全てが終わってしまうんだ。だから……少しずつでもいい。

必ず進め……！ そうすれば……お前の未来にも、何れ光が見える……必ず。」

新学年 新学期（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて、今回からようやくと原作？ というか、アニメ本編に入る事が出来ました。

…………… 此処迄結構、長かった感がorz

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

新学年 新学期

side: 孝介

今日はクラス分け発表の日。皆で詰め掛けて、それぞれのクラスを確認している真つ最中だ。

「……ふむ。俺は2-Dか……。皆は……。……ふむ、成る程。」

「……まあ、そついう事もあるか。今年は中々に面白い組み分けになつたな。」

「あ、お〜い!」

「ん? ……ああ、泉か。」

「おっはらっきー、草薙君。もう見た?」

「ああ。既に、全員分確認してある。」

「お！ 仕事がい早い。それで、孝介。俺達はどついう分け方になつたんだ？」

「……………全員同じ2・Eだ。」

「え？ ホント！？ ヤッター！！！」

「……………但し。」

「……………但し？」

「俺と柊…姉を除いた五人、全員が……………な。」

“……………ええええええ？！？！？！ って、それ全員って言わないよ（言いません）！！！！”

「……………そうか？ だがまあ、そういう事だ。」

「あ……………また、つかさ達とは違っちゃったね。」

「うう……………／／／／／／／／……………あ、あの……………草薙？」

「ん？ どうした、柊。取り敢えず、もう此処には用は無いだろ？」

皆の邪魔になってもいけないしな……………。教室に行くか？」

「そ、そうね……………うん。教室に行こう、うん／／／」

「????? ……相変わらず、変な奴。」

Side:2 - D教室

「お、オツスひいらぎい！！」

「柊ちゃん、また同じクラスね。今年も宜しくね。」

「あ、日下部に峰岸。あんた達も、また一緒だったんだ。本当に長い付き合いになりそうね。」

「おう ……所で、柊。そっちの男は誰だ？」

「あ、コイツは草薙よ。アンタも名前ぐらいは知ってるでしょ？」

「くさなぎ……草薙………って、確かあの去年の体育祭でブッチぎった草薙か？」

「ええ、確かにあれは草薙君だったと思うけど……。」

「……何故に、俺はそんなに知れ渡っている？」

「……アンタ……それマジで言って……るのよね。……ハア、まあいいわ。」

「草薙は別に気にしなくていいわよ。どうせあんま関係無いんだし。」

「……いや、正直可成り迷惑しているんだが……。」

「あ……まあ、アレじゃあ……ねえ……？」

柊の視線の先には、同じクラスの連中からと、何故か廊下からの色んな視線が有り、

明らかにとある一人へと、その視線は注がれ集約おれされていた。

「……終つ。そんな奴の近くに居たら、あたし達まで大変な事になるぜえ〜？」

早くソイツから離れた方がいいんじゃないの？」

「こら、みさちゃん！ そういう事は言っちゃメ！ ごめんなさい、草薙君。」

みさちゃんも悪気があって言った訳じゃ無いの。許してね？」

「……いや、俺は構わない。日下部の言う事は尤もだからな。好きにするといい。」

「うっ……ほら、みさちゃん。草薙君、拗ねちゃったじゃない。」

「いや、そんな事あたしに言われても………」

「あ……いや、違うわよ二人共。コイツ、今の素で言ってるのよ、素で。」

「「え？ 本当(マジ)？」」

「大マジよ。こいつ、そういう奴なのよ……。」

「……………柗ちゃん、苦勞したのね……………」

「……………有難う。峰岸は分かってくれる？」

「……………ええ、それは勿論。」

「……………ああ、そうね、そう言えばそうだったわね。」

「……………うん。だから、良く分かるわ。後で幾らでも相談に乗るからね。……………別の意味でも」

「う……………わ、分かる？……………」

「ええ、勿論　だ・か・ら　後でね？」

「……………うん……………」

「む……………何だよ、柗にあやのまで……………あたしら除け者かよ……………」

「あ……………ごめんなさい、みさちゃん。もうお話は終わったから……………ね？」

「……………取り敢えず、皆席に着いた方がいい。そろそろ先生が来るみ……………」

「ただいな。」

「あ、うん。それじゃ、峰岸、日下部。また後でね。」

「うん」「おう。」

今年も今年で、騒がしい一年になりそうだ。

俺は我知らず、そんな毎日に期待と想いを膨らませていた。

【質問状】

「……………それで？ 今度は一体何事だ？ 新学年早々。」

「いやあゝ、また草薙君への質問状が届いててね。」

私達もちよつと気になる内容だったから、こつちやつて招集したつて訳なのだよ、明智君。」

「……………それで、態々2・E迄引つ張つて来たのか。」

「そゆこと ……所でさあ……………何でみさきちまでいる訳？ 私、呼んでないよ？」

「しょうがないでしょ？ 勝手に付いて来ちゃったんだから。」

「いいじゃんかゝ。なんか面白そうな事やるらしいじゃん。あたしも交ぜるよなあゝ。」

後、ちびっこは黙つてろ。」

「なぬゝ……………！ ガルルルル……………！！！！！！」

「なんだ、やるかゝ！ フシユウウウゝ……………！！！！！！」

「これ、なんてハブとマングース？ まあ、それはさておき。早速

の質問や。

ホワイトデーに、こなたん・かがみん・ひーちゃん・ゆつきーには返したけど、

他の人達にも返したんかいな？ 可成りの量があった筈やけど…

…？ やて。」

「……ああ、いや返していない。」

「そりやまた、何故に？」

律儀なアンタの事やから絶対、何か用意して手渡すと思うとったんやけど。」

「………不特定多数に返すのは不可能だ。無関係な人達にまで迷惑が掛かる。」

それに例え名前が書いてあるうとも、俺はそいつらを全く知らない。

知りもしない人間から何かを貰ったとしても、それに対する返事などしたくもない。

少なくとも、俺自身に直接渡してきたのならまだしも、

勝手にそこいらに撒き散らかされては、傍迷惑な事この上無い。

そんな己自身の事しか考えられない、無節操な奴等になど、何故俺が何かせねばならない？」

“うわぁ……………一気に捲し立てやがったよ（ましたね）、こいつ（この人）。”

「……………俺は何か可笑しい事を言っただろうか？」

“……………いや、別に。”

「……………言うつか、もうええわ。」

「????????」

「あ……………んじゃまあ、気を取り直してもう一つ。」

皆さんは冬休みには何か楽しいイベントでもしましたか？ だつてわ。

みんな、どこか行ったりした？ 因みに私はずっと家に居たよ。」

「私もこなたさんと同じですね。余り外出はしませんでした。」

「ウチラもせやね。拓海の家か、ウチの家かのどっちかに必ず二人で居たわ。」

「そうだな。ほぼずっと一緒に居たな。」

「私も、ずっと家でのんびりしてたよ。あ、日下さんと峰岸さんはどうだったの?」

「へ? あたし? あたしは……まあ、良くあやのと兄貴と一緒にいたけど。」

「そうね。私もみさちゃんも、殆ど一緒に居たわね。」

「そうなんだ。お姉ちゃんは、良く出掛けてたよね?」

“ほぼ”……………”

「んなっ!?!?! つ、つかさ!!!!!!」

「ほえ? わ、私、何か変な事言った?」

「うっっっ……／／／／／／／／」

「ほっっらほっっら……もっと、そこんとこkws k話してっっらっん？」

「い、言わないっ！／／／ 絶対に言わない！／／／ 誰がそんな事、態々言っもんですか！／／／／／／／」

「まあ、そっだろっと思ったよ、うん。だから、かがみんは何も話さなくていいよっ。」

「せやな。まあ、その変わり、アンタの彼氏の孝介にちいとばかり聞っだけやしな。」

「んなあ！?!?／／／／／／／ ぎ、聞くなあ！／／／ て言うか、草薙も何も言っな！／／／」

「あ、後、別に草薙は、か、彼氏って訳じゃあ……／／／／／／／／／／／」

「……もう、好い加減に素直になれよう……このシンデレさん。」

「だ、だから、私はシンデレじゃ……！／／／」

「……で、そこんとこ、どうなのよ孝介。かがみんとの仲は進展し

た？」

「って何どさくさに紛れて聞いてるのよっ！?!?!?」

「……チツ、地獄耳め。まあ、あっちは無視していいから。で、どうなん孝介？」

「……どう、と言われてもな。それに、俺は草薙の言う通り、別に恋人でも何でも無い。

よって、仲が進展という事も特に無いぞ？ 友達同士という意味なら話は別だが。」

「ほな、それで。」

「ああ、それなら……休みの間中は、良く俺の家に遊びに来てたが。」

「ほうほう　　そんで、家でナニしてたん？」

「ちょっと、涼子！　今、なに、の所のアクセント可笑しかったでしょ!?!?」

「……まあ、あっちの遠吠えは気にせんといで。で、ナニしてたん？」

「なに……と言われてもな。何もしていなかったぞ？」

“……………は？ どういう意味？”

「いや、その儘の意味だ。只、家に遊びに来たらしいが、特に何を
するでも無く。」

単に何かを色々話したりしていた。その内飽きたか話題が無くな
ったら、

柊が俺が座っている方に寄って来て、壁を背にして二人でポーツ
としていただけだ。

時折、手を繋いだりとかはしていたが。未だ少し冷える時もある
たからな。

後はその儘、二人して寝入っていたりもしていた。

風邪を引くぞと、湊さんに何度か怒られた事もあるが。……………まあ、
精々それくらいだ。」

“……………何？ この熟年バカップル？”

「……………なんて言うか……………ゴチソウサマ?」

「……………もう二人共、結婚しちゃいなよ。早く。今直ぐに。」

「そ、そうですね……………／／／ 聞いているこつちが恥ずかしくなつてしまいます／／／／／」

「う、うん／／／ 二人共、凄く仲が良いんだね／／／」

「なあ、見てみるよ。こいつら……………これで未だ付き合っていないんだぜ? 笑っちゃうよな。」

「……………誰に言う тоннねん、拓海。」

「……………不特定多数の画面の向こうのみんな。」

「……………到頭、拓海まで完全にわやになつてもうたorz」

「……………なあ、あやの。あやのも確か、こんな感じに良くなるよな。」

「も、もう、みさちゃんってば／／／／／」

新学年 新学期（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回で、凡そ…………… 37話目?! …… 本編は、正確には38話
目からですね。

意外と掛かるものなんですね。 …… いえ、私だけかもしれませんが
o r z

一応、アニメの時系列順にイベント等は熟^{こな}していくつもりですが、
例に依って例の如く、少々時期が前後してしまうかもしれません。
どうか、その点に関しましては、御諒承下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

これなんてエロゲ？（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて。今話は、ちょーっつと調子に乗り過ぎた為か、結構長い
です。

あ、それと、甘さを抑える塩と、火照った顔を冷やす何かを御用意
下さい。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

「これなんてエロゲ？」

【中間テスト】

「オッス、こなた。」

「あ、かがみん。何？ 今日も夫婦同伴？」

「だ、誰が夫婦よっ！！！／／／／／／／」

「えゝ……言わなきゃダメ？ あ、もしかして……私達に態々言わせたかったの？」

「んなあつ！？！？／／／／／／／／／／／／／」

「……相変わらず、仲が良いな。それよりも、今回はどうだった？」

「あ、草薙君。あのね、今回のテスト、私すっごい良かったんだよ！」

「……そうか、それは良かった。」

「私も、草薙さんの御陰で、とても授業が分かり易くなりました。本当に有難う御座います。」

「……いや、役に立ったのなら十分だ。」

「そうそう。私も御陰でゲームに使える時間が増えたし！」

「……………そうか。それは……………良かった……………のか？」

「ど、どうなんでしょう？ 客観的に見れば、遊ぶ時間が増えて成績が良くなっていますし。」

「……………矢張り、教えるのは止めた方が良いのだろうか？」

「む……………なんだよ、ちびっ子！ お前、草薙に教えて貰うなんてずりぞー！！」

おい、草薙！ ちびっ子や柊ばっかヒイキしてないで、あたし達にも教えるよな！！！！」

「ちよ、ちよつと、みさちゃん！ もう……………そんな事、草薙君にも悪いわよ。」

「……………ごめんなさいね。みさちゃん、今回成績ちよつと悪かったから……………」

「……いや。しかし……更に二人追加すると……合計八人か。」

……テーブルを買い替えねば……。

いや、そもそもその前に、床が抜け落ちやしないだろうか？

……つまり、まずは修理屋を頼むしか……だが、そうすると……。

そもそものアパートそのものを、全てリフォームしなければいけなくなるな……。

だが、それをするには遷さんの許可が必要に……どうやって墜とすべきか。」

「あ……なんか物凄く不穏な事を言ってるんだけど……」

「……気にしないで、何時もの事だから。草薙って直ぐ考え込んでやうタイプだね。」

しかも、考え込むと周りの事も見えなくなる上に、可成り上げつない台詞がポンポンと……。」

「あゝ……まあ、なんとなく分かる気がする。

なんか、あたしらが頼むのは悪い気がしてきたよ……あやの……
どうしようか？」

「どうしようか？ って言われても……；……；

みさちゃんが言い出したんだから、みさちゃんが何とかしないと
いけないと思うの。」

「うづ……あやのがちべたい。……え、と……おゝい、草薙。」

「ブツブツ………ん？ どうした、日下部？ ……ああ、教
える件については心配するな。

俺は一向に構わない。条件はこちらで何とかする。好きな時に家
に来ればいい。

俺の家については、柎などに聞けば分かる。可成り分かり易い場
所にあるからな。

俺はこれからちよっと準備があるので、済まんが早退させて貰う。

あ、後。其処で打ち拉ひがれている馬鹿と、馬鹿の嫁に言っておい

今迄使っていた新品同様の物は漉にあげ、大層喜ばれたそうなの。

【風邪の病、恋の病】

「……何？ 柊が風邪？」

「う、うん、そうなの。それでお姉ちゃん、朝からいないの。」

「……そうか。所で、それは今日見舞いに行っても、平気な程度のものだろうか？」

「あ、うん！ 大丈夫だと思うよ。」

それに、草薙君が来てくれた方が、お姉ちゃんも喜ぶと思うし」

「……………そうか。それなら済まないが、今日柊の家に御邪魔させて貰うよ。」

「うん　じゃあ、早速お姉ちゃん……………は未だダメだから、お母さんに連絡入れとくね」

「……………ああ、頼む。」

「……………あゝ、そつかそつか、成る程。それで、つかさと草薙君が一緒に帰ってたのか。」

「うん　お姉ちゃん、きつと喜ぶと思うし。」

「そつか。いやあゝ、良かった良かった。」

つかさが、かがみんなが居ない隙を狙って、何時の間にか草薙君を口説いていたのかと。」

「ふええ?!　わ、私、そんな事してないよお、こなちゃん!／／／／／」

「うん、いや、だから、私の勘違いだったって。そかそか、成る程ね。」

「うづ……／＼／」

「でも、ごめんね、つかさ。今日行けなくてさ。」

実は明日から従妹が家遊びに来るから、今日はその手伝いをしなきゃいけないんだ。

あ、でも、明日は絶対に見舞いに行くから。かがみんには宜しく言っというてね。

みゆきさんと一緒に行くからさ。」

「うん！ りょうちゃん達は、明後日来てくれるって。」

なんか、明日は家の用事でどうしても抜けられないんだって。大変だよ。」

「そうだね。でも、私達、あの二人の家の事も何も知らないよね？」

「そう言えば……そうだよ。えへへ……なんか、家庭の問題とかって難しいよね。」

「そうだね。みんな色々あるもんね。あ、着いた。」

じゃあ、つかさ又明日ね。ノシ 草薙君もバイバイ ノシ

「あ、うん！ また明日。バイバイ」「……ああ、又。」

「ただいま。」「……御邪魔します。」

「あ、お帰りなさい。それと、いらっしやい。つかさから話は聞いているわ。」

どうぞ、遠慮無くあがってね もう勝手知ったる我が家みたいなものでしょ？ 「

「いえ、そんな。ですが、とても親しくして頂けるのは非常に感謝して居ります。」

「いえいえ、そんな気にしないで。」

ウチは女の子ばかりだから、男の子が良く遊びに来てくれてとても嬉しいのよ？ 「

「有難う御座います。ですが、そんな事を言つては旦那さんが悲しまれますよ?」

「あら、良いのよあの人は。だって、もういい年した大人が『子』も無いでしょ?」

「いえ……私には何とも。所で、かがみさんの具合は如何でしょうか?」

「そうねえ……。一応、今は薬を飲んで少しは良くなったみたいだけど。」

「……そうですか。でも、少しでも良くなったのなら、良かった。何よりです。」

「有難う。あ、ごめんなさい、何時迄も玄関で。どうぞ、上がつてゆっくりして行ってね。」

つかさ。かがみの部屋に通してあげてね。」

「うん あ、草薙君、こっちだよ。」

「ああ、済まない。では、失礼致します。」

「ここがお姉ちゃんの部屋だよ。それで隣が私の部屋。」

私は自分の部屋か、下に居るから何かあつたら呼んでね。」

「ああ、済まない。……だが、俺が一人で入ってしまったても良いものなのだろうか？」

「うんと……大丈夫だと思うよ。あ、でも、ちゃんとノックだけはしてね。」

「ああ、それは勿論だ。」

「うん、それなら無問題だよ。だってお姉ちゃんは……あ、うん、何でも無い……」

「そ、それじゃあ、私部屋に行ってるね。」　パタパタ……ガチャンッ！

「……？　一体、何を慌てていたんだ？　……まあいいか。」

「……いや、ちっとも、全く以て良くないが。……しょうがない、男は度胸だ。」

覚悟を決めようじゃ無いか。……（コンコン）失礼する。」

side：三人称

「……………スウ……………スウ……………う……………ん……………スウ……………
……………」

「……………何だ、寝ているのか。……………ちよつと失礼する。……………
……………む。」

タオルがもう冷たくないな。少し待っててくれ。

……………(ジャバジャバ……………きゅうっ)っつと、よし。これで、少しは気持ち良くなる筈だ。」

「んう……………スウ……………スウ……………ん……………ん……………」

「……………フッ。どうやら少しは良いみたいだな。」

部屋に入った孝介が見たのは、ベッドに横たわり小さな寝息を立てているかがみであった。

どうも寝入ってから或る程度は経っている様で、かがみの額に載っているタオルが乾いていた。

それに気付いた孝介が、かがみの側にあつた洗面器にタオルを浸け、改めて載せ直した。

すると、最初は冷たくて身動きみじろしていたが、直ぐに気持ち良くなつたのか、

また寝息を立て始めた。心無しか少し顔色も良くなった様に思える。

そう思った孝介は思わず微笑み、直ぐ側に座り込んでかがみの寝顔をずっと見詰めていた。

「……………全く。風邪を引いて寝込んだと聞いて驚いたぞ。」

学校を休む程の大風邪を引いたのかとな。どうやら、高熱程度で済んだみたいで一安心だ。

……………本当に全く。これじゃ、湊さんに会わせる顔が無いな。ホレ見た事かって怒られそうだ。」

寝ているかがみに向かって言ってるのか、将又はたまた只の独り言なのか孝介自身にも判らないが、

極力起こさない様に、小声で呟いている。端から見ると、とても危ない人である。

すると、もう話す事は何も無くなったのか、口を嚙み又、かがみを見詰め続けていた。

……と、その内、何やらやおら孝介が動き出し、かがみの寝顔を側で見始めた。

「……………綺麗……………と言うか、可愛い寝顔だな。……………汗で髪が張り付いている。」

……………つと、これでいいかな？ ……唯とかなら、身体ぐらいは拭いてやれるんだがな。

……………うん、まあ……………ごほんっ！ それはさておき。」

かがみの顔に張り付いて邪魔そうにしていた髪を退け、邪念を追い払う事に成功したようだ。

しかし、未だ起きないのを良い事に、間近で見る事を一向に止める

気配を見せない孝介。

……ちゃんと、外の気配も伺っている様で、時折外の音に耳を傾けている様だ。

それが心配ないと判ると、再度見詰め始めた。矢張り危ない人にか見えない。

しかし、その見詰めている表情が何時もの無表情では無く、

これまた綺麗な笑顔だから質たちが悪い。

そんな一見、ちょっとヤバ目な人を見ていると………何と！

「………柗？ ……本当にぐっすり良く寝ているなあ。 ……本当に寝ているのか？」

実は寝た振りとかじゃない？ 狸寝入りで俺を驚かせようってしてたりとかしてない？」

……返事がない。只の寝入っているかがみの様だ。

と言つか、耳元でそんなに囁かれたら、普通起きないか？

だがしかし、疲れ切って寝入っているのか、全く何の反応も無い。

「……………そっか。本当に寝ているのなら、俺が何しても気付かないよね？」

……………柊。」

すると何を思ったのか、急にかがみに顔を近付け出した。

だが、途中で止まり、かがみの顔に陰を作った儘で覗き込んだ。

その儘、何秒経っただろうか？ それでも一向に変わらず、小さな寝息を立てているかがみに、

ホツとする様な、残念な様な気持ちでいた孝介は……………。

「……………柊。もう……………本当に知らないからな。……………柊……………いや、
かがみ……………大好きだ。」

かがみの頬にそっと手を当て……………自分の影を重ねた。

「……………ん……………あれ……………？……………!!?!?」

「ん？ ああ、起きたか柊。お早う、調子はどうだ？」

「へ？／／／／ あ、な、何で？／／／ あ、アンタが此処に?!／
／／／／／」

「何故……と聞かれてもな。柎いせつに柎あねが風邪を引いて寝込んでいて、見舞いに来た。」

「あ、そ、そう。……あ、アリガト／＼／＼／」

「……どう致しまして。それより、調子はどうだ？ 少しは良くなっているのか？」

「あ、うん……。そうみたいね。取り敢えずは大丈夫そうよ。」

「そうか。明日は泉と高良が見舞いに来るそうだ。明後日は久坂と香椎が来るとも言っていた。」

「あ、そうなんだ。……じゃ、じゃあ、今日は……草薙……だけ？」

「ああ、そうなるな。……それがどうかしたか？」

「い、いや、な、なんでもない。うん、なんでも……／＼／＼／」

「??? ……相変わらず変な奴。」

「うっ………そ、それより、アンタ！ 私が寝ている間に変な事しなかったでしょうね？」

「……変な事？　どんな事だ？」

「……いや、何もしてないならいいのよ、うん／＼／」

「……そうか。それよりも、早く治す事を心懸ける様にな。

「これでも、中々にお前が居ないと少し寂しくもあるのよな。」

「……ふえ？！　わ、私がいないと……そ、その……さ、寂しい……の？／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

「……ああ、不思議なものな。何時も程、学校が楽しく感じられない。

その理由を考えてみると、多分柊がいない所為だろうという結論に行き着いたのでな。」

「……／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／　そ、そのう……因みに、どういう過程で？／＼／＼／＼／＼／＼／」

「……内緒だ。」

「い、いいから、教えなさいよっ！／＼／＼／＼／　そ、その！　物凄く気になるじゃないっ！／＼／＼／＼／」

「……気にするな。大した事じゃない。それよりも、早く治す様に。

起き上がった儘では、身体も冷えるだろう。いいから寝ている。

柊の母親達に、何か御粥かおじや辺りでも作って貰って来る。」

「あ……ま、待って！」 グイッ……！

「……ん？ ……柊、どうした？」

「へ？ あ、う……………／／／ え、えと、あの、そ、そのう……………
／／／／／／」

「……………そうか、分かった。柊がもう一度寝付く迄ここに居る。
それでいいだろう？」

「あう……………／／／／／／／／／／／／／／／／」

「……………何、気にするな。唯もな……………病気とかになるととかく一人に
なるのを嫌がるのでな。

良く……………というか、必ず一緒に居たものだ。御陰で、ほぼ確実に
俺に風邪などが移ってな。

その度に、唯が泣きながら謝って俺の看病をしたり……………と、まあ、

色々慣れている。」

「唯って……確か草薙の妹だったわよね？ ……そう言えば、何でアంతだけ『草薙』なの？」

他の御家族はみんな……確か『葛城』だったわよね？」

「……良く覚えているな。まあ、ちょっとした事情があつてな。所謂訳ありという奴だ。」

俺も戸籍上は、実は葛城だ。葛城孝介。だが、今の俺は恐らく永劫、草薙孝介だろう。」

「……なんか、良く分からないけど……でも、草薙は草薙よ。何も変わらないでしょ？」

「……まあ……な。恐らく何も変わらないだろう。……今迄も……これからも。」

「……むう。な、なら、今から変えましょう？ / / / て言うか、私が変わるわ。」

「……変える？ 何を？」

「何時もの事をよ。今迄通りの事を、一つでもいいから変えるの。」

…………え、と…………その…………だ、だから！／／／／

あ、アンタの事…………きよ、今日から呼び方を変えるわ！／／／

「…………呼び方？ 草薙と言つのをか？」

「…………そうよ。本当は葛城だけど今は草薙とか、訳分かんないモン。だから名前で呼ぶ！／／／

え…………と、こ、こ、孝介…………だと涼子達と被るわね。それなら…………。

え…………と…………コウ。コウなら…………ど、どうかな？／／／

「…………コウか。一応、両親は俺を孝と呼ぶが…………。まあ、悪くない。」

「そ、そう。オリジナリティーは無いけど…………まあでも、御両親と一緒にらいつか。」

「…………ああ、そうだな。」

「うん、じゃあ、今日からアンタはコウよ！ 良いわね？」

で。結局、かがみが安心しきって直ぐ様寝た事に気付かず、凡そ一時間程手を握った儘だった。

その翌週の月曜。何の前兆も無く、突然互いに名前で呼び合う様になった二人へ、

当然の如く迫る追求の手に、珍しく顔を少し赤らめて話す孝介に、

かがみ以上に萌える皆であったとぞ。

これなんてエロゲ？（後書き）

……………如何でしたでしょうか？

私は書きながら、自分自身で妄想しながら悶え死んでいましたが、皆様は如何でしたか？

少しでも楽しんで頂けたのならば、望外の喜びです。

ていうか、何だこのバカツプルはorz というか、マジで何？
このエロゲ？

アレ？ 可笑しいな……………？ こんなつもりは全く無かったんだが…
……………

とまあ、色々と突っ込み所満載ではありますが。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

誕生日（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

そして、25,000アクセス&ユニーク2,000人突破致しました！

心より、感謝致して居ります。

さて、何とか、今日（12/19）だけ、辛うじて時間が取れましたので、

今の内に、凡そ4〜5話分のストック全放出と行きたいと思えます。

今日が、今年最後の執筆となりますので、どうかこれで一つ御諒承下さい。

では、今話も拙作を御覧下さい。

誕生日

【出会い頭の御挨拶】

“誕生日、おめでとう……！！！！”

「あ、「ありがとう！」／／／」

「……取り敢えず、玄関で色々する訳にもいかないだろう。御邪魔しても構わないか？」

「あ、うん。勿論、みんな上がって。」

「……今日は御家族はいらっしやらないのか？」

「え？ 一応、みんな家には居ると思うけど……どうして？」

「いや……御挨拶はしなくてもいいのだろうか？ と思って……な。」

「あ、それなら大丈夫よ。ウチの家族はコウみたいに固くないもの。」

「……む。俺は只、礼儀は欠かしてはならないと言っているだけだ。」

「はいはい。玄関で色々話す訳にはいかないでしょう？」

「ぬ………分かった。それでは、失礼するでしょう。」

「うん、宜しい。さ、それじゃ、みんなこっちよ。」

「いやあ………しかし、草薙君が家族に御挨拶とか言い出した時は驚いたよ。」

「ん？ 何故だ？」

「何故？ ってお前………自分の言った言葉に自覚無かったのか？」

「………ああ、特には。そんなに驚く様な内容だったか？」

「そりゃもう………ねえ？ りょうちん」

「せやせや！ 彼氏が御両親に御挨拶って、要はつまり、『お嬢さんを僕に下さい！』」

「って奴やる？ もう、行き成り名場面が見れるかと思って、期待してもうたやんかぁ」

「ん なっ！？// // // // // // // // // // // // // // // //」

ほな、二人共　はい、お誕生日プレゼントや！　これ、孝介が選んだんやで？」

「うわあ〜…………綺麗…………」

「本当に…………こんなに沢山の百合の花…………よくあつたわね〜。」

「ああ。一応幾つかの花屋を巡って、掻き集めて来たからな。

自力で採って来た物では無いので済まないが、出来れば受け取って貰えれば有り難い。」

「うん！　勿論！　綺麗なお花、ありがとう！」

「うん…………本当に綺麗…………。それに凄く良い香り。でも、何で百合なの？」

「ああ、それはな。何でも、七月の誕生花が百合らしい。」

本当は姫百合の方が良いかと思っただが、どうもそっちは絶滅危惧種らしいのでな。

確か、百合の花言葉が『純愛』。そして、姫百合の方は『変わらない愛らしさ』だったか。

だから、二人には姫百合の方が似合っているかと思っただがな…………。少し残念だった。」

「あ……う……あ、ありがとう………
// // // // // // // // // //
// //」

「……いや。……だが、かがみの家の庭で植物を育てていると知っ
ていれば、

他の花でも持って来るんだったか。七月七日の誕生花というもの
又、別に有ったのでな。」

「へえ〜……草薙君って結構花言葉とかに詳しいの？」

「……いや、俺は詳しくないよ。一人……知り合いに詳しい奴
がいてな。」

誕生花とか誕生石とかな。……まあ、その影響で俺も少しは知っ
ているだけだ。

それに、今は調べる手段なんて幾らでも有るからな。知らずとも
どうにでもなるぞ。」

「あ、確かにそうだよな。今は、色んな事調べられちゃうもん。」

「そうですね。御陰で私も、毎日色んな調べ物が出来て楽しいです。
」

「そうそう　みゆきさんが何でも知ってて、それでいて調べてく

れるから私達も大助かりだよ」

「い、いえ、そんな……／＼／＼ お恥ずかしい限りです／＼／」

「ふう〜ん……ねえ、コウ。その詳しい人ってコウの妹さん？」

「……いや、違う。それよりも、花を早く生けないとな。枯れてしまつては元も子も無いだろう？」

「あ、うん、そうだよね。じゃあお姉ちゃん。私、この花、下の花瓶に生けて来るね。」

「あ……うん。……コウ？」

「……何だ、かがみ？」

「……あ、いや……何でもない。……うん、何でもないの。」

「……そうか。」

【プレゼント御披露目】

「お姉ちゃん、今お父さんに渡して来たよ。すっごく喜んでたよ、お姉ちゃん達もお母さんも」

本当にありがとう、草薙君」

「いや……気に入って貰えたなら、何よりだ。」

「うんっ……えへへへ」

「よっし、そんじゃ早速みんなのプレゼント御披露目といこうぜ！
俺、もう早く見せたくてさっきからずっとウズウズしてたんだよ
なあ〜！……！」

「オマエは落ち着きの無い子供かいっ！？ ……まあ、ええわ。ウ
チかておんなじやもんな」

「……ふっ、流石はバカップル一号。見せ付けてくれるね〜……。」

「フッフッ……どや、羨ましいやろ そいや、其処なバカップル
二号はどないなっとなるん？」

「あ〜……何かね。未だ名前呼び合いなから手を繋ぐのが精一杯

「うちちゃん!!」

「いえいえ、どう致しまして　因みに選んだのがウチで、金出したんが拓海なんやで」

「まあ、俺には、そういうセンスとか無いからな。俺達二人で二人分だ。」

「そうね。確かに、拓海じゃこういうセンスは無理よね。」

「……ひでえOTL」

「コラ!　狭いんやから、一人で幅とるんやない!!」

「んじゃ、夫婦漫才をBGMにして。はい、かがみん&つかさ。」

「……何か、物凄く嫌な予感がするんだけど……。」

「……これ、何?」

「ト　ハ?!」

「あ、それすっごく高かったよ。大事に着てね」

「あ、アンタ………それで、私のは………は?」
「ナニコレ?」

「団 腕章 やっぱ、かがみんにはソレがピッタシ似合うと思っ
て」

「……アンタの方が似合いそうだ。てか、姉妹揃ってコスプレさせ
んなー!」

「……なんだよ。ウチの制服とかとあんま変わんないじゃん
か……。」

「あ、アハハ……… あ、私からはこちらです。つまらな
い物ですが……。」

「これって……。「うわあ……ペアのイヤリングだあ」

「色々考えたのですが、矢張り御一人にはペアの物を……と思いま
して。」

「「……えへへ」

「気に入って頂けたのでしたら、幸いです」

「うん、有難う、みゆき やっぱ、こつこつのがプレゼントよね。
」

「む……。それは、もしかして私に言ってるのかな? かがみんや。

「

「……他に誰も思い当たらないのが現状ね。」

「むう……。つまり、これがツンデレ流のお礼って事？」

「ねーよ。」

【ド本命】

「ほんで？ 大本命の孝介はどないもんを持って来たん？」

「……何時の間に俺が本命に？ ……まあ、いいか。先ずは柊に。」

「あ、これ私？ このおっきいのさっきから、凄く気になってたんだあ〜」

「あ、うわあ……この子可愛い〜〜 ……！！ もっふもふだあ〜〜」

「ああ。柊の部屋にはぬいぐるみが多いと聞いていたのでな。」

まあ、その友達の仲に加えてやってくれ。因みに、その子が身に付けているペンダントだが。

その宝石は小さいながらも、七月の誕生石であるルビーだ。」

「ふわあ〜」……凄く綺麗……。ありがとう！」

「へえ〜。ひ〜ちゃんでこんだけ良いモンなら、かがみんはどんなに凄いのやらね?」

「だ、だから、何で何時も私の方が凄いだと思っ訳?!」

「……それを聞くん? それとも、アレ? もしかして、敢えてウチラに言っ欲しいとか?」

「んあっ…! // // // // // // // // // // // // // // //」

「ほな、態々聞かんでもええやん。それよりも、はよ見せてえな! 気になるでホンマ。」

「……そんな御大層な物でも無いのだがな。かがみ……御目出度う。」

「あ、ありがとう……／＼／＼／　……あの……コレ……は？」

「……御覧の通り、腕輪だ。……一応、大して重くは無いと思うが。

それに多分、それぐらいの大きさなら、身に付けるのには邪魔にはならないかと思つてな。

それと、其処に嵌^はめ込んである宝石は、スターローズクォーツとかいう物だ。

確かそれが、七月七日の誕生石の筈だ。その内、一度くらいは嵌めて貰えれば嬉しいが。」

「あ……う、うん／＼／＼／　……そ、その……あ、ありがとう……／＼／＼／　……」

「へえ……やっぱ、相変わらずの大本命というか、ラスボス並の一撃だったね。」

「せやなあ……。あ、そついや孝介つて確か、花言葉とか知ってたよな？」

「……ああ、まあ、幾つかは調べているが。……それがどうかした

か？」

「いやなあ……ほんなら、誕生石の意味とかも調べてるんちゃうかな？　と思てな。」

「そんで知ってたら、聞こつかと思つてな。因みに、そこんことどうなん？」

「……………一応、調べてはいるが……。まあ、敢えて伏せておこつ。」

「どうしても気になるなら、その内自分で調べてみるといい。俺は教えん。」

「……むう。逃げよつたで、コイツ。ほな、ゆっきー。何か知つてる？」

「え……と、その……あの……うう………済みません。今度調べておきますね……………」

「うん、それじゃ宜しくね。私もそれ何か淒く気になるし。」

「……いや、それぐらい自分で調べろよ。」

その後も恙つつがな無く誕生会は終わり、結局誕生石の意味は判らず終いだ
った。

この時、もっと詳しく聞いておけば。もっと、ちゃんとしっかり調
べておけば。

そう、皆が後悔するとは……。今この時には、誰一人として思い至
る事は出来無かった。

誕生日（後書き）

如何でしたでしょうか？

これにて、二年一学期は終わりです。次回からは夏休み。イベント
目白押し。

フラグは乱立（?!）どうぞ、御楽しみにw

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。又、直ぐ次の
御話にて。

夏祭り（前書き）

では、連続投稿第二話目です。どうぞ、拙作を御楽しみ下さい。

夏祭り

【待ち合わせ】

「……………と……………あ、居た！ コウー！！」

「……………ああ、かがみ。」

「早いわねー。何時から来てたの？」

「いや、丁度今し方来た所だ。」

「お。ナイス鉄板b それで、本当はいつ来たの？」

「……………いや、本当に今し方来た所だ。澁さんの準備に時間が掛かってな。」

「……………澁さん？ って、管理人さんも付いて来たん？」

「……………ああ。何時の間にか事前に調べていてな。連れて行けとせがまれた。」

「あ……………それは御愁傷さん……………」

「……全くだ。……それよりも皆、浴衣なんだな。」

「せやで。アンタみたいに、Tシャツ&ジーンズなラフな格好で祭りになんぞ来れるかい!!」

拓海もメンドイとか抜かしよったけど、ウチが『浴衣着いへんなら絶対行かへん!』

言ったら、大人しゅう着よったんやで。」

「……泣く子と涼子のお強請ねだりには勝てない……ってね。」

「……そうか、それは済まなかった。ならば、俺も紋付き袴もんつが袴はかまが袴かみしもで来るんだったか。」

“いやいやいやいや。”

「おろろ? あ〜つと……あ、居た こ・う・す・け・君

あ、やっぱりみんなも来たんだね。やほー。」

「あ、今晚は。管理人さんも浴衣で来たんですか?」

「そぞ。やつつっぱ、祭りには浴衣でしょ。だってのに、孝介君たら洋服なんだもの。」

「ちょっと興醒めしちゃったよ。もっと空気読まなきゃダメダメよ」

「……… 澪さんにだけは言われなくなかったorz」

「……… うん、よし。」

孝介君、ちよっつっつとあっちで、お姉さんと少しOHA
NASHIしようか？」

「……… 丁重にお断りさせて頂きます。」

【浴衣の着付け】

「アハハ……… ま、まあまあ。どうやら、皆さん揃った様で
すし、そろそろ行きましょう。」

「……… せやね。ほな、色々聞きたい事とかは途次聞くとしよか。」

「うんうん、そうだね。私もイロイロとみんなに聞きたい事有るし

あ、そついや、みんな良く着付けられてるね。自分でやったの？」

「あ、いえ。私と妹のは御手軽な完成品なんです。」

「私も御恥ずかしながら、御店の人に着付けて貰ったんです／＼。流石に帯は結べませんから。」

「ウチは実家が京にある呉服屋やさかい、拓海のはウチが、ウチのは拓海が着付けたんやで。」

拓海も高校卒業したら、ウチの家に婿入りする事が決まってるしな。

早い内に修行しとかなあかんねん。まあ、もうとつくに若旦那言われとるけどな。」

「まあな。まだまだ、精進が必要だけど。」

でも、最低限の着付けぐらいは出来無いと、涼子の婿には相応しくなれないからな。」

「へえ〜……。普段、嫁とか言ってたからてつきり。そうなんだ。婿入りするんだ〜。」

「せやで。やから、みんなも何か着物とかで困った事が有ったら、ウチに相談してえな。」

みんななら、友達の誼よしでお安くしとくで。」

「しかも、ちゃっかり商売上手。りょうちん……恐ろしい子っ……」

「へえ〜。そんなじゃ、泉ちゃんは誰に着付けて貰ったの？ お店の人？ それとも家族の人？」

「あ〜、これお父さんに結んで貰ったんですよ〜。」

「あ、そうなんだ。男の人でも意外と結べる人って多いんだね〜。」

「そういう管理人さんは、誰に着付けて貰ったんですか？」

「むっふっふ〜……。知りたい？」

「むう〜……。そう聞かれると、ハイかYESしか言えませんよ。て訳で、教えてプリーズ！」

「しょうがないなあ……。では、教えて進ぜよう！」

これ着付けたのはねえ〜……。……実は、孝介君なんだよね〜。

「……………え？ 草薙君（さん・コウ・孝介）が？」

「……………ああ。親父が以前、何かのドラマか映画で着付けする事が必

要になつたらしくてな。

自身が覚える傍らで、俺も序でに教わつた。何時必要になるか判らないと言つのでな。」

「そんで、結局お父さんの言つ通り、今必要になつて、感謝してるところとこだね。」

「……ノーコメントで。」

「もう……照・れ・屋・さん　　なんだからあゝ」　　ツンツン

「………帰りは御一人でどうぞ。屋台代も一切、御自身の財布から宜しく。」

「あ、ちょ、ちよつと、それは酷いよ……　　お姉さん、謝るからさ……ね？　　ね？　　ねえ？」

“………何だかなあ………”

「てか、コウ。アンタ達って、何時もこつなの？」

「……あゝ、まあ………そう………だな。どちらかと言えば、比較的高い可能性があると思つ。」

「………なんか、まるで浮気が見付かつて言い訳してるお父さんみた

い。」

「あ〜……うん、まあ、確かにそんな感じだねえ〜……。」

「ほらほら、其処なバカップル。好い加減、置いてくで。」

「だ、誰がバカップルよっ！！？／＼／＼／＼／＼／」

「あ〜、はいはい。何時もの台詞が出た所で。そろそろ、本当に行こうよ〜。」

「せやな。ほな、みんな！　ウチに付いて来〜い！！！」

“お〜〜〜！！！”

夜店を歩き回りつつの物色中に、泉の従姉の成実ゆいと言う人に出会い、

直ぐ様、同僚に連れて行かれた。

……あの人は本当に警官なのだろうか？　只、制服を着ているだけの人は？

そう泉に聞いたら、皆がほぼ同時に頷き、泉が激しく落ち込んでいた。

……どうやら、それは身内でも思わず心の中で突っ込んでいたそう
だ。……そうか、うん。

そうして遊んでいる内に、黒井先生とも出会であ会した。どうやら、暇潰
しに来て居たらしい。

少し話している内に、先程の連れて行かれた泉の従姉の警官とも、
又会った。

……今度は食べ物では無く、水風船や金魚、御面を身に付けて。
……本当に巡回中なのか？

だが、どうもその儘、澪さんと三人で大人の会話を始めてしまっ
たらしいので、

俺達はそれぞれ別れて、思い思いの行きたい場所に行き、後程集合
する事になった。

内訳は、久坂と香椎、泉と高良と柊……そして、俺とかがみの三組
となった。

【デート in 夏祭り ver. かがみ】

「……も、もう／＼／＼　みんなして、余計な気を回して……／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

「？　どうかしたのか、かがみ？」

「へ？　あ、いや、ううん、何でもないので／＼／　うん、そう、何でも無いから／＼／＼／」

「……そうか？　それにしては顔が赤いな。(ピト……)……うん、特に熱は無いな。」

「(ポツフウ……!)！?!?／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／／／／／」

「……それよりも、この人混みだ。逸はぐれると危険だからな。手を、その……繋つなごうか？」

「……う、うん／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／／／／／／／／／／」

「あ、タコ焼きだ。一緒に食べよ？」

「ああ。おじさん、タコ焼き一つ。」

「あいよ！ お、兄ちゃん、可愛い子とデート中かい？ いいねえ！

可愛い彼女に免じて、二つオマケしとくよ！！」

「有難う御座います、おじさん。どうか、休める所ありませんか？」

「ああ、そんならすぐそこが今、丁度空いてるよ！ のんびり座つていちゃついとぎな！」

「ああ、助かります。……ほら、かがみ、こつちおいで？」

「／／／／／／／／／／／／／／／／うん……／／／／／／／／／／／／」

「……ふう〜っ……ふう〜っ……ふう〜っ……はい、かがみ……あ〜ん。

「これ、出来立てで結構熱いから、気を付けてな。」

「あ、うん……うん／／／／／／／／／／あ、あ〜ん……はふっ……はふっ……うん、美味しい」

「そっか。それは、良かった。じゃ、俺も……ん？ どうしたんだ、かがみ？」

「……あ、あの、その……わ、私……も……………//」

「……あ、ああ、そっか、うん。それじゃあ……………//」

「うん。……………ふう〜……………ふう〜……………ふう〜……………はい、あ、あ〜ん……………//」

「あ、ああ。……………あ〜……………うん、これは美味しい。」

「そ、そう……………//////」

「……………ああ。ん？ かがみ、頬にソースが付いている。」 ス
ッ……………ペロッ

「（ポポフウッ……………！！！！）？！？！……………//////////////
////////////////////」

「ん？……………あ。いや、その……………す、済まない//」

「う、うづん//////////////////////」

「……………いやはや、何とも青春だねえ。初々しい事の上ねえや。」

俺にもあつたねえ、こんな青春時代。いやあ……懐かしいねえ。」

どうやら、俺達のそんな様子は周りの屋台の人達にずっと見られていたらしく、

暫く、俺達の話題を肴さかなに、自分達の青春時代の話で盛り上がっていた……そうだ。

「……あ、金魚掬すくい。」

「ん？ ああ。やっていくか、かがみ？ 確か、かがみの家には大きな池があつたよな？」

「うん。金魚を食べちゃうような魚も飼ってないし……ちょっとやつてみようかな？」

「そうだな。……お兄さん、一回やらせて貰えますか？」

「おお、いいぜ。一回三百円だ。……よし、ほれポイとお椀。頑張んなよ、嬢ちゃん！」

「よおっし！……って……あ、ちょっと！……もっつ！……な

んで、みんな逃げるのよっ!」

「そう慌てるなよ、かがみ。……………ほら、そこ。一匹だけいるぞ、狙い目の金魚が。」

「あ……………うん。……………そおう〜つと……………ゲットだぜえ〜!」

「おお! おめつとさん! そんなじゃ、袋に入れるから、それ貸してくんな。」

……………よし。ほい、大事に育ててくれよ!」

「有難う! ………………えへへ この子はうんと可愛がるつ。……………ね? ぎよびちゃん」

「……………フツ。良かったな、かがみ。」

「うん!」

「……………お〜。二人共、良い笑顔しやがるなあ。……………ああ、やっぱりな。」

擦れ違つ奴の殆どが、思わず釘付けになつてらあ。……………ありゃ、

暫く騒がれんじゃねえかな？

……いやだねえ、何時の世も出齒亀って奴は。

少しぐらい、二人きりにさせてやれないもんかねえ……。」「

「……みんな、済まん。遅れた。」「ごめんね、遅れちゃって。」「

「いえ、私達も今、合流出来たばかりですから。御氣に為さらず。」「

「そう言っつて貰えると助かる。」「

「いやいや……それにしても……ムッフッフ」「

「な、何よ？」「

「ん〜…… いやあ〜お二人とも、仲のお宜しい事で〜」「

「!!!///////// し、仕方ないでしょ！ 結構人混み凄かったんだから！/////////」

「うん、いやまあ、私達もそれは知ってるけどね。」

でも、そう言われても未だ離す気のない二人がアツアツなのは又、別物だよねえ。」

「う、五月蠅いつ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

「……………んっ／＼／ それよりも……………あの三人は、未だ話しているのか？」

「そうみたいやね。孝介がかがみんの手を離したくないぐらいには、話していたいんちゃう？」

「……………香椎。余り、人を揶揄うものじゃない。」

「へいへい、左様でつか。まあ、バカップルはさておき。あの年増三人組はどないするん？」

「……………りょうちん、それ先生達に聞こえてたら、宿題三倍ぐらいは軽く増やされるよ?。」

「聞こえなきやええねん。偉い人にはそれが分かりますよ!。」

「見える! 見えるぞ、りょうちん! 私にも未来が見える!。」

「どんな未来だと言うんだ?!。」

「……………りょうちんが、後ろを振り向いた瞬間、黒井先生に拳骨される未来予想図が」

「……………ふえ？」　ゴインツ！！

「ふえええ〜……………痛いよう〜……………拓海い〜……………」

「あ〜…よしよし。いいいいこ。痛いの痛いのとんでけ……………。ほら、もう大丈夫だぞ〜。」

「ううう〜……………先生のオニチクう〜！！！！」

「喧しい！！　人を年増だの何だのと、悪口抜かす奴は鉄拳制裁あるのみや！！」

「アハハ〜……………い、一応、私警官なんで、

あんまりそうゆ〜事はやって欲しくないんですけどお〜……………」

「まあまあ、ゆいちゃん。ちょっとぐらいは大目にみても罰は当たらないっしょ。」

「う〜……………ま、まあ、今回はしょうがないと言っ事です。」

「うんうん」

「…………… ゆい姉さん。その年でちゃん付けはどうかと思うよっ。」

「うう…………… 言わないでえ…………… ていうか、それは私じゃなくて、櫻井さんに言つてよ……………」

「…………… 無茶振り禁止だつてば……………」

管理人さん並の無法地帯は、今までに一度もお目に掛かった事が無いよ……………」

「うう…………… そうだよねえ…………… 私も初めて見た時と、話した時のギャップにさあ……………」

もう、お姉さん、ビックリだ……………」

「だよねだよねえ…………… 見た目は、あんなに完璧ないかにも大和撫子つて感じなのに……………」

「そつそつ…………… いざ話すとねえ…………… いや、それも面白くていいんだけどさあ……………」

「……積もる話もあるかと思うが、そろそろ学生が歩き回るには、遅い時間帯だ。」

名残惜しいかもしれんが、今日はこの儘解散しよう。未だ、夏は始まったばかりなんだからな。」

「……そうですね。もう少しずつ人も減り始めて来ていますし。」

「そうね。思ったよりも、長居しちゃったみたいだし。それじゃ、みんな又明日ね。」

「そういう事じゃ、しょうがないなあ。そんじゃ、孝介君 家までエスコート宜しくね。」

「……ハア。もう、いい大人なんですから、好い加減その方向音痴直しましょうよ。」

「やゝ。だって、そうすると、孝介君が迎えに来てくれないじゃない。だ・か・ら、ヤ。」

「ヤ じゃ有りませんよ。」

俺だって、何時退^のつ引きならない事情が出来るかもしれないんですからね。」

「だから、それは……………」

「……………なんか、私達が思ってた以上に、仲良いんだね、あの二人って。」

「……………せやな。こら、益々うかつかしてられへんで、かがみん！

あのおばちゃんに負けたら絶対にあかんで！ こうなったら、若さで勝負や！」

「な、何がよ！／＼／＼　べ、別に私はコウの事なんて何とも思ってたなんて無いんだからねっ！／＼／／」

「こんな時まで、ツンデレして萌えさせんでええねん。今は素直にならな、あかん時やで!？」

今から、ウチがええ策授けたる。名付けて、『若さに感^{かま}じて夜這いしよう作戦』や!!!」

「その儘かいつ!!!／＼／＼　って、よ、夜這い?!／＼／／／／／／

／／／／／／／／　そ、そんな事、私は絶対しないからねっ!!!?／／／／／／／／／／

「まあまあ、ええから。取り敢えずな……………。」

「だから……………! ………………!!」

「……いやあ、青春やなあ。」

「そうですね。……ていうか、だから、私警官なんですけど……；
……；

あまり、夜這いとか、そういう危ない言葉はやめて欲しいんだけどなあ。……；」

「あ……まあ、一応、ウチがしっかり言っておきますんで、ここは勘弁して下さいな。」

「あ、はい。それは、勿論。先生から言ってくれるなら、もう安心ですね！」

「……いやあ、黒井先生じゃ、却って危険な気が……あだっ！
？」 ガインツ！！

「じゃかあしいわっ！！ 大人を揶揄いようたら殴るで！！！」

「もう殴ってますよ！ うう……痛い……；」

「あ、アハハハ……；……；」

夏祭り（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、言う事は一つ。バカップル自重しろ。そして、リア充核爆発しろ。

では。こんな二人に砂糖を吐きつつ。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

又、次話にて。

二泊三日の海水浴（前編）（前書き）

では、連続投稿第二話目です。どうぞ、拙筆を御覧下さい。

二泊三日の海水浴前編

【みんな暇】

「夏だ！」

「海だ！！」

「「「と言つ訳で……！……！」」

“引率兼運転手、御願いまーす……！！！！”

「「「ほい」」

「……それにしても、こっちから頼んどいてなんなんですけど……。」

「「「ん？」」

「……三人共、よっぽど暇なんですね？」

「「「んぬぐっ……！……！」」「あはは……まあね」

「……貴女は、本来暇であつちやいけない筈なんですがね。」

「まあまあ、固い事は言いつこ無し無し　それで、乗り組みの内訳はどうするの?」

「ああ、それなら既に籤引きくじひで決めてあります。」

「え…と、黒井先生の車に、こなたさんと私が。成実さんの車に、拓海さんと涼子さんが。」

そして、管理人さんの車に、草薙さんとかがみさん、つかささんが御邪魔します。」

「ほお………そりゃ又、上手い事散はらけたなあ。ほな、早速行こか。」

【車内】

「いやあ、助かりました。実はゆい姉さんって、ハンドル握ると

暴走するタイプで」

「へ、そうなんか。警官やのにな。」

「あ、黒井先生！ そちらを左に曲がって下さい！」

「お、おお！ 危ない危ない。見失う所やったわ……………」

「……………ま、まさか、両方地雷だったとわ……………」

「成実さん、今日は宜しゅう頼みます」

「どうも、宜しく……」

「はいはい お姉さんに任せたまへ」

「あ、それと、こなたんから伝言があるんですけど。」

「んう？ 伝言？ 何々？」

「えっとですなえ……………」。

追い越した車を見掛けても絶対に追い掛けずに、前の車だけを見て走って下さい。

……………ですって。……………これ、マジッスか？……」

「あ、あはは……が、頑張って気を付けるよ……」

「頑張るんかいつ!? 頑張らなあかんのかいつ?!?!」

「おおっ?! ふ、二人共、いいツッコミするねえ……お姉さん、ビックリだ!?!」

「……漣さん、そこ左に曲がって下さい。」

後、そっちの先の曲がり角を……スルーした先の曲がり角を右折です。」

「ほいな、了解」

「草薙君と管理人さんって、息ピッタリだね」

「……そうね。」

「……そうか? 俺は未だに、漣さんが運転免許を持っている事に驚いているんだが。」

「む。酷いなあ、孝介君。」

わっちはこう見えてもね、運転関係の資格・免許は殆ど全部持ってるんだよ?」

「……………貴女、本当に何者ですか?」

「まあたまたま　孝介君の方が、よっぽどわっちの事、分かってる癖にい」

「……………どついう意味?」

「……………漣さん。余り、そういう誤解を生む様な発言は控えて下さい。事故りたくは無いですよ?」

「ほいほい。そんなじゃ、目的地に向かってねっつら!」

“海に着いたー!!!　無事に着いたー!!!!!!”

「……………では、取り敢えず予約してある宿に行こうか。何はともあれ荷物を降ろさないとな。」

“さんせーい!!!”

【海辺の語り】

「……いやあ、いいねえ。やっぱり海はこうでなくちゃなあ……。」

「……そうか？ 何時来ても余り変わらない気がするが。」

「……オマエは何も解っちゃいない。」

「……いいか！ 蒼い海！ 白い砂浜！ 青い空！ そして、何と言ってもビキニの姉ちゃん達！！」

「……これだけのすんばらしいシチュエーションを目の前にして、おまはは何とも思わんのかいっ！？」

「……いや、別に。綺麗な光景だな、とは思っが……精々それくらいだ。」

「……ハア。何と言っ可哀相な奴だ、お前は。宜しい！
ならば！」

俺が、ビキニの女性の素晴らしさについて、詳しく教えてやるつ
「！」

「……………未だ童貞の奴が女性について語るのか？」

「ど、ど、童貞ちゃうわ！！……………てか、チョットマテ。お前、そ
の発言……………マサカ？」

「……………コホン。さて、そろそろみんなが来る頃合いだな。」

「……………そうか、よし。後でちょっとオニーサンと話し合おう。」

「……………チツ。揶揄うつもりが、藪蛇やぶへびになったか。」

「あ、二人共お待ちせー！ ノシ」

「おー……………絶景かな絶景かな」

「……………ああ、そうだな。眼福……………と言う所か。」

「……………お前もやっぱ一応男なんだな。」

「……………お前とは、矢張り一度じっくりと話し合う必要があるそ
うだな。」

【海は水着でね】

「所で、コウ。いつまで上着着てるの？ しかも、ジッパーも上まで上げちゃって。暑くない？」

「……いや、特には。それに、済まないが俺は海に入る気は無いよ。みんなで楽しんで来るといい。俺は荷物番か、パシリでもしてるわ。」

「何ですよ？ アンタ……もしかして泳げないとか？」

「いや、一通りの泳法は出来る。まあ、少々訳有りだな。俺の事は気にしないでいい。」

「……気にするなと言われると気になるのが人情だよな」

「と言つ訳で、ちょっとその服、脱がさして貰おうかな」

「……だが断る。いいから、皆で遊んで来い。ビーチバレーとかぐらいなら付き合ってる。」

「……むう。又逃げられたか。」

「まあまあ、こなたん。ここは一つ長期戦といこうじゃないか。」

「そつだねー……まだ後一年以上もあるんだし。」

「うんうん ほな、あの人付き合いの悪いアホはほっといて、ウチラだけで遊ぼか。」

“おー。”

【内緒話】

「……… やつと行ったか。全く……… しぶとい奴等だ。」

「アハハ まあまあ みんなそんだけ孝介君が好きって事ですよ？」

「……… 只単に、物珍しいだけでしょ。」

「またまたあ　分かつてる癖にいゝ　イ・ロ・イ・ロ・と……
ね」

「……漣さん。俺を只、擲揄いに來ただけですか？」

「ん〜ん。……ちよつとした確認。……ねえ。孝介は未だ駄目なの
？」

「……当たり前だ。俺が彼女にしてやれる事は、きつと未だ有
る筈なんだ。

いや……有つて貰わなくては困る。でなければ……俺は、結
局、彼女には何も……。

何もしてやれず、何にも返せない事になつてしまつ。

それだけは……そんな事だけは、認める訳にはいかない……っ
！……！

「……孝介。それなら、あの娘はどうするのよ？　アンタもあ
の娘も……そうなんでしょ？」

「……恐らく。少なくとも、俺はそつだよ。……愚かしい事に
ね。」

「……愚かじゃない。ちっとも愚かじゃないよ。だって……しょうがないじゃない。」

死んじやったんだから。死んだ人はもう戻って……帰って来ないんだよ？

操だつて立ててる訳じゃ無いんでしょ？ 何時迄も拘こたわって居たつて……！」

「……アンタだつて分かるだろう？！ 俺と同じ苦しみを味わったアンタなら！」

例え、男オレと女アンタによる受け止め方の差異はあろうとも……！！

あの絶望感だけは……変わらない……！！！！」

「……………」

「……いいんだ、俺の事はもう……いいんだ。気にしなくていい。」

俺は、もう二度とそうなるつもりは無い。

例え、俺が……そして、アイツがどんな行動を取ろうとも。決して俺は肯つなずかない。

だから……何も問題は無い。だから、アンタも気にするな。

俺はずっと今の儘……何も変わらずにいる。どんな事であろうとも、変わっちゃいけないんだ。

だって……そうじゃないと……。

それこそ、本当にアイツへの裏切りになっちまうだろ？ まあ、今更だけど……さ。」

「……ばか。本当にバカだよ。二人共……そんなに……こんなに好き合ってるのに。」

「……………」

【海の家】

「……みんな、大分楽しんで来たみたいだな。」

「まあね〜。……………そつちも、何か管理人さんと長い事話し合っ
ちやって……………」

結局、どつち狙い？」

「……………そんな艶なまめいた話じゃないさ。それにしても……………皆、良くこれ
だけ頼んだな。」

店の食べ物を全て頼んだんじゃないか？」

「いやいや。まあ、流石にこんだけおると、それなりな量にもなる
つてもんやで。」

「……………まあ、それもそうか。取り敢えず冷めない内に頂こうか。」

こういふ所のは出来立ってっていうのが、一番の売りだろうしな。」

「そだね。そんじゃ……………」

“いただきますす！！！！”

「……………んぐっ……………んぐっ……………プツハアーツ！！！！ 今日暑

な、ビールが美味しい!!!」

「……アハハ；ふ、二人共、余り飲み過ぎない様に……程々にね？」

「そんな固い事、言いなや。折角の珍しく冷えたビールがあんのに。

ほら、成実さんもよう飲みい？」

「そうだよな。海の家での最大の罰ゲームって、生温いビールだよなえ、絶対！」

「お！流石は櫻井はん。よう分かつとるなあ　しかも、強いと来とる。」

今日はわんさか飲みましょう！」

「うんうん　飲みましょ、飲みましょ　ほらほら、ゆいちゃんも

折角ななちゃんも勧めてくれてるんだしさ。どうせ明日も休み取ってあるんだし……ね？」

「……は、ハア……；　そ、それじゃあ……少しだけ」

「いや……やっぱ、「うーうー」具のないカレーとか、海ならではだ

よねえ　期待通りだ！」

「うんうん　私もこういう油っぽくて、スパイスが沢山付いたのと
とか、実は結構好きだったり」

「こういつプレーンな焼きそばも海ならではのですね。」

「ほんまやで。生焼けのフランクフルトに三百円とか……普段なら
どんだけぼったくんねん！

って、ブチギレる所やけど、何や海っただけで許せてまつから、
不思議やよなあ。」

「……………ガツガツ…！　がぶがぶ…！」

「……………アンタは食い過ぎやで、拓海……………」

「……………ねえ。そんなに騒ぐ程美味しい？」

「ぜーんぜん。禪一丁ぜんいつで海を走る程じゃ無いよ。」

「……………又、何かのネタか？」

「……………まあ、それは兎も角。かがみ、こういう所の物は雰囲気
を味わうものだ。味では無くな。」

「う……………わ、分かってるわよ……………」

「そうか。それならいい。……ほら、かがみ。こっちも食べてみるか？」

「う……………うん／／／ あ、あ……………ん……………うん／／／／／」

「……………美味いか？ と聞くのは可笑しいな。まあ、だが悪くはないだろう？」

「う……………うん／／／ コウも……………その……………こっち、食べる？／／／／／」

「あ、ああ。……………ん……………ん、悪くない。」

「……………魅せ付けてくれるね。みんなの視線とか完全無視だよ。全く気にしてないよ。」

「まあまあ、目の保養にはなるからええやん。ニヤニヤも出来るしな」

「……………それは、りょうちんが彼氏持ちだから言える勝ち組発言だよ……………」

「あ、アハハハ………………………………………そ、それよりも、あの二人どうする？」

「……………そだね。こっちの事、全く目に入っていないみたいだし。」

何か物凄くピンクな空気とふいんき（何故か変換出来無い）が漂
ってるしね……あそこだけ。」

「……せやな。もうなんちゅうか……勝手にやってりやえんちや
う？」

ウチラはウチラで、あいつらほっというて飲んで食って騒ごか。」

「……うん、そうしよ、そうしよ。」

バカップルを後目ごめに、各々海を楽しみ、その日は一日中遊んでいた。

そして、案の定酔い過ぎたダメダメ大人三人に肩を貸しながら、宿
泊場に戻る皆であった。

【温泉】

「いやぁ……しっかしまぁ……なぁ？」

「……言うな。反省はしている。」

「しかし、後悔はしていないってか？」

恋は盲目って言葉は良く聞くが……お前までそうとはねえ。なぁ、孝介？」

「……五月蠅い。」

「へいへい。んじゃま、お先に入らせて貰うとすつか！（ガラガラ……）おおっ！」

「だーれもいねえぜ！俺達の貸し切りだぜ！ヒヤッハーツ！！」

「……余り燥^やぐな、久坂。例え誰が見ていなくとも、みつともないぞ？」

「そいつは無理ってモンだろ！こんなに広くてでかい風呂がオレラの貸し切りなんだぜ？」

もうこりゃ、思いつ切り泳いで騒いで暴れ捲^{まく}るしかねえってモンさー……！！

イヤツツホオオオオオウ!!!!!!」

「……………全く。子供みたいな奴だな……………フツ。」

「（バツシヤアアアアーン!!!!!!）……………プツハアアアアッ!
!!!! アツアツ!!!!!!」

きんもちいいアアアアアツツ!!!!!!」

「……………本当に子供丸出しだな。今頃、隣の女湯で笑われてるぞ?
きつとな。」

「そつかあ? だったら、そいつは大歓迎だな!

女性陣に話されて盛り上がれるのは、男冥利に尽きるってもんだ
ぜ!」

「……………それはまた、妙な男冥利もあったものだな。……………まあいい。」

【秘密】

「おう、やっと来た来た。お前、脱ぐの遅えぞ？」

「…………お前が早いんだよ、久坂。俺は平均的な速度だよ…………恐らくな。」

「そっかあ？……………って、オマエ…………ソレ……………！！？」

「ん？…………ああ、これが。…………これはな……………」。

「オマエ…………！！俺よりもデケエとは、どいうことだ！この野郎…………！」

お、オマエ…………俺は、これでも少しはでかさに自信があったんだぞ！？

そ、それなのに…………それなのに…………！！……………」

「……………」。

真っ先に気になるのは、ソコなのか。しかも、何故に泣く？

というかでかいのか、俺のは？ 余り他人のと見比べた事など無いんでな。…………良く判らん。」

「……………コノヤロウ。何気にちゃっかり勝利者宣言していきやがった……………」

「……いや、寧ろ他に気になる所があったんじゃないのか？
？」
「……と思ってな。」

「……ああん？……」

「……って、オマエ、何だソレ！？ その大量の
身体の傷は？！」

「……普通はそっちに先に気が付くものだと思っ
ていたが。」

「……矢張り、世の中はまだまだ広いな。色んな奴が居るものだ。」

「……そんな事はどうでもいい……！ それよりも、お前……ソレ
……一体……？」

「……ああ、そうだったな……これらはな。」

「……先ず、この胸にあるのと、背中をばっさりしている傷が刀傷だ。」

「……………かたな……………きず?」

「ああ。言葉通り、日本刀で斬られた傷跡だ。」

それと、ここの脇腹の所のと、両腕にあるモノはドスで突かれた跡。」

「ど、ドスう?!?!」

「そうだ。そして、この胸の所と、こっちの逆の脇腹の所、それと両足の跡が……………銃痕だ。」

「……………じゅ、じゅうこん…? じゅうこんって……………まさか、銃か?!」

「他にどんな銃痕がある? ……まあ、こついう訳だ。」

流石にこの幾つもの傷跡を曝した儘で海に入るのは……………な。」

「……………それで、あんなにクソ長い上着を……………。」

そ、そついやあ、お前体育の時も、必ずジャージを着ていたけど……………そついう訳だったのか。」

……………な、なあ……………ソレ、痛むのか?」

「いいや。此等は、3〜4年程前に付けられた跡ばかりだからな。もう既に古傷だ。」

「……孝介……お前………一体………?」

「……まあ、色々だ。人には言えない過去の二つや三つくらいは誰しもあるだろう?」

俺にとっては、コレがその二つと言つ訳さ。

……久坂。解っているとは思つが、余り彼女等には軽々しく言うてくれるなよ?」

「………何でだよ。」

「当たり前だろう? 一体、何の爲に隠したと思つているんだ?」

コレを見た者は皆、一人残らず例外無く不愉快な思いをする。……今のお前の様にな。

例えそれが俺自身に対する物では無くとも、この傷を付けた者に対して皆が憤怒するだろう。

故にお前がこの後、彼女等に言つてしまつては、態々コレを隠した意味が無くなるんだよ。

………それぐらい、解らぬお前では無いだろう、久坂?」

「……………だけど……………!!!……………くっ……………分かったよ。」

「……………そうか。助かる。……………それでは、俺も安心してゆっくり浸かるとするか。」

「……………そうだな。俺も、今日は長湯していく。」

「……………そうか。」

その後。宣言通り、久坂と俺は女性陣以上に長湯をし。皆に逆に心配されてしまった。

そして、美味しい料理に舌鼓を打ち、怪談話？ に興じ、明日に備えて、少し早めに皆寝た。

に

。その日の月夜。綺麗な満月の魔力に中^あてられたとある男女

。またもや、運命の瞬間が近付いていた。

二泊三日の海水浴（前編）（後書き）

如何でしたでしょうか？

これから、段々と少しずつ孝介の過去やら何やらが明らかになっていく……予定です。

まあ、今は取り敢えず此処迄って感じですね。孝介も徐々に皆にデレて来つつありますしね。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、次話にて。

二泊三日の海水浴（中編）（前書き）

では、連続投稿第四話目です。これにて、ストックは全て完全に尽きました。

……さて、皆様。先ずはこの話を読む前に注意事項が一つ御座います。

先ずは海水を御用意下さい。

ハッキリ申し上げまして、塩じゃあ足りませんので、悪しからず。

では、準備の出来た方から……どうぞ、今話も拙作を御楽しみ下さい。

二泊三日の海水浴く中編く

さて。唐突だが、この宿の間取りを少し説明しておこう。

先ず、奥まった所の三部屋を借りている。内訳は、女生徒陣・大人・男だ。

その内、海に面した所が女生徒陣。その向かいが大人部屋。そして、女生徒陣の隣が俺達だ。

更に、何と言っても俺がこの宿を気に入った最大の理由。それは、何と！

風流な事に、外の廊下から庭や外の景色が良く見え、途中に休憩所まで備え付けてあるのだ。

まあ、流石にその分少し御値段は張ったが、それだけの価値はあった。……これはいい。

なので、俺は今一寝付けない事を良い事に、起き上がって少し外に出て、月を眺めていた。

今日は、奇しくも満月だ。綺麗な真ん丸お月さんが、雲一つ無い空にポツンと浮いている。

「……………なあ、玲。お前は……………今、一人で其処に居るのか？ 寂しくは無いか？」

……………「ごめんな、玲。俺が臆病な所為で……………お前一人で其処に居させてしまった。」

思わず、そんな言葉が漏れ出た。……………本当に、この所、俺はたが籠かごが外れ易いな。

丁度、そんな風に少し自戒していた時だった。……………俺の真後ろで音が鳴ったのは。

【同伴】

ガタツ！ 「！？ 誰だっ！！」

「ひびくっ？！」「ひびく、ごめんなさいっ！！」

「……………柊か。いや、こちらこそ済まん。つい、物思いに耽^{ふけ}っていてな。驚いてしまったんだ。」

「あ、ううん。わ、私なら大丈夫だよ。それよりも……………草薙君、泣いてるの？」

「……………いいや。柊の気の所為だよ。」

「……………そう？ ……そうかなあ？」

「ああ、そうさ。……………それよりも、一体どうしたんだ？ こんな夜更けに。」

「あ、えっと……………そのう……………／／／」

「……………ああ、そういう事が。分かった、それなら途中まで一緒に付いて行こうか？」

俺も丁度、眠れなくて、外に出て来たばかりなんだ。」

「あ、うん……………お願いします／／／」

「えっと、その……あ、ありがとう、草薙君／＼　実は結構心細かったんだあ。」

「……そうか。明日も思いっ切り遊ぶんだろう？　今日はもうさっさと寝た方が良さな。」

「うん　……草薙君はまだ寝ないの？」

「……ああ、そうだな。俺はもう少し、月を眺めてから行くよ。」

……それじゃ、オヤスミ……柁。　サラ……　サラ……

「（ポフッ……!）!？／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼　お、お、お、お、おやすみ!？」　バタバタ……!

「……？　……むう。気軽に頭を撫でたのが不味かったのかな？」

【バトンタッチ】

「は、はうう〜……／／／び、ビックリしたあ〜／／／／／
ま、まだ、顔が熱いよう〜／／／／／

／／
うう〜……あ、あんなに綺麗な笑顔は反則だよ／／／／／
／／

し、しかも、お月さんの光が照り返ってて……ホントに凄く綺麗
だったなあ／／／／／／／／／

……でも。『れい』さんって、一体誰なんだろうっ？

「……つかさ？ どうしたの？」

「うひゃあっ？！ お、お、お姉ちゃん……お、驚かさないで
え……」

「何言ってるのよ。つかさが勝手に驚いただけでしょ？」

それよりも、明日も早いんだから、早く寝ちゃいなさい。」

「う、うん。……ねえ、お姉ちゃん。」

「何よ？」

「あのね？ ……『れい』さんって、誰だか分かる？」

「……『れい』？ ……ううん、私は知らないけど。その人が
どうかしたの？」

「うん。 ……あのね？ 今、その廊下に草薙君がいるんだけ
ど。」

そこでね。草薙君が言ったの。『れい、ゴメン。』って……泣
きながら。」

「……それ、本当？」

「う、うん、間違い無いよ。 ……一体、どうしたんだらう？」

「……つかさ。アンタは早く寝ちゃいなさい。」

「う、うん。 ……お姉ちゃんは？」

「……私は、ちょっとトイレ行って来る。少し遅くなるかもしれな
いから、先に寝てて。」

「……うん。お姉ちゃん、お願いね。 ……お休みなさい。」

「ええ、任せて。 ……お休み、つかさ。」

【月下美人】

「……今度はかがみか。」

「何よ。私が来ちゃいけない？」

「……いいや。かがみも一人では恐いのか？」

「……違うわよ。つかさじゃあるまいし。……ねえ、今ここで何してたの？」

「……見ての通り、月見さ。かがみも見て行くか？」

「……そうね。少し御邪魔してもいい？」

「ああ、勿論だ。……夏とはいえ、夜は少し冷える。これでも羽織っているといい。」

「あ、うん。有難う。……綺麗ね。」

「……ああ、そうだな。今日の満月は、特に綺麗だ。」

「……………ねえ、コウ。」

「……………ん？ 何だ、かがみ？」

「……………『れい』って誰？」

「……………そうか。やっぱり、さっきのを柊は聞いていたか。」

「……………ねえ、コウ。アンタ、一体何を隠しているの？」

私じゃ……………私達じゃ、アンタの力にはなれない？ 話も聞いちゃいけない？」

「……………『知る』と言う事は、何よりも恐ろしい事だ。……………死ぬ事よりも。」

もし、聞いてしまえば、かがみは……………御前達は一切、後戻りが出来無くなってしまう。」

「……………構わないわ。それぐらいの覚悟はしているつもりよ。」

アンタが隠してる事だもん。何かよっぽどの事だつてぐらいは察しが付いてるわ。」

「……………例え、それでも……………今は未だ、話せない。話す訳には……………いかない。」

「……………そう、分かったわ。」

それなら、コウが話したくなるまで、ずっとコウの側に引っ付いてやるんだから。」

「……………好きにするといい。俺は、御前達の意志迄縛る気は無い。」

「……………そう、良かった。もし、それも駄目だって言われたら……………」

実行行使でもしようかと思ってたからね。」

「……………実行行使とは又、穏やかじゃないな。……………因みに、どんな事をするつもりだったんだ？」

「え……………っと……………そのう……………そ、そんな事、言える訳無いでしょっ……………！！……………」

「……………一体、何をするつもりだったんだか。」

「う……………あ、アンタは知らなくていいのっ……………！！……………」

「……………そうか。」

「……………もう、バカ……………」

【君子豹変】

「……………なあ、かがみ。」

「！　な、何？／／／」

「ん……………」

「……………な、何よ？／／／　人の顔をじっと見詰めて／／／　で、照れるでしょっ！！／／／／／／／」

「……………いや、やっぱりかがみって可愛いよなってさ。」

「はあっ！？／／／／／／／　な、な、な、何を、いきなりい？！／／／／／／／／／／／／」

「いや、本当に…さ。前から思っただけはいたんだが……………何となく言いそびれて……………と言うか、

中々、こづいづい事を言える雰囲気にならなくてな。」

「そ、そんな事、言わなくてもいいってば！／＼／＼／＼／＼／

だ、第一、私なんて、全然、そんな可愛くなんて……／＼／

「……何を言ってるんだ、かがみ。かがみは物凄く可愛いぞ。少なくとも、俺にとっては。」

……それに、とても綺麗だ。顔もだけど……心って言うか、気持ち……さ。」

「あ……う……／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／／こ、コウ？ アンタ、何かさつきから変よ？／＼／＼／／

普段のコウなら、絶対言わない言葉のオンパレードじゃない／／

ねえ、本当に一体、何があったの？ 何かあったなら、相談に乗るわよ？」

「……そうかな？ 俺としては極普通に、何時も通りにかがみと接しているつもりなんだが。」

だがまあ……違うと言っのなら……きっと、中てられたんだろうなあ。」

「……中てられた？ 誰に？ もしくは何に？」

「……そうだな。夏と言う雰囲気か。この海というシチュエーショ

ンか。

それとも……………この満月の魔力にでも中てられたのかな？

……………だって、かがみが月の光に照らされて、もっと……………何時も以上
に綺麗に見えるからさ。」

「ううつ……………／／／／／／／／／／だ、だから、そういう事は……………／
／／／／／」

【スキンシップ】

「……………ねえ、かがみ。」

「う……………な、何よっ／／／」

「……………（サラッ……………）やっぱ、かがみの髪って凄く綺麗だよな。

それにとてもサラサラしてる。触ってて気持ちいいな。」

「そ、そう？／／／ま、まあ、一応手入れはしてるからね／／／」

「そっか。……本当に綺麗だ。思わず吸い込まれそうになる程に……」(チュッ)。「」

「へ？……(ポウンッ！)！！？//////」
//////

あ、あ、アンタ、い、今……な、何を……？//////

「何って……かがみの髪にキスしただけだけど？」

「あ……う……う……//////」
/////////

「(クスクス……)本当にかがみは可愛いなあ。ん……かがみ
「ぎゆうっ……！」

「はうつ?!//////こ、こ、こ、コウ?!?!//
///」

「ん……かがみって身体柔らかいな。それに温かい。……しかも
……。」

「し、し、しかも?//////」

「ん…………凄く良い匂いがする。俺、かがみの匂い、大好き

「うう……………ほ、本当に、コウなの？ 幾らなんでも、普段とギヤップが有り過ぎじゃない？」

「……………そうかな？ まあ、今は大分リラックスしているからなあ。

誰も周りにいないし、それに今は、何となくそういう気分だし。」

「り、リラックスして……………じゃ、じゃあ、これがコウの本性？
！これが素な訳え？！」

「あ……………まあ、そういう事になるのかな？ でも、普段のアノ俺も俺だよ？」

演じている訳じゃないしな。どっちも俺の素だよ。」

「うう……………このギヤップは慣れない。絶対に慣れないよう……………／／／／／」

「そっかな？ ………………それよりも、ねえかがみ？」

「うう……………何よう？／／／」

「ん……………ん……………かがみ……………ん……………」

「ひゃあっつ！？／／／／／だ、だ、だからあ…！！／
／／／／／／／／／／／／／／／／」

「はぶう〜……………しょうがないだろう？ かがみが可愛いのがい
けないんだからよ。」

「……………もう、好きにしてえ／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／」

「んじゅ、御言葉に甘えて ん〜…………… スリスリ……………

「……………はう／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

〜一時間後〜

「んう〜……………」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／

「かがみ　可愛いなあ　本当に可愛いなあ　」

「//////////も、もう、勘弁してえ……/」

「やうだ。かがみが好きにしていって言ったんだよ？」

「うう……て、程度つてもものがあるでしょうが！/////////」

「あ、それ無理。かがみと触れ合ってるだけで、もう自制が中々利かなくてね。

襲い掛かるのを堪えるだけで、実は結構一杯一杯だったり。」

「……そ、そんな風には見えないけど/////////」

「そりゃそうです。出来るだけ、極力見せない様に努力してるんだから。

「……そ、そう/////////」

「うひゃ……。でもなあ。」

「な、何よ？////////」

「……もうそろそろ、我慢出来なくなっちゃって来たんだけど
……どうしようか？」

「わ、私に聞かないでよ、そんな事！！！！！！私
そんな事、知らないモン！！！！！！」

「……ねえ、かがみ。」

「知らない！！！！知らないったら、知らないモン！！！！
／／」

「……なあ、かがみ。俺、かがみを好きにしてもいいんだよな？」

「い、いい、言ってるじゃない！ そんな事までは言ってるんかないモン
！！／／／／／／」

「……かがみ。」

「こ、コウ……。ちょっと、ダメだっばあ……。そ、そんなに近
付いたら……／／／／／」

そんなに、顔を近付けたらあ……／／／／／あ……「コウ
……ん／／／／／／／／／／」

「ん……。」

「んんん……っはあ……」「こ、「ウ／／／／／あ、あの、その……
／／／／／／／／／／」

「……かがみ、もっかい。」

「ふええ?!／／／／／／／／／／んふう……!／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／」

「んう〜……」

〜更に二時間後〜

「ん〜」

「う……んっふう……うんう〜……／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／」

「ん……っはあ。もっや……ん」

「ッはあッ……はあッ……／／／／／／／／／／も、もっ、らめ……
／／／／／／／／／／も、もっむりい……／／／／／／／／／／」

「え〜……俺、まだ物足りないんだけど。」

「む、むりむり!／／／／／／／／／／わ、私もっむり! 絶対にむりい
!……!／／／／／／／／／／」

「……ちえつ。まあ、しょうがないか。明日もある事だし……今日はもう寝ちゃうか。」

「というか、そろそろ明日になるしな。」

「……そ、そんなにしてたのね……」

「……く、唇がふやけてる様な感覚だよ……」

「そうか？ なら、これから何度でも、毎日でもして、少しずつ慣らしていかないと。」

「はうっ！？／／／／／こ、こ、こんなのを、ま、毎日い？！／／／／／」

「む、むむ、むりむりむりい！！！！／／／／／絶対にもりだよう！！！！／／／／／」

「……いや、流石に今日程のは、もうするつもりは無いよ。……少なくとも今は（ボソッ）。」

「あう……ほ、本当？／／／」

「あ、ああ……勿論。取り敢えず、今夜はもう寝よう。」

「う、うん……／／／／／」

「……………それじゃあ、かがみ。」

「う、うん／＼／＼／＼／＼／　お、お休み、コウ／＼／」

「……………ああ。あ、そうだ、かがみ。」

「な、何？」

「……………そう警戒しなくても。」

「……………自分の所行を省みなさいよっ！！／＼／＼／＼／」

「……………まあ、それは兎も角。ちょっと、御耳を拝借。」

「……………な、何よ？」

「……………今日は、御馳走様（ボソッ）」

「……………！！？！？／＼／＼／＼／＼／＼／／＼／／＼／
！！？／＼／＼／＼／＼／＼／／＼／／＼／／＼／　ば、ば、バカッ！」

「（クスクス……………）今度こそ、本当にお休み。又、今日の朝に……な。」

「うん……
/
/
/
/
/
うん……
/
/
/
」

二泊三日の海水浴（中編）（後書き）

……………如何でしたでしょうか？

皆様、塩分は足りましたか？ それとも、この程度では恐るるに足りませんでしたか？

でしたらば、尚々一層の精進を致したいと思います。

因みに、私はこれを書いている最中に、思わずガチで一回吐き掛けました。

つーか、何こいつら？ つーか、何コイツラ？ つーか、何コイツラ？！

もう、オマイラさつさと早く結婚しちまえよ。

そんな恨み節（？）を吐きつつ。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

次話は辛うじて、今日中には上げられ……………ると良いなあ……………（遠い目）。

二泊三日の海水浴後編（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、有難う御座います。

さて、大変御待たせ致しました。バカツプルの後編です。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

二泊三日の海水浴〜後編〜

【バカップルその一】

「……なあ、かがみ。本当に、みんなと一緒に遊ばなくてもいいのか？」

「……いいのよ。アンタもしつこいわね。別に一緒に遊ぶだけが海水浴じゃ無いでしょ？」

私が良いって言うてるんだから、いいのっ。……そう言うコウこそ泳がないの？」

「……ああ、俺はいいんだ。……そっか。なら、もう聞かないさ。

」ついでノンビリするのも悪くない。」

「……そうね。」

「……なあ、かがみ？」

「……何よ。」

「……手でも繋ぐか？」

「んなっ!?!?!?!」

「……………で、どうなんだ?」

「……………す、好きにしたらいいじゃないっ?!?!?!」

「……………そうか。では、御言葉に甘えて……………」

「あう?!?!?!?!?!」

「……………しっかし……………なあ?」

「な、何よっ?!?!」

「……………これ以上の事をしておいて、今更手を繋ぐぐらいで照れるのか?」

「うわーっ?!?!?! わぁーっ?!?!?!?!」

「こらこら。他人様に迷惑が掛かるだろう? そんなに大声を出しては。」

「あ、ああ、アンタのその発言の方が、よっぽど私に迷惑よおつ!?!?!?!?!」

「そうか。それなら、俺が余計な事を言わずに済む様にしないとな。」

「……ど、どうして……！ ま、まさか?!」

「まあ、その真逆だな。頂きます ん……。」

「んんう……?! / / / / / ……んんう…… / / / / /
/ / / / /」

【鳩首凝議】
たしなみ ぎやうぎ

「……なあ、おい。アレ、一体どないなっとんねん。」

「……知らねえよ、俺だつて……誰か知ってる奴いねえのか?」

「……」
「……。」

「……あかん、こなたん完全に固まっとるわ。ほな、他に誰か知ってる奴、いいひん?」

「……えっと、あのう……」

「ん？ ひーちゃん、何か知っとるん？」

「あ、うん。あのね、多分なんだけどね。昨日の夜にね。」

「………って事があったの。」

「………それ、ホンマかいな。あの孝介が………ねえ？」

「………なあ。所で、今の説明中、ずっとキスしっ放しのあのバカップル、どうする？」

「………どうするって………どうもせえへんやろ。」

てか、寧ろ触れたくないわ、あんな超絶バカップル。ウチラかて胸焼けするわ。」

「………あ、あはは………どんだけ………」

「全く………ホンマにドンだけやねんっちゅっ話やで。」

……所で、お～～い、こ～なた～～ん。そろそろこっちに戻つて来～い……。」「

……
「ハッ!？」

「………やつと戻つて来よつた。………まあ、気持ちは解らんでも無いけど。」「

「だ、だ、だって、あ、ああ、アレアレエエ～～?????」

「あ～……あかんわ、こりゃ。暫く使いモンにならんわ。」「

「うう～～～………私のがみんをカエセ～～(TAT)or
Z」

「いやいや、アンタのやあらへんやろ。」「

【絡み酒^{シラフ}】

「ア～イ～シ～ラ～～～!～!～!～!」

「こんんな真っ昼間から、堂々と不純異性交遊しよってからに！！」

「ま、まあまあ；別に高校生でキスぐらいなら、大丈夫ですよ……」

「甘いっ！ 甘いで！！ 甘過ぎるで、成実さん！！！！」

「そうやって一つでも許すと付け上がって、どんどんどんどんエスカレートしてまうんや！！」

「せやから、今の内に厳しく躾たらなあかんです！！！！」

「まあまあ、ななちゃん 若いもんの邪魔はしたらメツよ？ 私達は私達で遊びましょ」

「大人には大人の楽しみ方があるんだし」

「あ、ちよつと！ 櫻井はん！ 離しや！ ちよつとお！！」

「あ、あはははー……； じゃ、じゃあ、みんな又、後でねー」

【ダメだ、こりゃ】

「……………ホンマにあの人達は台風一過やね。」

「あはは。ホントに家族だったら楽しそうだよな。」

「……………ウチは突っ込まんからな。」

「?????」

「……………まあ、それはともかく。」

「何や、ウチラが話してる間に、あっちはもっと何かアレな事になつとるな。」

「誰か、何が起こったか解る奴おる?」

「おー、孝介がな。」

「かがみとキスしたまんま、抱き寄せて更に深いベロチュー噛ましやがってな。」

「まあ、そんな事をこんな所でしてた訳だから、嫉妬とか諸々込み」

でのDQ共ドキュンに絡まれてな。

でも、五、六人程度をあっさり瞬殺しやがってな。そしたら、全員逃げ出した。

んで、あそこに死屍累々としてるのが、その成れの果てって所だ。

……あ、又、キスし出した。………なあ、もうアイツラ此処に置いて行かないか？」

「………長々と説明、お疲れさん。

もうアイツラは放つといて、ウチラだけでキャツキャウフフ遊ばか。」

「「さんせうい。」」

「「あ、アハハハ………」」

その後。昼御飯時以外、ずっとイチャイチャしていた二人。

夕暮れ頃に、又……もと基。未だキスしていた二人に、黒井先生の拳骨
という天罰が下され、

頭を抑えた儘の二人を引き連れ、宿に戻った。

そして、翌日。帰る際にまたもや道中に不安に怯えながらも、

何とか無事に帰り着け、歓喜の涙を流した皆であった。

二泊三日の海水浴（後編）（後書き）

如何でしたでしょうか？

もう、リア充とか本当に嫌ですねえ……。何、この熟年通り越して
転生したレベルのバカップル？

これにて、二年次夏休みも終了。次回からは、早速二学期に入りた
いと思います。

何か、ようやくと本来の目標にしていた、短文（？）に戻れた様な
気が……………

所で、もし他に『こんなイベントが見たい！・こんな話はどうか？』
等という、

御要望・御提案等が御座いましたらば、何時なりとも御一報下さい。
頑張っ書いてみます。

では、皆様に良いクリスマスが訪れる事を願ひまして。今話も御覧
頂きまして、有難う御座いました。

そして、良い御年を。又、来年御会い出来ますよう。

有り触れた(?) (日常風景(前書き))

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

今話から二年次二学期になります。

幾つかイベントも考えていますので、どうぞ御楽しみに。

そして、これが今年最後の投稿になります。皆様、健やかに暮れを御過ごし下さい。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

有り触れた(?) 日常風景

【進路調査】

「さあ！ 休みが明けたばっかやけど、ポケーツとしとる暇は無いで！」

そろそろ先の事も考えて、勉学に励む様に!!」

「……………先の事って進路の事かあ。確かに、高校生活も折り返しだもんね。」

「……………でも、かがみは未だ大して先の事、考えて無いんでしょ」

「はあ！？ 何でよ、失礼ね!!」

「だって〜 みんなと同じクラスに成りたくって文系選んだくらいだもんね〜」

あ、いや違うか。みんなと……………じゃ無くて、

草薙君とずっと一緒に居たくて……………の間違いだっただね」

「んなあっ!!?!?///????? ちぢ、違つわよっ!!?!?/
///////////////

って言うか、つかさ〜〜ッッッ!!! しゃ、喋ったなあー
ーっ!!?!?//////

「あ、アハハ……； メンゴメンゴ……」

「し、しかも、よりもよって……」
「コイツにい〜っ!!?!?/
」

「んもう……。素直に言えば良いのに
寂しんぼさんなんだか
ら」

あ、よしよし 「 ナデナデ

「……………う、うう、ウルサアアア……イ!!!!!!
////////////」

「所で、孝介はどうなんだ?」

「……………何がだ?」

「何って……だから、進路だよ進・路！ お前は何か成りたいモンとかあんのか？」

「……いや、俺は………特には何も無い。」

「……ふうん。でも、お前ぐらい頭良けりゃ、何処の大学でも入れそうだしな。」

結構、選ぶ幅があっていいんじゃないの？」

「……いや。そもそも、大学に行くつもりも今の所、無いしな。」

「はあ！？ じゃ、じゃあ、お前一体どうすんだよ、この先よお？ 真逆、就職？」

あ、それとも、親父さんか母ちゃん跡でも継ぐのか？」

「……いいや。そのつもりも全く無い。就職………も、余り考えてはいるが……。」

まあ、恐らくバイトだけで暮らすのかもな。兎に角、先の事は何も考えていない。

………いや、今は………何も先の事等、考える気も無いのさ。」

「………おい、孝介。お前………。」

「……済まん、久坂。その話はもう終わりにしてくれ。……頼む。」

「……チツ、分かったよ。」

「……ただ、いつか必ず話せよ？ 勿論全部だ。いいな？」

「……ああ、いつか……な。……有難う、久坂。」

「……ハッ。親友だからな。少なくとも、俺はそう思ってるからな。」

「……ああ、有難う。」

【バカップルその二】

「かがみ、ちょっといいか？」

「ん？ 何、コウ？」

「これなんだが……この前、ウチに忘れて行った物じゃ無いか？」

「え？ ……あ、これっ！ 良かったあ〜 ……ずっと探してたけど見付からなかったのよ。」

これ、お気に入りだったから、また買おうかって悩んでた所だったの。

そっかあ …… コウの家に置き忘れていったんだ。本当に有難う、コウ！

「……………」

「いや、気にしないでいい。 ……ん？ かがみ、髪に糸屑が付いている。」

つと、取れた。「ポンポン（頭を軽く叩いてる）」

「あ、有難う。あれ？ コウ、制服の釦^{ボタン}取れ掛けているわよ？」

確か、管理人さんの所に裁縫道具有ったわよね？」

「ああ、持っていた筈だ。」 ナデナデ …… サラサラ ……（髪を撫で付け梳^すいている）」

「なら、後で又、コウの家に寄って縫ってあげるわよ。今取っちゃって渡して？」

「……………」

「ああ、済まない。……だが、裁縫出来るのか？ 柎に頼んだ方が
良いのでは？」

「あ、失礼ねー。そりゃ、確かにつかさの方がそういうのは得意だ
けど、

私だってそれぐらい人並みには縫えるわよ。いいから、ほら早く
渡しなさい。」

「分かったよ。……っと。では、頼む。」 ナデナデ……………
未だずつと撫でている)

「……………。」

「はい、頼まれましたと。……………フフツ。」

「……………？ 何か可笑しい事でもあったか？」 スツ…（手を髪か
ら頬に移動し又、撫で始めた）

「え？ ……うん。何か素直なコウが珍しいって言うか、何か可愛
いって言うか。」

「……………む。男は可愛いと言われても、普通は嬉しがらないものだぞ、
かがみ？」

「クスクス……いいじゃない、別に。褒めてるんだし…ね？」

ぎゅっ…ポンポン…（かがみから抱き付いて背中を叩いてる）

「……………全く。それじゃ、学校終わったら頼む。その儘、一緒に帰るか。」

ぎゅうっ……………ナデナデ……………サラサラ……………（強く抱き返して髪を撫で付けている）

「ええ、そうね。一応、つかさには言っとかないとね。」

「そうだな。」 満面の笑み 殆どの女生徒撃沈

「……………」

「……………所で。其処の二人は、何故にさっきから黙ってこっちをずっと見て居るんだ？」

「……………そうよ。もう、さっきから気になって仕方ないじゃ無いの。日下部、峰岸。」

ねえ、本当にどうかしたの？ 何かあった？ 未だ腰は抱かれ中

「……………え、ええ、まあ。何かあったと言えばあったのだけれど……………」

「……………いやあ、そのう……………何て言うかさあ……………なあ、あやの……………」

「わ、私に振らないでよ、みさちゃん……………あ、あのね？」

ふ、二人共……………何時もそんな感じなの？」

「……………そんな感じって？」
同時に顔を見合わせ、同時に発言

「……………だから、その……………何時もそんな風に仲良いのかな？……………って……………」

「……………？ まあ、大体何時もこんな感じだが。」
然り気無く少し強く抱き寄せる

「……………？ うん。まあ、そうね。でも、そんなに可笑しかった？」
自然に身体が近寄る

「……………いえ、可笑しいと言うよりも……………その……………ね、ねえ、みさちゃん？」

「……………うえっ?! あ、アタシに振るなってヴァ!……………え……………つとぉ……………」

「……………?……………?」二人共、変なの。
二人共同時に……………も

「しやめていい？」

「……今だけは、柊ちゃんに言われたく無かったわ……orz」

「……うう……柊が……アタシの柊があ………orz」

「……何なんだ(なのよ)、一体?」「(ry」

【公開質問状】

「みんなからの質問に色々答えちゃおうコ〜ナ〜!!!」

「わ〜どんどんぱぶぱぶ」

「………又か。」

「しかも、みんなて大体一人からしか来いひんやんか。」

「………それを言っちゃあおしまいだよ、りょうちん。とまあ、
気を取り直して！」

早速戴いた質問にみんなが答えちゃうよ！ 先ずは質問その一！！

『バカップルに質問です。御互い此の儘の状態が良いと思いますか？』

若しくはこれ以上イキたいですか？ 御互いそれぞれ答えて下さい。』 だつてさ。

じゃあ、早速答えて貰っちゃおう！ バカップルこと草薙君とかがみん。かもん。」

「んなつ！？ ちょ、ちょっと！／／／ な、何でバカップルで私達なのよ！！／／／／／」

だ、大体、私とコウは……その……あの……／／／／／／／／／／／／／／／」

「あゝはいはい。お決まりのツンデレには萌えておいて。で、其処んどこどうなの、かがみん？」

「ううっ……何か、物凄く悔しい……！」

いいわよ、そんなに聞きたいなら答えてやるわよっ！／／／／／／

で、でも、コウは聞いちゃダメ！ 絶対に、ぜえええつつつたいにダメツツツ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／」

「？ 良く分かんが解った。それなら、俺は一旦外に出ていよう。」

「……よしよし。ほんなら、かがみん。女だけの告白大会。ポロリもあるで！ 開催しよか」

「ううっ……／／／」

「ほれほれ 折角舞台は調ってるんだしさあ 一ここらでぶつちやけちやいなよう」

「ううっ……ひ、他人事だと思ってえ……！／／／ わ、私は……その……」

「こ、コウさえ良ければ……その……別に……（ボソッ）／／／／／／／／／／／／／／／／」

「おおっ！ 大胆発言だねえ」

「だ、だって！／／／ だってね？！／／／

「はいはあゝい。今度はかがみんが外に出ててね。　　そこで顔を冷やして来るといいよ」

「ううゝ……………(コクン)……………」

「……………終わったのか？」

「いやいや、寧ろこれからが本番やで？　　ほな今度は孝介が答える番や。」

「……………はあ。それで？　　一体どんな質問だったわけ？」

「せやからな。かがみんと何時になったら、ブチユウゝから先にイクんかつちゆう話やがな。」

「ほんでどうなん？　　一体何時になったら、かがみんと一線越えるん？」

「何か先程の質問と、大分違う様な気がするが……………まあいい。答えは……………無し……………だ。」

「は？　　一体どういう意味やねん。事と次第によっちやあ、ウチラ

かて許さへんで?」

「……と言われてもな。今言った通りだ。俺はかがみと一線を越える気は毛頭無い。」

“………は?” 「……ホンマにどづいつ事やねん、お前。」

「……言葉通りの意味だ。そもそも、俺と彼女は恋人では無い。」

「……あんだけ彼方此方でブチュブチュしといてよう言っわ。」

「……例えそれでもだ。」

それに、恋人同士で無くとも身体の関係のある者は幾らでも居るだろう?」

「……孝介。アンタ……もしかして、かがみをそんな風に見とったんか?!」

「……だったら、既に抱いている。言っただろう? 俺は彼女とそつなる気は毛頭無い……と。」

「………アンタ、一体なんなんやねん。何がしたいねん。ワケ分からんわ。」

「……さてな。その答えは……俺が最も欲しい物の一つだよ。」

【公開質問状2】

「……さて。暗い雰囲気を払拭する爲にも、次の質問にいこう！」

「わ〜わ〜どんどんぱふぱふう〜」

「因みに、二人はもうやっとなれんってばかりに、さっさと帰ってデートしとるで。」

「……まあ、あのバカップルはもう放つとくとして。今回の最後の質問はコレダー……！」

「……何や宇宙にいる怪獣達を薙ぎ払えそつな勢いやな。んで、質問は……つと……。」

他の親友方にこっそり質問です。今の二人を見て正直どう思ってますか？

素直に喜んで？ 何か複雑な気持ちみたいなのは無いですか？

P・S 自分はリア充死ねとか思ってますが やて。ほな、一人ずつ答えていこか。

つつか、ちと待てや。この最後の文句は……ウチラに対する挑戦状やな？

ええやる。売られた喧嘩はなんぼでも買ってやるで！ どっからでも掛かってこんかいっ！！」

「ま、まあまあ、りょうちん。落ち着いてっば、

そんじゃ、一番手こなたいつきまゝす！ まあ、私が一番言いたい事はたった一つなのだよ。

私のがみんを返せ〜〜！！！！！！！！！！（T T）「

「何言ってんだ、チビッコ！ 柎はウチんだ！」

「何おう〜〜！ かがみんはウチのだっ！！！」

「ウチんだっっっ！！！！！」

「ウチのだっっっ！！！！！！！！！！！」

「柊ちゃん、大人気ね　あ、私は勿論喜んでるわよ」

「アハハ；　で、でも、お姉ちゃんが聞いたら怒っちゃいそう……」

あ、わ、私も嬉しいかも／＼

だって、もしこの儘お姉ちゃんと草薙君が一緒になったら、お兄ちゃんが出来るんだモン」

「私も賛成です　とても喜ばしい事だと思います。」

「俺も当然賛成だな！　親友としては恋路を応援するのは当たり前だしな。」

「せやな。ウチも同じや。まあ皆、基本的に二人を応援しとるっちゆう訳やな。」

其処なハブあなたとマンガースみさっちも、要はかがみんが幸せになればええんやろ？」

「「「……」」」

「「「ちゆう訳や。ま、皆の意見は一致して、二人の恋を応援するっ

て事で。

あ、一件落着く………ってか」

「だね。んじゃ、又ね　ノシ！」

こんな日常（前書き）

皆様、明けまして御目出度う御座います。

昨年は僅か一月足らずの間に、40,000アクセスを超え、3,000人強の方に読んで頂けました。

拙筆にも拘わらず幾度も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。心より感謝致して居ります。

今年は去年よりも遙かに更新速度は落ちてしまいましたが、

どうぞ今年も拙作と孝介達を宜しく御願ひ致します。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

こんな日常

【忘却の彼方】

「あれ？ ゆきちちゃん、眼鏡は？」

「それが……今朝割れてしましまして； 椅子の上に置いたのを忘れていて、ついすっかり／＼／

草薙さん。濟みませんが、今日のノートを後程貸して頂けますか？」

「……ああ、構わない。……これが、今日一日分だ。」

「……え？ あ、有難う御座います……。……ですが宜しいのですか？

これだけの量を、今頂いてしまったら草薙さんが……。」

「ああ、俺ならば構わない。既に内容は全て頭に入っているからな。」

「……では、有り難く借りさせて頂きます。」

「でも、草薙君のノートなら、下手な先生の授業よりよっぽど分か

り易くて鳥になるよね〜。」

「あ、アハハ；、そ、そうかも……………」

「せやなあ……………。なあ、孝介。ウチラにも貸してくれへん？」

「そうそう！、頼むぜ、孝介！！！」

「…………お前達…………俺から教わっておいて、更にノート迄要求する…………と？」

「…………て言うか、アンタ達じゃ誰のノートでも同じでしょ。」

「…………お…………orz…………」

【モテる人達】

「…………じ…………っ…………。」

「…………あ…………あの…………何か私の顔に…………？」

「いやぁ……ゲームだと眼鏡キャラの人が、素顔で登校すると急にモテたりするけど、」

「実際はそう言うの無いね……。」

「な、無いですね； 残念ながら……。」

「残念なんかいつ！ 実は何気に期待してたとか……？ ゆきっち……恐ろしい子……っ！！！」

「ふえ？！ い、いえ、そそ、そんな事は決してアリマセンっ！！！！／／／／／／」

「……そんなに強く否定する所が又、怪しい。……実は、マジで本音だったり？」

「ち、ちち、違いますッッッ！！！！／／／ もっ……あんまり意地悪しないで下さい……／／／」

「……ぐはっ。お、俺……もう萌え死ぬ。た、頼む涼子……か、介錯をおお……！！」

「……ええから黙って沈んどぎ。」

「……ぐふっ。」

「……ううう……／／／／／／／／」

「……そついや、今更だけどさ。……コウのファンクラブって……未だ、あんなに居るのね。」

「……ああ。正直もう勘弁して欲しいんだがな……ハア。」

「全くだ！ 御陰でアタシ達までクラスの何人かの女子からの視線が、結構厳しいんだかな！」

「もう、みさちゃん。草薙君に言ってもしょうがないでしょ？」

「ウゝゝツ……！！ でも、あやの……。」

「……まあ、気持ちは分かるんだけどね……。」

「……本当に勘弁して貰いたいな。こつ常に、敵意や憎悪の入り交じった視線を浴びるのは、

精神衛生上、全く以て宜しく無い事、此の上無いからな。」

“ あ、アハハハ……；……；……ハア……。”

「あ、そいやさあ。こつこつ時の御約束の陰湿な虐めとかって無い

の、かがみん？」

「え？ …… う〜ん …… 特にこれと言って無いわね。」

「 …… 最早ツツコミも無しかい。にしても、ホンマに珍しいなあ。

普通なら結構仰山有りそうなのに。 …… って、もしかして…

…………… なあ、孝介？」

(以下、かがみに聞こえない様に小声会話です。)

「 …… …… 何だ？」

「 …… アンタ、何かやったやろ？」

「 …… いいや、何もしてはいないぞ。

…………… 只、一言、かがみや日下部達が居ない時に言っただけだ。」

「 …… 因みに何て言ったん？」

「 …… …… 誰にも言わないな？」

「 当たばうやで。ウチを信じんかい！ …… ほんで、何て言ったん

? W k t k 「

「……………かがみに害を加える者は、男女は勿論教職員であろうとも、俺が絶対に許さない。」

……………そう言ったただけだ。極力声を抑えて、かがみ達に聞こえない様に……………な。」

「……………ホンマに何やねん、このバカツプル。もうやっとなれへんわ。」

「……………???? どうかしたのか、香椎？」

「……………何でもあらへん。まあ、ワケが分かったただけでも良しとしまか。」

「……………????」

【花嫁修業】

「……………モグモグ……………そう言えばさあ、前から気になってたんだけど。」

かがみとつかさのお弁当って、おかずのキッチンとしてる時と、とっても質素な時とで、

はっきり別れるよね。」

「うっ……………う、うちはつかさと私が交代でお弁当作ってるから……………
／／／

私は家事とか苦手だし……………どうしても簡単なのになっちゃうのっ
！／／／

わ、悪かったわね、質素で……………！！／／／／／

「はう……………何い　かがみんって料理とかすると鍋とか爆発させるタイプ？」

「……………そんな奴いねーよ！」

「ま、それは抜きにしても……………や、かがみん？　もう少しぐらいは料理出来ひんと、将来困るで？」

「う……………それは…分かってるけど……………」

「ちゃんんと花嫁修業はせなあかんで？　せやないと、その内孝介に呆れられてまうで？」

「んなっ／＼／　な、なな、何でそこにコウが出て来んのよっ！／＼／＼／」

べ、別に私とコウは何でも無いんだし……………その……………（ゴニョゴニョ……………）／＼／＼／＼／＼／」

「はいはい、いつものお決まりが出た所で。冗談抜きでホンマに或る程度は出来んな。」

ウチかて最低限度は出来んと、こっぴどく親に怒られてしまっさかいにな。」

「……………／＼／」

「あ、ほんなら、ひーちゃんに教えて貰えばええやん。丁度、一番身近に上手な人おるんやし。」

「……………ふえ？　え、わ、私がお姉ちゃんに教えるの?!」

「……………何や、嫌なんか？」

「うづんっ!! ち、違うよぉ! あの、そうじゃ無くってね……
その……………//」

い、いつも、私がお姉ちゃんに色々教えて貰ってばかりだから
……………何て言うか……………//

その……………物凄く恥ずかしいって言うか、とても不思議って言うか
……………//

「あ……………まあ、その気持ちも分からなくは無いけど……………」

でも、そないな事言い出しよったら、かがみん全く成長出来へん
で?

もしそうなら、孝介に捨てられてまつかもしれへんやんか。

それはひーちゃんかて困るやろ? 折角、頼もしいお兄さんが出
来そう言うんに……………なあ?」

「……………俺に振るな。だがまあ、それはさておき。

何にせよ、色々と上達するのは喜ばしい事だと俺も思うぞ、かが
み?」

「うう……………」「う、コウもやっぱり、料理とか上手な子の方が……
その……………好き?//」

「……………俺は特にそういう事では無いが……………。まあ、上手なのに越した事は無いと思うぞ。」

それに、普段勉強等を教えている代わりに、料理等を教えて貰えばいいんじゃないか？

御互いに足りない所を補い合うのも、家族であり兄妹だと俺は思っているしな。」

「……………うん、分かった。それじゃ、つかさ。」

悪いけど、今度から料理とか色々家事一般教えてくれる？」

「あ……………うん！ 勿論！！」

「むう……………でも、つかさに何かを教えて貰うのって……………何か、無性に負けた気がする。」

「こなちゃんのくせに……………!？」

「……………オチ付きかい。」

こんな日常（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回も連続投稿致しますので、どうぞ御楽しみに。

所で、かがみが私の嫁である事は微塵も揺らがない厳然たる事実なのですが、

最近こなたが可愛くて可愛くてしょうがない私があります。……一体、どうしましょう？

いえ、どうもしません。………いつその事、こなたでも書こうかしらん。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。又、一時間後の次話にて。

体育祭と黄色い水仙（前書き）

では、連続投稿二話目です。今話も拙作を御覧下さい。

「つまらない顔で悪かったなっ!!」

「……そうか？ 結構可愛いと思うが。」

「……………// // // // // // // // // //」

“……うわぁ……………”

「それに、俺はかがみの髪を撫でるのが好きだしな。

ショートも中々に悪くは無いが……………どちらかと言えば、俺は反対かな。」

「……………じゃ、じゃぁ……………やめる……………// // // // // // // // // // // //」

「そうか。それは良かった。」 ナデナデ……………サラサラ……………

「……………う……………// // // // // // // // // //」

“……ダメだこのバカップル、早く何とかしないと。”

「ま、それはさておきとして……………だ。おい、孝介!」

「ん？ 何だ、久坂。」 ナデナデ……

「……………／／／／／／／／／／」

「……………おほんっ！ 何の因果かクラスが違っちまった以上、俺とお前はライヴァルだっ！！」

「……………何のだ、何の。」 ナデナデ……

「……………／／／／／／／／／／」

「……………ふう。そんなもん、決まってるだろう！ 体育祭という名の戦場のだっ！！！！」

「……………何だ、そんな事か。」

生憎だが、俺は基本的に一つにしか競技には出ないぞ。」 ナデナデ……

「……………／／／／／／／／／／」

「…………………………（ワナワナ）ッ！！ 何でだよ！ お前あんなに速かったじゃ無いか！

それなら、何処に出ても活躍出来るんだから、何でもやるっぜ！！

というか、寧ろ全部に出ちまえよ！！！ その方が絶対に楽しい

ぜ!?!」

「……と言われてもな。俺は、余り体育祭では体力を使いたく無いんだ。

少々訳有りだな。まあ、許せ。」 ナデナデ……

「……// // // // //」

「……ハア。しょうがねえ奴だなあ（色んな意味で）。

それなら、お前が何の競技に出るかだけ教えるよ。俺もそれと同じ奴出るから。

それで、勝負だ！ お前だけにや、負けねえぞ!!」

「……良いだろう。望む所だ。俺は100m走に出る。

久し振りに本気で走ってやろうじゃないか。」 ナデナデ……

「……// // // // //」

「……へッ。後で吠え面搔くなよ!!」

「……会話中、草薙君ずつとかがみんの頭と髪を撫で回してたよね。」

「……せやな。しかもあれ、素でやっとなるな。無意識っちゅう奴やな。」

「……拓海もようツッコミ入れんの我慢しよったで。ホンマに偉いわ。」

「……いやあ、アレは寧ろツッコミを入れて欲しかった……様な、そつでも無い様な……」

「触らぬ髪に祟り無し言っやる。」

「……オチ付きですか。」

【体育祭】

「お姉ちゃん、ガンバレー！」

「拓海ー！ 餡パンを口移しして食べ尽くす様なバカカップルに何ぞ、
絶ッッッッッッ対に負けんなやーッッッ！…… もしも負けた
ら…… 承知せえへんで……。」

「ハ、ハハ、恐ッッッ？！ 特に最後の低い声の脅しが一番恐ッッ
ッッッ?!?!?!?!」

「ううう………!!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/!/ 負けたら許さないからねーッ!?!?!」

「む……もう吹っ切れよったで。……何や、ツマラン。拓海。適
当にやりいやあ。」

「うわっ!?! 今度は一転して怠たるさの極致きょくち?! その差は無いよ
りようちん……。」

「せやかてえ…… 揶揄てんげうう対象が吹っ切れよったらツマランやないか
あ。

一体、ウチが何の爲に拓海を応援しとると思っとなねん。」

「………これWはWひWどWいWWW」

「………あんな事言われているが? ……大丈

夫か、久坂?」

「OTL」

「……………まあ、ガンバレ。」

「何言つてんだよ、孝介。お前も早く位置に付けよ。」

「……………ハア。分かったよ。」

「位置に付いて……………よ……………い……………ドンッ……………!!」

「嘘っ!? 物凄く速〜い……………!!」

「うえええ?!?!? あ、あれ高校生って言うか、人間の速さじゃ無いよやっぱりい……………!!?」

「拓海……………! 負けんなやっ……………!! 勝つたらチュ……………したるでっ……………!!」

「おおっ……………! 更に速くなった……………?! っ……………てあ…………………………。」

「……………… 凄い……………… コウ………………てあ………………んなに速………………かったんだ。」

「……………… タイムは幾………………つ………………だった………………ので………………しょうか………………?」

「お、おいつ！ い、今の草薙のタイムは幾つや?!」

「あ、あの……………せ、せんせ……………」

「あん?! いいからみしてみいつ! ……………はあああ!?!
?!?!?!?!?!」

「……………ハアハア……………っフウ……………。どうしたんだよ、先生。今のタイムって幾つだったんだ?」

……………負けた身として物凄く気になる数字だぜ。」

「……………(あんぐり)……………」

「え? いいから見てみるって? ……どれどれ……………
はあっ?!?!?!」

お、お前……………これ、世界記録抜いてんじゃないかねえかつ?!

何だよ、コレツツ……………!!! 俺だつて、10秒30がベスト
タイムなんだぜ……………?!」

「……………そうか。まあ、一応師匠に鍛えられたからな。あ、だがこの
事は公表はしないでくれ。」

只でさえ、色々と今は五月蠅いんだからな。嗅ぎ付けたマスコミ

とかに来られたら適わん。」

「……そ、それは別に構わないけどよ……お前、本当に部活とかに入る気は無いのかよ？」

「無いな。それこそ無駄な問答だ。済まんが、俺はもう戻る。頼んだぞ、久坂。先生達も。」

「……………ホンマになんなんやねん、アイツ。」

「……………そんな事……………俺が一番聞きたいですよ。」

【体育祭2】

「あやのー！ ガンヴァレーツー！！」

「峰岸ー！ 転ぶんじゃないわよーっ。」

「うんっ ……………っ！ あっっ…………。」

「あ…………手、付いちゃったね。」

「一番線に近い所で計測しますからね…………。」

「ごめんね、みさちゃん、柊ちゃん。」

「しょうがないわよ、こっぴつのはどっついても…………ね。」

「そうそう。あやのの仇は柊が取ってくれるって！ な、柊？」

「まあね。出来るだけ頑張るわよ。」

「うん、応援してるからね、柊ちゃん。」

「ガンバレっお姉ちゃん！」

「柊いっ！ あやのの仇を討てっ！」

「柊ちゃん、頑張って！」

「かがみさん、ファイトですっ。」

「「おい、かがみん！ 砂にまで突っ込まないでね〜（むなや〜）」」

「誰が突っ込むかつ！！？」

「……なあ、孝介。お前は応援しないのか？」

「ん？ あんまり頑張り過ぎて怪我でもしたら事だからな。」

俺が応援したら、余計に張り切り過ぎるだろう？ 何事も程々に…
…と言っ事さ。」

「……………バカツプルめ。」

「ぬおおおりやああー！！！！ たあっ！」

“おおっ！！ ……あっ！？ ……あっちやあ〜……………”

「……………案の定、砂場にまでツッコミを入れるかがみんであったとき。」

「……………そして又、さっきのバカツプルを見せ付けられるっちゆう訳やな。」

“……………ハア〜…………orz”

【その後】

「……………で、まあ結局、最後のリレーもアンカーの高良が、全員追い抜いて勝っちゃってなあ。

いやあ、凄かったぞ。みんなからの声援がな。何故か俺達、他のクラスからも声援があってな。

一体、お前等は何処のクラスの生徒だってみんなに笑われちまったよ。」

孝介は、又『玲』と言う少女が弔われている墓所に来ていた。

そして、何時もの如く黄色い水仙を手に、その少女の墓石に向かっ

て、

今日の事……そして、今年あった事を色々一人語りしていた。

然う斯うしている内に、ふと或る事を思い出し、『彼女』に報告した。

「あ、そうそう……実はね。この前話したろう？ ほら、あの娘。

柊かがみって言う、今俺が大好きな……いや、愛している女の子。

あの娘とね。この前……夏休みに海に遊びに行った時、キスしちゃったんだよ。

それから後は、もう隙あらばずっとキスしっ放し。周りからも呆れられちゃってさあ。

いや、俺も分かっているんだけど……何て言うかさ、歯止めが利かなくってついつい……ね。

ほら、玲にだって分かるだろう？ しよっちゆうしててさ、親父達に良く怒られてたもんな。」

そう『報告』する彼の笑顔は慈愛に富んでいながらも、悲しみに満ち溢れていた。

何を思い出していたのか。

だがそれも終わると、手に持っていた黄色い水仙を墓石に生け、

一歩後退りながら、今日も最後の別れの言葉を告げた。

「あ、でも安心してくれよ。その先には、一度だって行って無いから。」

この先もする気は全く無いからさ。

……だから、安心して今日も、そしてこれからも此処で眠っててくれ。

……それじゃあね、玲。又、来年も来るよ。君と一緒に語りこ……ね。」

そして……………彼は又、あの檻ホコ褻アパートへの帰途に着くのであった。

彼自身が、彼の友と、今の彼が最も愛する少女と共に居る爲に。

皆と、共に居たいが爲だけに。…………後、残り僅かな期間を楽しむ爲だけに。

翌日。

その墓石の前で、あの水仙が無惨にも打ち棄てられ、原形を留めぬ程に踏み荒らされていた。

そして、その黄色い水仙の花片が、単調な色彩の墓石を彩っていた事は一つの皮肉であろう。

今日も、彼は生きる。

否。

彼だけが、生きて居た。

体育祭と黄色い水仙（後書き）

如何でしたでしょうか？

孝介が花に託した想い。

そして、その『想い』を踏み躪にじつた者とは一体？

そして、最後の言葉の意味は果たして？

それらは、何れ明かされる時迄、暫しの御預けと言う事で。

……まあ、水仙に関しましては、調べれば直ぐに花言葉等が出ますので、

特に秘密と言う訳では無いんですが……

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

今年も皆様にとって良き年で在ります様、心より願って居ります。

ああ、楽しみ（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、有難う御座います。

そして、御久し振りです。最近、もう一つの小説の方にはかり感^{かま}けてしまいました、

こっちがつつい^{おろそ}疎かになってしまいました。申し訳有りません。

それと、PV50・000超え&お気に入り登録50件超えしました。

心より、感謝致して居ります。

では、今話も拙作を御覧下さい。

ああ、楽しみ

【どうなんだ？】

（お！つかさ、今回は頑張ったんだな。かがみも大分平均点が上がって来てるな。

……それでも、やっぱりかがみの方が上か。でも、つかさの上がり具合から見ると……ふむ。）

「御疲れ様、二人共。うん、自分のベストを尽くして良く頑張ったな。」

「うん！」「えへへ」「」

「へえ〜。つかさすごいじゃん！大分、点数上がってるね〜。」

あ、でもかがみの方がやっぱり上なんだ。」

「あ、こらまつり；もっと空気を読みなさい……」

「はう〜……」「アハハ……」

「アハハ、ゴメンゴメン。あ、でもさあ、良くこれだけ上がったね。」

何か良い勉強法でも知ってるの？ あったらあたしにも教えてよ

！」

「え、えと……その、私達は、何時も草薙君に教えて貰ってるから；

」

「草薙？ って………ああ。二人が何時も話してる、あの堅物君ね。

確か、かがみと付き合ってるんだっけ？」

「……む。」

「んなっ！？／／／ べ、べ、別に付き合っでなんかいないわよっ！／／／／／」

「あ、そうなの？」

でも話聞いてる感じだと、どう考えても恋人同士にしかみえないんだけどなあ。

だって、この前からもうキスだっしてしてるんでしょ？」「ニヤニヤ……

「あ、ちょ、ちょっとおっ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「………ふむ。まつり、かがみ。もう少し、詳しく話して貰える

かな？」

「……は、はい（こ、怖ッッッ?!）。」「」

「……成る程、うん。かがみ、今度草薙君に、もう一度家に来て貰いなさい。」

「え？ あ、あの……因みに、一体どんな話を？」

「……男同士の話だからね……内緒だよ。いいね、かがみ。今度必ず、彼を呼ぶ様に。」

「……は、はい（……ゴメン、コウ）。」「」

その数日後。かがみに招かれた孝介と、父のただおが何を話したかは、彼等のみぞ知る。

しかし、その日にただおが娘に話した言葉が、かがみをホッと一安堵させた事は想像に難くない。

「かがみ。彼は近年稀に見る程に良い子だね。ああいう子も、未だ世の中にいたんだね。」

(……尤も、あの年で余りにも出来過ぎた良い子なのが、気になるが……) 「」

「あ、うんっ！ / / /」

「えへへ 良かったね、お姉ちゃん」

「うん……」

【桜藤祭その1】

「で、どうする？」

「……何がだ？ 脈絡も無く、唐突に聞かれても答え様が無いんだが。」

「そりゃ、勿論桜藤祭でやる俺とお前のクラスの合同内容だよ！」

「……………合同は既に決定事項なのか？」

ちゃんと先生やクラスメイト達に許可は取ったのか？」

「おう、勿論さ！」

ちゃんと、お前のクラス担任の桜庭先生からも、クラスメイト達からも認可済みD A Z E！」

「……………そうか（……………一体何時の間に？）。」

「まあ、孝介のポケポケはさておき…や。ホンマにどないする？
誰か何か案とかある？」

「あ、あの……………それでは、桐^{きりだんす}筆^ひ笥^すの歴史と作り方などは如何でしょうか？」

「……………え？」

「……………ふむ。それはいいかもな。意外と面白いんじゃないか？」

「……………え？」

「ですよね！ 私もとても興味深い内容だと思うんです！」

「ああ、そうだな。発表自体が終われば、後は自由に行動も出来るし。」

……中々に悪くないんじゃないか？」

“……却下で。”

「「何故()でしょうか()？」

“つまんないから()おもしろないからや()。”

「「……シヨボーン()AA略()」

「よしよし()ナデナデ()。……しかし、相変わらず、訳が解らない物に良く食い付くわね。」

「でも、そんなところもかがみんはいいでしょ？」

「……ま、まあ、それは……そのう………／／／／／　って、そ、そうじゃないでしょっ！／／／」

「……誤魔化したつもりでも、誤魔化し切れてないかがみん萌え」
「うっ、うっ、五月蠅いッ！！／／／／／／／／／」

「……ハア。アホポン共はさておきや。改めてホンマにどないする？
桐箆筍以外に何にしよか？」

「フリーマーケットとかはどうかな？」

「ああ、バザー形式っていうのもいいわね。」

「迷路なんてのはどうだ？ 子供に還ったみたいできっと面白いと思っぜ？」

「歯磨き体操なんてのは………あゝダメだよな。」

「……みさちゃん。まるで草薙君みたいな発想はちよつとどうかと……」

「うえ！？ アタシ、あいつレヴェルかよ……orz」

「……ま、日下部だしな。此処は無難に喫茶店とかお化け屋敷とかでいいんじゃない？」

「後は占いの館なんてのもいいと思うんだけど……。」

「どうせなら、コスプレ喫茶にしちゃえば……ぐっふっふ。」

「絶対に却下。私は断固阻止するからね！」

「えゝ……いいじゃん、こすぶれゝ。かがみもそっちの道に目覚め

「ちやおつよう〜。」

「絶ツツツ対にい・や!! そりゃアンタはバイトで慣れてるからいいんだろっけど、

私達一般人には、果てしなく縁遠いものだと言わせて貰うからね!」

「え〜〜〜……ぶ〜ぶ〜。」

「……いや、それで行こう。」

「へ? それって……も、もしかして……;……;」

「せやな。コスプレ喫茶、おもしろそうやないか! なあ、孝介。」

「……何だ?」

「アンタの嫁の可愛い姿、見とっない?」

「……別に嫁という訳では無いんだが。」

「……だがまあ、綺麗な姿が見られるのであれば、否定する要素は皆無だな。」

「んなっ!?!?!?!?!」

「いよつし！ 旦那は既に買収済みや！ 後はかがみだけやで？」

「な、なんでよ！？ つかさとか峰岸とか、未だ聞いてないでしょ？」

「そんなん、ラスボスのががみんさえ陥落したら、後はどうにでもなるやろ。」

「一番の問題はアンタやし。ほれ孝介！ アンタからも言い聞かせてやりい？」

「……それで俺に先に聞いたのか。……かがみ。」

「……な、何よ？」

「……正直に言おう。俺はかがみの可愛い姿は……是非共見てみたい（ボソッ）。」

「！？！？／／／／／／／／／／／／／／／／……わ、分かったわよ／／／ 着ればいいんでしょっ！！／／／／／／／／／／／／」

「いよつしやあー！！！！ 孝介……G」

「……って、あかんわ。こいつらもうピンクモード入りよったわ。」

「……かがみ。」

「…………コウ／＼」

「…………まあええわ。ほんなら今年はウチラのクラスと孝介のクラスとの合同コスプレ喫茶や！」

「ちよっくら先生に申請して来るわー。」

「んじゃ、俺も付き合っぜ。…………あの空気には流石に耐えられん。」

「…………せやな。ほなのんびりで行こか、拓海。」

「ああ。」

帰って来た後

「…………所で、りょうちん。コスプレ内容は決まってるの？」

「モチのロン。あたぼうやで、こなこな。全員分既に決めてあるで。」

「

「ほうほう。ちょっとその内容……聞かせて貰ってもいいかな？
いいかな？」

「一回言うなや。……まあ、せやね。こなたんに協力して貰えれば、
衣装も集め易いやろうし。」

「そうそうw お互い持ちつ持たれつだよ、りょうちん。それでそ
れで？」

かがみんはどんなコスすんの？

「

「フッフッフ……実はな………では………やねん。しかも
………って寸法や。」

「おおおおー！！　そ、それは……ジュル……堪りませんなあ……
……ジュルリ。」

「せやろ、せやろ？　さあ、これから忙しくなるで！

こなたんも聞いたからにはバッチリ協力して貰うで？」

「もっちらんだよ！　あゝ楽しみだなあ………かがみんのコス」

その頃、得も言われぬ悪寒に思わず身震いしていたかがみんなであつたとさ。

「……あ、因みに、こなたんもウチも、拓海も孝介も全員させるからな。」

「え？ ま、マジで？」

「大マジや。」

「……うう……学校でもバイトでもコスかあ……。」

「いっそ、プロコスプレイヤーとかにでも転職しようかなあ……。
ダメ神殿を探さないと。」

「それ寧ろクラスチェンジちゃう？ クリスタルやないと無理なん

やない？」

「……どっちにしても、探さないと無理だよネ……」

「せやね。」

ああ、楽しみ（後書き）

如何でしたでしょうか？

桜藤祭は、一応後1〜2話程は続く予定です。

かがみ達のコスプレ……果たしてどんなものになるのか、どうぞ御楽しみに。

あ、もしこんなコスが良いという御要望があれば、是非共御一報下さい。

私の考えている物で、御満足なされるとはちょっと私自身思えないので；

では。今話も御覧頂きまして、有難う御座いました。

監査する者（インスペクター）？

いいえ、お客さん（ゲスト）です（前書き）
皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、有難う御座います。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

監査する者（インスペクター）？ いいえ、お客さん（ゲスト）です

【ゲスト訪問1】

「やほー、こなた」

「あ、姉さん。ばんわー。」

「んう？ おじさんはお仕事？」

「うん。何か、後もう少しで終わりそうなんだって。」

「あ、それは丁度良かった 私、こなたの部屋で漫画読んでるか
5、5」

おじさんの仕事が終わったら教えてね」

「……へ？ あ、姉さん……って、行っちゃったよ。相変わらず自由だなあ……」

（二時間後）

「ふう〜〜……………ん〜〜〜ツツツ……………ツツツはあ〜…
…」

「あ、お父さんお疲れ様〜。終わったの？」

「ああ、担当さんにも連絡付けて、明日取りに来てくれる事になっ
てるから。」

……………ん？ 誰か来てるのかい？」

「ああ、うん。ゆい姉さんが来てるんだよ。何かお父さんに話があ
るんだって。」

今呼んで来るね〜。」

「あ、うん。……………ズズツ……………っあ〜……………茶が旨い。」

「ゆい姉さ〜ん。お父さん仕事終わったよ〜。」

「ん〜……………」

「……………姉さん？ お父さんに用事あるんじゃない無かったの？」

「ん〜……………」

「……………姉さん……………すっかり漫画の世界に入っちゃってるよ……………
」

（三十分後）

「あはは………； いやあ、ごめんなさい……… ついつい続きが気になっちゃって…」

「いやいや、良く分かるよ。読み出したら止まらなくなるもんね。

あ、それより、何か用があつたんじゃなかつたっけ？」

「あ、そうそう！ あのね、今度こなたの学校で文化祭あるでしょ？」

「あ、うん。今度の土日。それがどつたの？」

（……今度の土日?! 何でそれをもっと早く言ってくれないんだ、こなた!?!）

「それでね。ウチのゆたかが、その文化祭で学校見物したいんだけど。

それで、是非共こなたにゆたかの事、お願いってしに来たの！」

「うん、勿論ゆーちゃんなら大歓迎だよ！ あ、でも大丈夫なの？」

ゆーちゃん、確か身体弱いんでしょ？」

「うん……そうなんだよねえ。私もそれが心配で……ゆたかは頑張るって張り切ってるんだけど。」

だから出来れば、そっちの方もこなたにお願いしたくて……。

私が行ければ、私が面倒見るつもりだったんだけど……。」

「うん、私は大丈夫だよ。それでゆーちゃん、当日来るの？ それともウチに泊まりで？」

「ん……多分当日だと思うよ。一応後で聞いて見るけど。」

「うん、そうだね。確か初日は、私達生徒だけしかダメだった筈だし。」

ん……なら、土曜日にウチに泊まりに来れば私と一緒にいけるから、それでどうかな？」

「そうだね、ゆたかにもそう言ってみるよ。……所でおじさん、さつきから何やってんだろ？」

「……あ……まあ、気にしない方がいいよ。」

（下手したら、姉さんの本職に関係しちゃうかもだし；

一応、私の親なんだから捕まっただけは無いし。てか、姉さ

んに物凄く悪いし……」

【ゲスト訪問2】

某国某所。とある（いい歳した）男女が六人。一塊ひとかたまりになつて集まっていた。

「それで大祐さん？ 今日、僕達を集めた理由は何でしょう？」

「ん？ 理由が無くつちやあ、俺達が集まつちやあいけねえか？」

「いいえ。ですが、明らかに今日のは何か目的あつての事でしょう？」

貴方達の顔が全てを物語っていますよ？」

「……やっぱ、竜にやあ叶わねえなあ。ったく、俺の役者としてのプライドがズタボロだぜ。」

「とまあ、茶番はここまでにするとして、だ。「茶番?!」「五月蠅いぞ、ユウ。」

「……シクシク」……まあ、この阿呆は放って置くとして。」

「うんうん。それでどつたの、せつちゃん。何かまたみーちゃんから聞いたの?」

「ああ、そうなんだしずへ。」

実はな……日本時間での今度の土日に、孝の学校で文化祭がある。」

「……そうか。俺達の誰かに行けと言っただな?」

「そう言う事だ、大河。たいが相変わらず察しが良くて助かる。」

……なあ、美夜。みややっぱりウチの旦那と交換しないか?」

「あらあら。そんな事言つてはダメよ、雪。大祐がいじげちゃうでしょ?」

「……むう……なら仕方ない。」

「むむむ。みゃーちゃんは渡さないからね? みゃーちゃんは私のお嫁さんなんだから!」

「まあまあ。どうしましょう、大河。」

「……美夜は俺のもんだ。誰がお前達になど渡すか。」むぎゅっ…
…！

「あらあらまあまあ。本当に甘えん坊さんなんだから」「ナデナデ
……

「……………む。」

「うゝ……………私のみゃーちゃんが奪^とられたあゝ。」

「余り人聞きの悪い事は言つものではありませんよ、雫さん。」

「うううゝ……………りゅーちゃんのイケズう！」

「……………さて、そろそろ話が脱線して来た様なのでな。話を本題に戻
すぞ。」

……………ほら、ユウ！ お前も何時迄も落ち込んでるんじゃない
！ 好い加減話に加われ！」

「……………うゝ（いいいいいよ、後で雪に一杯慰めて貰うから）。」

「ん？ 今なんか言ったか？」

「いいや。そんじゃ話を続けようか。」

「……？ ああ、そうだな。で、その本題なんだが。」

「……お前達は都合が悪く、行けないと言っただろう？」

「……そう言う事だ、残念ながらな。と言っ訳で、だ。お前達、誰か当日行けないか？」

「むう〜……因みにせっちゃん。土日って言ってたけど、どっち？」

「日曜日だ。土曜日は学校関係者のみにしか開かれていないらしいのでな。」

「あらまあ、残念。私達は土曜日しか空けられないのよ。前々からの約束なの。」

「……ああ、そうだな。済まんが、俺達はまた今度だ。」

「そうか。まあ、無理に頼むのも悪いしな。……では、お前達はどうなんだ？ 雫、竜之介。」

「ん〜……私は多分オツケーだと思うけど、りゅーちゃんはどうか？」

「そうですね……私も、恐らく大丈夫だと思いますよ。丁度有給も余っていましたし。」

「では済まないが、二人共行って来てくれるか？」

「うん、勿論!」「ええ、構いませんよ。」

「そうか、これで一安心だ。では二人共、いろいと頼むぞ?」

「ふっふっふ……この雫様にお任せなさいって!

孝ちゃんのおんなトコやこんなトコ、色々と撮って来ちゃうからね!

にゅっふっふっふっふ……待つてなよ、孝ちゃん!」

「……雫さん。まずは涎よだれを拭いて下さい。」

「貴女も女性なのですから……みっともない上に、はしたないですよ?」

「……まあ、彼に会うのは僕達も久し振りですし、楽しい気持ちには十二分に分かりますが。」

「因みに、孝のクラスは隣のクラスとで、合同コスプレ喫茶をするらしい。」

「可愛い娘も可成り大量にいるらしいぞ?」

「そりゃ、益々楽しみだねえ。件の彼女も確かめたいし……ん

益々やる気が出て来た！

あ……早く日曜日来ないかなあ　待ち遠しいなあ　ね、
りゅーちゃん」

「ええ。早く孝介さんに会いたいものです。彼と会うのは……
そうですね。」

あの日以来ですから、かれこれ四年振り以上と言う事になりました
ようか。」

「……そっか。もう、そんなに経つんだね。玲ちゃんが亡くなって
から。」

「……ええ。勿論そちらの方も確認しておきます。安心して下さい、
雪さん、大祐さん。」

「序でと言っては失礼でしょうけど、御墓参りもして行きましょう。」

「ああ、済まない。私達の方も一緒に頼む。」
「ああ、頼んだぜ、
竜。」

「俺の分もな。」
「私の分も宜しくお願いしますね。」

「ええ、勿論。ね？　栗さん。」

「うん、当然だよ！　せつちゃん、ゆーちゃん、がーちゃん、みゃーちゃん。」

はあく、楽しみだなあ　早く日曜日が来ないかなあ　」

「……………！！？」　ぶるっ……………！！」

「ん？　どうしたの、コウ？　……………段々冷えて来たモンね。」

「……………いや、そういう訳では無いんだが……………」

「????？」

「……………何か、途轍も無く嫌な予感がする。」

「……………大丈夫？　本当に顔色悪いわよ？」

「……………いや、大丈夫だ、問題無い。」

「……………どうみても、問題大有りなんだけど……………」

監査する者（インスペクター）？ いいえ、お客さん（ゲスト）です（後書き）
如何でしたでしょうか？

またもや新キャラが四人登場致しました。

彼等が孝介とどんな関わりがあるかは、次話以降の御楽しみと言っ
事で一つ。

そして、みんなの妹ことゆうちゃんが、一時的にゲスト出演します。

皆様、どうぞ御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

お祭りは準備期間が最も楽しいと思う（前書き）

皆様、拙作を何時も御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

到頭、ユニーク数も5,000人を超えました。心より感謝致して居ります。

では、今話も拙筆を御楽しみ下さい。

お祭りは準備期間が最も楽しいと思う

【桜藤祭その2】

今日は、桜藤祭開催日の数日前。各々のコスプレ衣装の最終打ち合わせの日である。

既に男子生徒達は着替え終え、今は女子生徒の衣装待ちをしており、雑談中であつた。

「で、どうだった？」

「……だから、何がだ。唐突に聞かれても解らんと言っただろう？」

「んなモン、涼子達のコスプレ衣装の事に決まってんじゃねえか。お前、まだ見てねえのか？」

「……見ていない。そもそも、今日は殆どお前と一緒に居るんだ、それぐらい解るだろう？」

気が逸るはるのは解るがな。少しは落ち着け。」

「そうは言ってもよう！……ってか、お前も気持ちは解るんだ。へえ〜……（ニヤニヤ）。」

「…ゴホンッ！ 元々、かがみの後押しをしたのは俺だしな。気に

ならないと言えは嘘になる。」

「……………相ツツツ変わらず素直じゃない奴だなあ、おい。まあいいや。流石にそろそろ、涼子達の支度も終わる頃だろ。……………お、やっと出て来た出て来た」

「みんな、お待たせや！　って、コラ男子共！　目え血走らせるんやない！」

みんな怖がって、出て来られへんやないか！　ドアホウ！！！」

“サーセン！orz”

「……………何で、こういう時に限って男共って団結力凄まじいんやろ？　……………まあええわ。」

ほな、皆大丈夫みたいやし、出ておいでえな。」

“……………は、はあ〜い／＼／＼”

「で、どうや野郎共！　すんごいやろ！？」

「……………つふう。何とか免れたか。……………ありや、こなたん達は間に合わなかったみたいやな。」

“……………ツツツ……………（キーン……………）！？！？”

「す、す、スゲエスゲエスゲエ！ みんな、超可愛いぜ！」

「うはっ！ やっべえ……………お、俺鼻血が止まらなく……………。」

「い、いかん！ メディック！ メディック！！！」

「あ、あの……………私、一応看護師さんだから、何かした方がいいのかな？」

「いやいや。あそこに近付いたら却ってアウトやろ。」

益々被害が大きゅうなるだけやから、止めとき。」

「……………は、はあ……………。」

「……………グフツ。あ、あんな所に、俺の……………俺達の女神が……………ナースコスで迎えてくれてるぜ。」

「ば、バカヤロウ！ 帰って来い！ あれは紛れもない現実なんだ！

俺達、夢を誓い合ったじゃないか！ もう忘れたのか！」

「……はっはっは……。この天国の前では……。最早、それも形骸化された……。」

「相棒！？ AIBOOOOOOO!!!..!!」

「……………久坂。あそこの寸劇早く止めて来てくれないか？

どうにも收拾が付かなくて、非常に困る。」

「しゃくねえなあ……。おら、オマエラ！ いい加減落ち着けつて。

今からそんなんじゃ、当日誰も使いモンになんなくなっちまうぞ
「？」

“マジ、サーセンったツツツ！！！！OTL”

「……………せやからこいつら……………いや、もうええわ。ほな、一人一人解説するで。」

先ずウチが、輝日南高校きびなの制服やな。後、こなたんも同じやな。」

「そうそう。『キミキス』の衣装なんだよ。いやあ、あの子達、物凄く可愛くて、

攻略する時、毎回興奮してたよ。」

「……相変わらず、ガチだな……こなたは。」

「……まあ、人の趣味至高はそれぞれだしな。いいんじゃないか？」

「まあな。……うん、やっぱり似合ってるぜ、涼子。流石は俺の嫁だな、何着ても綺麗だ。」

「う……そ、そういう事を、人の前で言いなや……は、恥ずかしいやないか、アホウ……」

「……最近、りょうちんもかがみんと草薙君達に宛てられて、

バカップル化に抵抗が無くなって来た気がする、今日この頃の私であつた。」

「「う……／＼／＼／＼ すいませんorz」」

「……何故に俺とかがみが引き合いに出される？」

「そ、そうよ！ べ、別に私とコウは、何でも……！」

「あ、はいはい。お決まりの台詞はさておきとして。かがみんのは文月学園の制服だよな？」

『バカとテストと召喚獣』のさ。」

「そんな名前だったっけ？ アタシも柊とおんなじトコの制服らしいけどな！」

「うう……まあ、この制服ぐらいだったら別に構わないけど……何で、私は男子の制服なのよ！」

「？ そりゃ、みさつちが女子服やから、それに合わせたんやでほら、おそろやおそろ」

「むむむ……！ みさきちとかがみんなパールツクとな？ 何か納得いかない」

「まあまあ、そう腐りなやって、こなたん。ウチとおそろは嫌か？」

「むう……そういう訳じゃ無いけどさ。」

「ど、どうかな……コウ。やっぱ、変だよな？ 男子の制服なんて」

「……いや、思った以上に似合ってると思うが。うん、悪くない。」

かがみ、意外と男装もイケルんじゃないか？ 今度、知り合いに何着か取り寄せて貰おうか？」

「いいいいいい！ い、いらないわよっ！／＼／＼ もう……コウのバカっ。」

「???? だが、この制服の儘では、確かにデートには見えないだろうしな。」

まあ、偶のお祭り騒ぎぐらいでいいか。」

「……………ば、ばっ／＼／＼／＼／＼／＼／」

「……………あのガチバカップル達は放つとくとしてや。やっぱり、凄いはひーちゃんやる。」

まさか、セーラー月の衣装を着て来るとは……………つかさ、恐ろしい子ッ……………!」

「うゝ……………／＼／＼／＼ だ、だって!

は、恥ずかしいけど、やっぱり一度は着てみたかったんだモン!
!／＼／＼／＼!」

「くうゝ……………その照れっぷりがまた何とも……………! ……つふうゝ。」

「賢者タイム乙やな、こなたん。それに、ゆっきーの衣装も負けず劣らずやな。」

「そ、そうでしょうか?／＼／ た、確かにちよっと着難い衣装ではありましたが……………」

「確か、リリイ・C・シャーベットだっけ？　ギャラクシーエンジンるんのだ。」

「いやあ、マニアックなところ突くねえ……。流石はりょうちゃん、恐ろしい子ッ……！」

「えっへん。どうや、凄いやろ！　って、そこな男子共！」

「目え血走らせるなやって言ったばかりやろが……！」

“ギンキラギンにさりげなく。”

「ひっひっ……！」

「どこがさり気ないねん！　思いつ切しモロに、ガン見しとるやないか、ドアホウ……！」

“ついやってしまった。でも反省も後悔もしていない。”

「気持ちは分かるけど、反省ぐらいはしいや……！」

“サーセンorzorzorzorz”

「……ホンツマに、このけっしたいなアホウ共は……。ほんで、さっきもチラツと見えたんが……。」

「あ、何か私だけ普通のコスプレみたいなんだけど……いいのかな？？」

「いいんだってば！　だって、それはみくるが着てたコスプレ用の衣装だからね　d！」

「……は、はあ。」

「ああ、やっぱせやったか。なんや、偉い普通のコスやなあ、思うとつたら、そんな絡繰りが。」

「……こなたん、恐ろしい子ッ……！」

「ふっふっふ……まかせたまへー！」

「……いやあ、眼福眼福

……んで、出来ればそろそろ俺達のコスにも触れて欲しいんだけど……」

「ああ、せやったつけ。すっかり忘れとったわ。」

「……………涼子……」

「ゴメンゴメン、冗談やって。んで、拓海が……………あゝ。こりゃまた、奇抜な衣装やな？」

「奇抜言つな！ 一応キーキャラな上、二枚目なんだぞ！？」

「あゝ……………確かゼロス・ワイルダーだっけ？ テイルズ・オブ・シンフォニアの。」

「そうそう。あいつの生き様、格好いいよなあ。」

「えゝ……………ウチ、あーいうキザつたらしい奴、大嫌いやで？」

「……………分かってねえなあ、涼子。あいつはな……………」

「あゝはいはい。ゼロス談義は、また後でね。取り敢えず、最後になつたけど……………」

「せやつたな。てか、孝介だけホンマに普通やな？」

「そだね。特にどっかのつて訳じゃ無さそうだし。極普通の執事服だよな？」

「……………そもそも執事服が普通という時点で、何か可笑しい気がするの俺だけなんだろうか？」

“細かい事は気にしない！”

「……………そうか。」

「大丈夫よ、コウ。いつもよりも、もっと格好良くなってるから……ね？」

「……………そうか。かがみがそう言うってくれるのならば、俺はまあ、構わないが。」

「うん」

「……………所でよう。確か、一日目だけじゃ無くて二日目もコスプレするんだろ？」

そっちの方はどうなってんだ？ 着てみなくてもいいのか？ それともまだ出来てないとか？」

「何をアホウな事言いよるん、拓海。衣装ならもうとっくに出来上がってるで。」

それを見せへんのは、当日のビックリサプライズにする為や！」

「……………それは、俺達にサプライズしても意味ないと思うのだが？」

「……………相変わらず、なんも分かってへんなあ、孝介。こっぴうんは、

全員で楽しむモンなんやで？」

「……………そうか。まあ、好きにすればいいぞ。」

確か、俺は二日間ともこの執事服なのだろう？」

「せや。それで、わんさか女子の集客率を上げるんや。ええな、孝介？」

「……………良くは無いが、了解した。何とか頑張ってみよう。」

「……………コウが頑張ったら、絶対ダメだと思う（ボソッ）。」

「？ 今なんか言ったか？ かがみ。」

「……………ううん、何でもない。」

「……………」

お祭りは準備期間が最も楽しいと思う（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、在学生のみでやる一日目は、一般人相手には余り知名度の高くないものに。

翌日の一般開放日は、もう少し全体的に一般人にも知られてるものにしようかと考えています。

コスプレの御提案等は、未だ募集して居りますので、随時御意見・御要望を御待ち致して居ります。

あ、因みに、孝介の執事服は替えられません。一応、ちょっとしたフラグではありますので。

因みに因みに。二年次のコスプレネタは全て中の人ネタに終始して
います。

どういう関係でこの衣装になったのか……一部、判り難いもの混じ
っている筈ですので、

ちょっとしたクイズ的なもの扱いで、楽しんで頂ければ幸いです。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

桜藤祭〜前編〜（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

この話で、もう50話目に入りました。どうぞ、今後共孝介達を宜しく御願ひ致します。

さて。今話から、ようやくと二年次桜藤祭に入りました。

一年次は、未だ孝介がクラスに馴染んでいなかった為、

敢えてさっさとスルーしましたが、今回からはバツチリやります。

オリキャラも出て来、物語も順調に進んで来ますので、其方も御楽しみに。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

桜藤祭〜前編〜

side: 孝介

時間は飛び、今日は桜藤祭二日目。一般開放日だ。今、俺達はてんやわんやの騒ぎである。

何故かと言えば……次の会話を聞いて貰えば、少しは理解して貰えると思う。

「いやあ、にしても昨日はホンマにドツカと儲かったなあ」

「全くだよ。少々多目に300人分の材料集めてたのに、あつと言う間に無くなって、

追加の500人分すら完売しちゃったんだからね」

「せやせや 御陰様で、もう昨日の時点で黒字確定やで これもみんな様々や」

「でも、一番の要素は間違い無く、草薙君でしょ。」

「まあ、間違い無いやろ。普段の調子でええ言ったら、あら、一転。

クールで冷静且つ、堅実な完璧執事やったしな。」

「全くだよ……嬉しい誤算って奴だね」

「ホンマやで。……………ま、その所為で今、ウチラは天手古舞てんでこまいな訳やけど。」

あ~~~~…もうっ!! この大量の材料、何処にどないしておけばええんや!」

「そつだよう! てか、更に増えるとか………どんだけorz」

………と言つ訳だ。皆が思った以上の大盛況を博した為、

今日、急遽大量の材料を追加した訳なのだが。御覧の有り様になっていると言つ訳だ。

「だから、もっと計画性を持ってと普段から言っているのに。」

「そないな事、今言つたかで、遅いわっ!! あ~~~~マジでどないしょ……………orz」

何とか、他の空き教室を使って、材料をド力置きして、随時採りに来る事で一段落したが。

準備も何とか、開始時間前に終え、皆が一息付けるだけの時間が出た頃。

今更ながらに、御互いの衣装コスプレについて各々話し始めていた。

「はあ〜〜〜……………な、何とかなったみたいやな。」

「そつみたいですね……………フウ……………」

「もつ、やる前から疲れたよう……………」

「……………もつ、始まる前から泣き言言わないの、つかぞ。」

「はあ〜〜い……………。あ、そう言えば、こなちゃん。今日、確かゆたかちゃん、来るんだよね？」

「うん、そだよ。あ、みんなには悪いけど、ちょっとゆーちゃん迎えに行つて来るね。」

少し早めに来るって言つてたし。」

「お〜、行つてき〜。ついでに、その格好の儘でウチラの宣伝も宜しゅうな〜。」

「モツチロン！ 私にまかせたまへ。貴方達！ 団員たるもの、
しっかりしなさいよ！」

じゃあ、私は行って来るからね！ ……フン！」

「……はあく、相変わらず成り切るの早いな。しかも、めっちゃ巧
いしなあ。」

あれ、もう天性の才能やる。」

「うん、急に人が変わったみたいでビックリしちゃった。」

「……まあね。でも、最初はあんなに渋ってたのにね。」

いざ着るとああなれるっていうのは、確かに凄い特技なのかもね。」

「そうなのだ。今日、朝早く着た時に、各々初めて二日目に着る衣装
を見たのだが……。」

何人が嫌がっていた人達の中でも、泉は特に渋っていた。

何でもバイト先で着ている服と同じなのだそうだ。

……確か……ハルヒ？ とか言ったか。そういう人物名らしい。
だが、結局の所、かがみと香椎と、珍しい事に日下部の説得もあり、
着る事となった。

「……にしても、珍しかったわね。まさか日下部があなたを説得するなんて。」

「う……。だ、だって、アタシだって、こんな恥ずかしいカッコしてるのに、」

あいつだけ着なくていいなんて、イヤだもん！／＼／

「恥ずかしい……って、只のテニスコスやる？ まあ、テニプリの……やけど。」

「だ、だって……こんなヒラヒラで短いの、アタシには似合わないってヴァ！／＼／」

「そんな事無いわよ、みさちゃん。」

さっきから、男の子達が何度もみさちゃん見て、顔赤らめているもの。」

「んなっ！？／＼／み、みんなやねーよ、オマエラッ！ ウガア
——ッ！！！！／＼／／／／／／／／／」

……未だ開始前だと言うのに、相変わらず元気な連中だ。そういう
峰岸は……何と言ったか？

……いかな。一応、一通り説明は受けた筈だったのだが……
どうにも、アニメは解らん。

……仕方ない。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥だ。再度聞いてみ
るか。

「……香椎。」

「ん？ 何や、孝介。」

「済まんが、もう一度お前達の衣装について教えて貰えるか？ 今
一覚え切れて無いのでな。」

「そりゃ構へんけど……別に孝介が知らんでもええんちゃう？」

「いや、そもいかないさ。もし、服装について客に聞かれたら困
るだろう？」

どんな事であろうとも、念には念を入れておかないとな。と言う

訳でだ、頼む。」

「……相変わらず、よう考えると言っか、考え過ぎと言っか……まあ、ええわ。

ほな、もっかい言っで？ 今度はきつちりメモって覚えるんやで？」

「ああ。」

と言っ訳で、こっから先はコスプレ説明です。

「先ず、ウチが吉祥学園中等部の制服や。」

「ケロロ軍曹のだよね？ あれ蛙達も可愛いけど、女の子達も可愛いよね???」

「せやな。まあ、ウチのは桃華の方のやけど。もしかしてアレか？

ウチが二重人格だとも言いたいんやるか？」

「いやいやいやいや。幾らなんでも考えすぎだろ……」

「まあええわ。ホンで拓海がタケちゃんやな。」

「タケちゃんって……； まあ、正確には桃城武のテニスコスだな。

てか、この青春学園の奴……普通に売ってたよな。……やっぱすげえ世界だぜ。」

「……いや、そんならいメジャーな奴なら、普通やろ。」

「……すげえ世界だ！」

「で、こなたんが、ハルヒやな。この前バイト先に行ったんやけど、ものっそい巧かったで。」

完璧に演じてたし、踊りもパーペキやったしな。」

「あ……私達も一回行ったわね。……もう二度と行きたくないけど。」

「そうかな？ 私は面白かったよ。」

「はい、とても楽しかったです。」

「……本当に似た者同士ね、アンタ達。」

「んで、かがみんがスクランの天満ちゃんやな。

ツインテールがちよっと長いぐらいで、後は問題無しや。

やっぱりそっちに、キャラ転向した方がええんちゃう？」

「い・や・よ！！　もう……………ね、ねえ、コウ？　これ……………どうかな？」

「……………うん、似合うと思う。やっぱり、かがみは何着ても映えるな。」

「う……………ば、バカツ……………で、でも……………アリガト）
ボソツ）……………」

「ああ。」

「バカップルガチで自重しい。つかさのは、レナたんの私服やな。」

「うん　この白い服、凄く着心地いいし、何より可愛いんだあ」

「ええ、本当に良く似合ってますよ、つかささん」

「えへへ　そいつゆきちゃんもすごく綺麗だよ」

「あ、有難う御座います……………」

「せやねえ……。確か、シエリルが6話辺りで着てた、あの青いドレスやる？」

「……ホンマに美人は何着ても特やな。」

「い、いえ、そ、そんな、私なんて……」

「……相変わらず恥じらい方も可愛えなあ。ズルイと言わざるをえんやないか。」

「……………」

「……眼福眼福。んで、みさつちが、拓海と同じテニプリの女子テニスコスやな。」

「何や、意外とピンクも似合うやないか。普段も着りやええんに。」

「き、着れるか、こんなヒラヒラした奴なんか！」

「もう……今だってものすっごく、恥ずかしいんだからなっ！
！」

「……むう。意外な所に、萌えキャラがいたとは……みさつち、恐ろしい子……ッ……！」

「ううう〜……／＼／＼　ってコラ、男共！　こっちみんなあ〜！
！！／／／／／／／／／／／／」

「……萌えと言わざるをえない。んで、最後があ〜ちゃんやな。

……むう、可愛い。麻帆良学園の制服……意外とええなあ。」

「あはは……／＼／＼　あ、あんまりジロジロ見ないでくれると助かるのだけれど……；／／／／」

「無理やる。自分が今、どれだけ注目集めてるか……もう少し気にした方がええんちゃう？」

「……そ、そんな事無いつてば／＼／＼／／／／」

以上、説明終わり

「……と言ひ事や。どや、理解したか？」

「……ああ、全く解らなかつた。」

「……オイ、ワレ」

「……慌てるな。だから、今メモしておいた。これでいいだろう？」

「あん？ ……まあ、これならええやろ。一応、大事なトコは書いてあるしな。」

『かがみはやっぱり可愛い』とか余計な一言が添えられてるけどな。」

「……余計な所は読むな、香椎。」

「……………// // // // // // // // // //」

「はいはい、バカッブルゴチソウサマ。……そろそろこなたんも戻って来る頃やと思うんやけど。」

「ごめん、電車がモロ混みで！」

「うわっ、懐いネタやな！？ てか、言ってる側から来よったがな。」

「ん？ 何か話してたの？」

「せや。そろそろこなたんが戻って来る頃やなあ、言うてたら、ホンマに来よったでって言う話や。お、その子がゆたゆた？」

「あ、うん、そうだよ。私の従妹のゆーちゃん。

「……にしても、相変わらず、物凄いネーミングセンスだよね……りょうちんって。」

「ぶつちゃけ、こなたんやひーちゃんもどっこいやで？」

「おんなじかよっ!?!?」

「は、初めまして……小早川ゆたか……です。きよ、今日は一日、宜しく願いますっ!」

“可愛いいいい〜〜?~?~?~? よろしく〜!~!~!”

「ひゃいっ!? お、おねがいしましゅっ!? ……舌^{ひはは}噛^んじ^じや^ひっ^たた^た……」

“……………グフッ。”

「……………やっぱり、早速何人が堕ちたか。」

私達のクラスって一体いつから、こんなにマニアックなクラスになっただる？……」

「始めからちやう？ にしても、ホンマにかわええなあ。ちよつとスリスリしてもええ？」

「へ？ え、え？ あ、あのう……わひゃっ！ ……………はう……
……」

「ん…… こなたん、この子マジでお持ち帰りしてもええ？」

「ぬあつ！？ だ、ダメだよ！ ゆーちゃんは私の妹みたいなものなんだから！

そ、そんなに目をキラキラさせてもダメ！ ゆーちゃんだけは絶対にダメエー！！」

「……ちえっ、しゃーないなあ。ほな、今だけで我慢しとこか。ん」

「はう………／／／／／ お、お姉ちゃん……」

「……あ………後少しだけ、我慢してね、ゆーちゃん。そしてら、解放されるから………多分。」

「ふみゆう………／／／／／／／／／／／」

そんなこんなで、桜藤祭は始まった。……本当に、こんな始まり方で大丈夫なんだろうか？

どうしても一抹の不安が残るのは………最早、御約束と言う奴なのだろう。

俺も大分、こいつらに染められて来たみたいだな。そう思う、今日この頃だった。

……今日も、天気は引き続き快晴だ。

思わず笑みが漏れた　　良い日になりそうだ。

そんな、予感がした。

桜藤祭〜前編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

取り敢えず、始まるまでの騒動を一つ。そして、ゲスト出演のゆーちゃん。可愛いですよね

次回からは、到頭始まります、桜藤祭。そして、孝介の身に一体何が起こるのか？！

では次話の、『桜藤祭〜後編〜』……………いや、ひょっとしたら『中編』になるかも？ にてw

今話も御覧頂き、有難う御座いました。

桜藤祭の中編（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、桜藤祭の中編です。今話も、拙作を御覧下さい。

桜藤祭〜中編〜

side: 孝介

派手に花火など打ち上げて開催した、桜藤祭二日目。早くも、俺達のクラスは盛況を博していた。

……は？ 宇宙船？ 時間のループ？ 何を言ってるんだ、アンタラ？

そんな事よりも、今俺達がどれぐらい大変なのか、是非共見て行って欲しい。

「いらっしゃいませー！ 御客様は何名様でしょうか？」

「二番テーブル、御指名入ったわよ、みさちゃん。」

「へ〜い……じゃなかった、喜んで……。」

「済みません、御客様。当店は御触り厳禁とさせて頂いて居ります。」

「いいこと！ 私の出した料理を食べられないって言うなら、 안타
死刑だからね！ 死刑！」

「べ、別にアンタ達の爲に、運んで来てあげた訳じゃないんだから
ねっ！」

「畏まりました、御嬢様。只今、持って参ります。少々御待ち下さ
い。」

一部を紹介しただけだが、少しは解って貰えただろうか？

因みに上から、香椎・峰岸・日下部・久坂・泉・かがみ、そして俺
だ。

昨日の通りでいいかと思ったのだが、何故か今日は香椎に、しっか
り多くの注文を付けられた。

一応、小さい頃は俳優の親父の仕事を誇らしく思い、何度も真似を
してた事はある。

その分……と言えるかどうかは解らないが、何とか様にはなってい
る……………らしい。

(女性の黄色い声と、ハートマークの目には、全く以て気付いて
いないのである。)

未だ、開店してから二時間程なのだが、既に材料を空き教室から五
度程、持って来ている。

商売繁盛なのは良い事なのだが、これは拙い。相当に拙い事態にな
っている。

先ず、何よりも俺達に休む暇が全く無い。

何せ、開店当初から、ニクラス全員が常にフル稼働して、ようやっ
と廻っている状態なのだ。

誰一人として、休憩時間も取れず、当然出店にも行けないのだ。

一日目は、未だ何とか交代制で少しはどうか時間が取れた。出店
を見るだけの時間もあつた。

しかし、一般の人達が来ると、そんな事は絶対に不可能なレベルに
なっていた。

……真逆、これ程とは………；……；立案した、泉・香椎・久坂
達など、

自分達が言い出しっぺだからと、自ら今日一日働き詰めにするつも
りらしい。

しかし、皆自分の役割に手一杯で、とてもじゃないが、誰かの代わりなんて出来そうになかった。

そして、次に拙いのは、何と言っても、泉が連れて来た、小早川という中学生だ。

実は、余りの忙しさの爲、彼女には誰一人構ってやる事が出来ず、始まった当初から、ずっと一人でテーブルに座っていて、偶に誰かが、

無くなった頃を見計らって持って来たジュースや菓子に手を付けているだけだった。

^{ゲスト}客に何の持て成しも出来無いなどと言うのは、接客業（の端くれ）としての名折れだ。

何より、彼女は遊びに来たのでは無く、学校見学に来たのだ。

ならば、誰かが校内見学をさせねばならぬ筈なのだが、

御覧の通り、今は誰一人として欠ける事が出来無い。

その爲、彼女はたった一人でポツンと二時間も居るだけなのだが、もうそれも限界だ。

これ以上は流石に色々な意味で拙過ぎる。一番いいのは、泉が抜けられればいいのだが……。

「おい、ハルヒちゃん？ こっちこっちい？」

「ちょっと！ 馴れ馴れしく呼ばないでくれる？」

私の事を名前で呼んでいいのは、SOS団員だけなんだからねっ
「！」

……とまあ、こんな具合で。

泉のその余りに完璧な役作りの爲、引く手数多の大人気振りなのだ。

一応、大人気な従姉の姿を見て、

少々誇らし気に楽しそうにしている分、未だ助かってはいるが。

だが、それに甘えてばかりもいられない。

そんな大人しい彼女の爲に、何とか皆で頑張っているのだが如何せん、どうにもなってくれない。

そんな風に、困り切っていた時だった。

俄に廊下の方の騒さわつきが大きくなり、俺の身体に重みと衝撃が押し掛かって来たのは。

「孝ちゃん！ 元気だったあ〜？ ん〜……すっかり、おっきくなっちゃってえ〜」

「栗さん、はしたないですよ。大体、孝介さんを驚かせてどうするんですか。」

そして、俺が今年、最も驚いた出来事に会ったのは。

そんな時だったのだ。

side：三人称

少し、時は遡る。桜藤祭が開催されてから、凡そ一時間半程、経った頃。

一般人専用に使けられた駐車場に、

その場に不相应な鮮やかな水色のスポーツカーが停まった。

思わず、その場に居た皆が注目した、その車から降りて来た男女に、更に驚きの声無き声を心の中で上げ……その二人の姿が消えた数瞬の後、ソレは爆発した。

その騒ぎの凡そ十分後。陵桜学園の正門前に、二人の男女が立っていた。

女性の方は、栗色のショートカットをしており、腰に手を当てて、その校舎を眺めていた。

スレンダーな美人とはこういう事を言うのか……と言つ様な、理想的な体型をしていた女性の、

その顔に見える、普段からは到底想像も付かない様な、如何にも悪戯好きな表情が、

更に、彼女の本来の魅力を引き立てる一助となっている事は、誰の目にも明らかであった。

一方。男性の方は、黒いロングヘアの先の方をリボンで結んで束ね、

如何にも文系だと言わんばかりの線の細い身体をしており、その顔は美形以外の何物でもない。

そして、仁王立ちして、興味津々に校舎を眺めている傍らの女性を見ては、溜息を付いていた。

そんな羨ましいカップルが、何かを外国語で話し合いながら、校舎の中に入っていた。

その数瞬後、此処でも駐車場と同様に、爆発的な歓声が上がった。

彼等はそれ程迄に、世界的に有名な人達であったのだ。

しかし、当人達はそんな歓声など何処吹く風か、目的地に向かって一直線に向かっていた。

「あ、見付けた　アレ、間違い無く孝ちゃんだよ、りゅーちゃん

」

「……確かに、言われてみればその様ですね。流石は隼さんです。

僕ではもう少し観察しないと判らなかつたでしょうね。」

「もう……りゅーちゃんは考えすぎだよ。」

「もっと、こう……フィーリングで物事感じないと！　ね？」

「はいはい、それじゃあ、彼に久し振りの挨拶でもしましょうか。」

「あ、それなら、私に良い案があるよ。ね？　ちよつとやってみていい？　ね？　ね？　ね？」

「……………間違い無く、孝介さんは驚かれると思いますが……………僕は知りませんよ?」

「わ〜い だからりゅーちゃん、大好き??? そんなじゃ、雫、いつきま〜す」

そして、時は戻る。

side:2 - D & amp; 2 - E 合同教室 by 三人称

「んなつ…!?!? ま、真逆、雫さん?! それに、竜之介さんまで!?!?」

「お久しぶりぶり〜 ちょっと見ない間に、すっかり格好良くなつちやつてえ〜」

「雫さん……………御願いですから、ちょっとどいて貰えませんか? 流

石に人の目がありますので。」

「え〜……やあ〜だあ〜。ぶ〜ぶ〜。それに、私、その孝ちゃんの喋り方きらい。」

雫と呼ばれた、孝介に後ろから抱き付いている女性が可愛らしく口を尖らせて、そう抗議すると、

竜之介と呼ばれた、共にいた男性と一緒に孝介も溜息を付き……。

その雰囲気はためが、傍目にも解る程に変わっていった。

「……………ハア。解った、解った。俺の負けだよ。これでもいい？ 雫さん。」

「うん やっぱ孝ちゃんはこうじゃなくっちゃね」

「ハア……………。何はさておき。御久し振りですね、孝介さん。御健勝な様で何よりです。」

「竜之介さんもね。相変わらず雫さんと仲良しで何よりだよ。」

あ、そつだ。雫さん、金メダル三つ目、おめでとつ。本当に凄いな。俺も誇らしいよ。」

「えっへん、そつでしょ、そつでしようお」

「……あれ、やっぱり、あの『米倉隼』よね？」

「うん……間違い無いよ。テレビじゃ物凄く怖そうな人だったけど……。」

「……うん。何か、とても可愛い人だね」

「それに、あの一緒にいる人って、確か……。」

「ええ、間違い無くあの『米倉竜之介』さんだと思います。」

所謂、新進気鋭の若手ITベンチャー企業の社長で、

その年収は………数百億とも、数千億とも言われています。」

「すっ……せつ……!?!?」

……な、何で、そんな物凄い人達が、コウとあんなに親し気に話してる訳？」

「……ちゅあ……」

そればかりは、草薙さん御本人達に直接聞く他には無いかと思いますが……」

「……そ、そうよね。本人達に聞くしか無い……のよね……」

そう。先にも言った通り、実はこの二人、世界的なレベルでの超有名人であった。

一人は、米倉雫。プロのフィギュアスケーターで、十代の頃からオリンピックに出続け、

出る大会出る大会に全て必ず優勝し、オリンピック大会三連覇の偉業を成し遂げた、現役選手。

一方、米倉竜之介。みwikiの説明にもあった通り、若手ながらも世界を日々相手取るIT社長。

その年収は、一般的には数百億とも数千億とも言われている。

しかも、仲睦まじい理想の夫婦として、最近は特にテレビに引っ張りだこであった。

その雲の上テレビのなかの人が、今自分達の目の前にいて、自分達のクラスメイ
トと、

まるで親子みたいに親し気に話しているその様に、思わず皆、魅入っていたのであった。

「ん」　　しっかし本当に格好良くなったねえ。もう、食べ頃？」

「ダメだよ（です）、雫さん。」

「ぶう」……二人共、相変わらず敵しいい」……。」

「いや、そういう問題以前の話だ（です）からね？」

「……………何で、久し振りなのに、そんなに息が合っちゃうかなあ？」

（それは、寧ろ貴女の所為だと、今、声を大にして言いたい。）

「???」　　どうかしたの、二人共？」

「いや（いいえ）、何でも無い（有りません）よ、雫さん。」

「あ、それよりも、サナ達は元気？　　珍しくあいつら、何の連絡も寄越さないからさあ。」

「あゝ……うん、大丈夫だよ。みんな元気でやってるよ?」

「……………雲さん、一体俺に何隠してるの?」

「ギクウツ!? ベ、ベ、別に……何も?!」

「……………竜之介さん?」

「……………まあ、健康的には何の問題も無い事だけは、断言しておきましよう。」

ちゃんと雪さんが、皆の健康管理をしていますからね。

そちらの方は寧ろ、孝介さんの方が心配ですよ。ちゃんと、朝昼夜食べていますか?」

「……………おほんつ。まあ、あいつらが特に怪我とかしてないなら、それでいいや。」

(ナイス、りゅーちゃん d) (御任せ下さい。伊達に世界は相手にしていません。)

とまあ、こんな感じである。一事が万事、こんな調子であった為、

誰も会話に入っていけず、只、三人の話を聞いているのみであった。

それが又、この騒動を更に大きくする原因になってしまっただが…
…それは、又、次の御話で。

桜藤祭〜中編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

オリキャラの正体……恐らく、とっくのとうにバレバレだったとは思いますが；

はい、孝介の親友達の親・sですw 今回登場したのは、米倉真人の両親。

そして、桜藤祭に来られなかったのが、時任渡の両親です。こちらも可成りアレですw

因みに何故、アルスの両親は集まらなかったのかについては……今はまだ秘密です。

次話は、ゆうちゃんのフラグ？ と、孝介の豹変？ について少々です。

……あれ？ これ、前中後編でも終わらんかね？ ……

……まあ、いつか。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

桜藤祭〜後編〜（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて。今回にて二年次桜藤祭も終わりです。

では、今話も拙作を御楽しみ下さい。

桜藤祭〜後編〜

side：三人称

未だに騒つく中、孝介と件の二人はまだ話し合っていた。

「あ、それで二人共。何でこんな所に来た訳？　と言うか、一体誰に聞いたの？」

絶対誰かに聞かない限り、今日が文化祭で、オマケに一般開放日だつて判らないでしょ？」

「あ〜……………ま、秘密つて事で一つお願い」

「……………ハア〜。まあ、いいけどね。それで、この後どうするの？」

「そうですね……………特にこれと言っては考えては居ませんが……………校内を見て回るだけですかね。」

「ふ〜ん……………。そういや、こっちにいるの今日だけ？」

「いいえ。今日明日と休暇を取っておりますので、まだいますよ。」

……それに、彼女にも御挨拶に行きたいですからね。」

「……そっか。」

「……うん。せつちゃんやゆーちゃんだけじゃなくて、みゃーちゃんやがーちゃんにも……ね。」

お願いされちゃったし……シンちゃん達の方も一緒に……ね？」

「……うん、解ったよ。俺も一緒に行つていい？」

「ええ、勿論ですとも。寧ろこちらから御願ひするつもりでしたから。」

「……うん 孝ちゃんが居てくれるなら百人力だよ。」

「……大袈裟だなあ、雫さんは。あ、そうだ。この後、特に予定無いんだよね？」

「ええ、そうですよ。」「うん、そうだよ。」

「なら二人には悪いけど、あそこにいる中学生に、校内見学させてあげてくれない？」

竜之介さんなら、ここの学園長を説得するぐらい、簡単でしょ？」

「それは構いませんが……何故、私達に？」

「いや、実はこっちが余りにも忙し過ぎて、誰も彼女に構ってあげられてないんだよ。」

態々、見学の爲にこっちにまで来たのに、この儘じゃ申し訳無いでしょ?」

「相変わらず律儀ですねえ。解りました、いいでしょう。構いませんよね、栗さん?」

「うん、もちねえねえ君、お名前は? 幾つ?」

「ふえ? あ、えっと……こ、小早川……ゆ、ゆたか……です。と、年は14です……。」

「あれ? まだ二年生なの?」

「あ、いえ……! あの、その……ま、まだ、誕生日が来てないので……」

「あ、そゆ事。ん? ……って事はシンちゃんと同い年?」

「……と言う事になりますね。これは、益々案内しないといけないかもしれませんね。」

「そだね……ひよっとしたら、クラスメイトになるかも知れないし
(ボソッ)」

「……今、何か言った、雫さん？」

「うづん（いいえ）、何も」「

「……怪しい。怪しさ、全開なんだけど……？」

「気にしたら負けだ（です）よ？」 さ、そんな事より、早速行きましようか、小早川さん。」

「ふえ？ え？ あ、あの……一体、何処へ……？」

「勿論、校内見学の許可を取りに、学園長の所へですよ。」

雫さん、小早川さんをちゃんと連れて来て下さいね。私は一足御先に行っていますよ。」

「ハイ じゃ、行こっか……え〜と……ゆつきゅん」

「……相変わらず、なんつーネーミングセンス； 香椎達とどっこいだなあ……」

「そこでウチヲを引き合いに出すなやっ！……！」

「おお、すごいツッコミ！ もしかして、本場の関西人？」

「は、はい。そ、そうですけど……。」

「孝ちゃん、孝ちゃん！」

「ダメです。いいから、早く彼女を連れて行ってあげて下さい。時間は余りありませんよ？」

第一、竜之介さんを待たせたら後が怖いデスヨ？」

「うう~~~~孝ちゃんが虐めるうう。いいモンいいモン。ゆっきゅんで癒されるから。」

じゃ、今度こそ行こ？ ゆっきゅん」

「ふえ？ ふえええええ.....」

「うにゅう~~~~やっぱこの子、可愛い~~~~ねえねえ、孝ちゃん！！」

「だからダメですつてば。大体、貴方達にはサナがいるでしょ？」

「ぶう~~~~だってシンちゃん、今お受験モードで全然構ってくれないんだモン。」

つままないんだモン。もっとスキンシップしたいのに~~~~。」

「そんな愚痴を今、言わないでよ。後でちゃんと（色々と）聞いてあげるから。」

ほら、さっさと行って来なさい。」

「はあ〜い。じゃ、一緒に行こうね〜ゆっきゅん」

「ふええええ〜……………お、お姉ちゃ〜ん……………」

「……………い、行ってらっしゃあ〜い」

「そ、そんなあ……………」

「人……………それを台風一過と言う。」

「……………寧ろ、暴風雨が大嵐の方が相応しい気がする。」

「どっちにしろ、こりゃ益々孝介に聞かなきゃいけない事が増えたようだな。」

「せやな。ま、色々と気にはなるけど、今一番ウチラがしなきゃいけない事は……………」

「……………うん。この騒ぎをどう鎮めるかって事……………」

「どうにか頑張って、今日を乗り切る事だよね……………」

其の後、何とか沈静化に成功した涼子達。

その日は、他のクラスの人達も手伝ってくれ、買い出し要員を頼まれてくれて、

今迄の桜藤祭の中でも、最大の盛況振りを存分に発揮したそうなの。

所で、ゆたかが超有名人な二人に校内案内をされた結果、どうなったかと言つと……………。

「で、どうだったの、ゆーちゃん。楽しかった？」

「あ、あのね、お姉ちゃん！ そのね！ て、テレビの中の人が、私に話し掛けてくるんだよ！

それで、私に抱き付いて来たり、笑ってくれたり、頭撫でてくれたりして、

それで、あの……………！ えつと……………・お、お姉ちゃん……………；
「……………」

「あ……………うん。取り敢えず、緊張してそれどころじゃ無いっ

てのは理解したよ、うん。」

……だったそうなの。……余談である。

時を戻し、そして更に進み、迎えたのはもう桜藤祭も終わりの頃。

二人が、混乱しているゆたかを連れて、再び合同教室に出向いて来た頃である。

「やほー、孝ちゃん」

「あ、雫さん。お帰りなさい。竜之介さんも御疲れ様。」

「お、お姉ちゃん……ん……」

「あ……よしよし。」

「むう……まるで私達、悪い事したみたい……シヨボーン。」

「よしよし……大丈夫ですよ、雫さん。」

「……………； あ、それよりも、二人共、今日は何処に泊まるの？
真逆、流石にビジネスホテルとかじゃ拙いでしょ？」

「それなら、問題有りませんよ。」

もうすぐ、セバスチャンが迎えに来てくれる手筈になっています
から。」

「セバスチャンが？ じゃあ、今日はアソコに泊まるんだ。」

「ええ。ですから、心配はいりませんよ。お、早速噂をすれば影で
すね。」

「御待たせ致しました、竜之介様、雫様。」

「あ、ありがとうおゝセバスチャン。お久しぶりぶり〜！ ノシ」

「はい、御久し振りで御座います、雫様。」

「今日は宜しく御願いますね、セバスチャン。」

「はい、御任せ下さい、竜之介様。」

「……久し振り、セバスチャン。」

「はい、御久し振りで御座います、孝介様。……大きくなられましたね。」

「やめてよ、俺は相変わらず子供の儘だよ。」

「いえいえ……すっかり執事服が似合う様になられて……感激です……クッ！」

「……何も泣かなくても。」

「……ズズツ……これが泣かずにいられますようか。」

あんなに御小さかった孝介様が、此程迄に大きく……と、失礼。……チーンッ！

……つふう。所で……孝介様も御一緒に来られますか？」

「……いや、俺はいいよ。まだ片付けとかも残ってるしね。二人を頼むよ。」

「はい、御任せ下さい。このセバスチャン。我が命に替えても御二人を御守り致しますよう。」

「ははっ……セバスチャンが守ってくれるなら、安心安全だね。」

あ、そうだ、セバスチャン。悪いけど、明日の朝、家にまでつけてくれる？

明日は隼さんと竜之介さんと一緒に出かける約束になってるんだ。

「

「畏まりました。何処へ御出掛けになられますか？ 何か御用意致します事は御座いませんか？」

「ああ、ちよつと……西の方へ……ね。特には無いよ。」

「………そうで御座いましたか。畏まりました。では、明朝御迎えに上がります。」

それでは、御二方。宜しいでしょうか？」

「ええ、私は構いませんが。隼さんはどうです？」

「あ、えつとね、ちよつとだけ待ってくれる？」

「畏まりました。何時成りと。」「ええ、構いませんよ。」

「えへへ あんがと えつと………ねえ、孝ちゃん。かがみちやんってどの子？」

「………何故に？」

「……ん………ない・しょ ね？ どの子？」

「あ、はい。……私ですけど。」

「……え？ 本当に？ 貴女がかがみちゃん？」

「……は、はい。な、何か……拙かったですでしょうか？」

「……あ、いや……うん。ちょっと驚いただけだから。……そっか、貴女がかがみちゃん。」

「……うん、いいと思うな。……ねえ、かがみちゃん。」

「は、はい。」

「……孝ちゃんの事、お願いね？ 知つての通り、融通の利かない堅物君だから……ね？」

「……はい、分かりました。コウの事は、任せて下さい。」

「……『コウ』？」

「……はい。……えっと……あの、何か？」

「……あ、うん。そっか……『コウ』……か。うん、分かった、大丈夫だよ。」

「じゃ、行こりゅーちゃん」

「……もういいのですか？」

「うん。もう、充分。多分、もう心配いらないう。孝ちゃん自身は気付いていないみたいだけど。」

「だから、もう大丈夫。さ、行こりゅーちゃん、セバスチャン。」

「……ええ。では、孝介さん。又、明日と言う事で。」

「うん。又、明日。」

「孝ちゃん。」

「ん？ 何、栗さん。」

「……チエキ！（パシャッ！）……いよし。良い写真が撮れたかも じゃ〜ね〜」

「うわっ！ ……もう、栗さんってば。」

「……では、孝介様。明朝、改めて御迎えに上がります。」

「うん、明日は宜しくね、セバスチャン。」

「はい、それでは。」

その後、皆からの質問を何だかんだ言って、のらりくらりとかわ躲し続け、

結局元の言葉遣いや、雰囲気に戻っていた孝介。

そして、後夜祭のキャンプファイヤーにて。

何も話してくれない孝介に怒ったかがみを説得している、少々情けない孝介が見られたのは、

せめてもの役得だったと、言えなくもないであろう。

明朝。未だ薄暗い中。一台の車が、西に向けて走り去って行った。

その日から暫く、とある一角の墓石は、色彩豊かに咲き誇っていた
そうなの。

桜藤祭〜後編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、フラグを幾つか鏝^{すじ}めて置きました。幾つ解りましたか？w
さて。取り敢えず、二年次二学期もこれで一応終わりです。

次からは、二年次冬休みに突入予定。……しかし、伏線ばかりで中々本編の物語が進まないorz

個人的に考えている事は、三年一学期からが、物語の本格的始動時期。

そこに到る迄は、プロローグと言うか………判り易く言うならば。
ラブプラスに例えるなら、告白する迄が二年次春休み。

それから先が本番……基^{もと}、本編てな感じですよ。

……え？ 余計判り辛い？ こまけえこたあ（ry

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

作者はコミケに行った事は有りません。悪しからずorz (前書き)

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

さて皆様、大変御待たせ致しました。私のもう一つの方の小説。

『無限にして無窮なる旅人』が取り敢えず、一段落着きましたので、

ボチボチこちらにも更新していきたいと思っ居ります。

では、今話も拙作を御覧下さい。

作者はコミケに行った事は有りません。悪しからずorz

【お祭りへいこう】

「みゆきさん　年末って何か用事ある？」

「あ、こなたさん。」

「お祭りがあるんだけど、みゆきさんもどうかと思って。」

「暮れのお祭りですか　楽しそうですね」

「うん！！　すっごく楽しいよ」

「雪祭りみたいなものでしょうか？　でも、私……田舎の方には……。」

「私達も確か……夏に同じ様な名目で誘われたっけなあ……。」

「……流石に、アレは高良には酷^{こく}過ぎると思うんだが？」

「かがみさん……草薙さんも。」

「こなたの言葉を意識すると、コミックマーケットの買い出し要員

の勧誘よ？

……夏に現地行って、ビックリしたモンだわ……。」

「……全くだ。アレはアレで一つの修練にはなりそうだが……二度と行きたくは無いな。」

「……嘘付いてないモン……祭りは祭りだモン。」

……一人は大変だし、つまないんだよ……。」

「クスクス……こなたん、その誘い方はちょっと姑息やで？」

「ホントにな。まあ、気持ちは判らなくも無いけど……。」

「ウチラは、毎年大晦日は実家に帰ってるさかい、行きたくても行けへんのや。」

堪忍な、こなたん。」

「……それで、俺が人身御供として差し出された……と言う訳だ。」

「……。」

「……………そう唸るな。…………ハア、仕方ない。今回も手伝ってやるから。」

「やたー!!」

「ちょ、ちよつと、「コウ!」

「……………仕方ないだろう? 困ってる友達を見捨てる訳にもいかないしな。」

……………かがみはどうする?」

「……………し、仕方ないわね……………コウが行くなら、付き合っただけでもいいわよ?」

「……………無理する必要は無いぞ、かがみ?」

買い出し要員だけなら、最悪俺だけでもどうにかかなりそうだからな。

二度の敗北は喫しない。今度こそ、見事遣り切ってみせよう。」

「だ、大丈夫よ! 私だって二度目なんだから……………二度目……………」。

アレをもう一度、味わうのね……………だ、大丈夫よ! 大丈夫ったら、大丈夫なのっ!」

「……………わ、分かった。なら、一緒に行くか？」

「……………う、うん……………」

「わーい！ 一緒 一緒」

「……………不安だ……………orz」

【クリスマス……………クルシミマス】

「あ、そっぴや、みんなクリスマスってどつするの？」

「私達は、普通のクリスマスよね？」

「うん ケーキとか色々買って、みんなで食べるんだよ」

「偶に、つかさが作ったりもしてるよね。」

「うん」

「へえ〜……流石はつかさ。……姉とは大違いだね」

「うっさい―!」

「お菓子の一つぐらい作れないと、草薙君に飽きらられちゃうかもよ？ うぶぶぶ……」

「んなっ!?!?/// ベ、ベ、別に、私とコウはそんなんじゃないわよっ!///」

「はいはい、お決まりの台詞をアリガトウ。あ、涼ちゃん達は何してるの?」

「ウチラも、特にコレと言って……なあ?」

「そうだな。今年も何時も通り俺の家で涼子と二人で、好きなモン喰って一日中ダラダラかな?」

涼子が出掛けようとか言い出さない限りは、籠もりっ切りだと思っな。」

「せやね。基本的にはのんびりダラダラと寛いでるだけやな。」

「……それで、何となく雰囲気に乗って、キスしたり、その先に……と。」

相変わらずラヴラヴさんだねえ、お二人さん」

「……………// // // // //」

「……ここにもいたか、バカップルorz ……みゆきさんは旅行？」

「はい。今年はオーロラを見に行きたいと母が言つたもので。」

「……おのれ、ブルジョワめ。」

「……ヨーグルトの親戚ですか？」

「……つかさ、流石にそれは無いわ。」

「……? ? ? ?」

「……………ま、つかさだしね。(こなちゃんのくせに!!?) (あ、所で草薙君は?)」

「あじ? ……そう言えば居ないわね。みさちゃん、知ってる?」

「アタシが知ってる訳無いってヴァ。柊なら知ってんじゃねーの？
ラヴラヴなんだしよ。」

「みさちゃん；もう、余り揶揄っちゃダメよ？」

「え〜……だつてえ〜……………う。」

「……みさちゃん？」

「……………ハイ。……………あやのこわいあやのこわいあやのこわい……………」

「……………ま、日下部だしな。でも、確かにコウなら、何時の間にか居なくなつてたわね。」

「コウの家に寄ってから帰るから、少し遅くなるって言つといてね、つかさ。」

「……………」

「……………少しで済むのかな？　かな？」

「……………う……………う……………さいわよっ、こなたっ！！……………と
言っか、……………一回も言っな！……………」

「コンコン……」「……」「ウ？ いる？」

「ん？ ……はい……かがみ？ いらっしやい。」

「あ、うん。お邪魔します。」

「ちょっと待っててくれ。今、御茶出すから。」

「あ、アリガト。………ねえ、コウ。」

「ん？ どうした、かがみ？」

「う、うん……。あ、あのね……／＼／

「こ、コウは………く、クリスマスって、何してるのかなあ……
って／＼／」

「………ああ、その事が。いや、俺はクリスマスは、毎年用事があつてな。」

「前日から、ちょっと出掛けていないんだ。」

「………そ、そうなんだ。その………因みに、何の用事？」

「……………墓参りだよ。俺の…………俺達の、大事な親友の…………ね。」

「……………お墓参り……………」

「ああ。毎年行ってるんだ。他の皆は海外にいるからな。俺が、皆の分も纏めて行ってるんだ。」

「……………そう、そうだったの。それじゃ、仕方ないわよね。」

「……………ん？何がだ？」

「……………ううん、何でもないの。……………あ、私もう帰るね。」

「ん、そっか。……………あ、そうだ。ちょっと待っていてくれ。」

「……………「ウ？これは……………」？」

「……………この部屋の合い鍵だ。まあ……………その……………無骨ではあるが、一応……………な。」

クリスマスプレゼント……………のつもり……………なんだが……………迷惑……………だったか？」

「……………ううん……………嬉しい……………凄く……………ありがとう、コウ。」

「……………ああ……………ん……………送って行く。」

「大丈夫よ、コウ。そんなに心配しなくても……………。」

「いや……………それもあるけど……………もう少し、一緒に居たいんだ……………ダメ……………かな？」

「え……………と……………その……………お、お願い……………します……………／／／／／」

「……………うん。」

【お祭りへ来たよ】

「……で、かがみ。これは一体、どういう事だ？」

「……私に聞かないで。文句はこなたに言っで。……私は頑張って止めたんだからね？」

「……泉？」

「……だって、大勢の方が楽しいし……今回は欲しい物が多いし……」。

「「ハアorz」」

「コミケって言うんだっけ？ 大きいお祭りって聞いたけど、随分朝早くからやるんだね

楽しみだなあ〜」 初心者

「……やっぱり、何も聞かされて無いのね……気の毒に。」 二回目

「いやいや、すぐ慣れるよ」 常連

「慣れたくない…………orz」つかさ？ 言っとくけど、かなり疲れるイベントよ？

…………色んな意味で。大丈夫？」

「あ、うんっ！ じゃあ、がんばるっ！」

「…………ホントに分かってるのかしら？」

「…………まあ最悪、俺が何とかするさ。かがみ…………済まないが、今回は…………」
「二回目」

「うん、分かってる。私も、少しぐらいは大丈夫だと思うし。…………つかさの事、お願いね？」

「…………ああ、任せてくれ。何としても、守ってみせるさ。」

「????？」

「…………まあまあ。そう言うだろうと思って、ちゃんとそういう風にルートも組んで来たから」

「…………お願いだから、そういう知性と情熱を普段から発揮してくれない？」

「エッヘン！」

「……褒めてない、誉めてない。」

「……お、お、お姉ちゃん……何か、ここ怖いね……。」

「……だから言ったのに……。」

「あ、そうそう。今の内に分担を説明しておかなきゃ。」

「分担？」

「……あれか。」

「はい、これ……買い物リストだよ。」

入場したら解散して、この地図に従ってサークルを廻ってね。

かがみは……で、つかさと草薙君は……を廻って。あ、それと、

「……」

このエリアで人混みに捉まると、三十分以上のロスになるよ。」

「……相変わらずの戦略眼……いや、長年培った経験……か？」

「……どっちにしても、碌なモンじゃ無いわね……。」

「まあまあ、いいからいいから　　後、緑の所は………で、赤の………だから。」

後、はいこれ実弾。会計の時、まごつくといけないから持って行って。

そのカフェオレは糖分の補給用。三十分には一回は飲んでね。

最終的な待ち合わせ場所はココ………13時ジャストね。

15分待つけど、来ないようだったら医務室に探しに行くから、気を付けて。

以上！　何か質問は？」

「………だから、何故に（何で）それを普段から発揮出来無い（の）？」

「エッヘン……！」

「だから、褒めてないって。」

「走らないで下さいーいッッッー!!」

「新刊の購入はッ!! 一人、四冊までとさせて頂いておりますッッ!!」

「御協力下さいッッ!!」

「……ナニコレ?」

「外れるなよ、柊。じゃ、又後でな、かがみ。」

「うん、そっちも気を付けて。」

「ああ。よし、行くぞ柊。本気で気合い入れろよ。」

「……うん、うん……」

「え……と、ここが東館？ ……それで……北がこっち側の筈だから……。」

「……！ っと、柊こっちだ。」

「ふえ？ ……うわわわわ……！？ ……あ、危なかったあ……
……凄い人……。」

「……ふう。言っただろ、柊。余り俺から離れるなって。」

「……う、うん……ごめんなさい。」

「……いや、気を付けてくれればいいさ。ほら、目的地はこっちだ……急ぐ。」

「あ、うんっ！」

「あの………すいません。』『うの61つてにににですか？』」

「あ、はい、そうですよ。」

「………新刊を全て三冊ずつ下さい。」

「はい、毎度有難う御座います。………4、500円になります。」

……はい、お釣りの五百円です。」

「……どうも。……よし、次行こうか柊。」

「うん。……ねえねえ、草薙君。一体どんな本だったの？」

「……いや、柊は見なくていい。気にするな。」

「え〜……余計気になるよお〜。」

「いいか、柊。世の中には、知らぬが仏と言つ素敵な素晴らしい有り難い言葉が有るんだ。」

後は………解るな？」

「………う、うん………分かった………（ふえ〜ん………）
草薙君が恐いよお〜………」

「……………矢張り、何度味わつても嫌なイベントだな。」

「……………これ、人混みに浚われたら、絶対に大変な事になるよね……………」

「……………間違い無く……………な。……………手洗いですら、三十分は優に掛かる人数だからな。」

「……………アンタは未だいいわよ。私の方なんか、その倍よ?」

「まあ、初参加の人には辛すぎるメニューだと思つてたから。」

それでも、草薙君の御陰で大分助かつたけど。午後はみんなでまったり見て廻ろうよ。」

「……………未だ廻る気なのか。……………うう…………………………」

「……………夏は来なかつたけど、こつという所も在るのね……………」

「そつだな。夏は何もかも初めてで、周りを見る余裕が全くと言つていい程無かつたからな。」

「……………そうね、そう……………だったわね……………」

「……………ハアorz」

「まあね。今頃じゃあ、目ぼしいグッズはみんな売り切れてると思
うけどね。」

「ふ〜ん……………」

「あ、長門長門！ 長モンの中の人売り子やってる〜」

「おい、いいかげんにしろ！ どうなってんだよ！！」

長門のテレカが無いとここまで来た意味がねえんだよ！！！！」

「……………うわぁ……………最悪。」

「……………最近、ああいう人が増えて来てるんで、私達も困ってるんだ
よ。」

「只でさえ、世間からはイメージが悪いのに、益々イメージダウン
しちゃっしょ。」

「その象徴が、あの条例だからね。もう！ 酷いなんてモンじゃ無
いよ……………」

「……まあ、確かにアレは遣り過ぎだとは思っけどね。……って、アレ？」
「コウは？」

「おい！ さっさと出せよ！ どうにかしろよ！……」

「……おい、アンタ。」

「ああ！？ なんだテメエは！ ……い、いてえっ！！！！ イテテテ……！！！！」

痛い痛い痛い！！ は、離せ！ 離しやがれ！！！！」

「……少し黙れ。二度と使い物にならなくなってもいいのか？」

「て、テメエ……アイテテテ……！！」

「おい、早く警備員を呼んでくれ。威力業務妨害に^{ていしやく}舐触するんじゃないか？」

「は、はい！ すぐ呼んで来ます！ おい、誰か！！」

「……あっちやあ〜……やっちやっした。」

「……草薙君、強い！」

「……まあ、危惧はしてたけど……；；； 私達も行くぞ。」

「……そうね。流石に知らんぷりは出来無いし……ね。」

「うん ……でも、大丈夫かな？ あの人、急に襲い掛かって来たりしたら……。」

「大丈夫よ。コウがああして押さえ込んでるんだから。ほら、早く行きましょ。」

「おい、草薙くん。」

「……ああ、三人共。済まん……つい身体が動いた。」

「しょうがないわよ、コウの事だもんね。」

「う……済まん。」

「大丈夫ですか？」

「あ、うん。私は平気だけど……その彼は大丈夫？」

「大丈夫です、問題有りません……慣れていきますので。それより、警

「備員さんは未だでしょうか？」

「もうすぐ来ると思っけど……あ、来た。」

「済みません。御協力に感謝致します。」

「いえ、人として当然の事をした迄ですから。」

「くそっ！ テメエ……覚えてやがれよっ！！」

「有象無象の事等、覚えていられるか……戯げが。」

「テメエ……殺すっ！ ゼツテエ、テメエは殺してやる！！！」

「くっ……暴れるなっ！ 貴方も、不用意に挑発しないで下さい！」

「……申し訳有りません。では、宜しく御願致します。……行くっ、三人共。」

「」「」「……うん。」「」

「…………ゴメンな、みんな。」

「いいよ、気にしなくて。草薙君ならきつとやると思ったし」

「うんうん。むしろ、しなかったら草薙君じゃ無いって言うか」

「…………まあ、そういう事だから。アンタもそんなに気にしなくていいわよ、コウ。」

「…………ああ、有難う。」

「それに…………えへへ…………長モンの中の人サイン貰っちゃったし」

「うんっ　それに綺麗な人だったね」

「そうね。…………コウって、やっぱりああいう美人タイプが好みとか？」

「…………一体、何処からその結論に達した？　それに、やっぱりとはどういう意味だ？」

俺はその手の類の話をした覚えは一度も無い筈だが？」

「…………何となくよ。女の勘って奴？」

「……………（中々に恐ろしいな）残念ながら外れた。俺が惚れた人は今迄に二人しかいない。」

「『『……………二人？』』」

「……………言わないぞ。」

「『『……………ケチ。』』」

「……………何とでも言え。」

作者はコミケに行った事は有りません。悪しからずorz (後書き)

如何でしたでしょうか？

言いたい事は一つ。題名の通りです。

友達には、行かないと絶対に理解出来無いと言われましたが……。

正直、行くだけの金も、度胸も、欲望も余り無い為……しょうがないよね(AA略)。

ですので、何か間違い等や、ねーよwと言った事が御座いましたら、

何時なりと御訂正頂ければ、幸いです。

そして、少しずつカミングアウトし始めた孝介。

全てが皆に判るのは、一体何時の事やら。……いえ、既に決めてあるんですけどね。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

一年の計は元旦に在り？（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

一年の計は元旦に在り？

【明けましておめでとござりますっ？】

「お姉ちゃん……眠い……。」

「……私だって眠いわよ。有明から帰ってすぐ家の手伝い……orz

何で大晦日にあんなイベントやるのかしら……。」

「かがみ〜、つかさ〜。あけおめ〜」

「お〜。」

「こなちゃん　あけましておめでとっ」

「朝からあんなお祭り騒ぎだったのに元気ねえ……。寒いし、面倒がると思ったけど。」

「いやあ〜、まあそうだけど。」

「一年の計は元旦にあるから、初詣に行って一年の英気を養おうって。」

「へえ〜……殊勝じゃない。」

「いや、お父さんが。」「どうも〜」

（急に何かが引つ掛かる!?!?）

「巫女服新鮮〜」「うんうん」

「お祈りすんだよ〜。」

「はい、御苦労様。」

「つかさ達は何かお祈りとかしたの?」

「そう言えばお姉ちゃん。さっき熱心にお祈りしてたね。」

「バツ!／＼／＼ またアンタは余計な事を……／＼／＼ そ、そんな熱心にしてないわよっ／＼／＼／＼／＼」

……ちよつと今年くらいは、つかさやみゆきと同じクラスがいいなって思っただけよ／＼／＼」

「ふ〜ん……」

「お、お姉ちゃん……こなちゃんは?……」

「？ 何で？」

「だって去年は、管理人さんと一緒に腕組んで来てたから……。」

「……それはまた……… 何とも強力なライヴァルだねえ、かがみん？」

「………うっさい／＼／＼／」

(………女学生つていいなあ………。)

「じゃ、お参りも厄除けも済んだし、私達は帰るね。」

「よいお年を。」

「あ、うん。よいお年を。」

「また、学校でね。ふ………まあ、こなたの御陰で少しは目が覚めたし………頑張りますか！」

「うんっ 拓ちゃんも涼ちゃんも元気かなあ？」

「そうね。多分、今頃向こうでもお参りしてるでしょうね。学校であつたら色々と聞こつか。」

「うんっ　えへへ……楽しみだなあ」

「あ、いたいた　ほらほら孝介君。巫女さんこっちにいたよ」

「余り大きな声で言わないで下さい、漣さん。変人かと思われるでしょう?」

「え……堅い事言いつこ無し無し　やほー、かがみちゃん、つかさちゃん。」

「あ、管理人さんに草薙君。あけましておめでとつございます」

「うんっ　あけおめ」

「……ああ。明けまして御目出度う。今年も宜しくな、かがみ、柊。」

「……うん／＼／」「うんっ　こちらこそ宜しく」

「もう、お参りは済ませたの?」

「いや、これからだ。漣さんが爆睡していてな。起こすのに、今迄手間取っていた。」

「そうなんだよ……もう、酷いんだよ孝介君。

折角、人が気持ち良くく寝てたのに、叩き起こすんだモン……文字通り。」

「出掛ける前に言ったでしょう、溲さん？」

一年の計は元旦に在り。初詣に行き、一年の英気を養うは日本人の常道です。」

「ぶ〜ぶ〜。相変わらずかったいなあ〜、孝介君はあ〜。おろ？
どったの、かがみちゃん？」

「……いえ。同じ台詞でも、言う人が違うと、

どうしてこんなに感じる意味合いが変わって来るのかなあと思
まして……」

「あ、あはは……」

「「???」」

「済ませて来た。」

「今年は勢せうじゃったよん」

「あはは； 有難う御座います。 コウも御苦勞様。」

「ああ。」

「あ、孝介君、孝介君。今年も御神籤おみくじやっていこ？」

「そうですね。一つ願掛けでもしてみるか。」

「あ、はい お二人様ご案内です」

「よっし！ そんなじゃ、今年一年の運試し！ ジャ〜ラジャ〜ラ…
…ほいっと！」

「……それ、去年も同じ台詞言ってますでしたか？」

「んにゅ？ そうだっけ？ ま、いいや。ナニが出るかな〜っと…
……わ。」

「あ……大凶ですか。」

「ありやりや。こりやまた、去年とは真逆なのが出ちったね〜。」

「大丈夫ですよ。今が最悪なら、後は運気が上昇するだけですから
」

「あ、そうだよね 流石は本職巫女さん……良い事言っ」

「えへへ」

「コウはどうだった？」

「ふむ……………生まれて初めて自分の手に取ったな。」

「あ、大吉！ 凄いじゃない、コウ！」

「ほえ？ 私の運が孝介君に取られた……；；； かせく……！」

「何て言う言い掛かりを……；；； それにしても真逆まさか、御互い去年と真逆まさかとは……………。」

寧ろ人生の運を、これで全て使い切った様な気がするの俺だけか？」

「……………それ、こなちゃんが前に同じ事言ってた気がする……；」

「……………俺は泉と同レベルか……………orz」

「……………あはは……………」

去年とは違い、賑々しく終わった今年の初詣。

引いた御神籤も手伝い、幸先のいい年の始まりに、何となく嬉しくなり笑みが零れる孝介。

あの時、御神籤を熟読しておけば良かった。

そう遠くない未来で後悔する事になろうとは、今この時は微塵にも思わなかった孝介であった。

一年の計は元旦に在り？（後書き）

如何でしたでしょうか？

これで二年次冬休みも終わりです。次話からは、二年次三学期。

そろそろ、長い長い序章も終わり、本当の本編に入ろうとしています。

果たして、孝介の身に一体何が起るのか。どうぞ、御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

新学期、始まりました(前書き)

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

新学期、始めました

【お正月マジック？】

「お正月気分って言うけど、確かに不思議な空気があるよね。

で、学校始まると急に空気変わるよね、残念な事に。」

「うんうん。まあさあ、御正月って確かに不思議な力が働くわよね

……。

三箇日、家の手伝いがあんなに忙しかったのにも拘わらず……

………体重が増えたあ！！」

「ウチもやあ………！　ウチも親戚一同が、ごっつい飯勧めて来たんやあ………」

拓海がちつとも止めてくれへんから………づっづっづっ………

………」

「ムウ………お正月マジックですね………」

「………アレは流石に、俺には無理だよ涼子………」

「それを何とかすんのが、アンタの一番の役目やろが………」

「うつ……………精進しますorz」

「……………何とも悲惨な光景だな；

だが、二人共見た目は全く変わってないんだが……………そんなに気になるものなのか？」

「当たり前や！ アンタかて、確か妹おるやろ！ そんなら見とるやろ！」

「いや、唯はそもそも余り体重が増えない体質でな。ダイエットとかとは無縁なんだ。」

「……………くつ。このハイブリッド家族めえ……………！！！」

【楽しい御正月】

「でも、お正月を楽しむって言えばさあ。羽根突き、百人一首、凧揚げの絵とか良く見るけど、

実際にそんなのやってるの、見た事無いよね。」

「まあ、今は電線とか交通とかに危ないって言われてるしね。

私もテレビ見たり本呼んでたりしてたわ、忙しかった三箇日以降は。」

「あの……私はしましたよ。羽根突きや百人一首や福笑いなどを楽しみました。」

「……私より遙かに日本人?!」「ウチより和風だ!?!」「て言うか福笑いって……?」

「百人一首ってさ。確か、全部和歌でできてるんだよね?」

「はい。上の句を読み上げて、下の句の札を取る遊びですね。」

「ああ。アレ、ウチも散々親戚の子達とやらされたわ。拓海なんか一枚も取れへんかったなあ。」

「……………アレは無理だつて。何だよ和歌って……………知らねえよ、普通orz」

「何や、ホンマにだらしないなあ。」

常勝無敗のウチに、常敗無勝の拓海なら丁度ええてよう擲掬われてたわ。」

「……………そう言えば、涼ちんって古典の成績だけは良かったっけ。」

「あたぼっや。京の呉服屋の娘が百人一首も出来んて、物笑いの種になる様なモンやからな。」

「……………そんな事は無いと思うが……………」

「あるんや。少なくとも、ウチのプライドがそれを許さへんのや！」

「……………普段の勉強もそれぐらい張り切ってくれんと、俺も助かるんだがな。」

「う……………スミマセン。」

「……………ハア、まあいいさ。だが、確かに百人一首は為になるな。」

「草薙さんも遊ばれたんですか？」

「ああ、あれはいい鍛錬になるからな。」

「……………た、鍛錬……………ですか？」

「そうだ。記憶力・反射神経・観察眼・瞬時の判断力、その他諸々の要素が鍛えられる。」

先人達の知恵は素晴らしいな。只の遊戯の様でいて、その実、鍛錬も出来るとは。」

「……………その発想は無かったよ（わ）……………」

【おいしい日】

「でも、かがみはそういう体使う遊びすれば、少しは痩せたんじゃないの？」

「ウルサイよ！ はあ……………お餅の所為だなあ……………」

「お餅はカロリー高いですよね。」

マッチ箱くらいの大きさで、御飯だとお茶碗一杯分くらいあるそうですよ。」

「じゃ、かがみは毎回どんぶり飯って事じゃん!？」

「って、アンタだってお餅食べたでしょ?!」

「うち、お母さんいないからお雑煮とか、殆ど食べた事無いんだよねえ。」

「と言うか、お餅自体あんまり食べない。」

「うわっ！ 勿体ないわね……。」

お雑煮、お汁粉、きな粉餅……お餅の美味しい食べ方一杯あるのに?」

「他にも地方によっては、納豆餅とかずんだ餅なんてのもありますね。」

「あ、それもいいわね！ 今度、それで食べて見ようっと」

「あ……こりゃ来年もまたまた、お餅で失敗する感じだね、かがみん」

「うっうっ……………orz」

「泉さんのお家では、お正月はお餅の代わりに何を食べていらっし

やるんですか？」

「ふえ？ ピザとかパスタとか。」

「……………はあ……………？」

「うちの一年は生パスタから始まるんだよ

毎年、年末にパスタマシンをお父さんが洗うんだよね。

あ、知ってる？ あれ、暫く使ってないと錆びるんだよ？

洗わないで使うと……………こう、パスタが真っ黒になっちゃってさあ。

ほんで、それを綺麗にして、で！ 生パスタとピザ生地焼くんだ

」

「本格的ですね。」

「ま、かがみの家はどうせ、ピザは宅配で、パスタは乾麺でしょ」

「……………て言うか、御正月はピザやパスタ食べないし。」

「うそおっ！…!？」

「御節料理おせちに合わないじゃない。」

「合つよおっ！ ローストチキンにはぴったりじゃん！…!」

「……………それっておせちか？」

「え？ おせちだよ？」

「洋風御節なんですね。」

「え？ ………………そういうものなの？」

「……………そういうものだと思うが。去年の桜藤祭に来た雫さんと竜之介さんは、

毎年必ずフランス料理のフルコースを、行き付けの御店に食べに行っているし、

とある親友の家では、毎年満漢全席を大量のシェフを雇って作って貰ってる。

俺の家では、日本人らしく普通の日本の御節を食べているが……………
……………十人分程。」

“…………………………どんだけー。”

【そんな初夢。どんな初夢？】

「でも、お正月って足早に過ぎて行くね。」

「そうだね。冬休みって終わるのが早いね。一応、長期休暇になつてるけど……、」

大掃除したり、年賀状書いたり、宿題やったりで、結構休める時間って少ないよね。」

「「ちょっと待て。(?!)(?!)」

「うぐう〜……。」「

「私達、年賀状貰ってないし！」

「……宿題は、俺のを丸写ししたよな？」

「しかも、それだけじゃバレるからって、私のも併せて写してたわよね?!」

「あつ〜……………そんな事言う人、嫌いですう〜。」「

「……………かがみ。」

「……ええ、勿論……！」　ゴインツ……………！」

「ひぎいっ……！」

「次、そんなフザケた事言ったら、思いつ切り殴るからね？」

「もう殴ってるよおっ……！！？　うう…………………イタイ……………；；；；」

「自業自得やな、こなたん。ナムナムナムナム……………。」

「あはは……………；　あ、そう言えばこなちゃん、初夢見た？」

「ん………あ………何か、見ると縁起が良いつて奴だっけ？」

「そうそう」

「一般的には、一富士二鷹三茄子って言われてるわよね。」

「正式には加えて、「しほふじごたかさんびやくくろくじゅうごう」といって四扇五煙草六座頭「しほふじごたかさんびやくくろくじゅうごう」といってと言つのもあるみたいですよ。

「

「へえ、六まであるんだ。」

「……でもさ。そんなの出て来る夢、普段から見ないよね。」

「どんな夢？ 何？ 『むとじ』って？」

「……まあね。」

「では、教えて進ぜよう！」

「……急にどつたの、涼ちゃん？」

「そういう昔の事は、うちがなんぼでも教えたるさかい、もっとドンドンふってや！」

「……あれ？ ふったつけ、私達？」

「……きっと、聞いたら負けな気がするから、そういう事にしようよ。」

「……そうね。」

「ほな、教えたるで。そもそも、初夢っちゅう言葉が文献上に書かれたんは、

鎌倉時代の『山家集』^{さんかしゅう} うちゅう、西行法師が書いた家集から始ま
つてな。」

「ちよ、ちよ、ちよと待った!」

「……何やねん、こなたん。未だ始まったばかりかやうちゅうに。ト
イレなら早よ済ませとき。」

「そうじゃなくて! ……えっと、その……あんまり一気に詰め込
み過ぎてもアレだから、

今日は要点だけまとめてお願い! 詳しい事はまた、今度聞くか
ら……ね?」

「え〜〜……しゃーないなあ。ほな、飛ばして言うで。」

そもそも、一富士、二ちゅうのはな、色々諸説があるんやけど、
基本的に名物の事や。

例えば、駒込^{こまごめ}やったり、駿河^{すまが}うちゅう昔の国のやったりする地方
のモンやったりな。

他にも言葉遊びみたいな奴もあって、富士は無事・鷹は高い・茄
子は成すつてな具合や。」

「又、四扇五煙草六座頭と言うのも、其れ其れ一富士二鷹三茄子に掛かっていてな。」

富士と扇は、末広がりと言う事で、子孫や商売等の繁栄・繁盛を。鷹と煙草の煙は、運氣上昇や、地位や自身そのものがより高みに昇れる様にといい事も含み。

茄子と座頭は、毛が無いので怪我が無い様にといい事だ。

因みに座頭とは、詳しく説明すると可成り時間が掛かるので或る程度割愛するが、

解り易く言うと、盲人の事だ。按摩や鍼灸師等の職にも就いていた。

総じて頭髪の無い人を指す事もある。漫画等では、老人の姿で書かれる事が多いと思う。」

“……………ばかーん。”

「……………成る程。お勉強になりますっ。」

「……………流石は孝介……………よう知つとるやないか。」

「此の程度は日本人として常識だ。少なくとも、俺は母さんにそう

「教わった。」

「ええお母ちゃんやないか。確かに色々賢そうな母ちゃんやったな。」

「ああ。………所で、香椎。お前には是非共、一つ聞きたい。」

「ん？ 何や、改まって。」

「………何故、それだけの知識を歴史には活かせない？」

「………そんなん、ウチが聞きたいわ。」

何で国語………しかも、古典しかウチは出来ひんねん！！orz」

「………最早、人生の命題だな。」

「あ、あはは………；……； あ、ねえねえ。それって一度に全部見なくちゃいけないの？」

「あ、いえ。全部見られたら凄い福が来そうですけど、確かどれか一つで良かったと思います。」

「良かったあゝ。鷹なら二羽、茄子なら三つ見なきゃいけないのか

「思ったあゝ」

「……………と言つか、ぶっちゃけさ。そもそも見た夢なんて、結構覚えてないモンだよな。」

「そういうの意識してる人は、お正月を楽しんでるよね」

「……………確かに」

「私の初夢は、靴箱を開けたら自分の靴が失くなっていました。」

仕方なく入っていた他人の靴を履いて帰ろうとしたら、

サイズが合わないって夢を見たんですが。」

「……………ふむ。」

「その夢の意味を夢占い辞典で調べましたら、社会的な実力を求めているけど、」

その力が付くには、まだまだ時間が掛かると言う事の暗示らしいです。」

靴はどうやら、社会的な地位を意味するみたいなんですな。」

「なるゝ。あ、なあなあ、ほなウチのはどんななんか聞いてもええ？」

「あ、はい。一応調べて来ましたので、少しは分かるかと思いが……どの様な夢でしたか？」

「えつとなゝ。何やウチの全く知らん人が事故に遭うててな。」

しかも、何でか知らんけど、ウチがその人の手術をする事になつててなゝ。

結局手術は成功したんやけどな。……………何が何やら全く意味が分からんくてなあ。」

「あ、それなら多分、分かると思います。え…………と、確か…………。」

事故を見るといふのは、思い掛けないアクシデントが起こる事の暗示だそうです。

例えば、人間関係でのトラブルや御仕事での失敗などですね。

それで、手術をするというのが、確か……………あ。

目の前のチャンスを逃さない様に。という暗示だったと思います。

」

「ほうほう。つまり、アレやな。」

「何や危ない事が起こるけど、その時の光明を見付けければ何とかなるうちゅう訳やな。」

「オツケーや！ ほんまにおおきに、ゆっきー！」

「いえいえ、私で御役に立てたのでしたら、良かったです。」

「いやあ、ホンマに助かったで。今年はピンチこそチャンスってな訳やな。」

「ほんなら、いつも以上に気張らんな！ な、拓海？」

「ああ、そうだな。これ以上、涼子のダメ夫の烙印は押させないよ
うにしないとな。」

「う……………あ、アホノノノノノ」

「はいはい、バカッフルバカッフル。あ、そうだ。草薙君はどんな
初夢だったの？」

「俺のか？ 俺のは……………まあ、香椎と同じ様なものだよ。」

「……………ごほんっ……………同じ？ ほな、孝介も事故った夢見たん？」

「……………まあ、その様なものさ。尤も、俺の場合は事故った相手は手術もされずに、

俺の目の前でその儘すぐに死んでしまったがな。」

「うわぁ……………新年早々嫌な夢やなぁ。」

まあ、そんな悪夢なんか綺麗サツパリ忘れてまっ方がええやろ。

どうせ、夢なんて何の宛にもならんモンやしな。アツハツハツハツハツハ……………！！！！」

「……………今、みゆきさんに感謝してた人の台詞とは思えない。」

「そ、そこはほら、あれや。……………その……………うう……………ええい！ 細かい事はええねん！！」

「うわっ、逆ギレだ。」

「ウツサイ！！！！」

い。 「

そうだな。 あんな悪夢は

忘れてしまった方がい

あんな

懐かしい悪夢は。

きつと 忘れるべき なんだろうな。
なあ、玲。」

その孝介の眩きに気付いた者は居なかった。

だが、気付けたとしても、何か……いや、何が変わったのだろうか。

その様な事は、神ならぬ身の彼女達には、分かりよう筈も無かった。

新学期、始まりました（後書き）

如何でしたでしょうか？

到頭、波乱（になるかも知れない）一年が、幕を開けました。

果たして、孝介達の身に待ち受けている出来事とは一体？

しかし、今は未だ前兆有るのみ。どうぞ、その時迄、御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

Happy Valentine ? (前書き)

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

Happy Valentine ?

【早めの聖バレンタイン】

Side : 放課後の教室

「ハッピーバレンタイン、草薙君」

「……………ああ、もうそんな時期だったか。有り難く戴く。」

だが、バレンタインは明日じゃ無かったか？」

「あゝ、それなんだけどね。」

どうせ、明日になったら草薙君の机とか凄い事になってそうだから、
う、

今日の内に渡しておこうって、みんなで決めただよ。だから、
はい、私からも」

「……………そ、そうか。気を遣わせて悪いな、有難う。」

「お恥ずかしながら、私からも……………どうぞ／＼」

「……………ああ、有難う。」

「ほら、みさちゃん。」

「うゝ……／＼／＼ ほ、ほら！／＼／＼」

「……日下部もか？」

「か、勘違いするなよなっ！／＼／＼」

あやのがどうしても作れって言うから、仕方なくなんだからなっ
！／＼／＼

いいな！／＼／＼ へ、変な勘違いなんか絶対するんじゃないぞっ
！！／＼／＼／＼／＼

「あ、ああ……分かった。だが、有難く戴くよ。」

「う……………／＼／＼／＼ あやのゝ……………！／＼／＼」

「クスクス……………よしよし、良く渡せたわね。みさちゃん、えらいえ
らい。」

「むうゝ……………（まさか、ライバル出現？ ………………って、そんな訳
ないか、日下部だもんな）。

はい、コウ。私からも。」

「ああ、有難う。……今年のは、やけに凝ってるな。柎に教えて貰ったのか？」

「うう……や、やっぱり、分かる？」

「……そうだな。だが、とても良い出来だと思つ。」

「そ、そう。……あ、アリガト／＼／」

「ふひ／＼／ いやあ、やっぱり改めて渡すとなると、結構気恥ずかしいものがあるよね／＼／」

「そ、そうですね／＼ 矢張り、去年同様、緊張してしまいます／＼／」

「まあ……余り慣れない感覚ではあるわね；」

「……そして、去年の私達がそこにいる訳だね。」

「うう……あやのお／＼／／／」

「はいはい……よしよし。」

「あ……私達、あそこまで酷くは無かったと思つただけど……まあ、似た様なもんか。」

「そだね……………でも、明日は、一体どれくらいチヨコあるんだろ？」

「……………頼むから言わないでくれ。今からもつ鬱が入って、学校を休みたくなるorz」

「あ、あはは……………去年の惨状を知ってる私達からすると、

比喩無しに聞こえるから困るわね……………色々……………」

「……………ハアorz」

“……………草薙（君・孝介）、南無。”

「……………本当に勘弁してくれ。」

side：孝介の部屋

ブルルルル……………ブルルルル……………ガチャッ

「……………はい、葛城だが……………因みに、取材なら一切お断りだ。」

「……………母さん？ 久し振りだね。元気だった？」

「ん？ ……おゝ、孝か。久し振りだな。」

「どうやら、そっちは元気な様だな……………声だけで充分に解る。」

「まあね。そういう母さんは、大分疲れてるみたいだけど……………大丈夫？」

「ん、ああ。つい今し方、研究が一段落した所だな。丁度羽根を伸ばしていた所だ。」

「それより、どうした？ 何か用があったんだろう？」

「あ、そうだ。唯、そこにいる？」

「ん？ ……そういや、誰もいないみたいだな。みんな、どこかに出掛けているんだろ。」

「唯に伝言があるなら、伝えといてやるぞ。」

「あ、じゃあお願い。チョコレート届いたよ、美味しかったって。後、写真有難うって。」

「ん、分かった。用はそれだけか？」

「ああ。それじゃ、母さんお休み。」

「いや、ちょっと待て。未だ、私の方がお前に幾つか用事がある。」

「？ 何？ それより、もう眠いんじゃない？ 話は後で又聞くから、先に寝て来たら？」

「いや、大丈夫だ。既に少し寝た後だからな。ユウがウルサイのなのってな。」

「アハハ……父さんは母さんが好きだからねえ。」

「……………むう。お前も中々に一端の口を利く様になっただじゃないか。」

「クスクス……伊達に高校生はやってないって。」

あ、それより、何か用事でもあったんじゃないっけ？

「……………むう。その話の切り方……益々、私に似て来たな。」

「そう？ まあ、親子だし何処かは似てくるでしょ。……唯にはそこは似て欲しくないけど。」

「全く以て同意する。まあ、取り敢えず本題だ。喜べ、吉報だぞ。」

「吉報？ ……………何だろう。」

何か…………何故か、とても嫌な予感がするのは俺の気の所為かな？」

「……………。(チツ…………相変わらず妙な所で、靈感とでも言つか…………勘が鋭過ぎるな)」

それは間違い無く気の所為だな。余り、普段から気を詰め過ぎて
いるんじゃないか？」

「……………そうかな？ 所で、結局何なの？ 吉報って。」

「おお、そうだったそうだった。」

実はな…………唯と真まことの奴が第一志望の高校に受かったぞ。」

「え?! 本当!? それは良かった…………いや、本当に。」

頑張ってるって話は、雫さん達がバラしてくれたから知ってたけど、

何処を狙ってるとか、そういう事は全く教えてくれなかったんだ
よね。

「一応、健康状態とかは母さんが見てくれてるから、心配いら
ないとは教えてくれたけど。」

「……………まあな。（あの阿呆共め……………何が大丈夫だっただ。物凄
く危なかったでは無いか！）」

「あ、そうだ。それより、何で雫さん達、うちの高校の文化祭の事
知ってた訳？」

母さん……………今度は何を企んでるの？」

「企んでるとは又、人聞きの悪い。私達は何時でも、お前達の幸せ
だけを願っているんだぞ？」

「……………それにしても今迄、大分あれこれと色々な思い出がある
んですけど……………御母様？」

「……………ん、ごほんっ！ そんな事よりもだ。お前には是非共聞き
たい事がある。」

「……………又、誤魔化したよ。全く……………それで一体、何？ 珍
しく改まっちゃって。」

「うむ。隼達とある匿名からの情報でな。色々とお前の学校生活などを聞いているんだが……。」

「良い友達が出来たみたいだな。それに、中々にモテモテの様じゃないか……うん？」

「……………その匿名さんの詳細を是非共、今直ぐ聞きたいんだけど……………」

「教えてくれないよね、きっと絶対……………ハア。」

「まあ、良い友達関係には恵まれているとは思うよ。」

「うむうむ、良い事だ。所で……………だ。ここからが、本当の本題なんだが。」

「……………ねえ、俺、今途轍もなく嫌な予感がするから、電話切ってもいい？」

「当然の如く、ダメに決まっているだろう？ それで……………彼女とはどうだ？」

「……………どう……………とは、一体どういう意味ですか、御母様……………？」

「勿論、言葉通りの意味だ。お前の彼女……………確か……………柊……………か？
み……………とか言ったか？」

その娘とは何処迄いった？ ん？ 手は繋いだか？ もうキスぐらいはしたのか？

あ、告白はどっちからした？ どんな言葉を言ったんだ？

も、もしかして……………もう、最後迄いったのか！？ 詳しく、私にだけ教えなさい！」

「……………もし、教えたらどうするの？」

「そんなもん、聞く迄も無いだろう？」

私を知る限りの、お前を知っている人全員に、言い触らして廻るに決まってるじゃないか。

(ガチャッ！……………ツ……………ツ……………ツ……………ツ……………)
……………何だ、孝の奴め。

相変わらず照れやさんだなあ。まあ、そんな所も可愛いから良しとするか。

どつやら、中々に仲は順調な様だしな。ん？ 今のギャグ……………結構面白いかな。」

思わず反射的に電話を切ってしまった孝介。その日一日、何度も溜息を付き、

気落ちした様子を見せ続けた珍しい孝介が見れたとは、某管理人の言。

その翌日。後に伝説の一つとして語られる、通称『バレンタイン・タワー』が、

孝介を不幸のどん底に叩き落とした事は、想像に難くない。

結局、自身の机と椅子が埋まり切る程に、堆うすたかく積み上げられたチヨコの山を、

溜息を付いた彼がどうしたのかは、読者の想像にお任せする。

只一つ言える事は、その日の学園内では、

何処かで見た事のある様な、忙せわしなく動くメイドさん達と執事の姿
が見られたそうなの。

Happy Valentine ? (後書き)

如何でしたでしょうか？

個人的に、孝介の母の雪ゆきは、萌えキャラだと思っている私です。

そして、年を重ねるごとに数が増えていくチョコの山。

果たして、来年は一体どうなっている事やらw

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

そんな受験模様（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

そんな受験模様

【結果発表！】

「そう言えば、アンタの従妹、陵桜受けたんでしょ？」

「ああ、受かったって 実家だどこまで遠いから、来月からうちに来るんだよ。」

元々、妹みたいなものだし、交流あったから。」

「へえ、そうなんだ。でもアンタと比べると、どっちが妹だか分かんないんじゃない？」

「いや、だから、色んな意味で妹みたいなものなんだって。」

「そんなにちっさいの?!」

「でも、ここすんなり合格って、従妹さん頭良いんだね。」

「取りようによっては、自信過剰に聞こえるよ……在校生でしょ？」

「だ、だって、私は絶対ギリギリだったから……」

「……受験かあ。私達も来年、受験なのよねえ……ハアア……今年一年、勉強漬けか。」

「あ……やだね。」

「受験……するのかな？ まだ全然進路考えてないや。」

「アンタ……本気で将来を考えた方がいいよ。」

「……全くだな。」

「あ、そう言えばコウ。アンタの妹さんも今年、受験じゃ無かったっけ？」

「ああ。唯も友達の実も、見事に第一志望に受かったそうだ。」

「わ、おめでとう。」

「ああ、有難う。」

「凄いじゃない、二人共第一志望に合格なんて。所で、どこの高校に入るの？」

「……いや、それが俺にもさっぱりだな。」

「……………は？ 兄貴のアンタが判らないって、どういう事？」

「……………それがな。どうも、敢えて俺にだけ隠してるみたいでな……………」

何か途轍も無く嫌な予感が、ここ最近ビンビンしてるんだ。」

「……………それは確かに怪しいわね。何か情報とか無いの？」

「いや、それが全く梨の礫でな。」

二人共、何処の高校が第一志望なのかも、点数とかどうだったかもまるで判らん。」

「……………益々怪しいなあ。」

「で、でも、高校に受かったってことは良いことだよ、きっと……………ね？」

「……………まあな。それだけだったら……………いいんだが。」

「……………ア、アハハ…………………………」

【受験模様】

「……………あ、あの……………大丈夫？」

「？……………うわあ……………／／／／／／」

「……………保健室まで、一緒に行こうか？」

「って、声まで掛けてくれて、ハンカチまで貸してくれたの

仲が良い友達が出来そうで、嬉しいなあ」

「でもゆたか。その人、落ちてるかもよ？」

「そんなことないよう！ ああいう人はきっと受かってるよお！……………」

「気持ちは分かるけど……………」

「頭も良いに決まってるよお！……………」

「な、何の根拠もない反論をありがとう……………」

「でもさ、ゆうちゃん。ゆうちゃんが落ちてたらどうするの?」

「きゅう〜……そっちは確かに可能性が……」

「……ズズツ……っはあ〜……。まあ、ゆうちゃんなら大丈夫だろうけどな。」

「そうだ。合格発表の日なら、合否に関係なく会えるかも。」

「なるほど。」

「ハンカチ返さなくちゃいけないし……《合否を問わず郵送にて通知します。》……うう〜……」

「……………」

「う〜……あ、そうだ。」

「ん? どつたの、ゆうちゃん?」

「あのね、実は同じ日に受験した人達の中でね、凄い人を見たんだよ!」

「凄い人?」

「うん。え……と、どう言ったらいいのかわからないんだけど、

その……とっても可愛い男の子と、もんのすっごく可愛い女の子が一緒にいたの！」

「……………そんなに？」

「うん！ とっても仲良しだったから、多分カップルかなあ？ 本当にお似合いだったよ

あ
あの人達も、一緒に陵桜に入ってくれるのかなあ？ 楽しみだな

……………でも、あの女の子……どこかで見たことあるような気が……………？ 気の所為かなあ？」

で、入学説明会兼制服採寸の日。

「あ、あの〜！」

「？」

「これ……………会えて良かったです。ずっと、返そひつと思ってる。」

「……………これを、届けに？」

「はい。」

「……逆に悪かったかな？ もう、会えると思ってなかったから。」

これは、あげたつもりだったんだけど……。」

「あはは……； 私が落ちると思ってたとか？」

「……いや……そうか。今ここにいるという事は……同じ学年……ごめんなさい。」

「あはは……；……受験生の身内だと思われてたんですね……」

「……今日、家の車だから。」

「あ、はい。」

「……じゃあ、いいです。」

「……あ、あのっ！ これから三年間、宜しくお願いします
！」

「ん……。」「

「……フフツ、良かった　高校で早速あんな良い人と友達になれて。」

「……；……；　名前聞いてないや……；　……；……；　って、アレ？」

もしかして、あのリムジン……あの人の……？　あ、通り抜けちゃった。

「……；……；　アレ？　学校の方に向かっている……？　もしかして、誰かのお迎え？」

「……；……；　あ、あの人達……！　あの時の可愛い人達だ……！」

「す、凄い……；……；　もしかして、どこかのお金持ちのお嬢様とかなのかな？」

「……；……；　あ、行っちゃった。……；……；　あんな凄い人達と、お友達に……；……；　は、さすがになれないよね。」

「……；……；　今度会ったら、ちゃんと名前聞きなよ？」

「……うん」

「て言うか、リムジンって……どっかで見た事ある様な……無い様な……？」

ゆーちゃん、もしかして気分とか悪い？」

「う、うん……少し車に酔っちゃったみたいで……。薬、飲んだんだけど……。」

「ごめんね……心配かけて。」

「ゆたかは本当に体弱いからねえ。」

「いや、それもそうだけどっ！ 少しは自分の運転癖も自覚しようよ、お姉さん！」

私でも……うつぶ……少しくるよ……；……；

「……でも、出身中学から陵桜に行くの、私だけだし……。」

今日みたいにすぐ体調崩しちゃうし……クラスに馴染めるか、心配だなあ。」

「ゆたかは良い子だから、大丈夫だって」

「むう……子供あつかいしてえ……！」

「（ん）……病弱＋妹属性＋純粹＋可愛い＝歩く萌え要素……なるほど。」

ゆーちゃんは、ウチのクラスに来たらモテモテだね　みゆきさん
んと組んだら、益々凄そうだ」

「「???」」

「……はっ！　でも、待って……。と言う事は、ゆーちゃんがウチのクラスに来たら、

かえって大変な事に……。あわわわ……。！　ゆーちゃん！

ダメ！　ダメだからねっ！　ウチのクラスに来たら、絶対にダメ」！

「お、おお、お姉ちゃん、落ち着いてえ〜……」

「そ、そうだよ、こなた。急にどうしたの？」

「……い、いや……何でもないよ、うん。……これは早急に対策を取らなければ。」

あ、ちょっと、私、友達の方に電話してくるから」

「……う、うん。……急にどうしちゃったんだろ、お姉ちゃん？……」

「……ちあっ…」

其の後、こなたが掛けた電話が巡り巡って、有志と言つ名のクラス総動員で、

紳士淑女達による『ゆたかちゃんを護ろうの会』が、極秘裏に結成されたのは言う迄も無い。

後に、現在の二年や新一年も加わり、陰に日向にと見護り続け、

遂に卒業する迄、本人に気付かれる事無く、見事に仕事を完璧にやり遂げた事は、余談である。

そんな受験模様（後書き）

如何でしたでしょうか？

ようやくと登場、ゆたかの嫁ことみなみちゃんです。この二人は本当に可愛いですよ。

そして、何やら怪し気な雰囲気、謎の二人が登場。果たして、一体誰なのでしょう？

………って、バレバレですよねw ですが、答えは今暫く御待ち下さいw

ちょっと、今期はもう少し引き延ばしたいと思いますのでw

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

ゆーちゃんの良い子(前書き)

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

では、今話も拙作を御覧下さい。

ゆーちゃんは良い子

【1対面】

「御邪魔します。」「おーっす。」

「やぶ。紹介するよ、この子が従妹のゆーちゃんだよ。」

「は、初めまして／＼／ 小早川ゆたかです／＼／」

「私の友達のつかさとかがみと草薙君だよ。」

「ああ、じゃあ皆さんがお姉ちゃんがよく話してる……。」

「へ。何て言われてるのかしら?」

「えう。……／＼／＼／」

「……アンタ、どんな風に教えてんのよ。て言うか、何を吹き込んだのよっ!」

「反応見りゃ、察しは付くけどっ!!!／＼／」

「ねえ? 教えた通りでしょ?」

「……泉。後で少し、話し合おうか？」

「ぬおっ！？ め、珍しく、草薙君まで怒ってるう！？」

「……当たり前だろう？ 無垢な少女に、一体何を吹き込んだのやら。みっちり聞かないとな。」

「あ、あはは……」

「ゆたかちゃん、もう卒業式終わったの？」

「あ、はい、先日。」

「卒業式かあ……懐かしいね。」

「私、卒業式って覚えてないなあ。」

「ゆたかちゃんは、誰かから第二ボタンとか貰った？」

「あ、いえいえ、そんな；うちの中学はブレザーでしたから。」

「そっぴや、最近そっぴいう学校多いからね。」

「あ、卒業って言えば、コウ。アンタの妹さん達のも、もう終わったの？」

「ん？ ああ、昨日終わったそつだ。卒業式の写真が送られて来た。」

「へ〜……で、結局まだどの高校に行くのかは、分かってないわけ？」

「……ああ、依然として不明瞭な儘だ。」

「何とも歯痒いが……まあ、流石に新学期になったら教えてくれるだろうさ。」

「……うん、だといんだけど。」

「……あ、あのう……。」

「「ん？ 何（どうした）？」」

「はうっ……あ、あの……お、おふたりは……「こ、恋人……なんですよね？」」

「ふえ？ ……（ポフッ）／／／／／／／／ち、ちちち、違っ

って／＼／

わ、私とコウはそんなんじゃないってば／＼／＼／＼ ね、ねえ、コウ？／＼／」

「……………うん、まあ……………恋人……………では、ないな。」

デートもしょっちゅうしてるし、殆ど俺の部屋に入り浸っているが……………恋人ではない。」

「……………そ、そうなんですか……………？」

あの……………でも、お話聞いていると、どう聞いても恋人にしか……………。」

「まあまあゆーちゃん。この二人はどんな事があっても、絶対に認めないツンデレさんだから。」

でも、公然とみんなの見てる前で、キスとかしてれば普通はそう思うモンだけどね。」

「……………き、キス……………あわわわ／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

「あ、あはは……………／＼／＼ た、たしかに、あれは見てる私たちの方が結構恥ずかしいかも／＼／＼／＼／」

「う……………わ、悪かったわね……………／＼／＼／＼／＼／」

「……………善処する。」

「え？ 中学と高校で違うところ？」

「うん……………」

「うん……………部活動が強制入部じゃないところとか。」

「それは学校によるんじゃない？」

「うちは進学校だから、中学に比べて学習内容が多くて早いかもね。」

「後、通学時間がかかるから、少し体力使うかも。」

「決定的に違うところは、小・中・高になるにつれて、居眠りの時間が長くなるってこと！」

「特に苦手科目（きりつ）」

「あー！ それはあるかも！ 先生の言葉が外国語にしか聞こえなくなってる……………」

「そうなるともう、意識が遠退のちいちゃって……………」

「……………くれぐれも、あんな風にだけはならないようにね。」

「は、はあ………」

「……どうしても分からない所は、俺が教えてやるから大丈夫だ、問題は無い。」

それから、その二人は後で纏めて説教だ。」

「はづううっ！！？」

【嗚呼、懐かしき思い出】

「あ、ゆーちゃん、中学の制服持って来たんだ。」

「うん。うちの制服地味だから、私服として着れるかなって思ってた。ここ、地元じゃないし。」

「なるほど。かがみたちは制服とかどうしたの？」

「私達は近所の年下の子達とかにあげたわよ。あんたは？」

「私の？」

「まあ、アンタのじゃ貰い手ないだろうけど」「あはは……」

「ウルサイな、シツレイだな……」。

「私のはゆーちゃんと同じで、コスプレ用にちゃんとしてあるよ」

「じっ、じっ……」

「……そういう言い方すると、いやな感じになるな。」

「だって、コスプレじゃ〜ん。」

「まったく……コウは、制服とかどうしたの？」

「俺のか？俺のは……捨てちまったな。」

「え？ そうなの？ 勿体ない……誰かにあげたりとかしなかったの？」

「いや、誰かにあげられる程、御近所付き合いは余り良く無くてな。」

「何せ、両親の職業が職業なものでな。余り、明けっ広げには出来無かったんだ。」

「あゝ……懐かしい反応ね。私達も最初、こんな感じだったっけ。」

「あ、あはは……；；；； 実は私たちも、今でもまだ信じられなかつたりして……；」

「……まあ、それは分かるよ、うんうん。」

「………何とも、反応に困る回答をどうも。」

【年長者】

「ハッロオー！ エツブリワーンツ！ 遅くなったけど、ゆたかー！ 卒業オメデトー！！」

「おー、姉さんいらっしゃーい。」

「」「御（お）邪魔してま（ゝ）す。」「」

「お、なになに？ 今日、珍しくハーレム状態だねえ！ むふふ

「？」

「ふえ?! / / /」「そ、そんなんじゃないありませんよう / / /」「
そ、そうだよ、ゆい姉さん / / /」

「まったくです…… / / / ね、ねえ、コウ？」

「勿論だ。」

「「「「……(むう)……、」「」「」

「……何故に、睨まれる？」

「ふむふむ……ま、いいや。今日は卒業祝いつてことで、みんなで
飲みにいくか！」

おじさんも誘って、奢っちゃおうよ〜!!」

「おー!」「お姉ちゃん、ダメだよそれはあゝ……」

(いえ、お姉さん……我々まだ未成年なんですけど。)

(ジューズってことだろ……多分。曲り形にも警官だぞ? 幾ら何
でもそんな……なあ?)

(……でも、こなたの従姉さんよ?)(……言下に否定出来無いの

が悲しいな。)

「お姉ちゃん；わたしたちはそういうお店にはまだ入れないと思うけど……………」

「んう……………あっははは　そ〜いうのは堂々としてればバレないモンだつて

あたしも学生の頃よくやったけど、一度もバレたことなんてなかったよ」

「やたー」「だ、ダメダメ、絶対ダメ！　ダメだよ、お姉ちゃんつてばー……………」

(いやいや、主にあなたの身内二人のせいでバレますつてば。)

(……………残念ながら危惧していたことが現実になってしまったか。)

(……………そうね。是非共、外れて欲しかった現実ね。)

(……………ああ。だが、何としてもこれは全力で止めなければな。)

(ええ、ここが今日一番の山場ね。)

《密かに臍ほそを固めた二人。何とか、この日は難を逃れられた皆であったとさ。》

『ゲームとかすごいよね！ コミュニケーションも範囲が広い！
料理とか家事が出来る！』

お姉ちゃんって本当にすごいね！！』 キラキラな眼差し

「……………最近、姉としてのプレッシャーが分かるようになってきたよ……………」

あの瞳で見られると、頑張らないとって思うよね……………かがみん、
草薙君……………」

「……………はあ？」「……………今更か。」

『車で暴走するゆい姉さん。酔っ払って実家に来るゆい姉さん。何かといい加減なゆい姉さん。』

「……………でも、やっぱり人によりけりなのかなあ……………？」

「……………取り敢えず、分かるように話してくれ。」「いや、言いたい事は分かるんだがな。」

「話の前後の脈絡くらい、自分の脳内だけで完結させてないで、私達に話しなさい。」

全く意味が判らないでしょうが。……いや、何となくは分かるんだけど。」

「いや……年長者は大変だねって話だよ……orz」

「ああ、それなら良く分かるわ（な）……」「」「」

ゆーちゃんは良い子（後書き）

如何でしたでしょうか？

私は一人っ子なので、兄弟のいる人がとても羨ましいですね。

まあ、親友の弟は私にとっても弟の様なものなので、其処迄寂しくは思いませんでした。

後、一話程、この章は続きます。その後は……到頭本編です。どうぞ、御楽しみに。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

変わらない日常、変わり行く日常（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂き、有難う御座います。

今回で、二年次も終わります。

これで、ようやくと今迄の（バレバレだった）フラグが回収出来ます。いやあ……長かった……；

では、今話も拙作を御覧下さい。

変わらない日常、変わり行く日常

【お花見】

「かがみって、変なところでアクティブだよな。」

「だって、今日お花見しとかないと、満開逃すし。」

「明日行こうかなあ？ 明後日にしようかなあ？」

とか思っていると、雨なんか降って散り始めちゃったりするんだよね〜。」

「せやな〜。何や、花見て言えば、大人たちがどんちゃん騒ぎしてるイメージが強うてなあ。」

どうにも、団体やないと行き辛うて叶わんわ。」

「……………まあ、気持ちは分からんでもないが。」

だが、ここにはそういう連中は余り見えないな。」

「確かにそうだな。……………ここらは治安がいいのかねえ？」

「……………さてな。だが、落ち着けるに越した事は無いさ。」

「そりゃそうだ　　久し振りにのんびりできるのは有り難いよ、やっぱり。」

「ねえねえ、涼ちん。何か拓海っち、いやに大人びて来てない？」

「あ、やっぱこなたんも分かる？　どうもなあ。」

この前、正月にウチの実家に来た際に、何や色々あったみたいだな。

その……………んんっ／＼　　す、少しずつでもな／＼

ウチの旦那に相應しいように頑張るって……………その……………言ってくれて…な／＼／＼／＼

「あ……………はいはい、ゴチソウサマ。ん……………でも、なるほど、そういうことか。」

「男の子は、何か切欠があればすぐに大人になっちゃうって聞いたけど……………」

「……………事なのかしらね？」

「うん。たしかに、今の拓ちゃんって、なんか大人っぽいよね。」

「そだね。草薙君と一緒にいると、より大人びて見えるというか…」

ある意味老人みたいにしが見えないと言うか。」

「……………まあ、孝介やしな。ある程度老成しとるように見えるんは、しゃーないやろ。」

「……………ん……………コウの場合は老成とかそういうんじゃないで、

何か……………色々と諦めてるようなだけの気がするのよね……………最近特に。」

「……………おおっ！ 流石は、非公式な公然たる嫁！ 言うことが違いますなあ」

「う、うっさい！／／／／／／／ てか、嫁って言うなー！／／／／／／／／／／／」

「そのツンデレ具合がまた、何とも…………… っ……………うっ……………ブルッ……………」

「結構、寒くなってきたよね……………」

「まだそんなに日が長くなったわけでも無いしね。そろそろ帰る？」

「夜桜見物って、うっかり昼間の格好で来ちゃつと冷えるよね。」

「座っていると、お尻冷たくなっちゃつし。」

「三月の平均気温は、十二月の平均気温と同じぐらいで、

四月は十一月と同じくらいだと聞いた事がありますよ。」

「う〜……十一月とか十二月とかだったら、絶対もつと厚着するのにいー。」

「三月・四月だと、何となく薄着しちゃうわね。」

「いい加減、冬物着るのに飽きてるからじゃないの?」

「やっぱり、早く春になって欲しいという気持ちの表れじゃないでしょうか。」

「ん? かがみん、元気だね〜……。」「……?」

「もしかして、毛糸の……………? 準備万端か。」「履いてないわっ! / / / /」

「う〜……かがみん、なんで平気なん？　ウチなんか、拓海の上着
着せてもろてもまだ寒いで？」

「何でって言われても……；　単に、私が寒さには強いっただけだ
と思っけど…」

「……そして、何気にバカッブルぶりを見せ付けながら、少し照れ
てる涼ちゃん萌え」

「……………ウツサイわっ／／／／／／／／／／／」

【洋風高級住宅地ってどんなの？】

「折角だから、春休み中にみゆきさんの家に遊びに行ってみようよ。
」

「お〜、いいわね。場所遠いから、行ったことないしね。」

「みゆきさんの家ってお金持ちなんだよね？　どんなんだろ？」

「ん〜……庭にプールがあったり。」

「いやいや、家の前に警備員とかいたり」「いや、もっと普通だろ。」

「あ、ペットとか飼ってそうだよな。」

「イメージ的にフェレットとかかな？ 白いの。」

「い〜やいや、犬だよ〜。白い大きな犬！ 大きな庭で白いパラソル！」

「まあ、犬くらいはいるかもね。」

「せやなあ。ウチらも和風の高級住宅やったら、なんぼでも語れるんやけど、」

「洋風は全く分からんなあ。拓海もせやろ？」

「ああ、そうだなあ。俺も、一般的なイメージでしかないし。孝介はどうだ？」

「そうだな。参考になるかどうかは分からないが、俺の知ってる洋風住宅なら。」

“ うんうん！ 教えて教えて！”

「……………取り敢えず、プールとパラソルは完備。警備員はいない。

執事とメイドが、全員段持ちレベルでの武術を学んでいて、その役割を兼任しているからな。

ペットは、ドーベルマンが数体と、白くて毛が多い大型の犬が二体……………と言った所か。

それと、フェレット数匹と、鳥類が何種類か飼っている。

他にも、木々が沢山あるから、飼ってはいなくとも住んでる動物は可成りいるだろう。

この前、久し振りに寄った時は、栗鼠^{リス}も見掛けた。結構人懐っこかったぞ。

自分から、足元に寄って来て肩に乗って来たからな。」

“……………ほへ……………（ポカーン）。”

「……………だがまあ、あれは例外中の例外だろう。」

宛にして期待外れだ、などとは決して思っなよ？ それはこちらにも失礼だからな。」

“はい！”

「……という感じで話が進んでるんだけど。」

「……歓迎ですが、草薙さんが仰った豪邸ほどではありませんので、どうか、くれぐれも期待しないで下さいね； 済みません、ペツトも飼ってなくて……」

あ、でも、うちには白い大きな犬やパラソルはありませんが、近所にそういうお宅はありますよ。」

「へえ〜。」

「で、その家の子が、今年陵桜に入学するんだって。」
「へえ〜……。」

「その子呼んで貰って、ゆーちゃんも行く?」

「私の友達の従妹の子が、陵桜に入学するらしいんですよ。……」

「結構世の中って狭いよね()んですよね。」

s i d e : . . . ? ? ?

「はう〜……長かった……今日までもすつつつ〜く長かった
よう〜……」

「あ、あはは……；でも、良かった。僕達、二人共ちゃんと合格
出来て。」

「うんっ　それに、後から二人共来るんだよね？」

「うん、転入手続きにね。何せ、僕達全員揃って満点通過だったら
しいから。」

「えへへ〜　孝ちゃん、誉めてくれるかなあ〜

あ〜あ……早く孝ちゃんに会いたいなあ〜。」

「そうだね、僕も早くカイ兄に会いたいな。でも、後少しの辛抱だ
からね。」

「ここまで来たんだもの。もうちょっとぐらい我慢するのは、簡単だよ。ね？」

「うんっ、勿論！」

「お待たせしました。」「わりい、わりい。」

「もうっ。遅いよ、二人共っ！早く行こっ　もう、待ちきれなくって」

「クスクス……さっきから、ずっとウズウズしっ放しなんだよ？」

恋人さんなんだから、ちゃんと構ってあげてね？」

「ええ、勿論分かっていますよ。」

「にしても、今急いだって、別に時間が早まるわけじゃねえんだしよ。」

そんなに慌てることあねえだろ？　まあ、ワクワクする気持ちは分かるけどよ。」

「もうっ。本当に兄さんはデリカシーが、全くって言って良い程、

無いよねっ!」

「そっだーそっだー! もっ……これだから、乙女心の分からない人はダメね。」

そんなんだから、モテないんだよ?」

「うっ……い、痛いところを的確に突いて来るじゃねえか……。」

流石は、あいつの妹なだけはあるやがるぜ。」

「少なくとも、今のまんまじゃ絶対にモテない事だけは、ボクが全身全霊で保証してあげるっ」

「……………」

「……返事がありませんね。まるで、只の屍のようです。……余りにも情けないですねえ。」

「……………ウッセエ……………グスン。テメエに分かって堪るか……………俺の気持ちなんか。」

「ええ、勿論、微塵たりとも分かりませんとも。」

私達は、産まれた時から御互い惚れ合っていたのですから……。

モテたいなんて、そんな醜い願望は持ち合わせては居りませんのでね。」

「……………このバカップルどもめえ〜……………!!!」 血の涙

「おや、有難う御座います。それは、私達にとっては、何よりの誉め言葉ですからね。」

「ほらほら、二人共ー！いつまでもじゃれ合っていないで、早く行こー…!」

「そつだよ、兄さん。もし、こんな所で暴れてカイ兄にバレちゃったらどうすんのさ。」

今迄の、僕達と母さんや父さん達の苦勞が水の泡だよ？」

「……………チツ、分かったよ、もう。」

「クスクス……………では、早いところ行きましようか。」

もう彼女が、本当に待ちきれないみたいですから。」

「おつよ。」

「はーやくー!」「はいはい、今行きますよ。」

春。別れの季節にして、出会いの季節。

今年の微風そよかせが運んで来た……そして、運んで行く種は、果たして何処に実を結ぶのか。

そんな事を熟々じゆじゆと思いながら、部屋から見える桜が散って行くのを、

その儘、眠りに就く迄、見るとも無しに見続けていた孝介であった。

変わらない日常、変わり行く日常（後書き）

如何でしたでしょうか？

私、あの『世の中って狭いよね（ですよね）』ってシーン、大好きなんですよねw

そして、最後の四人……ええ、もうとつくのとうにバレバレですよw

ですが、敢えて誰とは言いませんw 答え合わせは次話にて。

ひよっとしたら、次話を投稿する迄、少々時間が掛かってしまうかも知れませんが、

どうか御諒承下さい。どんなに遅くとも、来週中には確実に投稿出来ると思いますので。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。又、新学期……新たな物語の始まりにて。

轟く激動、駆られる激情〜前編〜（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

何と！ この話を投稿した時点で、

既に、100,000アクセス&ユニーク8,000人を超えていました！！！！

皆様、このような駄作を幾度も読んで下さり、心より感謝致して居ります。

又、新章という節目に、このような幸せを迎えられた事は、作者として何より嬉しい限りです。

より一層の精進をすると共に、今後共どうぞ孝介達を宜しく御願致します。

と言う訳で（？）、今話から五日連続で一話ずつ00:00に、既に全話予約投稿済みです。

上がった先から読むもよし。続きが気になられる方は、纏めて読むもよし。どうぞ、御楽しみ下さい。

長々と失礼致しました。では、今話も拙作を御覧下さい。

盡く激動、駆られる激情〜前編〜

side：孝介

今日は新学期に於ける在校生最初の登校日。

分かり易く言うならば、始業式だ。入学式は既に何日か前に終わっている。

そして、今日も俺はトースト二枚・ハムエッグ二枚・ブラックコーヒー三杯で軽く済ませ、

何時もの通り、かがみ達に会える事を楽しみにしつつ、アパートの自分の部屋を出た。

「あ……………」

「……………御早う御座います。」

「あ、うん。お、おはよう……………」

幾つか隣の浪人生……………否、元浪人生だった。

去年、何とか念願の大学に入る事が出来、今年から新大学生として新たな出発を切っていた。^{スタート}

どうやら、大学を出た後で、正式に漣さんに告白して交際を申し込むらしい。

だが、既に現時点で本人にもバレバレな上、誰もがその結末を予測出来る為、

四年後の残念会の準備を現段階から、そう多くないアパート住人総出で計画中らしい。

可哀相とは思うが、これも世の常。彼には申し訳ないが、涙を呑んで諦めて貰う他は無いだらう。

他の起きていたアパート住人達とも挨拶を交わし、

外にある、ボロボロに錆びて何時壊れるとも知れない階段を下りた。

其処には、アパートの玄関先を掃いている管理人の漣さんの姿があった。

俺が漣さんを見付けると、漣さんが俺を見付けるのがほぼ同時だったらしく、

漣さんの方から近付いて来て、俺に挨拶して来た。……………にやついた笑顔で。

「おっはー、孝介君　ここ最近、毎日楽しそうだね

毎日が楽しく思えるのは良い事だよ、うんうん。

あたしなんか、昨日の孝介君の所為で、腰が痛くて痛くてもう…

…。」

「……御早う御座います、澪さん。朝から、そういう話題は止めて貰えません?」

「えー、何でよー、ぶーぶー。あ、も・し・か・し・て　今更、照れてる……とか?」

「……………」

照れる照れないの問題以前にですね。

曲り形なりにも公共の場で、しかも朝からそういう話はどうかと思うんです。

抑そもそも、昨日誘って来たのは貴女ですし、殆ど寝かせてくれなかったのも、貴女の所為でしょう?」

そんな事は口が裂けても言えず、只、不満顔だけを顕わにして抗議していた。

すると、今にも吹き出しそうに口元を抑えて、何時もの綺麗な笑顔で揶揄って来た。

「プツ……くふふふ…… もう、そういう所はいつまで経っても初心で本当に可愛いなあ」

お姉さん、孝介ちゃんのそういう所、大好きよん」

「……………おほんっ！ と、とにかくっ。朝からそういう冗談は止めて下さい。いいですねっ？

では、俺はもう行きますから。」

「はあ〜い 気を付けてね〜 うぶぶ……………」

遠目にも判る程、何時迄も口元を抑え腹を抱えて笑っている漣さんをさて置いて。

時間も時間な為、歩いても一応通える距離をバスに乗って向かった。

その日が自分にとって、人生の分岐点となる事も全く知らず」。

side：三人称

「しかし……改めて思うが、この学校……幾ら何でも広過ぎやしないか？」

今更ながらの事を誰とも無く呟く孝介。

両親の事とは全く無関係に、最早学園内では有名人となっている彼が、

思わず溜息を付いてる姿を見た他の女生徒達は、キヤアキヤア黄色い声をこっそり上げていた。

それに気付いているのかいないのか。孝介が唐突に彼女達に振り返

った。

否、正確には彼女達の後ろから聞こえて来た声に反応して振り返った様だ。

「えう〜……………眠いよう……………」

「全く……………昼まで寝る癖付けるから……………あ、こなた。おーっす。」

「……………お、おおおお……………」

「……………何？ アンタも眠り癖？」

「……………かれこれ、三日徹夜でゲームして……………死にそう……………」

「くう〜……………！ こいつら、だらしないとこばっか似やがってえ……………！」

かがみが握り拳を作って、殴りたい……………！ という意志を必死で抑え付けていた時であった。

その隣から声が聞こえて来た。かがみにとって、誰よりも愛しい人の声。

その声に振り向いた彼女の笑顔は、今迄怒っていたとは思えない程、

とても綺麗な笑顔だった。

「……相変わらずだな、二人共。」

「あ、コウ。お早う」

「ああ、御早う、かがみ。……寝不足とゲームのし過ぎって所か？」

「そのまま、ズバリね。……全く。」

「……………本当に相変わらずだな。ほら、二人共。しゃっきり立って、掲示板に行くぞ？」

「……………ふあ（はあ）〜い……………」

今直ぐにも頼れそうな二人を、抱き抱える様にして立ち上がらせた孝介。

隣で、少し睨む様にしてその様を見てるかがみに、ちょっと慌てた仕種おんぐしをする孝介であった。

其の後、言い訳も済んだ頃。何とか立ち上がった二人と共に、掲示板に向かった。

「あ、また同じクラスだ」

「あ、ホントだ　良かったあ」

「お早うございます。」「おは。」「よ。」「よ。」

「あ、ゆきちゃん、涼ちゃん、拓ちゃん。おはよ。」

「おはよー。みゆきさんと涼ちゃんは同じクラスだよ。拓っただけ違っけど。」

「あ　ほんとですね　良かったです」

掲示板を見ていると、みゆきと拓海と涼子が合流した。

これで、いつものメンバーがほぼ勢揃いし、先に見た方から結果報告を受けていた。こなたたち

「うっ……！！　何でまた、ウチが拓海と離れなあかんのや！　きつと黒井センセの陰謀や！」

「ま、まあまあ； そんな恐ろしい事、大声で言うなって…」

「あ、あはは………ま、また一年間、よろしくね〜」「よ
ろしく〜」「ふふっ」

「うつつ……拓海い〜」「はいはい。後で幾らでも愚痴聞いて
あげるから……な？」

とまあ、当然の事ながら阿鼻叫喚も聞こえて来る訳で。

その頃、とある似非えせ関西弁教師が嚏くしゃみをしていたそう。

そして、そんな楽しそう(?)な声が聞こえて来る反面……一方で
は。

「……あ。」「……かがみ。」

「……また、かがみだけ違うクラスだね。しかも、今回は草薙君ま
でコッチのクラスだし。」

「ただでさえ顔合わせる機会が多いんだし、クラスぐらい別になっ
てくれないと私が疲れるわ。」

「……お姉ちゃん。」「……残念ですね。」

思わず沈黙するかがみ達。偷閑あかしのちに肩を落とすかがみに寄り添う孝介。

流石にこればかりは、世の中は儘ならぬものと思わざるを得ない。

（実はかく言う作者も、親友の内の一人とは一度もクラスが一緒になつた事がないので、

その寂しい気持ちも良く解るのである。……………あれは、本当に物淋しいよ、うん。）

そんな風に作者が愚痴っていると、かがみがアツケラカンとした声を出し、

何時も通りだと言って、皆に話し掛けた。

「別に。いつもの事でしょ？」

それにどうせこなたや涼子辺り、ノートだの教科書だの借りに来るんだしい〜。」

「読まれてるね〜」「……………ま、まあな〜」

「……………取り敢えず、お前達。」

忘れる事を前提にしていたのならば、後々説教するから覚えておく様に。」

「さ、サーイエッサー……………」「」

孝介の冗談とも本気ともつかない台詞に、思わず背筋を伸ばす二人。多分、本気であろう孝介のその雰囲気、ついパプロフの犬状態になる二人を見て、

思わず爆笑する皆。周りからも忍び笑いが漏れ聞こえていた。

一頻り^{ひとしき}御互い笑い合った所で、孝介とかがみを残して、皆で先に教室に向かった。

その後には、孝介の胸で肩を震わせている少女がいた……………が。

何かを孝介に耳元で言われた後、急いで掲示板を確認し、

恥ずかしそうに頬を掻く可愛らしい姿が見られたとか何とか。

あの後、少ししたら峰岸と日下部がやって来て、その儘一緒に教室に向かう事になった。

かがみ……中学から一緒に奴を忘れるなよな。まあ、それも或る意味かがみらしいが。

「じゃあ、かがみ。又、後でな。」

「あ、うん　また、後で。」

そう言つて、御互い軽く抱き合う俺達。ん？ …………… ああ。確かに何時もの事だが？

そして、何故か相変わらず苦笑している日下部と峰岸をさておいて、御互いの教室の前で別れ、一旦は教室に入って先生の到着を待つ俺達。

チャイムが鳴った直後、慌てて教室にボサボサ髪で飛び込んで来る黒井先生を見た時、

（あ……………まあ、少なくとも今年も退屈しない一年になりそうだな。）

そんな事を、ふと思った。

その後、眠たい式もあっさり終え。

教室に皆でぞろぞろと戻って来る頃には、流石に黒井先生も落ち着いて来た様だ。

だが、どうも何時もと違って、今日は様子が変だ。

誰かを待っているかの様な……ソワソワした感じている。いや、焦っている……？

何より。何時もならば、とっくのとうに決め終わっている筈の各委員会決めに未だやってない。

黒板に列挙したものの、どうやら只の時間稼ぎの様な感じに見える。

そう皆が訝しんでいた時、黒井先生の携帯に電話が掛かって来、俺達に教室に残ってる様に言って、急いでその教室を出て行ってしまった。

何事かと多少不安になりつつも、黒井先生が帰って来るのを皆で雑談しながら待ち続けた。

思っていたよりは、早くに戻って来た先生。

どうやら、誰かを連れて来た様で、人の影が廊下からチラチラ見えている。

それを見た他のクラスメイトが、ざわざわとし出した。

そして、それを待っていたかの様なタイミングで、

それ迄の黒井先生の挙動不審の説明が、ようやくと本人から為された。

「いやあ、みんなスマン！ ちょっと色々事情があつてな。

実は今日。ウチのクラスと隣の3-Cに転校生が来んねん。

んで、そいつらの用事うちゅうのが終わってから来るうちゅうんで、ウチラは待ってた訳や。」

「せんせー。男の子？ 女の子？」

「……………ふっふっふ。知りたいか？」

“ 知りたーい！！！”

「……………相変わらず、黒井先生のクラスは一致団結振りが凄まじいな；」

何度聞いても、女子の黄色い悲鳴という奴は慣れない。

そして、男共は相変わらず欲望に忠実だ。……………それで良いのか、お前達？

俺が思わず嘆息を呟くと、真後ろの席にいた涼子が声を掛けて来た。
……………そういうものか？

俺が半ば呆れながらその様子を見ると、廊下側の窓の外からチラツと金髪が見えた。

女子は更に歓喜の声を上げ、男共は更に忌々しいとばかりに齒^は軋^りを立てた。

そして、俺は。

何か……………嫌な胸騒ぎがしていた。

「ほな、どっちもいつまでも待たせるんもアレやし。早速入って来て貰おか。」

ほれ、とっとなんて来〜。」

「……………」。

「……………ッ?!?!」

そして 入って来た転校生を見た俺の思考は停止し。

その瞬間から、俺の時間は動きを止めた。

盡く激動、駆られる激情〜前編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

果たして、孝介は一体何故、思考が停止する程の衝撃を受けたのか。

その理由は、24時間後に予約投稿した次話にて。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

盡く激動、駆られる激情〜中編〜（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

ほぼ日本全体が、可成り激しい地震に見舞われましたが皆様は御無事ですか？

私は、家族共々辛うじて無事でした。只、父は今日中には仕事先からは帰って来られないそうです。

皆様も、どうか警戒を未だ緩めず、御気を付け下さい。油断した瞬間が何より、一番危ないのですから。

では、今話も拙作を御覧下さい。

轟く激動、駆られる激情、中編、

side: 31B 教室 by 三人称

黒井先生に呼ばれた転校生が教室に入った途端、教室内は水を打った様に静まり返った。

確かに黒井先生の言う様に美形だ。いや、美形……としか形容の仕様が無いのである。

染めた訳では決して無いその自然な金色の髪と、

翠と蒼のオッドアイが、彼の美しさを更に際立たせていた。

それを証明するかの如く、先程迄騒いでいた女子も、憎々し気に歯軋りを鳴らしていた男子も、

皆一様に言葉を失い、息を呑んでその美しさに只管、魅入っていた。

「Nice to meet you. My name is
Arus Kreis.」

「お、流石は本場……綺麗で流暢な英語やな。どや！ むっぢや驚いたやろ！」

あ、そうそう。因みに、ホンマもののイギリス人やで。……
ん？ どしたん、草薙？」

「……………ッ！！！」

その転校生が教室に入って来てから、ずっと顔を伏せ肩を震わせていた孝介だったが、

それに気付いた黒井先生にそう問い掛けられた孝介は、

まるで弾け飛ぶ様に立ち上がり、つかつかと黒板まで……………いや。

黒板の前の壇上にいる、その転校生に近付いて行った。

その転校生は、笑顔の儘で孝介が近付いて来るのをじっと見ていただけだった。

一体、どうしたのだろうか。孝介が何をしようとしているのか、誰にも皆目検討が付かない為、

只、黙ってその様を見ていた。否……………見ているしか出来無かった。

何故ならば。

ダンッ！！！！「グッ！？」

「……………?! んなっ!? な、な、行き成り何しとるんや、草
薙！！」

はようはなs……………」

「ウルセエエツツツツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

誰もが初めて聞いた、孝介の有らん限りの怒声。

それはクラスメイトは勿論、当の先生本人ですらも、自分が何を言
われたのか理解出来ず、

思わず茫然自失とするしか出来無かった。

そして孝介は、転校生の胸座むなぐいを掴み上げ黒板に叩き付けた儘、襟首
ごとグイッと持ち上げ

その彼に対し、何時に無い程の怒気と険しい顔を伴って、問い詰めた。

「テメエ……！！ 一体、何を考えてやがるツツ！！！！ アルスツツツ！！！！！！」

「……けほつ。……久方振りの再会の歓迎の仕方にしては、少々手荒過ぎませんか？ カイ。」

彼は、アルス「クライス」。

カイと呼ばれた孝介の親友にして、彼の妹である唯の恋人。その人であった。

此処で時間は少し遡る。隣の……かがみのクラスへと舞台を変えて。

side:31C教室

其処も水を打った様に、静まり返っていた。但し、隣のクラスとは違い、その意味合いは異なる。

恐らく190cmは超えるであろう高身長と、制服の上からでも判るその筋骨隆々とした体躯。

そして何より、その如何にも野性的な風貌が何をしなくとも、十分な程の威圧感を感じさせた。

「ん〜。んじゃ、さっき説明した通りだ。序でに自己紹介しといてくれ。」

「ウイッス。俺は時任渡^{ときじつわたる}。カイの親友だ。取り敢えず、一年間宜しくな、お前ら！」

その身体から発せられた大声が又、他のクラスメイトを驚かせ、気弱な人をより怯えさせていた。

そして、『カイって誰?』そんな疑問の空気が、教室内に充満していた。

だが、そんな事などまるで気にも掛けず、キョロキョロと教室内を見回し始めた。

何事かと思い、担任の桜庭先生が問い掛けた。

「……ん? どうかしたか、時任?」

「んー、いや。こん中に、柊って奴はいるか? 柊かがみって女。」

「ん？ 何だ、お前柎の知り合い……って感じでもなさそうだな。」

「ああ。名前しか知らねえんだがな。ちょっと、用があつてな。で、どいつ？」

「……面倒なトラブルは起こしてくれるなよ？」

「大丈夫だつて！ で、誰なんだ？」

どうやら見た目通り、余り他人の話を聞くタイプの人間では無いらしい。

すると、全員の視線がとある一人の少女に注視された。

その当の少女は困惑気味だ。………それもそうだろう。

何せ見ず知らずの転校生が自己紹介もそこそこに、行き成り自分の事を訊ねて来るのだから。

そして、それを目敏く見た渡が皆の注目を浴びる中、その少女の席にドストドスと歩み寄る。

其の後、その少女を覗き込み、盛大に響めつ面をして、こんな事を呟いた。

「……………ん？ ……？ 本当にアンタが柀かがみ？ 思ってた奴と全然違うな。」

いかにも気が強そうだなあ、おい。 …… 本当にこいつがか？」

「…………… ちょっと、アンタ！ 人の顔を見るなり、行き成り失礼ですよ！

一体、私に何の用なのよ！」

「…………… やっぱり、見た目通りか。カイの奴、一体何があったんだ？

…………… まさか、弱み握られてるとか？ いや、あいつに限ってそれはねえな、絶対。」

「ちよつとツ！！ 聞いているのツ！」

自分の言いたい事だけを言っつて、何かを呟く渡。

それも、精々かがみに聞こえる程度の声量でしかない。

そのでかい身体で、そんな小さな声が出せるのか。そんな事を思っつかがみであった。

だが、まるで他人の話を聞いていない態度に、かがみは益々苛々が募り思わす声を荒げるも、

ギロリと睨まれ思わず怯むかがみであった……が……。

「……うつせえな、聞こえてるよ。そんな事よりお前に聞きてえんだがよ。」

お前、カイとはどんな関係なんだ？」

「……そもそも、カイって一体誰の事よ？ …… …… って、カイ？

どっかで聞いた事あるような……？」

「あ……チツ、めんどくせえな。カイってのは、アイツの事だ。」

孝介。葛城孝介だ。 …… …… あ、今は草薙孝介だったか？ とにかく、そいつの事だ。」

いんだろ？ 隣のクラスによ。そいつとの関係を聞いてんだよ、早く答える。」

その甲高い声にイラッと来たのか、思わず声と言葉に棘とげが入る渡。

その余りにも居丈高いたけだかに聞こえる訊き方と唐突つぷりに、

誰の事かやっとなつたかがみは、思わず激昂した。

よりにもよっての相手だったからである。出歯亀デバガメは御免蒙ごめんこうむりたい。

「……………！！ ぶざけないで！ そんな訊き方がある！？

大体、それが人にものを聞く態度な訳！？ それに、コウとの仲って一体どういう意味よ！？

なんで、見ず知らずのアンタなんかそんな事、一々言わなきゃいけない訳！！？」

「おい、テメエ、今なんだった？」

「……………な、何よ…………。行き成り凄んで見せたって…………。」

「ウルセエよ。いいから答える。今、テメエ、あいつの事をなんて呼んだ？」

「……………コウ、よ。それがどうしたって言うのよ?!」

怒りを顕わにしたかがみの台詞の中にあつたとある言葉に、その表情を一変させた渡。

初めて見た人ならば、誰もが怯える様なその恐ろしい形相に、当然の如く怯むかがみ。

それにも何とか耐えて、少し震えた声ながらも、しっかりと返答するかがみであったが、

その言葉を再度聞いた渡は、顔を片手で覆い、まるで幽霊でも見るかの様に、

かがみを見詰めながら、何事かを側にいるかがみにしか聞こえない小さな声で何事かを呟いた。

「おいおい、マジかよ　　嘘だろ？　あいつがその呼び方を認めた……だと？」

まさか………両親とアイツ以外に………そんな事が………なら、本当に本気だって言うのか？

あの野郎………まさか、アイツを忘れるつもりじゃねえだろうな………。

いや、あいつに限ってそれはねえ。ある筈がねえ………よな。

チツ………益々カイの奴に色々と聞かねえといけねえな。………ん？」

その弦きが終わった頃であった。隣の教室から壁に何かを叩き付ける様な大きな音がした。

思わず、今迄渡とかがみに注目していた全員の視線が壁に向けられた。

……………どうやら、件の孝介の教室の方からの様だ。

その音を聞き付けた渡がまるで獰猛な動物の様に、歯を剥き出して笑みを作った。

そして、誰に聞かせる訳でも無い言葉で……………誰にも聞こえる声で呟いて教室を出て行った。

「……………ハッ！ 早速やってやがんな。やっぱ、アルスの奴、カイの説得に失敗しやがったか。」

「しゃーねえな。ちよっくら、俺も行くとするか。」

そして、舞台は先程……孝介がアルスを黒板に叩き付けた場面に戻る。

side：再び31B教室

教室では、相変わらず物音一つせず。

只、カイと呼ばれた孝介と、未だ胸座むねくらを掴まれた儘のアルスの、二人の会話のみが流れていた。

「そんな事はどうでもいい!! 俺は、どういふ事が聞いてんだよ
ツツ!!!!」

「ウグツ……! わ、分かりましたよ……御話しますから……この
手、どけてくれませんか?」

「……………ッ！…いいから話せ。」

「…！グツ……………！（こ、これは……………参りましたね……………；……………；……………）

ま、まさ…か、ここまで……………カイ……………が……………激怒……………する……………とは……………。

或る……………程度は……………覚悟してい……………いました……………が……………想定外も……………甚だしい……………！…！）」

そんなアルスの思惑も知らず、少しずつ持ち上げる力が強くなっていき、

流石に、余裕を見せていたアルスにも、苦しみの表情が見えて来た。

丁度、そんな時だった。教室の扉が乱暴な音を立て、猛烈な勢いで開けられたのは。

「おうおう！！ 相変わらず、ハデにやってやがんなあ、カイ！アルス！」

「 渡。やっぱり、テメエもか。」

「当たり前だろう？ アルスの奴がここに来て、何でこの俺がいないなんて思うよ？ なぁ？」

そう。隣のクラスに転向して来た、時任渡。孝介の第二の親友。その人であった。

「そんな事よりも、そろそろアルスの奴を放してやれよ。流石に苦しそうだからな。」

「……………チツ。ほらよっ！」

「……………おっとと……………ゲホツ。……………ハア……………ふう。一応、御礼は言っておきますよ、ワタル。」

「ヘッ！ 気にすんな。テメエでも死なれちゃ、目覚めが悪いだろうからな。」

「……………で、これは一体どういう事だ。いい加減、答えろ……………ア

ルス、渡。」

渡の台詞に、アルスの状態をようやくと確認したのか、忌々しそうに手を振り解く孝介。

恐らくは…だが、態と皆に聞こえる様に大きく深呼吸して、少しは落ち着いたのか。

未だ顔と声に怒気は多分に混じってはいるものの、何とか話を聞く事ぐらいは出来そうだ。

そう判断したアルスと渡は、改めて孝介に事の経緯を話した。

「では、私から。分かり易く言いますと、唯がこの高校に入りたいと言って来たのですよ。」

「……………唯が？ 本当か？ ………………珍しいな、あいつがそんな我が儘言うなんて。」

「ええ、勿論。以前、ここの高校に見学に来た時、何か気に入ったのでしょうね。」

「珍しく、雪さんや大祐さんに自分から御強請りおねだしていましたから。」

「……それは確かに珍しいな。で、それにお前は付いて来たと言う訳か。」

「はい、当然です。後は貴方さえ説得出来れば、晴れて唯とは公認の恋人になれますからね。」

「どうやら、他の人は完全に無視して三人だけで話を進める様だ。」

一字一句聞き逃さない様にしている人達に、若干苦笑混じりで話を続けるアルスと渡。

一方、孝介はそんな事を気に掛けている余裕は全く無い様だ。

「もうとっくに、あの両親も認めてる所か早く早くって責付せついてるぐらいなのによ。」

相変わらず頑固っつーか、シスコンっつーか……なあ、アルス？」

「……ワタル。例え、そう思っていようと、例えどんなに事実であるとしても、

言っではいけない言葉というものがあるのですよ?」

「……………渡。」

「ゲツ！？　そ、そんな事よりもだ！　まだ話は終わっちゃいねえぞ！　な、なあ、アルス？」

「……………仕方有りませんね。これでさっきの借りは返しましたよ？」

「……………あゝ、分かった分かった。だから早くしてくれ。カイの奴の視線が痛過ぎる……………」

自業自得だろ。クラスみんなの心が、今この瞬間初めて一致した。

そして、溜息を一つ付いて再度孝介に、アルスが話し始めた

「……………ハア。それですね。唯が行くならばと、サナも一緒に付いて来まして。」

「……………で、当然の如く、仲間外れにされると思ってた渡の奴も来た……………と、そういう事か。」

「ええ。ちゃんと、僕達も雪さん達全員に許可を頂いて来ていますから、御安心を。」

寧ろ、向こうからの頼みで全面協力をして頂きます。

何より、当の僕達よりも、雪さん達の方が余程楽しんでいらっしやいましたね。」

「……………そんな心配はしていない。まあ、あの人達ならば当然だろうな。」

「あ、勿論、僕達四人共、全員満点通過しましたよ。ちゃんと、後で誉めてあげて下さいね。」

「……………言われる迄も無い。それより、お前仕事はどうするんだ？」

「ああ、それならば大祐さんが、今年一年は活動を縮小すると仰って下さいましたよ。」

僕達は、学業と最後の高校生生活を楽しんで来い……………とね。」

其処迄聞いて、やっと納得したのか。孝介の怒気もようやくと殆ど薄れ、

今迄の緊張の極みの様な教室内の空気も、幾分か萎しぼんで来た様だ。

すると、どうした事か。孝介が唐突に帰り支度を始めたのだ。

「……………フン。あの親父らしいな。」

「……………カイ？ 一体何をしてるのですか？」

「見りゃ分かんذار、帰んだよ。」

これ以上、テメエラの下らねえ茶番になんぞ付き合っ
てられるか
……………バカバカしい。」

「おや、本当にいいのですか？」

「……………どついう意味だ？」

すると、アルスが孝介に意味深な言葉を投げ掛けた。

案の定、孝介が引っ掛かった。その言葉に何かとても嫌な予感がし
て、

鞆を肩に掛けた儘、思わずアルスに振り返って問い質ただしたのだ。

それに対し、満面の笑みでアルスが孝介に質問をし出した。

「おやおや、本当に御忘れなのですか？」

「……………俺はどういう意味かと聞いている。禅問答をする気など、毛頭無い。」

「これは失礼。では、他ならぬ貴方に質問です。」

今、私は『私達全員ここに受かった』と言いました。間違い有りませんよね?」

「……………ああ、確かにそう言った。それがどうした?」

「では、御聞きしましょう。この後、HRが終わった後に、唯はどつするでしょう?」

「どつって……………そんなモン、教室から勢いよく飛び出して……………
テメエ……………アルス!!」

嵌めやがったな!!!」

どうやら、アルスの言いたい事が分かったらしく、孝介は又、眉間に皺を深く刻んでいた。

それを確認したアルスは、更に笑みを深くし、白地あかじなまな言い訳をした。

「おやおや、これは酷い言い掛かりですねえ。私は只、事実を思い出させてあげただけですよ?」

寧ろ、実の妹の事を忘れるなんて、彼女が聞いたら泣いてしまうかも知れませんねえ。」

「……………チッ！勝手にしろッッ！！！」

そう吐き捨てる様に言うと、鞆を机の上に乱暴に置き、椅子を乱暴に引いてドツカと座った。

後ろの机に勢い良く椅子が当たっていたが、

今の孝介には、そんな事を気にしている余裕は全く無かった。

腕を組み、唸りを僅かにあげていながらも、色々と諦めた様子の孝介を見て、

ようやくと胸を撫で下ろしたアルス達と、クラスメイト達であった。

「……………ふう。さて、ワタル？ 貴方もそろそろ自分の教室に戻った方がいいのでは？」

「……………。」

「へいへい。まあ、カイの奴にいつまでも睨まれるのも、割に合わねえしな。」

んじやな、カイ！ アルス！ また、後でな！！」

そう大声で言つて、またもや乱暴に扉を閉めて、乱暴に隣の教室の扉を開けた様だ。

結局其の後、あの手この手を使って、アルスは孝介の隣の席に座り、尚々、孝介から強く睨み付けられるのであつた。

盡く激動、駆られる激情、中編、（後書き）

如何でしたでしょうか？

次話は、唯編です。果たしてその時、唯と真人は一体何をしていたのか。

それは、再度24時間後に予約投稿した次話にて。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

盡く激動、駆られる激情、後編、（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

今回は、唯編です。とは言いながらも、孝介達も普通に出て来ます
が；

では、今話も拙作を御覧下さい。

轟く激動、駆られる激情〜後編〜

side：11D教室 by 唯

あ、皆さん初めまして！ ボク、葛城唯って言います！

孝ちゃんこと、葛城孝介の妹です！ あ、今は草薙でした。……てへっ

それで、今ボクは親友のさな君……米倉真人君と一緒に教室にいます。

実は、ボク……孝ちゃんに内緒で、

孝ちゃんがいる高校、この陵桜学園を受験して入学しちゃいました！

しかもっ！ 何と二人揃って満点通過なのですっ！ どう！ 凄いでしょっ！ エッヘン

孝ちゃん、誉めてくれるかなあ………エヘヘ あ、それでそれでっ。

ボク達が今、何をしているかって言うと、何と実は自己紹介の真っ最中なのですっ！

「……………岩崎です。宜しく……………」

「さな君、さな君！ あの子、カッコイイ！」

「うん、そつだね。僕よりもちょっと低いぐらいだし……………」

「うんうん さな君と並ぶと……………あ、凄くお似合いのカップルかも」

「も〜……………唯ちゃん、揶揄わないでよ。」

それに、今の僕は今迄以上に、唯ちゃんを護らなきゃいけないんだから。」

「クスクス……………うん、分かってるよさな君。言ってみただけ」

「……………もう。」

一人一人の自己紹介の度に、さな君と一緒にあれこれ言っています。今の子はとっても格好良かった！ 美人さんって、本当にお得だね

それで、次に自己紹介した子が、物すつつつつごく可愛かった！
！！

だってだって！ ボクよりちっちゃいんだよ！？ うっ……早くあ
の子、抱き締めたいっ！

そう思っつて身悶えしてたら、先生に呼ばれたんだ。

「じゃ、次。葛城ー。」

「ふにゅ〜…… ……あ、はい」

「唯ちゃん……くれぐれも気を付けてね？」

「うんっ、モチロン」

さな君の苦笑混じりの言葉に元氣付けられて、ボクは席を立ち。

そして、ボクは今壇上に立ち、これから自己紹介をするのですっ。

「初めましてっ。葛城唯です。」

「……お、おい。あの子ってもしかして……？」

「あ、ああ。俺もテレビで見たことあるぞ……！」

「本当に、あのテレビに出てた子？」

「確か………六道大祐と、ノーベル賞取った葛城雪の子供よね？」

ボクの顔を見て、名前を聞いてみんなざわつき出したの。

やっぱり、みんなあの放送見てたんだ。でも、分かってた事だから、ボクは大丈夫。

だから、すっと息を吸って、予め考えてた事をそのまま喋ったの。

「えっと。ボクの事をテレビとかで御存知の人もいますけど、

ボクはそういうの嫌いです。みんなとは普通の友達になりたいです。

あ、でも、男の人は済みませんが、近付かないで下さい。」

“……………へ？”

やっぱり驚いてる。……………ううん、意味が解らないってとこかな？

でも、ボクはみんなの様子には気付かない振りをして、

一気に言わなきゃいけない事を全部、言い切ったの。

「あの、ボクがって言うより、孝ちゃん……………ボクのお兄ちゃん達が絶対に許してくれないので。

なので、もしボクに何か用事がある時は、済みませんが孝ちゃん達を通して下さい。

あ、女の子達は勿論、別です。ドンドン話し掛けて下さい！

みんな、これから三年間、宜しくねっ
「

よしっ。ちゃんと言えた　やっぱり、変な空気になっちゃった…
…でも、しょうがないよね。

だって、こつでも言わないと、みんなの方がよっぽど危険な目に遭
っちゃうんだモン。

それに何より、ボクは孝ちゃん達に危ない事、して欲しくないんだ
モン。

「……………そ、それじゃ……………次……………米倉、頼む……………」

「あ、はい。じゃ、ちよつといつて来るね」

「……………」

先生もちよつと困った様子で、次のさな君を呼んでた。……………ゴメン
ナサイ、先生。

……………さな君、何て自己紹介するのかなあ？ 何て言うのか教えてく
れなかったんだよね。

私の自己紹介の台詞考えてくれたの、実はさな君だったから、

そのさな君自身がなんて言うのか知りたかったのに……………さな君
のケチ。

でも、だからかな？ さな君が何て言うのかちょっと楽しみかも

side: 真人

あ、皆さん、初めまして。僕は米倉真人。渡兄さんの従弟です。

さっき、唯ちゃんが自己紹介で色々言ってたんだけど、その補足を僕がこれからします。

だって、あんまり酷い事とか、唯ちゃんには言わせられないからね。

それが、僕とカイ兄とアル兄と兄さんの……僕達四人の昔からの決め事だから。

そして今の僕は、唯ちゃんのたった一人の騎士ナイトだからね。

……さてっ。気合い入れますかっ！

「初めまして、米倉真人と言います。唐突ですが、先程の唯ちゃんの言葉の補足をします。

唯ちゃんに何か用事のある男の人は、唯ちゃんのお兄さんの孝介さんか、

僕か、僕の兄さんの渡兄さんか、唯ちゃんの恋人のアルス兄さんに必ず許可を取って下さい。

そうじゃないと、肉体的・精神的・社会的に、比喩無しで抹殺されますので。」

“……………は？”

うん。全く想像通りの反応だね。「冗談にしても度が過ぎる……………みんなの考えはそんな感じかな？

甘いなあ　　本当に甘い。世の中っていうのは、そんなに甘くないんだよ？

……………まあ、みんなそんなには、苦労知らずの世間知らずで生きて来てるんだろっから、

或る意味、仕方ないとは言えるんだけどね。

だから、僕がここではっきりと言っておかなきゃいけないんだ。

みんなの考えている程度の非日常っていうのは、本当にすぐそこにあるんだって。

いつ、自分達が巻き込まれるか解らないんだから、警戒しておかないといけないって。

例え、僕がどんなに嫌われても。例え、憎まれ役になっただとしても……ね。

「因みに、冗談でも脅してもありません。只の事実です。既に何人が体験していますので。」

あ、女性の方は気にせず好きに声を掛けて下さい。でも、男の人はダメです。

では、そういう事ですので、宜しく御願います。」

やっぱり、みんなポカーンとしてるね。ま、それも当然だろうけど。

……ふん、睨んでる人が何人もいるね。イイ度胸してる人も
いるんだね……可哀相に。

成る程……お近付きになりたい人の方がやっぱり多いね。ま、しよ
うがないか。

取り敢えず、今の所これから三年間、僕が一人で唯ちゃんを護らな
いといけないんだし。

少しでも多く、味方……いや、友達を作ればいいんだけどなあ……
…。

そんな事を色々と考え、席に戻りながら、僕は唯ちゃんと大成功の
ハイタッチをしたんだ。

……結構、大変なんだよ？ たった一人のお姫様プリンセスを護る騎士ナイトつ
て言うのはね。

side:三人称

何とも強烈な自己紹介が終わったHR後。早速、唯に群がる人が溢れた。

何人かそれに紛れて唯に触れようと画策した不埒な男がいたが、

速攻で潰されていた……………主に他の女子の手で。

どうやら、あの自己紹介はさておいても尚、唯の余りの可愛らしさに保護欲が湧いて出た様だ。

当の唯本人も、非常に嬉しそうに笑い合っていた。

その輪に入れず、それを遠巻きに見ていた他の女子にも、

唯自ら近付いて行って、握手したり抱き付いていたりしていた。

その中でも、自分より小さいゆたかと、そのゆたかと仲の良いみなみが特にお気に入りの様だ。

ゆたかに至っては、もう殆どメロメロにやられている状態の様だ。

……………丁度、こんな具合に。

「はう〜…………ゆたかちゃん、かあ〜い〜よう〜???」

「はわわわ……／＼／＼／＼／＼／」

「んにゅ〜……スリスリ。ん〜…… さな君、さな君！」

「ダメだつてば。お持ち帰りなんかしちやダメ。小早川さんだつて困つてるでしょ？」

「え〜……だつて、こんなに可愛いのにい〜……。」

「うう〜……／＼／＼／＼／」

「ふみゆ〜…… ゆたかちゃん、可愛い可愛い可愛いい〜い〜い〜
??????」

分かり易く一言で言うならば、物凄い猫っ可愛がりである。

ゆたかを自分の膝上に乗せ、後ろから抱き締めて頬をスリスリ。

その余りにも嬉しそうな笑顔に、誰もが苦笑し中々引き剥がす事が出来ないで居る。

するとみなみが、ゆたかの為に助け船を出した……のだが。

「……あ、あの……そ、そのくらいで……。……小早川さんが気分悪くなるといけないし……。」

「あ、そっか。ゴメンね、ゆたかちゃん。少し、気分悪い？」

「はう〜……だ、大丈夫……です。」

「そっか、良かった。それと、敬語はいいってば。ゆたかちゃんもなみちゃんも……ね？」

「は、はい……じゃなくて……うん。」

「……そ、その呼び方は……ちよつと……／／／」

「その照れ方がもう……すっすっごく可愛いつー!!」

「……／／／／／／／／／／」

『なみちゃん』という聞き慣れないニックネームに、抵抗感からなのか恥ずかしさからなのか。

顔を赤らめて出来れば止めて欲しいと懇願しているのだが、

それが尚の事、唯の萌えポイントを擦った様で、却って気に入ってしまった様だ。

その御陰で（？）、満面の笑顔で喜んでる唯を止められる猛者はそうそう居らず。

その止められる数少ない一人が、溜息を付いて唯を二人からようや
っと引き剥がした。

本来の目的を忘れない様にと、釘を刺しながら。

「……………はあ。ほら、唯ちゃん。そろそろ行かないと、カイ兄達
帰っちゃっよ?」

「…!?! いっけない! ゆたかちゃん達の可愛さに、すっかり忘
れてた!

じゃ、また明日ね、ゆたかちゃん! なみちゃん! ボク、先行
ってるね、さな君!!」

「あ、ちよつと待つてよ、唯ちゃん! じゃ、みんな。僕達はこれ
で。」

ちよつと、唯ちゃんってばあ〜!!」

その真人の言葉を聞くなり、膝の上に乗せて抱き締めていたゆたか
をそつと降ろし、

急いで鞆を引っ掛けて教室を勢い良く飛び出して行った。

その唯の後を、同じく急いで鞆を引っ掛けて、叫びながら教室を出て行った。

台風一過とでも言うべきものに翻弄され、

なんだかなあという気持ちでその儘帰途に着いた、クラスメイト達であったそう。

side:31B教室

その教室では、再度剣呑な空気が漂っていた。

HR終了後の今、教室には腕を組んで相変わらず不機嫌さMAXで唸っている孝介。

その隣でニコニコ笑顔でいるアルス。と、そのアルスの隣でニヤニヤしている渡。

そして、その渡をアルスの反対側の孝介の隣で睨んでいるかがみ。

と、それを遠巻きで引き攣った笑顔で眺めている友人達………と
いう構図であった。

その構図を眺めて、アルスと渡が孝介を揶揄い始めた。

「おやおや。中々に大人気……いえ、モテモテじゃないですか、カ
イ。」

「……………うつせえ。」

「クツクツク……………いやあ、まさかカイの奴にこんなにダチが出
来るとはなあ。」

「良くもまあ、こんな無愛想のままだったカイと一緒に居れたもん
だ。」

「うつ……………!」

「おお、こええこええ。カイ、しっかり手綱ぐれえ握つとけよ。」

「……………渡。」

「おっと……………。こっちの方がよっぽど怖ええや。」

そう言いながらもけらけらと笑っており、とてもでは無いが全然怖がっている様には見えない。

そんな感じで二人で孝介を揶揄い続け、孝介とかがみが二人に唸っている。

そんな状態が暫く続いていた。何故、孝介達は未だ帰らないのか、

何時迄この教室に居るのかとか、疑問は幾つもあったが、最大の疑問としては……………。

「……………ね、ねえ……………何で草薙君、服脱いでるんだろ？」

「さ、さあ……………／／／」

「あ、あはは……………／／／ お、男の人の裸って……………恥ずかしくて見れないよう／／／」

「……………そ、そだね……………／／／」

「……………むう、中々にセクシーやないか。あのセクシーさは拓海には無理やな。」

「ああ、無理だな、どう考えても。てか、本当にアイツ……………何考えてやがんだ？」

そう。今、孝介は制服のボタンを全部開け、更にはシャツのボタンも上半分迄開けていた。

因みに、肌の露出は然程さほどでは無い為、身体中に刻まれている傷跡は巧く隠し通せている様だ。

かがみが顔を赤くして唸っているのは、そんな状態の孝介に、

さっきからずっと、抱き締められた儘でいるからでもあったりする。

その理由が判らず、見慣れていない女性陣が顔を赤くし思わず照れていると、

何かに気付いた様子のアルスが孝介に話し掛けた。

「おや、どつやらそろそろの様ですよ、カイ。」

「……分かっている。かがみ、済まないが少し離れて貰えるか？」

「え？ ……う、うん／＼」

そう唐突に言っただかがみを自分から離し、席を立って扉を正面にして立ち構えていた。

すると、廊下からタツタツタツ……という軽快な足音が聞こえ、ガララッ、バンツ！ という大きな音を立て、美少女が入って来た。そのとても可愛らしく、見る者全てを魅了する程の美少女は、自身の目の前にいる者が誰か認識すると、誰もが一目惚れしてしまう様な満面の笑みになり、

教室の扉を開けた時同様、勢い良く孝介の胸に飛び込んで来た。

「孝~~~~~ちゃ~~~~~ん?????!!!!!!!」

「よっ……と。久し振りだな、唯。」

そう言って、飛び付いて来た少女を抱き留めその子の頭を軽く二回叩き、

その姿勢の儘、少女の長い黒髪を梳き撫でた。

その感触がとても心地良いらしく、少女は顔をふやけさせて更に孝介の胸に深く顔を埋めた。

「ふみゅ~~~~」

孝ちゃんの匂い……? 孝ちゃんの厚い胸

板……???

孝ちゃんの優しくて大きい手に……???

孝ちゃんの温かさ…

…???

うにゅうにゅ

間違い無く、ボクの孝ちゃんであ〜?

?????

「はいはい。元気だったか、唯？」

「うんっ！ 孝ちゃんに会って、もっともっと元気になった!!」

「そうか……それは良かった。」

「うんっ えへへ〜〜???

……”

その甘えっぷり、甘やかしっぷり、そしてその少女から出た台詞に、誰もが思わず思考が停止し。

孝介が初めて見せた本当の満面の笑みに、残っていた殆どの女子生徒がK・O・されていた。

それを分かっていたアルスと渡は、苦笑混じりながらもニヤニヤし

ていた。

すると、後からもう一人分の足音が聞こえて来た。

その少年は教室に着くと、ホッと一息付いて、

孝介達と、孝介に未だに抱き付いている唯に話し掛けた。

「……………ハア。何とか大丈夫だったみたいだね。」

「……………サナ、久しぶりだな。」

「うん、カイ兄。久しぶり……………元気だった？」

「ああ。お前も元気そうで何よりだ。」

「おいおい、真^{まな}。遅えぞ？」

「しょうがないでしょ、兄さん。唯ちゃん、僕よりも足速いんだから。」

多少なりとも緊張していたのが解れたのか。そう言って、髪を掻き上げる真人。

その前髪で見えなかった本当の素顔を、思わず意図せずに見せる事になった。

その素顔の程度は、その場にいた先輩方から黄色い声があがり、何人か気絶した程だった。

あつちやあゝ…という顔をする孝介達。解らずは本人ばかりなりであつた。

「？ あ、それよりもカイ兄。外でセバスチャンが待つてるから、早く行こ。」

「……セバスチャンが？ …………… まあ、いいか。」

取り敢えず、向こうで落ち着いてから、ゆっくりと訳と理由と事情を詰問きつもんしようか。」

「……………孝ちゃん、今の『きく』って絶対、字が違ってた。」

「さてな。それより、早く行こうか。……………済まない、かがみ。」

そういう訳だから、また明日な。」

「……………あ、うん。また、明日ね……………コウ。」

その女生徒達の謎の行動が理解出来ず、小首を傾げる真人。

其の後、以前学校に現れたあの執事が外で待っていると孝介達に伝えた。

それを聞いた孝介は何事かを思案し、結局それに頷き後に続く様だ。そうと決まったら、早速皆を促して外に出ようとし、かがみと帰りの挨拶を交わした。

その時だった。

「
「
」

今、何て？」「
」

「え？」

かがみの最後の台詞……それが、孝介の側に居た三人を如実に反応させた。

丁度今さっき。自身のクラスで其処に居る渡という転校生が、

自分に向けて来たのと、全く同じ視線を投げ掛けて。

そして、恐る恐る……自分達が今聞いた言葉が、嘘であってくれとでも言いたそうな顔と声で、

三人共、まるで幽鬼か何かの様な様子でかがみに問い掛けて来た。

「……………今、貴女は……………カイの事を、何て仰いましたか？」

「え……………こ、コウ……………って……………」

「……………うそだ。」

「……………孝ちゃん。」

「……………ハア。いいから行くぞ、お前等。悪いな、かがみ。こいつらも悪気は無いんだ。」

出来れば気にしないでやってくれ。ほれ、いつまでもポケットとしてないで、さっさと行くぞ。」

あれ程の異常な反応を見せ付けられて、気にするなと言う方が無理だ。

だが、どうも孝介には余り追求して欲しくない所らしい。

何となく、嫌な空気が固まっている所に、思わぬ所から助け船が来た。

「そうそう。外でセバスチャンが待つてんだろ？ 早く行こうぜ？」

「……………ワタル。貴方は驚かないのですか？」

カイの両親と 『彼女』 以外の人が、『コウ』と呼んだのですよ？」

「充分に驚いてるよ。でも、俺の方が先に聞いてたんでな。

俺も最初聞いた時は、お前等と全くおんなじ反応したぜ？」

「……………そうですね。分かりました、では早く行きましょう。」

唯、サナ。諸々の話は後程。……………宜しいですね？」

「……………あ、う、うん。」

「では、行きましょう。御待たせしました、カイ。それでは皆さん。又、明日御会いしましょう。」

そう言って、若干茫然自失の態で五人してぞろぞろと出て行った。

何が何だか、訳が分からない友人達とクラスメイト達を置き去りにして。

其の後、彼女達が気が付いて教室を出る迄には、暫く時間が必要だった。

盡く激動、駆られる激情〜後編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

少々無理矢理な感は否めませんが、どうか御見逃し頂ければ幸いですorz

後2話程で、一応この話は終結の予定です。

あ、最終話と言う意味では有りませんので、御安心を。

果たして、何故孝介はアルス達に対して怒ったのか。

彼等は一体、何処に向かって行ったのか。

何について話し合つと言うのか。

何より、アルス達が心底驚く程の名前『コウ』には、どのような意味があると言うのか。

そして……一体、どんな結末が待っているのか。

それらは、再々度24時間後に予約投稿した次話にて。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

盡く激動、駆られる激情、終編、（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

今回は、タイトル通り話の纏め編です。果たして、孝介達の話とは一体どんなものか。

では、今話もどうぞ拙作を御覧下さい。

盡く激動、駆られる激情、終編、

side：三人称

正門前に停まっていたリムジンに孝介達が乗り込み、走り出してから凡そ三十分程。

その眼前には、巨大な豪邸が映っていた。此処は、以前孝介が話していたあの豪邸であった。

その豪邸の門扉もんびを潜り、屋敷の中に入る一同。

メイド達の出迎えを受け、セバスチャンに促される儘ままに進み、

居間とは呼べない程の巨大な憩いの場にて皆で落ち着き、今ようやつと一息付けた所である。

因みに。席位置は、複数人用のソファーに孝介と、孝介に学校からずっとくっついている唯。

その目の前の長大な机を挟んだ対面の同じソファーに渡と真人。

そして、孝介達を右手に、渡達を左手に見た、机の端にある位置に置いてある、

ふかふかな椅子にアルスが、それぞれ座って居た。何れも如何にも豪華絢爛である。

「此処に来るのは……………一昨年の夏休み以来か。」

「それで御座いますね。もう、そのくらいになりましたでしょうか。」

それにしても、皆様お揃いになられるとは、一体いつ以来でしょうか。

私を始め、屋敷の者一同、首を長くして御待ち致して居りました。

「それは済みませんでした、セバスチャン。先ずはこれから三年間、宜しく御願いますね。」

「はい、畏まりました。三年と言わず、いつでも、何時迄もいらっしやって下さい。」

「……………有難う、セバスチャン。」

この屋敷の主であるアルスに、満面の笑みで応える執事。相変わらず、関係は良好な様だ。

そうこう言っている間に、皆の目の前に紅茶が置かれ、それぞれ口を付けてホツとした。

それを置いた後、セバスチャンを含めた他のメイド達は全員退席していた。

そして、再び重い空気がこの部屋に伸し掛かり出し、

話を進める為にも、この空気を払拭はらいつくする為にも、先ず孝介から口を開いた。

「で？ お前達は何でこんな事しているんだ？」

「……それは私から御話致しましょう。」

「分かり易く一言で言いますとね、貴方が心配だったからですよ、カイ。」

「………心配………だと？ 別に俺の一人暮らしは、今に始まった事じゃ無いだろうが。」

そのアルスの言葉に思わず首を捻^{ひね}る孝介。

そう……孝介自身が言う通り、孝介の一人暮らしは中一の頃からだ。その一人暮らしが心配だなどと、それこそ今更だろう。

だが、どうやらそういう事では無い様だ。そうでは無いと、アルスは頭^{かぶり}を振って言った。

「……………違いますよ、カイ。一昨年の夏休み、私と唯が貴方の所に遊びに行きましたね？」

「ああ、来たな。それがどうした？」

「……………そのとある日です。貴方が、帰って来次第、倒れ込んだのを覚えていますか？」

「……………あれか。」

ようやくと合点がいった孝介。以前、こなたの家に遊びに行った時の事である。

孝介は尋常ではない様子で、アパートの自分の部屋に駆け込むなり、倒れ伏してしまった。

アルスと唯の呼び掛けにも全く応えず、結局目を覚ましたのは凡^{およ}そ

一週間後の事だった。

その事を、アルスは改めて詳細に言った。まるで、誰かに言い聞かせる様に。

「ええ、そうです。貴方が御友達の家遊びに行った夏休みのある日。

そして、帰って来た途端、唐突に玄関に倒れ伏して、

凡そ一週間も目を覚まさなかった、アレの事です。

あの後、貴方の家に来たサナとワタルにも話しました。

そして帰国後、唯がどうしてもカイの側に居たいと雪さん達全員に事情を話して、

ここに私達全員が来られる様に改めて御願ひした訳です。」

「……………チツ。」

理由が理由なだけに強く怒る事も出来ず、

孝介は、涙目で縋^{すが}り付いて来る妹の頭を、抱き寄せて撫でていただけだった。

そうしている内に、ずっと強^{こわ}ばっていた唯の肩から徐々に力が抜け
ていった。

一つ溜息を付いて、肩を震わせている唯を改めて正面から抱き締め、
背中を撫でてあやししながら、アルスに話し掛けた。

「……………で、お前達もどうせならと言って、付いて来た訳か。」

「ええ、そういう訳です。納得して頂けましたか？」

「……………納得はいつていないが、理解はした。」

まあ、今更来ちまったもんを帰れとは言わないさ。……………好き
にしる。」

「……………有難う御座います。」

それで、どうやらアルスの話は終わった様だ。

つまり、今度応えるのは……………。

「さて。では、カイ？ 今度はこちらから御尋ねします。

あの柊かがみという女性……………いえ。

た……ただのお友達如きに、何故、貴方は『コウ』と呼ばせているのですか？

私達が納得出来る様に御応え下さい。」

「……………チツ。別にいいだろ？ 俺が、誰に何と俺を呼ばせようとも。」

敢えて辛辣な言葉を使ったアルスからの問いと、唯達からの厳しい責める様な視線に、

矢張りかと言う思いで煩わしそうに舌打ちをし、ぶっきらぼうに言い放った。

が、当然そんな事でアルス達が納得する筈も無く……………。

「ええ、そうですね……………その通りです。貴方が自身を誰にどう呼ばせようとも構いません。」

例え、御自身を御主人様等と呼ばせようとも、それは貴方の勝手

です。

それこそ、私達が一切干渉する事ではありません。

ですが、その呼び名だけは例外です。

軽々しく、事情の一つも知らない赤の他人に呼ばせていい名前では有りません。

……訳は、聞かずとも分かりますよね？」

アルスの顔と言葉が更に険しくなった。唯達も同様だ。

言い訳も誤魔化^{しまか}しも聞かないし、許さない。そんな言葉が、言わずとも空気で読み取れる。

孝介は覚悟を決めたのか、深く深呼吸をし、まるで全てを吐き出すかの様に……。

とある名前を口にした。

「……………ああ、勿論だ。」

『ロウ』と言う呼び名は、彼女の
玲だけの、俺への呼び
名だからな。」

「ええ、そうです。草薙玲……私達のもう一人の親友であり。

貴方の
今現在以てして、唯一の恋人だけの、呼び名だか
らです。」

草薙玲。本来ならば、此の場に居る筈だった、六人目の親友。

そして。孝介の、葛城孝介の唯一の恋人。

その名を出した途端、部屋の空気が今迄の何十倍にも重く感じられた。

「……お前が、あいつの事を忘れられないのは良く知ってるし、良く分かってる。」

それは、俺達も同じだからだ……カイ。」

「孝ちゃんが、今でも『草薙』って名乗ってるのは、玲ちゃんの事を忘れられない……うづん。」

絶対に、忘れたくないからでしょ？」

「カイ兄が日本に残ったのも、玲さんの御墓参りに行く人がいなくなっちゃうから。」

玲さんの友達が……僕達が誰一人としていなくなっちゃうから。それでは、寂しいから。」

……そうなんだよね、カイ兄？」

「……………」

そう、それこそが。孝介が……孝介だけが日本に残った理由。

そして、『草薙』孝介になった理由であった。

誰にも言わなかった……両親にも。勿論、妹にも、親友達にも。

一人だけ、日本に残ると言った時も……決して理由は言わなかった。言いたくなかった。

それでも家族と、今自分の目の前に居る親友達と、彼等の両親達は許してくれた。

とても悲しい顔をしていたが、そんな孝介の……子供の我が儘を許してくれたのだ。

……恐らく、分かっていたのだろう。自身がそう言うであろう事を。そして、その理由も。

親友達や妹ですら分かっていたのだ。当然、自分の両親達ならば猶なほの事……。

今更ながらに、両親達の偉大さ……そして親友達の有り難さを思い知る孝介であった。

「だからこそ、私達は許せないのですよ……カイ。

高々二年かそこら程度しか知り得ない彼女が、その呼び名を使っている事が。

そして何よりも、貴方がその呼び名を許した事が。

それとも……真逆、貴方は比喻無しに、産まれた時からの私達の友情を、

見ず知らずの者に土足で踏み荒らされても構わないと……。

その様な戯れ言を言つつもりでは有りませんよね？」

そう。だからこそ……共に過ごして来た友だから。

そして、親友が今も尚想い続けている程の、何よりも大事な……大切な恋人だから。

今迄、皆そう思って来た。実際、そうだった。そして……今もその筈、だった。

だからこそ、自分達はその孝介の我が儘を、自分達からも自身の親達に頼み込んで迄……。

だからこそ、許せなかった。その自分達の思いを踏み躪むじられた様で。だからこそ、許せなかった。その孝介の心変わりが。玲を……彼女を忘れようとしている様で。

だからこそ……今、こうして悲しい思いで、皆で孝介に詰め寄って訊いているのだ。

「どうなのですか、カイ。応えて下さい……私達が納得出来る答えを。」

貴方が、彼女に『コウ』と呼ばせている……その理由を。」

「……ハア。」

いいか？ 今から言う事は絶対に、本人は勿論、その他の友人達にも内緒だ。

お前達だから話す事だ。……誓えるか？」

「ええ、勿論です。私達から話す事は決して有りません。」

「あたぼうよ。こちとら義理人情だけは、絶対に欠かさない様に親父達に教えられてるんでな。」

「そうだよ。僕達がカイ兄との約束を破る訳無いでしょ？」

「……孝ちゃん、御願ひ……教えて？ 孝ちゃんの気持ちを……。」

長い沈黙の後、孝介が漏らした言葉に、各々言葉を返した。

その即答を聞いた孝介は、再び深い溜息とも、覚悟の深呼吸ともつかぬものを付き、

今の今迄抱き締めていた唯をも自身から離し、ソファに深く腰掛け。

腕を組み目を瞑り、眉間に皺を深く刻み込み、十数秒か……将又、数十分か。

暫くその儘の姿勢で、何事かをずっと考えていた。……その考えも纏まったのか。

組んでいた腕を解き、両膝の上に腕を置き、手を組んで少し前屈みの姿勢になりながら、

徐に語り始めた。……自分と彼女の……かがみとの、僅か二年ばかりの物語を。

「
と言っ訳だ。」

「そっか……………初めて会った時から、一目惚れしてたって、気付いてたんだね。」

「ああ。……………未だ、玲が死んでから三年も経っていないと言うのに、この節操の無さ。」

……………余りにも自分が滑稽でな。思わず自嘲するのを止められ無かったよ。」

「……………そして、その思いが早くも一年後に爆発し、寝込みを襲った……………と。」

本当に節操がありませんね。其処迄鬼畜な人だとは思いませんでしたよ、カイ。」

「まさか、風邪引いて寝込んでる所を襲うんざ……………俺ですら考えつかねえぜ?。」

「……………つっせえよ、おまえら。」

孝介からの、今迄の話を掻い摘みながらも聞いていたアルス達。

しかし、聞けば聞く程、惚気のんげしか出て来ない。最終的には、みんな思わずゲツソリしていた程だ。

その話を聞きながら、こんな会話がアイコンタクトで交わされていた。

(……………ねえ、これって完全に只の惚気話だよね?)

(ええ、どこからどう聞いても只の惚気話ですね。気付いてないのは本人ばかり也……………ですね。)

(……………何で、これで付き合っていないとか恋人じゃないとか、

そんなアホな事言えるんだこいつ。……………ダメだ、俺には全く理解出来ねえ。)

(安心して下さい。私達でも全く理解出来ませんから。……………まあ、理由は判りますけど。)

(玲ちゃんの事だよね? だから、好きだって……………恋人になって欲

しいって言えないんだよね？」

（ええ、恐らくはそうでしょう。ですが、それを差し引いても尚、これだけは言えるでしょう。）

（（（何、このバカップル？）））

「……………でな。その時のかがみの照れ顔が可愛くてな……………聞
いてるのか、お前等？」

「……………聞いているよ（ますよ）。」「……………」

「……………そ、そっか。それでな……………。「所で、カイ。」「ん？
何だよ？」

「其処迄、彼女の事を思っっているながら、何故に未だに告白もしない
のですか？」

まさか、好きでは無いなどという言い訳はしませんよね？

手を繋いだだけならばまだしも、キスまでしておいて、その言い
訳は通じませんかからね。」

「……………（コクコク）。」「……………」

未だ惚気話を続けそうな孝介を止める為、アルスが孝介の台詞に割って入った。

こっそり親指を立てた三人に気付く事無く、孝介はアルスに応えた。

そして、アルスからの問いに同時に頷く三人。

その瞬間、今迄のホワっともゲソっとも言えた空気が、

一瞬にして重く真剣なものへと変わっていた。

そして、孝介は悲しそうな……申し訳無さそうな顔になり、

溜息混じりに自嘲の言葉を吐いた。……自身の本当の想いと共に。

「……………ハッ。どの面下げて、そんな事が言えるって言うんだ？

最愛の恋人が死んで、三年も経たない内に一目惚れをして。

それ迄の物悲しさを埋める為に、澪さんとも肉体関係を持っておいて。

何程どれほど、破廉恥ハレンチになれば、好きだなどと言える？

何程しんこん、心根しんこんから腐れば、愛してるなどと言える？

そんな事………言えるワケねえじゃねえかッツツ！！！！！！！」

「ならば、何故？ 何故、彼女とキスなどしたのですか？
そんな事をすれば、益々離れ難がたくなってしまうでしょう？」

孝介の心からの絶叫。あの時、玲を失った時と同じ様な………魂を削り取っているかの様な絶叫。

アルスからの、問わずにはいられない指摘にも頭を抱え込み、想いの丈を全て吐露とろする孝介。

「………ああ、そうだ。お前の言う通りだよ、アルス。もう、これ以上耐えるのは辛い。」

今直ぐにも、好きだと言ってしまうたい。誰よりも愛していると……言ってしまうたい。

恐らく……もう、俺は玲以上に、かがみの事が好きなんだと思う。どうして、ここまで好きになれたかは、俺にも分からない。

何か切欠があつたかも知れないし、何にも無かつたかも知れない。

だが、それでも……俺は彼女が……かがみが一番好きだ。それだけは、断言出来る。」

「……なら、てめえはどうするつもりなんだよ、カイ？」

孝介の喉から……いや、魂から絞り出す様な声で、どれ程かがみを恋しく思っているか。

それ程の想いを抱えていながら……それでも、孝介はじっと我慢し続けていた。

そして、渡が聞いて来た。それでは、これから先はどうするつもりなのかと。

その孝介の答えに……誰もが驚愕の色を顔おもてわにした。

「後、一年だけは何としても堪えてみせる。」

その後は………かがみ達とは一切、連絡が取れない場所へと行く
つもりだと思ってる。」

「「「「
なっつ!?!」「」「」

「………そうだな。海外辺りがいいかもな。それも、日本からとても
離れた国辺りが。」

「だ、ダメだよ、カイ兄!! それは………それだけはしちやダメだ
!……!」

「そうだよ、孝ちゃん!! それじゃ、逃げてるだけだよ!

玲ちゃんからも! 柊さんからも! 全部、逃げてるだけだよ
……!……!」

「………ああ、分かってる。でも、もう決めたんだ。」

ずっと前から、そう決めていたんだ。」

孝介の言葉に、思わず袖を、腕を掴んで引き留める唯と真人。

しかし、申し訳なさそうな顔で、孝介は考えを変えるつもりは無いと……そう言い切った。

そんな孝介に、怒りを顕わに唸りを上げ噛み付くかの様に、言い放つ渡。

「ヘッ！ テメエがそんなに意気地無しで臆病な逃げ腰野郎だとは、思ってもみなかつたぜ！！」

「……濟まん。どんなに軽蔑されても構わない。でも、もういいんだ。」

いい加減、玲にばかり拘こたわって日本に縛られているのも。

かがみの事を、何時迄も思い煩うのも……もう、いいんだ。」

渡からの罵倒も功を成さず。思いは既に固まり切っている様だ。

苦々しそくに舌打ちをしながら俯く渡。孝介の側に獅しが噛み付いて泣き崩れている唯と真人。

そんな二人を抱き締め、撫でている孝介。

……だが。アルスだけは何も言わず、只、沈黙を保っていた。

すると、徐にそのアルスが孝介に何かを聞いて来た。

「……………では、カイ。貴方はもう考えを変える気は全く無いと。

何が起ころうとも、その決意と覚悟は堅いと……………そう仰るのです
ね？」

「……………ああ。もう、決めた事なんだ、アルス。」

「……………そうですね。では、それについて、彼女達にも聞いてみ
ましようか？」

「……………どうぞ。入って来て下さい。」

「……………な……………」

孝介の顔が、驚愕と不安と恐れのみ彩られた。

孝介は後に語る。自分の人生でこの時以上に驚いた事は、

過去・現在・未来に於いて、只の一度たりとも無いと。

魂たまけ消るとは………魂たまけが消えるとはこういふ事かと言ふ事を、この
時初めて知った……と。

盡く激動、駆られる激情、終編、（後書き）

如何でしたでしょうか？

長い独白。そして、その思いの丈を全てぶち撒けた孝介。

皆様は如何様に感じられたでしょうか？

そして、最後にアルスが呼んだ人達とは？ もう、バレバレですよ
ね？w

ですが、その答えは24時間後の、次話の御楽しみと致しましょう。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

盡く激動、駆られる激情〜完結編〜（前書き）

皆様、毎度拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

今回で、一通りの問題は終わりです。果たして、どのような結末が待っているのか。

では、今話もどうぞ拙作を御覧下さい。

盡く激動、駆られる激情、完結編、

side：三人称

アルスが、何時の間にか自身の後ろに居たセバスチャンに言い付け、アルスの真後ろにあつた扉を開けた。其処から出て来た人達を見て、孝介は息が止まった。

涙を滂沱ほうたと流しながら、孝介を睨んでいるかがみを先頭に、肩を震わせて泣きながら、何度もハンカチで目を拭っている、みゆき、つかさ、こなた。

今にも泣きそうな、何とかそれを押し留めている悲しい顔の儘で孝介を見る、みさお、あやの。

神妙な顔で、孝介を只々睨み付ける、拓海、涼子。

皆、先程の教室に集まっていた、孝介の友人達であり、何故か今此処に勢揃いしていた。

余りの驚きに、何も言葉が喋れない孝介が思っているであろう疑問に、アルスが答えた。

「実はですね。私達が教室を出て車に乗った後、すぐにメイド達が彼女達と接触しまして。

その場でイヤホンを渡しまして、この部屋に仕掛けてあるマイクで、

今の私達の会話を、ずっとリアルタイムで御届けしていたのですよ。」

「……………なん……………だと……………?」

「で、ですね。先程、退席したセバスチャンに最高スピードで彼女達を迎えに行つて貰い、

今の今迄、其処の私の真後ろにある隣の部屋で、会話を一部始終聞いて貰っていた。

……………とまあ、そういう訳です。」

策士^{アルス}、ここにあり。そんな言葉が浮かんだ孝介であった。

そのアルスの説明も終わり、ようやく孝介が事情を飲み込めたと判断したかがみは、

相変わらず涙を流した儘、孝介の元へとズンズン歩いて行き、孝介のソファの前に立ち開^{はだか}った。

その何時に無く鋭い眼光で睨み付けられ、思わず立ち上がって何かを言おうとしたが、

更に睨み付けられて何も言えなかった。すると、かがみが徐に手を上げた。

（ああ、これはやっぱり叩かれるなあ。）そう思った孝介は、目を瞑りその衝撃を只管^{ひたすら}待った。

……だが、何時迄待っても一向に、何の衝撃も来ない。

不思議に思い、目を開けるとかがみの顔が目前に迫っていた。

先程から自分の思考外の事ばかり起こる。

考える事を放棄した孝介は、その流れに勢いに任せて乗った。

「……………ん……………」

「……………んう……………」

自身の唇に柔らかい感触が伝わると、無意識に腕が目の前の愛しい少女を抱き締め、

かがみの頭を掻き抱きながら、必死に接吻し続けた。それが、どの程度経っただろうか。

どちらとも無く唇を離し、御互いに少し身体を離れた瞬間、かがみからビンタが飛んで来た。

完全なる不意打ち。キスの余韻と、叩かれた事とが緋ない交ぜになり、呆然とする孝介。

その孝介の頬を、かがみが未だ涙を流し続けた儘で、突然目一杯真横に引っ張った。

「……………？ ………………！？ ひ、痛はらひ痛はらひ……………！！

ひ、行き成ひり、何あをするんだよ、かがみ……………！！？

「ウルサイ、バカッ！」

「ふ、ウルサイって……だから、痛いってば……！」

「ウルサイ！ ウルサイ！ ウルサイ！！ このバカッ！ バカッ！
バカッ……！！！」

「………かがみ。」

孝介の頬を引っ張り続けながら、益々涙の量を増やすかがみ。

頬から手を離すと、今度は孝介の服を掴み上げ、嗚咽と共に肩を震わせ始めた。

孝介は思わずかがみをもう一度抱き締め、かがみが落ち着く迄ずっとその儘でいた。

みんなも、かがみが落ち着く迄、出された椅子にも座らずにずっと立ち尽くして眺めていた。

少しは落ち着いたのか。肩の震えも小さくなり、嗚咽も収まって来た様だ。

その頃になって、ようやくとこなた達の涙も幾分か引っ込み、椅子やソファに座っていた。

そして、相変わらず二人の世界に入っていた孝介とかがみは、

そんなみんなに気付く事無く、何時も以上のバカッパル空間を繰り広げていた。

「……………かがみ？」

「……………ひっく……………ぐすっ……………ばかあ……………」

「……………ごめんな、かがみ。」

「……………ホントに……………バカよ……………コウの……………ばかあ……………」

かがみの顔を覗き込んで、涙を指で拭う孝介。その孝介の胸に、更に縋り付くかがみ。

そのかがみを愛おしそうに、更に強く抱き締め自身の頬を撫でる様に擦り付ける孝介。

その孝介の仕種が心地良いのか、更に身体を密着させるかがみ。

「……………あゝ、やってらんね。そんな空気が、部屋に充満して来た頃だった。」

少しは満足したのか。孝介から身体を離し、孝介を睨み付けたかがみ。

思わず、うつ……………と声を漏らし、少し怯んだ孝介。……………しかし、身体は決して離さずに。」

「……………さっきの。」

「……………え？」

「……………最初にキスしたのは、私の気持ちを確認したかったから。」

それから、その後に叩いたのは、それで今迄の全部帳消しって意味。」

「……………え……………と……………？」

自分は何を言われ、かがみは何を言おうとしているのか、全く検討

も付かず困惑する孝介。

始めからその反応が分かっていたのか、かがみは孝介の理解を待たずに話を続けた。

「……………許さないから。」

「……………かがみ？」

「……………私の事、こんな風にしておいて……………絶対に許さない。」

「……………えっと、かがみ？」

その……………そういう言い方は非常に誤解を受け易いので、

出来ればもうちょっと表現を……………だな。」

「……………私を……………こんなに、コウの事を好きにさせておいて……………、

逃げたりしたら、絶対に許さないんだからっ！……！」

「……………かがみ。」

かがみの言葉で、思わず鋭い目付きになる他の女性陣。

孝介の慌てっ振りもその皆の疑念を助長していた。

しかし、その言葉の意味を理解し、逆に笑顔になっていた。……
…おお、恐い恐い。

「コウは、本当にそれでいいの？ 私から逃げ続けて……玲さんからも逃げ続けて……。」

「……………仕方無いんだ。俺が、今更……………どの面下げて言えるって言うんだ？」

「こんな……………汚れた俺にそんな事……………「私は好きよ。」……！！」

「私は好き。貴方が好き。コウが好き。草薙だとか葛城だとかそんな事はどうでもいいの。」

確かに、管理人さんとそういう仲だって言うのは驚いたし、悲しかったし、とても嫌だった。

でも、それでも。私は 孝介 貴方が、誰よりも大好き。」

「……………かがみ。」

「ねえ、コウ。貴方は……………私の事、どう思ってるの？ どう……………想

っしてくれているの?」

「……………知っているんだろう? 聞いていたんだったら……………」

「それでも! 私は……………貴方から、コウの口からコウの言葉で直接聞きたいの!

ねえ……………私は、貴方の恋人にはなれないの?」

「……………かがみ。俺は……………俺は……………」

君が…………… 終かがみが、大好きだ。」

「…………… コウ。」

「かがみが……………君さえよければ。こんな俺でもよければ……………俺の恋人になって下さい。」

「…………… はい、喜んで。」

そして二人は。本当の
初めてのキスをした。

その瞬間、部屋一杯に割れんばかりの拍手が巻き起こった。

何時の間にか、メイド達も総出で部屋の中にいたのだ。

そのメイド達に併せて、アルス達も、こなた達も、そして執事のセバスチャンも。

皆、涙を流しながら、心から祝福してくれた。

今、この瞬間。彼等は確かに、世界から祝福されていた。

盡く激動、駆られる激情〜完結編〜（後書き）

如何でしたでしょうか？

これで、取り敢えず一応の終結を見ました。

それでも起・承・転・結で言えば、『起』の部分です。

次話からは、『承』部に入ります。いや〜……ここまで長かった長
かった……………

実は、この話の結末は非常に悩んだのです。

当初の予定では、最終話の一つ前辺りで、孝介とかがみを正式に恋人にするつもりでした。

ですが、この話を書いている途中で色々とプロットが変わって行き、最終的には、この様な形となりました。

もしかしたら、読者の方々の中には、『最後の最後に本当の意味でくっついて欲しかった。』

そう、思われる方もいらっしゃるかも知れません。

ですが、誠に申し訳有りませんが、今回はこういう形で進ませて頂

きたいと思います。

では。今話も御覧頂きまして、誠に有難う御座いました。

そして……………（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、御待たせ致しました。一応、後日談というもの（？）（？）になっ
てる……………筈です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

そして……………

side：三人称

皆の拍手と祝福の空気に包まれ、孝介とかがみは照れ臭そうに御互い、はにかんでいた。

ゲームとかならば、これでエンドロールといくのだろうが、現実はそのはいかない。

皆が或る程度落ち着いた頃を見計らって、アルスが全員に話し掛けた。

「何はともあれ、先ずは改めておめでとうございます、カイ。」

「あ、ああ、有難う／＼／」

「それで、或る程度情報も御互い共有したと言う事で、一つ私から提案があるのですが。」

「……………何かとても嫌な予感しかしないが……………何だ？」

「ええ。先ずは御互い、改めて自己紹介をしましょう。」

色々あって、ちゃんとした挨拶が出来ませんでしたからね。」

過去のアルスの所行が蘇ったのか、いや々な顔になる孝介。

益々かがみを抱き締める力が強くなり、アルスから顔を隠す様にかがみに更に顔を近付け、

かがみの顔と首筋の間に顔を半ば埋め、アルスに余り自身の顔が見えない様にして、

アルスの提案とやらを聞いてみた。

かがみは更に真っ赤になり、^{くすくす}擦ったそうにむずがっていたが。

938

「では、言い出しっぺの私から改めて。

アルス「クライスと申します。カイの親友にして、カイの妹である唯の恋人です。」

今は、カイと同じ3 - Bのクラスメイトですね。以後御見知り置きを。」

「んじゃ、次は俺か。」

俺は時任渡だ。カイの親友で、アルスとも腐れ縁の親友だ。

真は俺の従弟で、俺は、カイの嫁と同じクラスの3-Cになった。以後宜しくな！」

「じゃ、次はボク！

ボクは葛城唯！ 孝ちゃんの血の繋がった実の妹だよ ……
…残念ながらね（ボソツ）

それで、アルスはボクの恋人で婚約者 あ、後ボクは1-Dなんだ。宜しくね」

「じゃ最後は僕だね。

僕は米倉真人。カイ兄ちゃんの親友で、渡兄さんは僕の従兄だよ。……残念だけどね（ボソツ）

あ、僕も唯ちゃんと同じ1-Dなんだ。お姉さん達、宜しくね。」

孝介組（？）が先に皆に挨拶を交わし、かがみ達が後から慌てて順番に自己紹介をした。

一通り終わった所で、孝介が危惧した様にアルスがとある提案をして来た。

「では、御互い自己紹介も終わった所で……一つ御提案があるので
すが。」

「……だから、お前の提案とやらは、碌な目に遭った事しか無いん
だが……？」

「おや、大丈夫ですよ。今度はそんなに実害の無いものですから」

「……不安だ。此の上無く、超絶的に不安極まりない答えだ。」

案の定、何かを企んでいた様だ。その予感に少々げんなりする孝介
の頭を撫で、

よしよしと必死に元気付けるかがみ……に萌える一同であった。

そして、少しの間その様を眺めていたアルスはハッと我に返り、

改めて（孝介にとっての）爆弾発言をした。

「ええ。この際ですから、みなさんにカイの呼び名を改めて頂いて
はどうかと思ひまして」

「……は？ 何故に態々そんな事を？」

「いえ、三年間も一緒にいるのに何時迄も名字の儘では味気ないでしょう?」

「……普通はそんなものだと思うが?」

「私達は普通ではありませんので。そうでしょうか? カイ」

「……にやろつめえ。開き直りやがった……ハア、もう勝手にしろよ。」

「……よしよし。」

不貞腐れた孝介を、相変わらず抱き締められた儘で、よしよしと慰めるかがみ……に萌えr(ry

と言う訳で、本人の了承(と言う名の諦観)が得られた事で、改めて皆で鳩首凝議きようぎし始めた。

そして、一時間後。

「御待たせしました、カイ。全員、決まりましたよ。」

「……やけに遅かったな。」

「まあ、色々とありまして。……………では、皆様、どうぞ改めて御自分の言葉で宜しく。」

少々騒付いたが、すぐに収まり何故か順番に前に出て孝介に言う様だ。

(別にそんな、あいつの口車に乗らなくてもいいのに……………)と、少しずれていた孝介であった。

と言う訳で、結局こなたから順番に言うて行く事になったのだが……………。

「じゃ、じゃあ、私から……………」、「孝介君で……………」

「……………ああ、分かった。」

「え……………と、私は孝介さんで……………／／／」

「……………ああ。」

「あ、アタシは……………！／／／ その……………！／／／」

「……………別に無理しなくてもいいんだが……………？」

「う、うっさい！／＼い、いいから、黙ってるよな！／＼／

え、と……………こ、孝介！！！！／＼／／／」

「……………あ、ああ。」

「クスクス…………… あ、私は草薙君の儘で構わないかしら？」

「……………ああ。寧ろそちらの方が落ち着くのだが。」

「ウチと拓海は変わらんよな？」

「ああ。何時も通り、孝介だ。」

「……………まあ、そうだな。」

「あ、あの……………！」

「ああ。それで柊は？」

「ふえ？／＼／ あ、う……………そ、その……………／／／

お……………お、お兄ちゃん……………で／＼／／／／／／／／

「……………何？」

「だ、だって、アルスさんが、草薙君とお姉ちゃんがその内結婚するんだから、

そしたら私は草薙君の妹になるんだから、今の内にお兄ちゃんって呼んでた方がいいって、

だから、今の内から練習とかしてた方がいいってアルスさんが、その、あの……！！！！！！！！」

「あゝ……分かった、分かった。分かったから落ち着け、柊。

取り敢えず、アルス。お前ちょっとこっち来い。」

「嫌ですよ。そんなラヴラヴなバカップル空間に飛び込むなど、

自殺行為以外の何物でも無いじゃないですか……ねえ？」

皆が次々と矢継ぎ早に、孝介の新たな呼び名を恥ずかしがりながら言って行った。

因みに順番は、こなた みゆき みさお あやの 涼子 拓海 つかさ である。

そして、何故か最後に回っていたつかさの台詞に、一瞬この場が凍り付いた。

どうやらこなた達も知らなかった様だ。そして案の定、こめかみ蛸谷に
付けて、

イイ笑顔をアルスに向けている孝介を、軽く往いなすアルスであった。

「さて。そういう訳でして、皆さんの呼び名も変わった事ですし…
………ねえ、カイ？」

「………俺にも変えろってか？」

“当然（です・だろ）！……！！！”

「………そ、そうか。」

「はい。ですので、カイ。早速、呼んで下さい。」

アルスに促される儘に、仕方なく皆に向き合って各々の名前を呼ん
だ。

………かがみを傍らに抱き締めた儘で。

「………ハア。それじゃ………こなた。」
「………う、うん／＼／」

「……みゆき。」「は、はい……／＼／＼、これは、結構恥ずかしいものですね／＼／＼／」

「……全くだ。……みさお。」「な、なんだよっ！！／＼／＼／」
「……いや、何でも無い。」

「峰岸は……この儘でも構わないよな？」「ええ」

「……（良かった……峰岸は真面で。）それから………拓海。」

「おう。やっと、名前で呼んでくれたな、孝介」

「……まあな。最後に………涼子。」

「よし！ ほな、今後『香椎』は禁止やで、孝介？」

「……どんな罰ゲームだ、それは。」

一体何を満足したのか。アルス達四人共、何故かホクホク顔でいた。いや、彼等だけでは無い。

セバスチャンや、他のメイド達も全員ニヤニヤ笑顔でいた。

………どうやら、微笑ましいと言うよりは、孝介の照れている様子を途轍も無く、此の上無く、

ただ単に楽しんでいるだけの様だ。……実は、こっそり隠しカメラで写真も撮ってあったりする。

取り敢えず、アルスは目的を全て終えたらしくホクホク顔の儘、

セバスチャンとメイド達と何事かを話し合っていた。

それを呆れた顔で見る孝介に、かがみが話し掛けた。

「……ねえ、コウ。それで、今日はこれからどうするの?」

「……そうだな。ちょっとけじめを付けに行こうと思ってる。

アルス! セバスチャン!」

「? どうしましたか、カイ?」 「如何致しましたか、孝介様?」

「悪いが、今日は唯をここに泊めてくれ。明日以降はうちで引き取るから。」

それと、かがみ達を、家に帰してくれないか、セバスチャン?」

「ええ、私は構いませんよ。」「「畏まりました。孝介様の御頼みとあらば、例え火の中水の中。」」

「有難う、二人共。じゃ、ちょっと俺は行って来る。……ん……じや、また明日な。」

「……ん……うん／＼／」

其の後。孝介は一人、徒歩でアパートへと帰り。

漣と一日中話し合い。

その関係を今度こそ、完全に終わらした。

そして……………（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、三年次用のプロフィールを予定しています。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

プロフィール 三年次 変更&追加 加筆・修正(前書き)

皆様、何時も拙作を御覧頂きまして、誠に有難う御座います。

そして、この話を投稿する前に、

ユニーク10,000人&125,000アクセスを超えました！
！！！！！！

これも、偏に皆様の御陰です。心より、感謝致して居ります。

さて、今回は題名通り、三年次に於けるオリキャラのプロフィール
です。

幾つか、敢えて伏せていた所も併せて、書き改めました。

今迄の、そして今後の話の際の一助になれば幸いです。

では、今話も拙筆を御覧下さい。

プロフィール 三年次 変更&追加 加筆・修正

自称：草薙孝介 正式：葛城孝介

高三 3 - B所属 182cm 56kg

好きなタイプ：草薙玲・柊かがみ

主人公。二年次の試験も全て満点通過。

学園内でファンクラブに入っていない女子は有り得ないと言われる程の、学園一の有名人。

今回、唯を筆頭に孝介の親友が全員、陵桜に来てしまった。

早速四人共に、ファンクラブが出来上がっていた。因みに重複可らしい。

この度、改めてようやくと晴れてかがみと恋人同士になった。

クラスは離れ離れになってしまったが、そんなものは何の其の。

相変わらずのバカップル……を乗り越して、恋愛街道超絶^{はくしん}慕進中である。

作者も砂糖をただ零しながら書いている程である。……………正直、キツツツツイorz

漣との関係も、孝介からちゃんと本人に伝えて、御互いそういう関係を断ち切った。

だが、未だに漣にはその事で揶揄われたりして、孝介を慌てさせている。

一言「かがみ、愛してる。」

久坂拓海

高三 3・C所属 185cm 65kg 茶髪 黒髪

孝介の友達その一。孝介の指導の賜物か、将又拓海はたまたの努力の結果か。何とか、成績は少しずつ上がって来ている様だ。因みに、両方だと思われる。

三年になってからは、バスケの腕もメキメキと上がっており、到頭全国も目前となっている。

又、涼子との漫才は既に学園迷惑物に真化済み。最終的に世界を巻き込むつもりらしい。

『いや、漫才じゃ無くて、呉服屋として目指せよ。』とは孝介からのツッコミである。

何やら、今年の正月に涼子の実家に行つて、何かがあつたらしく、戻つて来た拓海は、もう既に大人びていて、こなた達を大いに驚かせていた。

その所為か、今迄染めていた髪を元の黒髪に戻している。因みに、ツンツン頭は素の状態。

頭髮そのものが結構堅く、風呂に入って洗つても中々柔らかくならないらしい。

今年も孝介とはクラスが違ってしまい、最初は血の涙を流していた。だが、孝介の過去を、その一片とはいえ知る事が出来、中々に上機嫌にはなった。

因みに、その詳細については、後々涼子からこっそり聞いている。

が、内容が内容な為、余り大手を振って喜べないそんなジレンマも有り。

何やら、渡に対して少々ライバル意識を持っている様子。

一言「涼子、俺もお前が大好きだ。それと、渡！ お前だけには負けないぞ！！」

香椎涼子

高三 3 - B所属 165cm セミロングヘア ロングヘア

孝介の友達その二。到頭、孝介やかがみからも、バカカップルと呼ばれる様に……。

既に、全学年&全教員から私的に頼られる存在に。所謂、影の支配者的な立ち位置。

拓海との仲は尚々深まっている様子。最近では赤面する事が増えて来ている現状が悩みの種。

今の最大の萌え対象は、ゆたかに萌えてる唯に萌える事。後、みな×ゆた推進派の筆頭。

一言「……孝介にバカップルてゆわれた…orz ……かがみんにバカップルてゆわれた…orz」

葛城唯

高一 1 - D所属 145cm

孝介と血の繋がった実の妹。微塵も成長の兆しが見えない自身の体に、絶賛絶望中。

相変わらずの超絶ブロン。寧ろ、孝介命レベル。しかし、アルス

との仲は益々極めて良好。

最近、孝介にかがみという恋人が正式に出来、姉が一気に四人も増えた上に、

自分より小さい子が同級生で、しかもその子達とも友達になれて、

尚且つ他の友達も沢山出来て、嬉しい事続きだと諸手を挙げて喜んでいる。

因みに、つかさもお姉ちゃんと呼んでいる為、

つかさは唯と話す度に照れて真っ赤になるのが日課だったりする。

一言「かがみお姉ちゃんもつかさお姉ちゃんも大好き　アルスも
大大大好き

でも孝ちゃんは、も~~~~~と、大大大大好きっ

」

アルス〓クライス

高三 3 - B 所属 178cm 55kg

嫌いなタイプ：友や恋人に仇為す者・草薙玲

孝介の親友その一。孝介の過去を知る人物その二。孝介をカイと呼ぶ一人目。

作中に於いて両親を除き、孝介の気持ち・考えを誰よりも理解している人物。

かがみ達に孝介の話聞かせたのは、そうでもしないと孝介は決して前に進めないと、

本人以上に理解していた為、敢えて憎まれ役を引き受けて強行した。

秘書の仕事は、現在休業中。大祐からも仕事の事は忘れろとの厳命が下る。

実際問題として、アルスがいないと仕事に可成り支障がある為、非常に困るのだが、

将来の娘婿でもあり、優秀な秘書の一年限りの休みと言う事もあり、

他の会社員達の協力も仰ぎつつ、態々事業を縮小して迄、

アルスの為だけに、この一年間は開店休業中にしてあるのである。

因みに、唯との仲は極めて順調に進んでいるが、未だに孝介には認められていない様子。

しかし、両親からは、早く孫の顔が見たいと急かされているらしい。

但し、唯はその事を知らない為、アルスの葛藤を知っているのは、渡・真人・孝介のみである。

一言「……………カイ。好い加減、あきらま……………基。認めて頂けませんか？」

時任渡

高三 3 - C所属 190cm 77kg

孝介の親友その二。孝介の過去を知る人物その三。孝介をカイと呼

ぶ二人目。

残念な筋肉脳に思われがちだが、実は……………。

アルス・唯・真人の三人同様、編入&入学試験は満点通過していたりする、実は天才児。

但し、所謂直感型な為、普段の授業や通常会話では、

馬鹿っ振りが遺憾なく発揮されているのが、残念な現状である。因みに、恋人は未だいない。

何故か、拓海にライバル視されて居り、張り合いが出来て毎日が楽しいとの事。

最近では、体育の授業の度に、孝介に渡が勝負を申し込み、拓海が渡に勝負を申し込み、

結局、三人で毎回勝負をする事になっている。

又、休み時間に馬鹿騒ぎをしては、しょっちゅう真人に怒られて居り、

既に新たな名物と化していて、見物人が後を絶たない。

一言「オラ！ カイ！ 拓海！ 今日も勝負だ、勝負！！」

う……………わ、分かった……………分かったから、そんなに怒るなっ

て、サナ………」

米倉真人

高一 1 - D 所属 166cm 50kg

主人公の親友その三。孝介の過去を知る人物その四。

アルスの画策により、唯と同じクラスになった。

ほぼ常に唯と一緒に居る為、殆どの男子からは疎まれ、女生徒からは好まれ頼りにされている。

それが尚、男子との溝を広げる大きな要因でもある。尤も、本人は気にしていないが。

唯と仲の良い友達が早速沢山出来た為、彼女をその友達に任せ、

自分や唯をどうにかして陥れようとする阿呆共を唯にバレない様に、

秘密裏に孝介達と一緒に、色んな意味でボコボコにしていたりする。実は、女生徒からの人気よりも、男女問わず教師からの方の人气が遙かに高い。

だからか、真人達がそういう事をしていても、学園全体で敢えて黙認していたりする。

……ダメだこの生徒と教師達、早く何とかしないと。

真人には恋人は未だ居ない為、その座を狙って虎視眈々としている人達が一杯居る……が。

真人はそういう事に特に敏感な為、如実に狙って来る人は実は可成り苦手だったりする。

故に、自分とそういう事とは関係無しに付き合ってくれる子の方が好みだったりする。

又、孝介が真人を特に可愛がってるのは有名な話らしく、実は裏でこっそり、

『孝介×真人 推進クラブ』なるものが発足していたりする……
…事を本人達は知らない。

一言「……ハア。あの人達、考えが白地過ぎてやなんだよね……。
あ、兄さん！

又、何かやらかしたの！！？ だから、あれだけダメだった……………（ガミガミ）！！」

櫻井 漣

孝介が住んでいるアパート『紫陽花荘』の管理人。既に孝介との関係は終わっている。

漣は一昨年ぐらいから既に覚悟していたらしく、とっくに孝介の事は割り切っているが、

多少の腹癒せもあり、未だに気にしている孝介を揶揄って遊んでいる。

アパートの住人である、元浪人生の現大学生が自分に惚れている事は知っている。

孝介に振られた今、実は少し検討中だったりする。ガンバレ、男子！！！！

一言「ま、流石にあんなに真剣に惚気られちゃあね〜……。」「

葛城大祐

37歳 190 / 5cm 81kg

孝介と唯の父。孝介の過去を知る人物その五。万年バカップル夫婦その一。

その正体は、俳優兼社長の六道大祐。今年は大事な娘婿の為に、事業を縮小している。

実は、家事の一切が全く出来ず、雪がいなければ生活そのものが出来無い。

故に昔から、雪の手料理だけを食べて生きて来た……比喩無しで。

その為、冷凍食品などには、少々苦手意識……というか、嫌悪感に近いものを抱いている。

何事も極端になる嫌いがあり、やる以上はトコトンするタイプ。

例えば、役作りの為に体重を20kg以上落としたり、頭を完全に丸坊主にしたりと、

マス ミへの話題には全く事欠かない人物。

一言「なあに。大事な息子達の為なら、会社の一つや二つぐらい、
どうとでもしてみせるぞ。」

葛城雪

37歳 161cm ツルンペタン

好きな物：子供・研究・恋バナ

孝介と唯の母。孝介の過去を知る人物その六。万年バカップル夫婦
その一。

今回の計画の首謀者にして主犯。そして、童顔にして幼児体型だっ

たりする。

趣味も特技も研究という変わり種だが、御近所付き合いはそれ程悪くない。

何故ならば、良く唯と材料の買い出しなどに一緒に行っている為、必然的に、御近所さんと挨拶を交わす事が多い故である。

実は、管理人の澁は雪の後輩であり、孝介の情報を逐一受けていた。

以前、孝介に言った匿名からの情報とは澁の事である。しかし、孝介は未だその事を知らない。

実は、他人の恋バナが大好きで大好物。それだけで御飯が五杯はイケルとの事。

又、『恋バナをしている時が、誰よりも一番輝いていて誰よりも一番可愛い』とは、大祐の言。

唯との恋バナはアルスからも聞ける為、今一番の関心事は孝介からの恋バナ&惚気話である。

虎視眈々と、孝介がすっかり口走るのを、日々狙っているお茶目さんである。

一言「唯でもアルスでも孝介でもいい。早く私に孫の顔を見せてくれ。」

後、恋バナも沢山御土産でな。イイ研究資料になるんだ、それがな。……………む？

一体何の研究か……………だと？ そんなもの内緒に決まってるだろう？ ……フッフッフ。」

米倉竜之介（よねくらりゅうのすけ） 一人称：私 CV：神谷浩史

36歳 男性 170cm 48kg 黒髪黒目 ショートヘア
黒眼鏡着用

好きなモノ：数字・数学・計算・お金・理屈・理性 嫌いなモノ：本能・理不尽・計算外

好きな食べ物：雫の手料理・冷凍食品 嫌いな食べ物：特に無し

好きなタイプ：米倉雫・理性的な人 嫌いなタイプ：本能で生きている人

趣味：雫の笑顔を見る事 特技：金勘定（雫曰く『お札が高速なん

だよ!!!?』)

米倉真人の父。孝介の過去を知る人物その七。万年バカップル夫婦その二。

みwikiの言っていた通り、

年収が数百億〜数千億とも言われる、新進気鋭の若手ITベンチャー企業の社長を務めている。

プロフィールとその外見だけを見ると、情の無い冷たい人に見えるが、そんな事は全く無く、

寧ろユーモアに富んでおり、柔和な対応や柔軟な発想も持ち合わせ、色んな人に慕われている。

妻・息子・親友達等々、だれかれ誰彼構わず全員に対して敬語を使うが、

とある時には、その常の敬語をかなぐ金繰り捨てて、乱暴な言葉遣いになる……事もある。

寧に本気で惚れており、結婚前に米倉家が提示して来た全ての条件を無条件で呑み、

自身の両親や米倉家に一切の有無を言わせず、結婚を承諾させて今に至る。

例えば、米倉家に養子に入る事・収入の三割は米倉家に入れる事

・年収は最低でも億は行く事・子供を必ず拵こぎえる事……etc.

米倉家とは、真人が産まれる迄は大分ぎこちない関係であったが、

真人が産まれてからその仲も急速に縮まり、今では好々爺じいじの様な
っている。

その為か、真人は生まれ付き周りに気を遣う子供に育ってしまい、

それだけは、竜之介も雫も真人に済まないと思っていたが、

当の本人は、一向に気にしていない旨を自分から二人に伝えており、

その親子仲は誰も危惧する者が居ない程に、実に順風満帆じゆんぷんまんぱんである。

一言「雫さん。もう少し真を見習って、落ち着くか御淑おしとやかになっ
て下さい。

まあ、そんな風に燥はく貴女も私は大好きですから、見てい
て飽きはしないのですね。」

米倉雫（よねくらしずく） 一人称：私 cv：日高のり子

35歳 女性 164cm ボンキュッボン 茶髪・黒目 ロングヘア ツリ目

好きなモノ：運動・食事・楽しい事 嫌いなモノ：じっとしてる事・食事制限・つままない事

好きな食べ物：美味しい物 嫌いな食べ物：苦い物

好きなタイプ：米倉竜之介・米倉真人・時任美夜・葛城雪

嫌いなタイプ：????????? 自分達の幸せを壊す奴

趣味：フィギュアスケート・運動・食事 特技：早食い・大食い・楽しい事探し

米倉真人の母。孝介の過去を知る人物その八。万年バカップル夫婦その二。

プロのフィギュアスケーター。三つの金メダル保持者。

10代の頃からあらゆる大会に出続け、その全ての大会で全優勝を

果たした偉業を持つ。

その異常っ振りはオリンピックでも遺憾なく発揮され、

未だ現役の儘で居続けている、全大会連続優勝記録保持者でもある。

普段はその伶俐れいりで冷たそうな外見の儘に、冷静を装ってテレビなどに出演しているが、

その本質は、本作で孝介に抱き付いたりしていた様に非常に甘えたりである。

特に渡の母、時任美夜にはほぼ常にべったりで、

いつも旦那の時任大河と、美夜を独り占めする権利を獲得しようとして争っている。

又、とかくアグレッシブで、常に何かしていないと落ち着かない性分であり性格。

旦那の竜之介や息子の真人とはとても仲が良く、

『二人への愛が常に溢あふれ返って、溢こぼれ落ちているんだよ?????』
とは本人の談。

実は、雫と美夜とは血の繋がっていない義理の姉妹であり、

渡と真人は飽く迄も家系譜上での従兄弟関係である。因みに、雫が義姉^{あね}。

だが、当の本人達（親子双方共）は、御互い産まれた頃からの付き合いである為、

今更呼び名を変える気は毛頭無く、関係も何も変わらない儘、今日に至る。

因みに、嫌いなタイプにある二人分の『???』は、美夜のそれと全くの同一人物である。

一言「さ〜な〜　一緒に寝よ〜　え？　やなの？　え〜〜〜…
…ぶ〜ぶ〜！

え？　りゅ〜ちゃんど？　むう〜…りゅ〜ちゃんと一緒に寝るの確かに大好きだけど、

りゅ〜ちゃん、いつも私を離してくれなくて、寝るの毎回遅くなるんだよね〜……………。

あ、真、赤くなっちゃった　あは　か〜わ〜い〜い
い〜〜〜???」

時任大河（ときとうたいが） 一人称：俺 CV：神谷明

37歳 男 203cm 95kg 赤髪赤目 ショートヘア 常

時細目で時折眼を見開く事がある

好きなモノ：修行・鍛錬・試合 嫌いなモノ：怠慢・中途半端

好きな食べ物：肉・美夜の手作り 嫌いな食べ物：無し

好きなタイプ：時任美夜 嫌いなタイプ：????・うじうじした奴・
はっきりしない奴

趣味：修行・鍛錬 特技：修行・鍛錬・格闘

時任渡の父。孝介の過去を知る人物その九。万年バカカップル夫婦その三。

世界的に有名な格闘家。孝介とは、実は兄弟子の関係。と言っても、弟子は二人しかいないが。

流派などは特になく、雑多な武術・武道を取り入れている、とある師匠の下で学ぶ。

既に師匠の教えとは異なった型として、自己流に昇華されている。

『……………敢えて言うならば……………【時任流】だ』とは、本人の弁。

自身の肉体の保持の為、幼い頃からの鍛錬によって好き嫌いを一切無くしてある。

又、自身の健康管理は徹底しており、風邪一つ病気一つ罹^{かか}った事は未だ曾^{かつ}て無い。

赤い眼は雪と同じく、生まれ付き色素が薄い故であり、決してカラコンなどでは無い。

髪は眼に合わせて染めているのだが、その理由は『……………格好良いからだ』……………だそうだ。

孝介とは、出会う度にほぼ必ず手合わせをする間柄であり、立派に兄弟子を務めている。

又、雫とは常に美夜の隣の位置を巡って競う仲であり、『最大のライバル（本人達談）』である。

因みに、大河も入り婿ではあるが竜之介とは違い、寧ろ請^こわれて入った口である。

その為か、時任家とは当初から御互いにとても友好的に接しており、

美夜が諍いいさかを此の上無く好まない事もあって、トラブルの類は未だに一切無い。

一言「……………日々是精進也。ひびしれしようじんなりそれと、美夜は絶対に誰にも渡さんからな。」

時任美夜（ときとうみよ） 一人称：私 CV：大原さやか

34歳 女性 150cm すとーん 黒髪黒目 超ロングヘア

好きなモノ：物静かな雰囲気・穏やかな雰囲気・仲良し

嫌いなモノ：煩わしさわづらひ・騒々しさ・喧噪いさか・諍いいさか・虫

好きな食べ物：和風料理・中華料理 嫌いな食べ物：欧風料理

好きなタイプ：時任大河・葛城雪・米倉雫 嫌いなタイプ：?????
?????

趣味：御稽古 特技：日本舞踊・茶道・華道・薙刀・書道…… et

時任渡の母。孝介の過去を知る人物その十。万年バカップル夫婦その三。

様々な稽古や鍛錬を親に言われるが儘、そして自分の望む儘に幼い頃から積み重ね、

名取や師範代の名を縦ほしにした曾ての神童にして、時任家の現当主。

米倉雫の項目に書いた通り、雫とは血の繋がっていない姉妹であり、美夜が義妹いもこと。

又、後述する草薙玲の師匠でもあり、彼女の死を心より嘆き悲しんだ人の内の一人でもある。

欧風料理が嫌いなには理由がある。

昔、幼い頃に外国に連れて行かれた時に食べた、初めての外国料理がエスカルゴだった。

最初はそれと知らず美味しそうに食べていたが、両親の会話でそれが蝸牛かたつむりと知り、

小さい頃から虫の類が一切駄目な美夜は、思わずその場で吐瀉とせして大泣きしてしまい、

それがトラウマとなり、それ以来、欧風料理は一切食べられなくなってしまうたのである。

大河に惚れ込まれ、彼の猛烈アタックにより陥落し、今ではバカッブルの名も恣ほしこまにしてまいる。

実は、雪・凧とは小学校時代からの親友であり、二人にとってはアイドルそのものである。

（歳を見れば御判りだろうが、三人共学年が違う。）

例えば、美夜が小一の時、凧が小二、雪が小四である。（

その立ち位置は未だに全く変わっておらず、今でもその隣を巡って日々争いを繰り広げている。

因みに、彼女の左側は雪の定位置となっており、右側を凧と大河が常に取り合っている。

一言「あらあらまあまあ。おいたはダメよ、大河。

もう……本当にみんな子供みたいなんだから」

草薙玲（くさなぎれい） 一人称：私^{わたくし} C V：桑島法子

享年12歳（満13歳） 女の子 138cm ツルンペタン 黒
髪黒目・さらさらのロングヘア

好きなモノ：和 嫌いなモノ：無秩序

好きな食べ物：和風の食事・甘味 嫌いな食べ物：洋風の食事・辛い物

好きなタイプ：孝介 嫌いなタイプ：自分達に近寄って来る人

趣味：習い事 特技：琴・華道・書道・茶道・武道（主に薙刀）等々

故人。中学一年の十月頃に交通事故にて他界。

孝介の最初の恋人にして、孝介の過去そのもの。

唯達以外と話している、ぶっきらぼうな普段の孝介を形作った直接の原因。

大和撫子が服を着て生きていると言えば、御解りだろうか。

和の習い事は並べて習って居り、各習い事の殆どが名取に直接指導を受ける程の腕前で、

齡十代で、次代の名取を襲名するのも間近とすら言われていた麒麟児。

その育ちの所為か、和風のものならば何でも好み、常に着物を着て登校していた程。

逆に洋風のものならばどんなものでも嫌がり、学校の制服も着たがらない程、徹底していた。

その為、当初はアルスとも御互い非常に仲が悪かったが、後々和解する。

……が結局、洋風嫌いは直らず終いで、どうやらアルスだけは特別扱いだった様だ。

年老いた両親が居る。遅くに産まれた子の所為か、猫っ可愛がりをして居り、

正に目に入れても痛くない程の溺愛振りで、彼女自身もその愛情を殊ことの外ほか喜んでいた。

その為、彼女が亡くなったと聞いた時の両親の絶望は計り知れない。

プロフィール 三年次 変更&追加 加筆・修正（後書き）

如何でしたでしょうか？

皆様の疑問の幾つかでも解消されたのであれば、幸いです。

そして、またもや新たな『???』の文字が……………はい、新しいキャラですw

ですが、その登場はまだまだ先の事ですので、今は余り御氣に為さ
らず。

次回からは、ちょっとした説明不足の補足と、バカップルの全開振
りの御披露目ですw

皆様、胸焼け対策は万全ですか？w

では。今話も御覧頂きました、誠に有難う御座いました。

そんな或る日（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

大変、御待たせ致しました。孝介とかがみが恋仲になってからの第一話です。

では、今話も拙作を御覧下さい。

そんな或る日

【『ごめんなさい』と言えるかな？】

side：陵桜学園 職員室

転校生達と大騒ぎした翌日の朝。孝介は一人、其処の扉の前にいた。昨日黒井先生に吐いた、暴言について謝罪する為である。

只でさえ、律儀……と言うか堅物と言っても過言ではない孝介の性格では、

あの儘なあなあにしておく事は出来ず、

最悪の場合、停学……いや退学の可能性をも考えていた。

「……………すう……………ふう……………失礼します。黒井先生はいらっしゃいますか？」

「ん〜？ お〜……………草薙か〜。何や、どないしたん？」

深呼吸までして意気込んで入って来た孝介を出迎えたのは、

如何にも気の抜けた黒井先生本人の声だった。

少し拍子抜けしてしまつたが、改めて気を入れ直して、黒井の元へと歩み行く孝介。

一方、黒井はその嫌に気合い十分な孝介の様子に、

何か嫌な予感がしたのか、先程迄の気の抜けきつた顔が少々引き攣つていた。

「黒井先生。今、少々、御時間を頂いても宜しいでしょうか？」

「……………お、おお。構へんけど……………な、何や？」

「……………昨日は、大変失礼致しました。教員に対し、有るまじき暴言……………猛省しております。」

「……………あ、ああ。何や、その事か。ええって、ええって。

草薙にも事情つちゆうもんがあんねやろ？ そないな事、ウチは気にせえへんって。」

「……………有難う御座います。」

「お〜。」

職員室にいた他の教職員達も、何事かと多少なりとも戦々恐々としたが、

取り敢えずは無事に終わってホツとしていた。

それでもう話は終わりかと思われたが、ふと何か思い出したかの様に黒井が声を上げ、

孝介にニヤニヤ顔を向けて、皆に聞こえる様に少し声を大きめに話し掛けた。

「あ、せや。なあ、草薙。一つ訊きたい事があんなやけど……」

「……何でしょうか？」

「柊とはどないなってる？ あ、姉貴の方やで？」

「………何故、そんな事を？」

「ウチが気になるからや。あ、せやせや。ほな、それを正直に話したら、昨日のは許しちゃうで。」

ニヤニヤ×ウキウキ笑顔の黒井を前に、苦虫を噛み潰した様な顔になる孝介。

それが尚、黒井の笑顔の質の向上を助長している様だ。

自業自得だ、仕方ないと諦めた孝介は、又一つ深呼吸をして、昨日のあらましを更に掻い摘んで黒井に話した。

「……………（何と言う……………だが、仕方ない……………か）解りました。

ですが、多少の過程は省かせて頂きます。私事でもありますので。

昨日、あの後アルス……………転校生の別荘に行きまして。そこに後から彼女達が来まして。

其の後、色々と紆余曲折がありまして、結局かがみとは昨日から恋人になりました。

……………これで宜しいでしょうか？」

「……………お、おお。と、取り敢えず……………おめでとさん。」

「有難う御座います。では、これで失礼致します。……………御騒がせ致しました。」

堂々と惚気た孝介に、気圧されるが儘に頷く黒井。

自分が注目されていた事にも気付いていた孝介は、

他の教職員にも頭を下げ、その儘足早に職員室を出て行った。

其の後、恨み言の様に延々と独りごちる黒井が正気に戻ったのは、
一時間目のチャイムが鳴った時であった。

【『カイ』と呼ぶ訳】

side:3 - B教室

只今、昼休み時間。各々昼食も終え、誰もか余った自由時間をどうしようかと考えている頃。

仲の良い友達と雑談に興じる者。有り余る元気を持って余し、校庭や体育館に遊びに行く者。

眠気が勝ったのか、机に突っ伏したり、何処か自分の所定の場所で眠りに就く者。

そんな各教室それぞれの光景が広げられていた。

そして、此処3 - B教室でも多分に漏れず、孝介を中心に左隣から、
唯 アルス 渡 真人。

又、右隣からは、かがみ つかさ みゆき こなた あやの みさ
お 涼子 拓海。

と、何となくこの席順で円形に座る事になり、その儘で雑談に花を
咲かせていた。

(余談であるが、結局卒業する迄一度もこの席順は変わる事が無
かった……と、

さ。)
卒業後にアルスに言われて、初めて気付いた孝介であったと

「……………コウ???」

「ん……………かがみ……………???」

「孝ちゃん???」

「よしよし、唯??」

「……………相変わらず仲が良いですねえ、カイ。」

「……………それは皮肉か？ それとも、やっかみか嫉妬か？」

「……………ワタル？ 口は災いの元と言う言葉を知っていますか？」

「まあまあ、アル兄。……………兄さんも思った事すぐ言う癖、早く直してよね。」

「んなもん、無理に決まってるだろ？ 思ったと同時に口が開いてんだからよ。」

「……………本当にもう……………。」

“……………あ、アハハ……………；……………”

御判り頂けたらだろうか？

孝介の右側にべったりくっつき、右腕で抱き締められているのがかがみ。

孝介の左側にこれでもかと言つぐらい引っ付き、左手で頭を撫でられているのが唯。

二人……………いや、三人共辺りの目を何等憚なんごほばかる事無く、堂々とイチャツ

いているのである。

それをすぐ側で、一日中延々と見せ付けられている身にもなって欲しい。

これからは毎日これが続くのかと、多少……もとい基、多々げんなりしていても誰が責められ様か。

寧ろ、彼女達に対する同情の視線が同クラス・同学年のみならず、通り掛かった他の生徒や先生達からも向けられたのは、言う迄も無い。

しかし、既に草薙玲と言う前例を目の当たりにしていた孝介の親友達は一向に構わず、

寧ろそれを^{やぶ}揶揄するだけの余裕も見せ、色んな意味でこなた達を驚かせていた。

「……にしても、カイの奴の惚気ッ振りは相変わらずだなあ、ええ？ おい！」

「……ホントにね。ま、カイ兄は結局変わってないって事が解っただけでも、僕はいいけどね。」

「……サナは本当に良く出来た弟ですねえ。それに引き換え………ハア。」

「あん？ 何、人の顔見て溜息なんざ付いてやがんだよ、アルス。」

「……いえ、別に。特に意味はありませんよ、どうぞ御氣に為さらずに。」

「……………」

何となく一触即発になりそうな空気の中。

空気を読んだのか読めなかったのか……つかさがふとした疑問を投げ掛けて来た。

「……………あ、あの……………」

「はい、何ですか？ つかささん。」

「あ……………え、と……………その……………ね？ あ、その前に……………何で同い年なのに敬語なの？」

「ああ、これは私の癖でして。御氣に為さらず。」

ですがそれ以上に、つかさんはその内、私のお姉さんになられるのですから、

特に敬語は後々の為にも欠かせないかと。」

「ふえ？ ど、どうして、アルス……さんが、わ、私の、その……お、弟に？」

それはつかさのみならず、誰もが疑問に思った。

つかさがアルスのお姉さん？ と言うか、アルスがつかさの弟に？

一体どういう事だろうか？

だがどうやら、孝介や唯達は分かっている様で、唯はより嬉しそうな笑顔に。

そして、孝介は今迄の気の抜けた惚気た顔が一変し、鋭い目付きでアルスを睨んだ。

だが、当のアルスは一向に気にした様子も見せず、却って笑顔を増して訳を話した。

「では、御説明致しましょう。あ、因みに。アルス、と呼び捨てで結構ですよ。」

御覧の通り、カイとかがみさんが恋仲になられた事は皆さん周知の事実ですね？

故にこの儘、関係が続いていけば、追々二人は結婚なさるでしょう。

と言う事は。カイの妹である唯がかがみさんとつかささん、御二人の義妹となり、

その唯の恋人であり、婚約者である私とも義理の姉弟と言う事になる訳です。」

「……………俺は未だ認めていないんだが？」

「はいはい……………と言う訳です。既に唯は、御二人の事をお姉さんと思っっていますよ？」

「うんっ！ かがみお姉ちゃんにつかさお姉ちゃん えへへ〜
家族が沢山だ〜」

「お、お姉ちゃん…………… / / / / / あうっ…………… / / /

よ、呼ばれ慣れてないから、な、何か……………は、恥ずかしいよ……………
/ / / / /

「つかさお姉ちゃん、顔真っ赤……………カ〜ワ〜イ〜イ〜……………?
? ? ?」

「あう……はう……／／／／／」

真つ赤になつて悶えているつかさに抱き付く唯。それに照れるつかさ。更に萌える唯。

その二人に萌える涼子。色んな意味でツツコミ所満載だったが、敢えて誰もが黙っていた。

そんな中、思い出した様にアルスがつかさに聞き直した。

「ああ、そう言えば、つかささん。先程、何か私に質問があったの
では？」

「はう……／／／ふえ？／／／あ、そ、そうだった……忘れ
てた／／／

あ、あのね？ 何でアルス……さん……達は、その……、

くさなg……お、お兄ちゃん／／／／／の事を、
カイって言うの？／／／／／」

「……ああ、そう言えばそうよね。前から気にはなつてたけど、聞
いて無かつたわね。」

て言うか、つかさ？ そんなに恥ずかしいなら、別に無理して言
わなくていいんじゃない？」

「だ、大丈夫だよ、お姉ちゃん／＼ わ、私、頑張るからっ／＼」

「……………相変わらず、何処か抜けてるといっつか、変な所で頑固と言っつか……………」

まあ、頑張んなさい。……………私は一応止めたからね？」

「う、うんっ／＼／＼（……………本当に解ってんのかしら？…………）」

とまあ、姉妹の会話も一段落した所で、改めてアルス達に皆の視線が集中した。

すると、何故かアルスがクスクスと笑っていた。

渡は不思議そうな顔をして首を傾げており。真人と唯はあく、やっぱり。と言っ顔をしていた。

そして、当の孝介本人は、特にこれと言った表情を見せる訳でも無く。

どうやら、その質問は孝介達にとっては良くされる質問なのだと、

その反応を見たかがみ達は、そう思った。

「クスクス……………いえ、失礼。その質問は、仲良くなるとほぼ必ず聞かれるものですので。」

「うん。絶対って言っていていい程、本当に良く聞かれるよね、それ。」

「うーん……………ボクはそんなに気になんないんだけどなあ……………孝ちやんの呼び方。」

「全くだ、俺にもさっぱりだぜ。そんなに気になるもんかねえ？他人の呼び方なんてよ。」

「まあまあ、いいじゃありませんか。減るものでもありませんし。」

そう言うと、では、と一つ前置きしてから、アルスが皆に語り始めた。

「実は、『カイ』と言う名前にはそんなに難しいエピソードは無いのですよ。」

彼女……………玲が、カイの事をコウと呼んでいた事は御話致しましたよね？

そうそれで、彼女に『孝介』と言う名前の、前の文字の『孝』の分を取られてしまったので、

では、私達は後の方の『介』の文字で呼ぼうと。

ですが、『すけ』では流石に如何なものかと。では読み方を変えて『カイ』と呼ぼうと。

そう言う訳でして、カイに相談してみたら、『好きにしる。』と。

偉くあっさり決まってしまう、今に至る……と言う訳です。御納得頂けましたか？」

いぎ、聞いてみれば何と言う事は無い。皆の思い出が詰まった名前。只、それだけの話。

しかし、大事な大切な思い出。何よりも代え難い想いの詰まった……。

何となく、しんみりとした空気になり、その儘休み時間が終わっていた。

其の後。孝介は、アルスの別邸に泊まっていた唯を連れ戻し。

何年振りかで、兄妹仲良く一つ屋根の下、同じベッドで二人共、安らかな眠りに就くのであった。

そんな或る日（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、今の所、他の題材としては五つ程、考えてはいますが、何か御要望や疑問等が御座いましたら、遠慮無く御一報下さい。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

孝介と唯（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

さて、大変御待たせ致しました。今回はタイトル通り、殆ど喋っているのは孝介と唯だけです。

では、今話も拙作を御覧下さい。

孝介と唯

【兄妹？ or バカップル？】

side：孝介の部屋 by 孝介

チチチチチ…………… チュンチュン……………

…………… 小鳥の声 …… 瞼に光が差し込んでいる …… とうとう、朝か。

時間を確かめようと、頭の方にある目覚まし時計に手を伸ばした。

…………… 何だ、未だ六時回ったぐらいか。思ったよりも早く起きたな……………。

だが、妙に頭がすっきりしているのは何故だろうか？

昨夜は早目に寝たからか？ 真逆、アルスの阿呆達の騒動の疲れが今頃来たのか？

それとも …… 今、俺に身体全身で獅噛み付いて寝ている妹の御陰だろうか。

「ふみゆ……………うにゆ……………孝ちゃん……………もう、食べられにゃいよう……………」。

「……………何と言つべ々な台詞を。」

「……………ふにゆう……………えへへへ……………」

「……………一体、どんな夢見てんだか。」

今の俺達の体勢を説明するとだな。

先ず俺が左側を下にして、左腕を伸ばして投げ出している。

その腕を枕にして唯が俺に身体全体で抱き付いている。……………身動きが一切出来ん。

それで、自由に動かせる左腕の先の方で唯の肩を抱き締めて、右腕で頭や背中を撫でていた。

すると、とても嬉しそうなニヤケ顔で更に自分の顔を俺の胸に埋める様に押し付けて来た。

……こいつ、実は起きてるんじゃないだろうな？

そんな事を徒然つれづれ思いながら、良くやる様に唯の髪に俺も少し顔を埋めた。

相変わらず良い匂いがする。何時も側にあつた懐かしい匂い。……

……本当に落ち着く。

そうしていると、少しくすぐ擦ったそうに唯が身動きした。先程からずっと頭は撫でた儘だ。

……だが、どうやら少しみじろ身動きしただけの様で、又ニヤケ顔で顔を埋めて来た。

何となく、そんな唯が益々可愛く愛しく思えて、思わず笑みを零していた。

額の髪をそつと上げ、その儘小さな額に軽くキスした。序でに柔らかいほっぺにも。

ニヤケ顔が、ニへへという何とも言えない顔になつてた。……本当
にどんな夢を見ている事やら。

もし、起きているんだとしたら……と悪戯心が湧き上がり、鼻の頭にも一つ唇を落とした。

……どうやら、特に反応は無い。本当に夢を見ている様だ。

未だ、時間はたっぷりある。そう思って、俺は再度時計に手を伸ばし、目覚ましを止めた。

それから一時間程。唯が「んにゅつづつうううう~~~~!!!!!!!!
!」と、

まるで猫の様に背伸びして起きる迄、俺はずっと久し振りに見る妹の寝顔を堪能していた。

side...3 - B教室

「.....とまあ、これが今朝の様子だが。」

「ねーよ。」「ありえへんな。」「嘘はダメだよ、孝介君。」「お前、妄想ヒデエな。」「

「.....お前達、ちょっと其処に正座しろ。」「

御判り頂けるだろうか？ 今居る場所は3 - B教室。そして今は授業の合間の休憩時間。

既に新学年三日目となった今日にも拘わらず、恒例となっているこの集まり。

この中には、今は真人と唯はいない。二人が来るのは、主に昼休みぐらい。

それ以外は、教室で友達とワイワイキャッキャウフフしているそう
だ。

そんな中で現在話されていたのは、今朝の事。

今朝、登校して来た皆が目撃したのは、孝介を抱き締めながら、孝介に抱き締め返されながら、

ラブラブオーラを出し捲まくっている葛城兄妹の姿だった。

二人の関係を知らなければ、誰もが恋人だと絶対に勘違いするレベルの仲の良さ。

それはやっぱり身近な人達をも困惑させ ナニガアッタ！ と詰問され、今に至る訳なのである。

そして、先程発言した拓海・涼子・こなた・みさおは、現在絶賛正座&説教中である。

それを見ていたアルスと渡は少々苦笑しながら、フォローと言う名の事実を皆に教えてあげた。

「まあまあ。カイ、程々にしておいてあげて下さいね。」

「ま、アレを見た殆どの奴が疑うよな、普通。」

「ええ。私達も何度勘違いしそうになった事か……ねえ、カイ？」

「……俺が知るか。俺と唯は兄妹以外の何物でも無い。邪推は御免蒙る。甚だ迷惑だ。」

「ええまあ、それは間違い有りませんからね。何せ……ねえ？」

「あ……アレか。確かにアレん時は大変だったなあ。みんなで何事かと大慌てしたっけか。」

何か意味深な発言と、確信したかの様な口振りに益々気になるのは、人の性だろうか。

御多分に洩れず、皆も同様だったらしく……………。

「……………ねえ、コウ？ 一体、何があったの？」「うんうん、私も気になる？」

「……………あ……………まあ、いいか。授業まで未だ時間もあるし。」

「やたー。」「えへへ だからコウ大好き / / / / /」「うふふ 柊ちゃんったら、大胆ね」

「マジでバカカップルは手に負えんわ。」

「全くだな。と言う訳で涼子。俺達もしようか？」

「何をやねん！？ / / / こんな他人様の前でなんかようせんわ、阿呆！ / / /」

「じゃ、後でならいいんだな？」

「そ、それは……………その……………あの……………察しいや、阿呆！ / / / / /」

「……………うわぁ……………アンタ達も充分にバカカップルじゃないのよ、涼子。」

「……………全くだ。他人の事は言えんな。」

「……………まさか、お前達にその台詞を言われるとは……………俺も末期だったのか。」

「……………孝介にバカップルてゆわれた…orz ……かがみんなにバカップルてゆわれた…orz」

「……………うん。今の涼子に萌えた時点で俺はもうダメなんだろうな。」

バカップル共のリア充会話はさておき。アルスが孝介に代わり、その理由を話した。

「いえ何、実はですね。カイは唯にとって初恋の人なのですよ。」

ですが、御両親に兄妹では結婚は出来無いと聞き、愕然としまし
てね。

それで、雪さん……………母親を伴って態々自ら戸籍謄本を受け取って
確認までしたのです。

その時に、紛れも無く実の兄妹である事を彼女は知りまして、

それはもう物凄く大泣きしましてね……………こうして、初恋は敗れ去
ったと言つ訳です。」

「……………す、凄い妹さんですね。」

「ま、行動力だけは、俺達の中でもピカイチなのは間違い無えな。」

「貴方は只、毎日暴れているだけですからね。」

「あぁ、ん！？ …… ったく、テメエは毎回一ター言多いんだよっ
！！」

涼し気な顔で渡を見下しているアルスと、今にも嘔み付きそうな程にアルスに唸っている渡。

一触即発な空気でありながら、何となく微笑ましく感じるのは、
きっとこれが彼等にとって日常であるからだろう。 …… 何とも心臓
に悪い日常ではあるが。

そんな事を話している内にチャイムが鳴った。同時に説教タイムも
終了していた。

【兄の想い】
いむちけ

side: 孝介の部屋 by 唯

「……………とまあ、こんな事があってな。いやはや、久しぶりに参つたよ。」

「あ、アハハ……；確かに小さい頃は良く言われてたよね、とても兄妹には見えないって。」

「まあ、今も十二分に小さいがな。」

「あ、ひつどーい！もう、孝ちゃんのバカっ！」

え？ 今、ボク達が何してるのかって？ あのね、今学校から帰って来た所なの。

それでね。今ボクは、孝ちゃんの膝の上に乗って、孝ちゃんと正面を向いて座ってるの

えへへへ　　ここがいつものボクの定位置なんだ　　いいでしょ
　　羨ましいでしょ

でも、代わってあげないモン　　だってここはボクだけの場所だからね　　えへへへへ

それでねそれでね！　　今、ボク達は今日学校であった事を話してる

んだ

「クスクス……にしても、アルスの奴……余計な事ばっか言いやがって。」

「あはは……；アルスだって別に悪気があって言った訳じゃ無いんだし、ね？」

「……いいや、あいつの場合に限っては、絶対どこかに必ず悪気や悪戯心が含まれてる。」

「そ、それは流石に言い過ぎじゃないかと……；……；」

「あいつに限って言い過ぎると言う事は絶対に有り得ないな。」

むう……。一応、ボクの彼氏で恋人なんだから、

もうちょっと仲良くして欲しいと思うのはボクだけかな？

お父さんやお母さん達は、孝ちゃんとアルスが実は一番仲が良いって言うけど、

ボクにはそんなに仲良くは見えないんだけどなあ……。

そりゃね？ 今までずっと一緒にいたんだから、他の友達よりよっぽど仲は良いけど、

それでも、まだとき君の方が仲が良いって思う時の方が多いんだモン。

そつだ！ 今はどうせ誰もいないんだし、折角だから聞いちゃおう！

「……………ねえねえ、孝ちゃん。ちょっと聞きたい事があるんだけど。」

「ん？ 何だ急に改まって。別に構わないぞ、何でも。」

「孝ちゃんの一番仲の良い友達って誰？ とき君？ さな君？ それともアルス？」

「……………本当に何だ？ 唐突に……………ま、いいけど。」

そつだなあ……………一番気が合うのは渡かな？ で、一番話が合うのがサナだ。

んでもって、非常に残念な事だが、アルスが俺とは一番御互いの事を理解しているな。」

「……………ふえ？ アルスが？ でも、いつも口喧嘩してるよね？ 何で？」

「……………ぷつ。クスクスクス……………アッハッハッハッハッ！！

「！！！」

お、驚いたあゝ。いきなり大声で笑い出すんだモン。

でも何で笑うの？ ボクマジメに聞いているのに！ もう、孝ちゃん
のバカっ！

そう思つて、むう……つて頬を膨らまして怒つてるつて孝ちゃんに
教えたら、

孝ちゃんが、綺麗な笑顔で、ボクの頭を撫でて来たんだゝ

うにゆうにゆう　　気持ち良いゝ　　……………はっ！

つて、そう簡単にごまかされないんだからねっ！　つて、思つて孝
ちゃんを見たら、

孝ちゃんが苦笑しながら、教えてくれたんだ。

ボクの知らない二人の『絆』つてものを。

唯が唐突に改まって聞いて来るから何事かと思っただら……思わず笑ってしまっただが。

すると、唯が剥^{むく}れて怒ってしまった。……まあ、唐突に笑われたら誰でもむっとするよな。

……しょうがない。余り、こういう事は言いたくは無いんだが……教えてやるか。

「むう……!」

「ぶっ……クスクス……ごめんごめん。」

「むう……う……! 撫でてくれたってボクは許さないからねっ!」

「はいはい。」ポンポン……

「うにゅうにゅ……はっ! だ、だから、そうじゃなくって……孝ちゃん?」

「……いいか、唯。今から言う事は絶対に誰にも秘密だ。

特にアルス……アイツには絶対に、だ。いいな?」

「……う、うん。」

そう唯から言質を取ると、俺は一つ深呼吸して唯に教えた。

俺とアルス……俺達の関係ってものを。

「そうだな……どこから話すかな。」

「そういや、唯は俺とアルス達が最初はどついう関係だったか、覚えてるか？」

「あ、うん。確か、孝ちゃんとき君が喧嘩してたんだよね？」

「喧嘩と言うか……まあ、そうだな。要は、俺と渡達が対立してた訳だ。」

渡がガキ大将で、アルスがその参謀役。

で、俺がそいつらを窘めて時にはそれこそ喧嘩する仲。

始めは御互い、大喧嘩して殴り合うぐらい仲が悪かったんだよ。」

「……そうだったんだ。」

俺の膝の上に座った儘で、俺に真正面を向いた唯が目を大きく皿の

様にして驚いていた。

まあ、あの頃は未だ唯も小学……低学年だったからな。今一つ覚えてないのも無理は無いか。

「ああ。でも、唯とサナが同じクラスになって仲良くなって、それで俺とサナが仲良くなって。」

それから、サナが俺達の間を仲介して渡やアルスとも和解したんだよな。」

「うん。サナ君、様々だね。」

「ああ。まあ、そんな訳でな。アルスの奴が参謀役を務めてたのは伊達じゃ無くてな。」

あいつは人の気持ちとか考えとか、そういうのを理解するのが得意なんだよ。」

「うん。確かにボクのしたい事とかして欲しい事とか、いつも必ずしてくれるモン。」

一体、何時の、どんな事を思い出していたのか。唯の綺麗な笑顔にはいつも心が和む。

そんな唯に俺も嬉しくなり、笑みながら唯の髪の毛を撫でた。

唯も気持ち良さそうに甘えて擦り寄って来る。

「ああ。そんな奴だからな。俺も何となく一緒にいる内に、

アルスの考えとか想いとか色々自然と解る様になって来て、な。

それもあいつは理解しててなあ。いやはや……アルスにだけは流石の俺も参ったよ。」

「……そうなんだ。」

「……まあ、そういう訳だな。」

アルスの奴が小学校を卒業する時に、俺が居ない隙を狙ってお前に告白した事も知ってるし、

アルスがどれだけ唯の事を想って、どれだけ唯を愛しているかも知ってる。」

「あう……………// // // //」

自分の両腕を俺の首に回し抱き付いた儘の、唯の耳や頬が真っ赤になっている。

その可愛さに思わず頬に一つキスをした。益々真っ赤になる唯に癒

されながら、話を続ける。

「……そう。だから、アルス以外には唯を任せられないのも理解しているし、

それ以外の奴になど……例えお前達に何かがあつて、二人して共に居る事を諦めたとしても、

俺は絶対に認めないし、絶対に許さない。

アルス以上に唯に相応しい男など、此の世には絶対に居ない。」

「……孝ちゃん。」

「そして、俺がそう想っている事も、アルスは解っている。

アルスが解っている事も、俺も解っている。だからこそ、俺達は親友でいられる。」

「……それじゃあ、いつも孝ちゃんとアルスが喧嘩してるのって……。」

「ああ。あれは、只の戯れ^{ごじ}合いだ。御互い理解しているからこそその照れ隠しだな、要は。」

「………そ、そんなの分かんないよう………」

「……解って貰っちゃ困るんだがな。」

「ううん……にゆ？ あれ？ それじゃ、孝ちゃん、ボクとアルスの仲って……？」

「ああ、最初から認めてるよ。アルスが唯に惚れてたのはバレバレだったしな。

唯の俺への初恋が叶わないと知って泣いた時、

すぐに慰めに来たアルスを初めて認識して、その時に一目惚れしたのも知ってる。」

「うにゃにゃにゃ！？／／／／／／／／／／／／」

「……何だ、その奇声は； まあ、いいや。そういう訳だな。

だが、そうおいそれと大事な妹をくれてなどやるものか、とね。それで今に至る訳さ。」

「……………え、と。つまり、只の意地っ張り？」

「……………要約すればそういう事になるかな？ だから、まあ、あれだ。

俺に気兼ねせずに、何時でも好きな時に、好きなだけアルスと遊びに行つて来い。」

アルスが遊べるのは今年だけだからな。今の内に堪能しておいた方が良い。

来年からのアイツは余りにも忙し過ぎて、滅多な事じゃ一緒にいられなくなるからな。」

「……………うん。」

その日。唯は今迄以上にぐっすり、穏やかに眠れたと後に孝介に語っていた。

そして、その日を境に唯は、孝介とアルスの何時もの喧嘩じゃれあいを見るたびに含み笑いをし、

益々アルスと良く一緒に遊びに行く様になったそうな。

その積極性にはアルスも少し驚いた程らしく、後々……結婚後。

孝介にそれとなく聞いて、ようやっと得心がいったとか、孝介に改めて感謝したとかしないとか。

孝介と唯（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、前半で全キャラ（真人除く）最低でも一言は喋っている筈ですが……；……；

長々と書きましたが、分かり易く言うならば、

孝介はアルスを信じ、アルスは孝介を信じている、と云っただけの話です。

そして、それは渡も真人も同様に、御互い信じ合っている。そういう関係です。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

風邪って大変！（前書き）

皆様、拙作を何時も御覧頂き、誠に有難う御座います。

大変御待たせ致しました。そして、やっぱり間に合わなかったで御座るうゝorz

では、今話も拙作を御覧下さい。

風邪って大変！

【風邪って人によって症状違うよね】

Side：学校 HR前

「え？ 今日、コウ休みなの？」

「……うん。何か、風邪引いちゃったみたいで……。」

「……そう言えば、年に1〜2回程、必ず彼は風邪を引いて学校休んでましたね。」

「あ〜……そういやあ、あいつ前に、両手を床に突いてどんよりと落ち込みながら言ってたな。」

『どんなに身体鍛えても、どんなに健康に気を付けてても全く意味無かった。』ってな。」

「……カイ兄。本当に難儀だよな……。」

どうやら、孝介のそんな様は初めて見聞きしたらしく、皆一様に驚いている様だ。

実は去年も二度程、風邪に掛かっていたのだが、何れも幸いなる哉かな

休日だった為、

辛うじて誰にも気付かれずに、自力で治せたのであった。

だが、今回は残念ながら平日に来てしまい、休まざるを得なかったのだ。

「でも、風邪って言うけど、そんなに休む程酷いの？」

「えっとね。熱は常時39 台で、咳が酷くて呼吸が辛くて、体中が軋むんだって。」

「そ、それ、物凄く重症じゃないですか!？」 「あ、あわわわ……!？」

「ちょ、ちょっと! それって放つといて本当に大丈夫なの?!」

唯が症状を伝えた瞬間、教室が騒付いた。……まあ、皆が騒ぐのも無理は無い。

世間一般的には、39 台と言えば下手をすれば救急車を呼んでも可笑しくは無い。

しかも、他の症状も聞説相当辛そうな状況の様だ。

皆が心配するのも極普通の反応ではある。……あるのだが、しかし。

「慌てる御気持ちも解りますが、落ち着いて下さい。」

「そ、そんな事言ったって……！」

「……ふう。あのですね？ カイが何よりも大事で大切と、恋人である私の目の前で公言しているこの彼女が、何故、今この場に居ると思います？」

普通に考えれば、カイの隣で看病していると思いませんか？」

「……そう言われりゃ、そうだな。」

「ほな、ウチらが思ってるよりかは、大丈夫なんか？」

「つーかな。あいつはどんな重症でも、大概一日でケロリと治しちまうんだよ。」

昔も、おたふく風邪とか麻疹はしかとかも一日であっさり治しててな。

……本当に変な奴だぜ。」

「……まあ、貴男にだけは彼も変とは言われたくないと思っているでしょうけど。」

「……ああ？ テメエ、朝っぱらから喧嘩売ってんのか？」

とまあ、二人のいつもの喧嘩はさておき。

相変わらずの孝介の廃スハイペックに少々冷や汗を掻くかがみ達であった。

気にはなるものの、それで少しはホッと胸を一撫でした彼女達の中に、共通の考えが浮かんだ。

(そうだ。御見舞いに行こう。)

純粹に心配だからと想う人と、こんな機会滅多に無いから揶揄に行こうと思う人。

動機はそれぞれ様々だったが、どうやら孝介に色んな意味でのフラグが立った様だ。

皆は、それぞれの用事や時間的都合もそれぞれ示し合わせて、波状攻撃を仕掛けるつもりだ。

果たして、孝介は無事に明日学校に行けるのか！ 頑張れ、孝介！

side：孝介の自室

「ヘックション！ ……ズズツ。誰か噂でもしたのかな？

……(ブルッ)うっっ……何か冷えて来た。

……沢山、汗掻くけど、もう一枚布団増やそうかな。

……はあ。かがみに逢いたいな……早く明日にならないかなあ……。」

その悪寒が風邪による悪寒では無いと孝介が気付いたのは、この日が終わってからだった。

【そうだ。御見舞いに行こう。ver.1】

side:かがみ

今、私とつかさ、こなたとみゆきが、コウの家の前にいる。

唯ちゃんが、家の鍵を開けて私達を通してくれた。

「さあ、どうぞ。相変わらず狭いけど……あ、何か飲み物持ってきて来ますね。」

「いえ、御構い無く。それよりも、孝介さんのお部屋はどちらでしょうか？」

「あ、孝ちゃんの部屋はすぐそこです。多分、今寝てると思うけど気にしないで下さいね。」

「あ、寝てるなら、今は不味いんじゃない……。」

「ううん、大丈夫。孝ちゃんは一回寝付くと、滅多な事じゃ起きないもん。」

確かにね。いつも手を繋いでたり、膝枕してあげてる時とか一緒に良く寝ちやうんだけど、

起きる時は必ず私の方が早いものね。そっか……昔からそうだったのか。

「……そうなの？ かがみん。」

「え？ ええ、まあ。確かに、中々起きないけど……って、何で私に聞くのよ……？」

「いやいや。……立派に通い妻やってるなあって。……もう既にそこまでの関係になっていたとわ。かがみん……恐ろしい子……っ！」

「な！？／＼／＼　ち、ち、違うわよっ、バカッ！／＼／
そ、そういう意味で言ってるんじゃないってば！！／＼／＼／＼」

もっつ！　いきなり何て事言つたのよ、こなたのバカッ！／＼／

ほら、みゆきにつかさまで顔赤くしてるじゃない！　少しは自重しなさいよねっ！！

「いやいやいやいや。……自爆したのは、他ならぬかがみんだからね？」

「う、ウル Сайツ！／＼／＼／」

「えへへ　でも、いつもよくボクと孝ちゃんと一緒に、居間こゝで寝ちやいますよね」

「……ほうほう。その話kws k!」

「う……／＼／　そ、そんな事はもういいからっ！　ほら、早くこの部屋に入るわよっ！／＼／」

これ以上、恥ずかしい話を暴露されて堪るもんですか！

そう言っさつさと部屋に入る私の後ろから、クスクスと忍び笑いが聞こえて来たけど、

絶対に私は振り返らないもん！ 四人分の笑い声が聞こえて来たけど、気にしないモンツ！！

side:こなた

いやあ、やっぱりかがみんは弄り甲斐があつていいよね

もう可愛いなのって。流石は私の嫁（公式）だな。うんうん。

「クスクス…… かがみさんって、ほんと可愛らしい方ですよね」

「うんうん 最高に弄り甲斐があつて面白いよね」

「そ、そういう意味では、無いのですが……」

「お、お姉ちゃんが聞いたら怒りそう……」

「アハハ……まあまあ、それじゃ中に入りましょう
二人きりにさせて、それを覗くのも面白いですけど、今日はお見舞いですしね」

そうか！ その手があった！ と思っただけど、流石に今日は自重しよう、うん。

でも音を立てない様に、こっそりドアを開けて中を確かめながら入ったんだ。

……残念ながら、特に皆が期待する様な事にはなってなかったけどね。

「……一体、何を期待してたんだか。」

「そりゃ、まあ……私の部屋にあるようなゲーム的展開？」

「ちょ、おまつ！？／／／／／／ やるかっ！ そんな事っ！！／／／／／／／／／／」

「え〜……ぶ〜ぶ〜。」

つまんない〜。そういうニュアンスを込めてぶ〜垂れてみた。

案の定、あっさりと反応してくれた。やっぱりかがみんは生来のツッコミ体質なんだね。

「ブーイングしないっ！ だ、大体ねえ！

あんただって、そんな場面に遭遇したら物凄く空気というか雰囲気マズイでしょうがっ！！」

「まあ、確かにキスシーンとかはちょっとマズイけどね。」

「へ？」

「ん？ 私の持つてる恋愛ゲームとかじゃよくある定番イベントな
んだけど。」

看病している相手が寝ている最中に、ばれないようにキスするっ
てシーンは。」

「……あ、そっちか。そういう意味か……。わ、私はてっきり……
……／／／」

そして、案の定引っ掛かってくれた。うん、やっぱりかがみはドジ
っ娘だ。

そして、物凄く可愛い。何と言ってもこの照れ照れな顔と態度が、
もう最高にハイって奴だぜ！

もう、本当に一体何を考えて、ナニを想像していたのか丸判りなの
がまた……

「あつるえ〜？ かがみんはあ〜。一体何を想像してたのかなあ〜
？」

「……／／／／／／／／／／／」

「あ、アハハハ……／／／」 「……はう／／／／／」

「あ、こっちもショートしてる。」 「……ホントだ。ちょっと刺激が強すぎたかな？」

その後、三人が戻って来るまで結構時間が掛かっちゃった。てへぺろ（・<）

結局、余りお見舞いらしい事は出来なかったけど、それはこの後来る人達にお願いしよう。

何か、帰り際かがみんなが物凄く後ろ髪を引かれていたけど、まあ流石にしようがないよね。

明日も学校あるんだし、今日は泊まる訳にはいかないでしょ。

………ん？ あれ？ これってもしかして、私フラグ立てちゃったかな？

【そうだ。御見舞いに行こう。 ver.2】

side:拓海

てな訳で、今度は俺達な訳なんだが。後で、日下部と峰岸も合流する予定らしい。

で。問題はこの、俺の隣で手をワキワキさせながら、孝介を狙ってる痴女なんだが。

……いやまあ、こんな涼子もすごく可愛いから俺は構わないんだけどな。

……そこ、うっさい。リア充爆発しろとか言うな。可愛い彼女を自慢して何が悪い！

「？ どこ向いてブツブツ喋るとんねん、拓海。ほら、早よいくで。」

「あ、ああ。じゃあ、唯ちゃん。」

「はい 飲み物は、孝ちゃんのお部屋に持って行きますね」

「うん、済まないけど御願い。って、こら、涼子。そのハリセンで何をするつもりだ。」

全く……流石に今日ばかりは、暴走してる可愛い涼子を拝むのは我慢しておじつ。

だって、孝介に悪いからな。……親友として、な。

そうこうして、涼子の度々の暴走を事前に食い止めながら、

まだずっと寝転ねかげている孝介を眺めていると、チャイムが鳴った。

どうやら、後の二人が合流して来たみたいだな。

……ってだから、その洗濯バサミで一体何をするつもりなんだよ!?

ていうか、一体そんな大量なブツ、どこから持って来たんだ?!

俺と一緒に来た時、お前手ぶらだったよな?! 間違いなく確実に手ぶらだったよなあ!?

side…あやの

「あ、いらっしやーい」

「御邪魔します。」

「おう ……？ 何か騒がしいな。孝介の奴、起きてるのか？」

「ううん。あれは多分、拓海さんと涼子さんが漫才してる音だと思
います。」

孝ちゃんは、あれぐらいじゃ全然起きませんからねw あ、どう
ぞ上がって下さい。」

「それじゃ、失礼します。」

「そんじゃ、アタシらも突撃すつか！」

「あ、ちよっと、みさちゃん！ ……ごめんなさいね。」

「あ、いえいえ ボクは賑やかなのも大好きですから どうぞ
御氣に為さらずw」

唯ちゃんって、本当にいい子よね。みさちゃんにも是非見習って欲
しいわ。

……そんな風に、ちよっと唯ちゃんと談笑していると、騒ぎが更に大
きくなってたの。

……間違いなくみさちゃんが一緒にあって遊んでるのね。……全く
もう。

「……本当にごめんなさいね。草薙君、病気で寝てるのに……。」

「あ、アハハ…….;」

「じゃ、私も草薙君の部屋に失礼させて貰うわね。……みさちゃんも止めないといけないし。」

「あ、はい。御飲み物、後で部屋に持って行きますね（……あやのさん、今ちよつと怖い）」

「うん、御願い」

……さあつて、みさちゃん。覚悟はいいかしらね？

さすがに病人のいる部屋で暴れるのは感心しないわよ？

その後、一緒になって暴れてた涼子ちゃんと一緒にお説教しちゃいました。

……でも、何でだろう？ あの後、何故か三人共、私に怯えている様な気が……。

きつと気の所為よね

【そつだ。御見舞いに行こう。ver.3】

side:アルス

「おや？ もう、皆さん帰られたのですか？」

「あ、アルス。うん、みんなお大事にって言ってくれたよ。」

「そうですか。皆さん優しい方ばかりですからね。」

「うん」

「……大丈夫ですか？ 唯……少し疲れている様にみえますが。」

「あ、うん。ボクは全然大丈夫だよ。」

「ただ、ちょっとインパクトが強すぎたというか、あやのさんが怖かったというか……。」

「……普段静かな方程、一度怒った時は男女問わずに、非常に恐ろしいと聞きますからね。」

あの非常に温厚な方が怒る程ですから、恐らくは寝ているカイの側で騒いだりしたのでしょ。

それを唯に問うと、苦笑しながらも肯定してくれました。……それはまた何とも。

「それより、カイの奴はまゝだ寝転げてやがんのか？」

「うん、ずっとぐつつすり。トキ君達も先行つてて。」

「あ、唯ちゃん。飲み物なら僕も一緒に運ぶよ。」

「ありがとう、サナ君」

「おやおや。役目を取られてしまいましたね。それじゃ、僕達は先に入ってますね。」

「うん　それじゃ、サナ君御願い」

「うん。お盆はこつちだよね？」

「おやおや。本当に仲のいい姉弟の様ですね。……別に羨ましくなんてありませんがね。」

「……おい、アルス。幾らなんでも、真の奴に嫉妬すんのは見苦しいぞ？」

「……そんな事は貴男に言われなくても解っていますよ、ワタル。」

「そつか。ならいいや。ほら、早く入るぞ、アルス。」

「……ええ。」

全く。我ながら狭心とでも言いますか……。本当に唯の事となるとどうにも参りますね。

そんな風に、未だ寝ているカイを一人で眺め、自嘲しながら自戒している。

二人が仲良く笑い合いながら、お菓子と飲み物を持って入って来ました。

……はあ。どうやら、僕もまだまだ修行とやらが必要なようですね。

そうして、彼が起きるまで四人で談笑していましたが、

結局僕達が帰るまでカイが目を覚ます事は無く、そのまま唯を残して僕達三人は帰りました。

え？ 何故かって？ クスクス……それはですね？

……まあ、それは内緒にしておきましょう。起きた時の彼の反応が

非常に楽しみです

是非共、明日はそれで存分に揶揄ってあげましょう。ああ、早く明日になりませんかねえ

【そつだ。今日一日を振り返ろう。】

side：孝介

「う……。」

眩しい……唯の奴……電気消し忘れたみたいだな。

……どうやら、大分楽にはなったみたいだな。咳き込む事も無いみたいだ。息も楽だし。

熱は……まだ少しあるか。だが、精々37 台程度だろう。これぐらいなら、もう問題無いな。

後は……まだ少し体が怠いか。御飯も食べて無かったしな……。
もう少ししたら起きて何か食つか。……はあ、早く治してかが
みに逢いたいなあ。

自分の身体を確認し、そんな事を思いながらゴロンと横に寝返った
時だった。

俺が、これが夢かと錯覚したのは。

「あ、コウ。やっと目が覚めたのね。身体はどう？ 大丈夫？」

「え？ か……………がみ……………？」

「うん、そうよ。それより、ほら。質問に答えなさい。身体はもう、
大丈夫なの？ まだ辛い？」

「あ、ああ。……………身体の方はもう殆ど問題無い。微熱になっ
てるし、咳き込みもしない。」

「只、飯は食ってないから、少々腹減ってて、怠いが……………。っ
ていや、そっじゃなくて。」

どうやら、寝起きで混乱している俺の頭じゃ、まだ正常な判断が出来ない様だ。

何でここに今、かがみがいる？ 抑も、今何時なんだ？

「所で、かがみ？ ちょっと幾つか聞きたいんだが……。」

「今は、二十時丁度。御飯なら、唯ちゃんが今用意してるわ。大体これぐらいの時間に起きるだろうって。」

「そ、そうか。………マテ。今、二十時？ ……何で、かがみがそんな時間にうちに？」

「………何よ。私にここにいちや迷惑？ コウは私に来ない方が良かった？」

「まさか！ そんな事ある訳ないじゃないか。物凄く嬉しい。」

今でもこれが夢じゃないかと疑ってるくらいだ。」

そう。寝る前も、起きた後も。ずっとかがみと逢いたいと想っていた。

だから、目を開けた瞬間にかがみの姿が見え、かがみの声が聞こえた時には本当に驚いた。

俺の思った通りに事が運ぶなんて……夢なんじゃないかと思って。

「もう、ばかね。夢なんかじゃないわよ。ほら………ね？　ちやんと私はここにいるわ／＼」

「あ、ああ。確かに……間違い……ない。」

………そんな真つ赤な顔で恥ずかしそうにしないでくれ。

………こちらが病人という事も忘れて襲い掛かりたくなっちゃうじゃないか。

………だがまあ、その御蔭でキスという役得も貰えたし、結果才ライ………でいいのかな？

「そ、そろそろ御飯が出来る頃ね／＼
私はもう家で食べちゃったけど、コウはお腹空いてるんでしょ？」

「あ、ああ。あ、そうだ、かがみ。どうしても一つ聞きたいんだが。」

「

「ん？ なぁに、コウ？」

「どうやってここにいるんだ？ 家族への説明はちゃんとしたのか？ まさか流石に無断で来た訳じゃないよな？」

そう。俺の一番の心配はそこだった。

……実はまだ、御両親とは恋人としてはちゃんと挨拶をしてないのだ。

だというのに、親しい男の部屋に泊まるなど、

例え妹がいると言っても、普通の親ならば断固否と言っだろう。

流石に幾らなんでもそれはマズイ。恋人として相手方の親と気不味くなるのも避けたいし、

何より、それは世間の一般常識から外れている。まさかかかみに限ってそれはないと思うが、

もし……万が一にももし、そんな事だったのならば、早い内に何とかせねばならない。

だが、そんな俺の心配などは、完全な杞憂だった様だ。

「……まあ、コウが何考えてるか、何と無く想像が付くけど。……大丈夫よ。アルスと唯ちゃんに協力して貰ったから。」

「唯と……アルスに？」

「そう。アルスの豪邸に今日は友達とお泊りしてる事になってるから。」

あそこにはメイドさんも沢山いるでしょ？ だから大丈夫だって。アルスと、執事さん達全員で協力してくれるって。」

「……そうか。アルスとセバスチャン達には、後で御礼を言っておかないとな。」

それじゃ、今日はかがみはうちに？」

「う、うん／＼、い、いいよね？／＼／」

「……ああ、勿論だ。寧ろこちらから御願いしたいぐらいだ。唯も喜んでるだろ。」

「うん……。」

「ん？ どうした？ 喜んでなかったのか？」

まさか。それこそ、あいつに限ってそんな事は有り得ない筈なんだが。

だが、俺の考えていた事とは、全然違う方向でかがみは困っていた様だ。

「いや、物凄く大喜びしてくれたんだけどね……その、妙に気を回されちゃって……」

「気を？ どういう事だ？」

「えっと……その……ね？ / / / / / /」

『今夜は孝ちゃんの隣に御布団敷いて置きますね 実はこの部屋はですね……』

澪さんがちゃっかり防音壁に完備させていたので大丈夫なんです！ 問題ありません！』

………な、なんですって / / / / / / / / / /」

「……………」

今の物真似が何気に上手かったとか、そういう事はさておき。

………また、何ちゆう事をばらしてくれるんだ、あの妹は。

御蔭で色々お互いに意識してしまって、どうにもならないじゃないか。

……………いやまあ、こちらは病人なのでそんな事をする気は初めか

ら無かったが。

「……………
……………
……………
……………」

こんな感じで御互い真っ赤な顔で見詰め合っていると、唯が声を掛けて来た。

どうやら飯が出来た様だ。…………このタイミング、あいつ絶対計つてやがったな。

そして勿論、その声を助け舟にするかの様に、かがみが真っ赤な顔の儘で先に外へ出た。

…………聞こえる声から判断するに、やっぱり唯に揶揄われている様だ。

…………俺は、もう少し顔の熱が引いてから、行くとするかな。

…………そう思ってた俺を、腹の虫が早く行けと急かしていた。

結局。その日は唯の思惑通り、俺の布団の隣に敷かれた布団にかがみが寝て。

朝、支度をする為に早く起きた唯に、二人で手を繋いで寝てた所を見られた時は、

流石の俺も顔から火が出るかと思った。

……でも、夜中に御互い寝付くまでキスし合っていた事はバレていなかったらしい。

それだけは本当にホツとした。そして、俺、本当に良く我慢した。頑張った。

冗談抜きで、自分で自分を褒めてあげたい。正直、そう思った。

……流石に、今後は少しは自重しよう。そんな事を、アイコンタクトで話し合った俺達であった。

風邪って大変！（後書き）

如何でしたでしょうか？

……やっぱり二か月もブランクあるときついですね。

オリキャラの名前とか呼び方とか、すっかり忘れていましたorz
拓海&涼子&唯、マジで済まんorz

数話何度か読み直していたら、間に合わなかったDEATHORZ
今度は出来るだけ早く、もっと多く更新したいと思います。

予定には間に合わなかったけど、アノ表示は回避する事が出来まし
た。

どうやら、足掛け二か月経たないと表示はされないようですね。少
しホッしました。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

管理人の一日ver・朝（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

今回は多分、前・後編になるかと思えます。

では、今話も拙作を御覧下さい。

管理人の一日ver・朝

【管理人の一日ver・朝】

side：櫻井滂

「ん…………もう、朝…………なんだ…………。」

いつもの気怠^{けたる}い朝。今の時間は…………と、6：30、か。そろそろ起きないと。

管理人の朝は早いらしいけど、私はそれに比べれば少しは遅い方…………なのかもしれない。

どうやら昨日も亦、酒を飲みながら寝転けてしまったらしい。

髪はボサボサで寝ぼけ眼。このスッピン姿は流石に誰にも見せられない。

……………まあ、彼にだけは何度も間近で見られてしまっではいるけど。

そんな事を未だ覚醒してない頭で何と無く懐かしく思いながら、洗面所へと向かった。

蛇口の下に置いた頭へと水を掛け、そのまま顔を水だけで洗う。

その後、歯磨きをし、汗でべとついた身体を軽くシャワーで洗い流し。

これで大体七時頃。朝の早い人はとっくに出掛けている時間帯。

後残っているのは、あの大学生と、フリーターと言うかアルバイト？ の人と……。

彼……草薙孝介。まあ、本名は葛城なんだけど。

起き抜けだからか、何と無く未だお腹が空かなくて、箸を片手に外に出る。

どうやら、今日もピーカンいい天気らしい。……このネタ古いかな？

何て事を考えながら、気持ちの良い空気を目一杯吸い込み、少し頭をスッキリさせる。

何と無く気分のいい儘に、私の管理している『紫陽花荘^{あじやな荘}』の玄関口を掃く。

と、そうこうしている内に、誰かもう出掛ける様だ。おや、あれは……。

「おっはー。もうお出掛け？」

「あ、か、管理人さん／＼　は、はい！　これからがkk……大
学でしゅっ！　……orz」

朝一で出会ったのは、私に惚れている大学生だった。

どうやら本人は未だバレてないと思っているらしいが、

私は勿論のこと、全住人が周知している事実である。……可愛いな
あ。

因みに、彼本人は凡百ほんひゃくな顔付では無く、寧ろとても可愛い美少
年の類だ。

身長も恐らくは、私より10cm以上は低いだろう。……うむ、嚙
み方もとても可愛いらしい。

そんな真っ赤な可愛いらしい彼の顔を拝めた今日は、とてもいい一日
になりそうだ。

「クスクス……w 朝から元気だね〜 じゃ、行ってらっしゃい」

「は、はい……行って来ましゅ……orz」

どんよりとした影を背中に背負いながら出掛ける彼に又も萌えながら、手を振る。

すると、彼の機嫌も少し直り、ちよつと苦しいながらも笑顔になり出掛けて行く。

……うん、本当にそろそろ食べちゃおうかなあ？ でも、未だ早いかなあ？

……いやいや、さてよ？ 未熟な果実というのもそれはそれでそそられるものが……。

そんな朝に有るまじき不埒な事を考えていると、また一人下りて来た様だ。

「……… 澪さん。朝っぱらから一体、何を妄想してるんですか？」

「……でへへ……って、おや？ 見つとも無いとこ見られちゃったね、孝介君 おっはー」

「……… まあ、今更ですけどね。御早う御座います、澪さん。」

そう。元セフレの孝介君が真っ黒な学生服に身を包んで、自然に格好良く下りて来たのだ。

しかし、本当に彼には黒い服が良く似合う。彼の物静かな雰囲気に見事にマッチングしている。

「……………漣さん。だから、朝からそういう事は言わないで貰えます?」

「おりよ? 私、口に出してた?」

「ええ、一言一句漏らさずに。」

「……………ふむ。つまり、これは君の催m」掛けてません。「ぶ〜ぶ〜、つまんな〜い!」

どうやら、最近益々ツッコミのキレが良くなって来た様だ。

何と言ったか、彼の友達の、え〜と……………あ、涼子ちゃん!

彼女がちよつと前に、「ウチの立ち位置が脅かされるう〜……………orz」って嘆いてたっけ。

むむむ……………孝介君、恐るべし！

「……………はあ、また一体何を考えているやら。それより、俺はもう行きますよ？」

「はいはい さつきから、愛しの彼女に逢いたくて逢いたくてソワソワしてる孝介君？」

「……………ゴホン。ま、まあ、否定はしませんが／＼／」

「ふむ……………可っ笑しいなあ……………今日は冷えるって天気予報で聞いたんだけどなあ……………」

「何でこの一角だけ、妙に熱いんだろうねえ？」

「……………い、行って来ます……………！」

「はあゝい 行ってらっしゃあゝい」

孝介君を彼女関係で^{からか}揶揄う。これが、最近の私の朝の日課である。

彼女……………かがみちゃんって言ったっけ。ツインテールのととても優しい
そんな可愛い娘。

どうやら、御互いに本気でベタ惚れらしく、固有結界の発動は日常

茶飯事だ。

多分、固有結界の名前は、『アンリミテッドモウラヴ・ワークス 無限の糖分過多』だろう。

更には、どうにも未だ彼は私と話すのが気まずらしく、少し会話をぎこちなさが残っている。

だから、私も巫山戯^{ふんげ}たりおちゃらけたりして話し易い様にしてあげてるのだが、

どうにも蟠^{わだかま}りがまだまだ抜け切らないらしい。そこは子供というのが、男とさえばいいのか。

尤も、とても頭のいい彼の事だ。そんな事はとっくに理解しているだろう。

……本当に難儀な性格だ。まあ、それが又、可愛い所でもあるのだけれど。

そんな事を考えつつ掃いていたら、玄関口の掃除が終わっていた。

後残っているのは、午後からバイトのフリーター君と、

何の仕事をしているかはさっぱり判らない、どうみても十台前半な幼女の二十代後半の女性^{ひと}。

さつて。そろそろ私のお腹も空いて来た頃だ。ハムエッグにトーストでも焼くか。

今日は他にやる事も特に無いし………食べたら、のんびりとお昼寝^{スグ}でもしますか。

少しは寝て体力残しておかないとね。

何と無くくけど、今日は楽しそうな予感がするんだよね。

じゃ、オヤスミッ …… Z Z Z

管理人の一日ver.朝（後書き）

如何でしたでしょうか？

何と無く書いていたら、何時の間にか書き終わっていたで御座る…
…。

このペースでいくと、何かこの章が一番長くなりそうな予感が…
ま、いつか。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

管理人の一日ver・午後（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

今回は、前・中・後編の中編に当たります。え？ 増えてる？ こそ
まけえこと（ry

では、今話も拙作を御覧下さい。

管理人の一日ver・午後

【管理人の一日ver・午後】

side：櫻井澪

「ふわあ〜……っと。んにゆ？ ……一時、かあ。そろそろ起きよっかな。」

みんなお出掛けし終わって、私ものんびりお昼寝して、今起きた所。
流石に寝てばっかだと身体も鈍^{なま}っちゃうし、健康にも良くないしね。

「取り敢えず、洗濯機を回して……っと。後はゴミを出して、それから……え〜っと……。」

あ、掃除もそろそろしないとなあ……。残りは……帳簿ぐらいかな？」

先ずは今日のやるべきノルマを確認。意外と色々が残ってた事に驚

いた。

うむむ……昨日の内に少し片付けておくべきだったかな？ ……ま、いいや。

さっさと片付けちゃいますか！ そう気合いを入れて腕捲りをした。

ウーン……………ガタンゴトン……………ガタガタガタ……………。

え？ 何の音かって？ 『紫陽花荘』のオンボロ洗濯機の音ですが、何か？

「うむむむ、相変わらずいい音だね」

「やっぱ、こつこついう音聞かないと、洗濯した気にならないよね」

「……………私、それは貴女ぐらいだと思っの。」

「おる？ 依子さん。おっはー」

「……………おっはー。」

小鳥遊依子^{たかなしよしこ}さん。ウチに住んでる、どうみても十代幼女な二十代後半の女性。

でも、本人は可愛いと言われると暫く凹むので滅多な事じゃ言わない。てか、言えない。

私とは茶（酒？）飲み友達でもあり、実は、私と孝介君の関係を唯一知ってる女性でもある。

そんなピンク色の甘口リを着用している彼女は、可愛らしく両手を腰に当てながら、

呆れた声色で私に話し掛けて来た。……つまりは、いつも通りである。

「……今日はどうしたの？ 貴女、えらく御機嫌じゃない。珍しく精力的に頑張っちゃって。」

「ん〜……何かね。今日はとっても楽しそうな事がある予感がするんだ〜」

だから、時間のある今の内になんかやっところって、ね」

「……正確に言えば、それまでの時間を持て余して、手持無沙汰なので、

何かやってないとwktkが止まらない収まらない……って所かしらっ。」

「さっすが、依子さん もう何でも御見通しね〜」

はあ……と、又もや可愛らしく溜息を付き、更に呆れた声色で、

今の私の心情を事細かく説明して下さりやがりました。

「……貴女は特に判り易いもの。それにしても……どうして貴女の勘って、

愉快な事になると、そうも超常的レベルなのかしら？

最早、予知とか未来が見えてるとか、そんな次元よ？」

「それは言わない約束だぜ、とつつあくん。単に、私は楽しい事に目が無く鼻が利くだけよん」

「……誰がとつつあくん、よ。私はまだ2歳よ？　というか、女性なんだけど。」

の中は自分で想像してね？　そんな漫才をしてると、洗濯機がうねり声を止めた。

「あ、終わった。」と同時に言つと、御互いに顔を見合わせて、

何事も無かったかの様に、洗濯機の中から洗濯物を取り出す私達。

うん、何て息の合ったコンビネーション　今なら、ハットトリ

ツクも余裕ね！

「……私、サッカー嫌いよ？ ていうか、スポーツ全般嫌い。汗臭いし。」

「世のスポーツ少年達の爽やかな汗の素晴らしさを解らないとは……。」

おお よりこよ わからない とは なさけない。」

「……ここ、いつから教会になっちゃったのかしら？ ていうか、貴女は汗じゃなくて、スポーツ少年そのものが好物なだけでしょ？」

……性的な意味で。」

「……………てへぺろ（・く）？」

「……………何か、無性にイラッとしたわ。殴ってもいい？ 因みに答えは聞いてないわ。」

「ひぎい！？」

そんな漫才を繰り広げながら洗濯物を取り込み終え、掃除という名の作業に二人して移行する。

……………あれ？ ていうかさ。

「今更だけど、依子さ〜ん。今日はお仕事はいいの？」

「…………… 本当に今更ね。大丈夫よ。今日は有給取ったから。」

「そかそか、よかった。そんじゃ、頑張っておそ〜じしましょう〜か」

「…………… おー。」

そんな気の抜けた気合いを聞きながら、二人してごみを掃いていく。

何で、御掃除つて永遠に終わらないんだろっね？ メンドイよね〜

…………… はあ。

そんな風に溜息を二人同時に付きながら、せっせっせとお仕事を
している。

最後に残っていた一人が、盛大な欠伸をしながら、

いつもの浴衣着装状態で、のんびりと階段を降りて来た。

「おりよ？ 良雄^{よしゆ}さん、おっはー。今起き？」

「ふわ〜あ…………… お〜う、今起きだじえ〜。おっはー、お二人さん。」

朝から精が出るねえ……。」

「……因みに、今は昼過ぎだぞ、よっしー。序でおっはー。」

来生良雄^{きすきよしお}。見た目三十代前半ぐらいの年齢不詳のおっちゃん。

基本的に騒動が大好きで大好物な、非常に大迷惑な人物である。

駄菓子菓子、その分面倒見も良く、結局なんだかんだで根本的には良い人物である。」

「いやいや、澁ちゃんさ。それ、全部しっかりちやっかかり喋^{しゃべ}繰^くっちゃってるからね?。」

「え? 何それ、怖い。ていうか、私何もしゃべってませんよ? ねえ、依子さん。」

「……うむ。まあ、そういう事にしておこうか。なあ、よっしー?。」

「……へえへえ。女性にゃ、叶いやせんぜよ。」

「……へタレ男性乙。これが草食系か……しかも昼過ぎに起きて来るとか……ニート乙。」

「なんちゅー言い種……；……； つつーか、ニートちゃうわいつ！」

「……外に出かけもしないで、部屋の中で4545と金溜めしてる奴が、

ニートじゃなくてなんだと言うんだ、よっしー？」

「ひでえorz ちゃんと、株でウツハウ八だっちゅーの、全く。バイトだつて偶にしてるしさ。」

大体、それが恋人に向ける言葉かねえ、よっぴー。

つつーか、お前さんは全部知ってるじゃろがい。」

そう。実はこの二人、何と恋人同士らしいのだ。え？ それ傍^{はた}から見たら犯罪じゃね？

つて前に聞いたら、冗談抜きで以前お巡りさんに尋問されたそうなの。
ワラワラ
wwww

そして今、本人の口から出た様に、この人……何と株で大儲けしてて、

実は超超高級住宅街に、一生住めるぐらいのお金を既に稼ぎ終わってるとか、何とか。

……じゃ、なんでこんなとこにまだ済んでるの？ ていうか、私にその有り金、全部頂戴？

「「安いし、居心地がいいから。後、断じて否。」
「あざーっす！ ……ちっ（ボソッ）。」

……と言う事らしい。え？ 舌打ち？ ハテサテ、ナンノコトヤラ。
お金持ちばんざーい！

とまあ、そんな訳で、生きてくにはもう一切困らないから、
依子さんは、好きな仕事を好きなだけ、好きな様に出来るらしい。
テラウラヤマシス。

あ、そうそう。因みにね。

「万歳という表現は本来、皇帝や天皇、皇族のみが使える言葉なん
だよ。

それで、諸侯とか王侯貴族は千歳。その中でも特に偉い人は九千
歳って言ったの。

因みに、一般庶民は百歳ひゃくざいって言ってたんだって。

それと同じで、龍りゅうっているでしょ？ 想像上の動物。あれもしっ
かり決まりがあってね。

一般人が使えるのは三本指の龍。王侯貴族が使えるのが四本指で。
五本指の龍りゅうが使えるのは、皇帝や天皇だけなんだって。」

「「へーへーへーへーへー」」

「10へー頂きました。あざーっすー！」

とまあ、無駄知識を披露していると、何時の間にか掃除も或る程度完遂しており。

折角なので、良雄さんも巻き込んで、三人してごみを纏めていく。

「……………最近、物凄く煩いのよね、ごみの分別って色々……………はあ。」

と、三人同時に溜息を付きながら、せっせっせくのよいよいいとゴミを纏めていく。

「……………実は、普段の仕事より、こちらの方が重労働なんだけど、楽しいのよね。」

「おりよ？　好きな仕事させて貰ってるんじゃないっけ？」

「……………例え、どんなに楽しくて好きな仕事でもね。」

「……………嫌な事っていうのは、絶対に存在するものなのよ。」

「……………デスヨネー。今度、一晩突き合って愚痴聞いてあげるからね？」

「……ええ、御願いますわ。………ていうか、ちょっと待って。今、何かイントネーションおかしくなかった？ ていうか、絶対に漢字違ってたわよね？」

「え、気の所為じゃない？ ……ぐっふっふ……おっと涎が…」

「………やっぱり絶対違ってたわ。」

「大丈夫だ。俺はリリイは大歓迎だ。問題無い。てか、寧ろ俺もまぜて……プゲラ！？」

「……貴男には見えて？ あの死兆星が。」

「……バカカップル、爆発するよろし。」

「………貴女が原因ということ、一応解ってるのかしらね？」

矢張り、漫才は楽しい。特に気心が知れてる人達と遊ぶのが。

そんなこんなで、私達は仕事を終え。

バカカップルはこの後、ガチでシケ込むらしい。バカカップル、本当に

核爆発すればいいのに。

そして、私は一人寂しく、真っ赤な帳簿を今日も付けるのであった、
まる。

シクシク……孝介くん。早く帰って来て、私を愉なぐさめてませて……

side：孝介

「……（ゾクツ！ブルルツ……！！）！？」

「？ 何をしたの？ コウ。」

「……いや、なんでも、ない。うん、きっと、俺の勘違いだ。きっと、そうだ。うん。」

唐突に、激しい悪寒が背中を過ぎると同時に、何か物凄く嫌な予感

が湧き上がった。

突然震え出した自分に、どうしたの？ と尋ねて来たかがみに、大丈夫だと一応返したんだが、

彼女は、俺の様子のおかしさが気になって気になって仕方が無い様子だった。

「??? …… 本当にどうしたの? ……物凄い冷や汗まで掻いちゃって……。」

取り敢えずじっとしてて。今、汗拭いてあげるから。」

「あ、ああ、ありがとう、かがみ。」

「ふふ……別にいいわよ、これぐらい。……そ、その、一応、わ、私は、彼女、なんだし……」

「……ああ、そうだな。いつもありがとうな、かがみ。」

「……う、うん……」

side：三人称

そんないちやいちや振りを、目の前で何の恥ずかしげも無く平然と見せ付けられた、

バカップル双方のほぼ全クラスメイトは、背中に青紫の縦線を幾つも背負いながら、

呪いの言葉を延々と吐き続けた。

“バカップル、死ねばいいのに” と。

そんなバカップルと、遠巻きに眺めながら呪いの言葉を呟いていた
ほぼ全クラスメイトを、

更に遠巻きに眺めていた友人達が、誰よりも一番居た堪れなかった
のは言う迄も無い。

管理人の一日ver・午後（後書き）

如何でしたでしょうか？

ね？ 二話じゃ終わらなかつたでしょう？ あるえ〜？ おつかし
いなあ〜？ ……ま、いつか。

ひよっとしたら、全四話ぐらいになる鴨長明。かものちやうめい

因みに。よっしーが来生良雄。きすけりょうしゅう よっぴーが小鳥遊依子デス。たかなじよりこ 某ツン
デレゲームは関係ありません。

それと、個人的なイメージcvは、よっしーが堀内賢雄さん。ほりうちけんゆう
よっぴーがかねとm……いややっぱ、真田アサミさんでファイナル
アンサー。

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

管理人の一日ver. 夕方（前書き）

皆様、何時も拙作を御覧頂き、有難う御座います。

この度は、私事で大変御待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

詳細は私の活動報告に書いてありますので、そちらを御覧下さい。

さて。今回は、全五話の三話目に当たります。え？ 増えてるって？ こまk(ry

では、今話も拙作を御覧下さい。

管理人の一日ver. 夕方

【管理人の一日ver. 夕方】

side: 澪

「およ？ 唯ちゃんに孝介君、おかえり〜」

「澪さん！ ただいま〜」「只今、澪さん。」

二人が仲良く腕を組みながら帰って来たのだ！ …… 本当にこの兄ふ妹たち、仲が良いよねえ。

でも！ 今日はそんな事よりも、私には先に確認しなければいけない事があるのだ！

話を聞き出し易くする為にいつものアノ手を使おうと、私はしなを作って孝介君に迫ったのだ！

「ねえ〜、孝介？ 何か私に話、あるんじゃない？」

「うわっ！…！ 物凄く色っぽい声……。孝ちゃんが色香に惑わされる訳だ……。」「

「……人聞きの悪い事を往来で言うもんじゃないぞ、唯。」
「は、いい、ごめんなさい。でも、澁さん凄いな。何ていうか……
嗅覚的な意味で？」

「……全くだな。まあ、御察しの通り、澁さんに今晚御誘いの話がありまして。」

「なるほろ。今晚、私と孝介君がしっぱ」「違います。「ぶ、ぶ、ぶ、最後まで言わせてよ。」」

折角の私の渾身のギャグだったのに、言葉を途中で遮って下さりやがりましたよ、この男は!?

しかも、文句を垂れた私に浴びせて来る、その冷たい視線………
あ、やばい。

アノ時を思い出してまた身体が火照っちゃいそう／＼ そんな事を考えながら身悶えしていると、

唯ちゃんが苦笑顔になり、孝介君の吹雪が更に濃くなった。悔しい
でも感じちゃう／＼／＼／
……

「却下します。………それですね、御誘いと言うのは………
と言う訳なんです。」

「………ッッッ無しかい！ ま、いいや。ホムホム、ニヤるほ
ろ。」

要はパーティーをやるから、おいでませアルス邸へって事ニヤン？」

「……………ええ、ええ、まあ。大体合ってます、けど。」……………遷ニヤン、可愛い……………」

フッフッフ。私の魅力に唯ちゃんもメロメロみたいね。

後、そのドン引きしてるイケナイ男の子はちよつと説教が必要ね。

後で私がマンツーマンでとっくりとO H A N A S H Iしてあげましょう

「あ、そうだ。パーティーって事は、正装していった方がいいのかな？」

「いえ、普段着で構いませんよ？ 気心の知れたいつものメンバーで集まるだけみたいですし。」

「うん。それにボクの友達も加わるから結構大人数になりそうだけど。」

「了解かい んで、もうイクの？」

「……………イントネーションと表現方法を控えて下さい。まあ、そうです。」

各々準備が出来次第、アルス邸へと言う事になってますので。

俺は唯の準備が出来次第ですね。漣さんはどうします?。」

モッチのロン　こんな面白そうなイベント、この漣さんが見逃す訳無いっしょや!

当然、^{あそ}弄びに行かせて貰いますよ!　ええ、イカせて貰いますともさー!!

「そんなじゃま、折角だし御相伴に与ろっかな　あ、私も一緒に行くからちよつち待っててね。」

「はい。時間は未だ十分ありますから、慌てずにゆっくり準備して下さい。」

「ほいほい。そんなじゃ、また後でね。」

さあって。予感も的中した事だし　たっぷり楽しもう、愉しもう

side : 遷 in アルス邸玄関先

「うわっはあ！ やっぱおつきいね〜……。 」

「うんうん。 アルスはみんなで遊べる方がいい、 って言っておつきくしたらしいんだけど。」

でも、こんなに沢山普段来ないよね……。 セバスチャン達、 お掃除大変そう……。 」

「そだね〜……。 お掃除、 面倒だもんね〜……。 ハア。 」

「……………（はあ……………） 何時迄も玄関先で黄昏てないで、 中に入りましょう。」

もう既に何人が来ているみたいですし。 」

……………確かに。 中に何人かの人影が見える。 あの制服は……………孝介君達の学校のだよね？

ニヤルニヤル
なるなる。 どうやら何人かはその儘、 学校から直接此処へ来たみたいだね。

そんじゃま行きましようか。 と踏み込んだ私達を待ち受けていたの

は……！

……いやまあ、いつものメンバーだった訳なんだ
けどね。

side：透 in アルス邸内

中にいたのは、招待主のアルスに、渡君に真人君に執事さん達とメ
イドさん達。

それと、かがみちゃんとかさちゃんとかなたちゃんとかみゆきちゃ
んと涼子ちゃんと拓海君。

後は、多分一年生だと思われる子達が四人。うむむ……みんな、レ
ベル高いなあ。

「ゆーちゃん！ なみちゃん！ ひよちゃん！ パティちゃん！」

「あ、唯ちゃん」「……／／／」「や、やっぱ、その呼ばれ方、

慣れないツス……ノノノ」

「ノンノン。スベテはナレですよ、ひよりん」

「うう　ゆーちゃん、可愛い」　「はわわわノノノノノ」

あ……え、と……その……。」

「……うむ。」「Nice・Moe・デスネ」

私がそんな風に観察していると、唯ちゃんがおーいと手を振って名前を呼びながら、

一年生達の許へと駆け出して行って、一番小さい子に抱き着いていた。

……って、あの子唯ちゃんより小っちゃいの!?　……世の中って広いね。

そう感慨深げに思ってみると、アルスが唯ちゃんに接近して来た。

「唯。彼女が困ってますよ?　程々にしましょうね。」

「はーい。ごめんね、ゆーちゃん。」

「あ、いえ!　そんな全然!　わ、私は大丈夫ですから!」

「……ゆたか。無理はだめ。ちゃんと具合悪くなったら、私に言っ

て？」

「みなみちゃん……………うん。ありがとう、みなみちゃん」

「バカなっ！？ 私の萌えスカウターの数値が更に上昇していくだとい！？」

……………！？ 振り切れた！？ ………………な、何て恐ろしい萌え要素なんだ……………！！

「……………何やってるんですか？ 澪さん。」

「え？ あ、アレを見ても何とも思わないのかね、チミは！？」

「……………いえまあ、非常に可愛らしいとは思いますがね。微笑ましい友情だと思いますが。」

「……………ハア……………。本当に君は何も解ってないね。全く理解し難いよ。」

「……………そっくりそのまま、御返ししてもいいですか？」

「あれを只の友情と断ずるとは、君は本当に何も解っていない。今の世の中、同性愛は大分受け入れられる傾向になって来ていると言っている。」

「嗚呼、嘆かわしい。」

「……………（ガン無視かよ）それは流石に邪推し過ぎなのでは？」

本当にダメだこの子。早く何とかしないと。あの素晴らしい魅せモノが理解出来ないなんて！！？

全く……………人生の98%は確実に損してるね。

こんな可哀想な子と話してたら、お姉さん涙がちょちょぎれて真面に顔見れないよ……………うう。

「……………何故にそんな可哀想な子を見ている様な目で見られなけりゃいけないんだろうか？」

「ま、いいや。私もあの子達のところ行って遊んで来ようつと。」

「……………納得いかん。非常に納得がいかん。俺が可笑しいのか？
気にしたら負けなのか？」

何か可哀想な男の子が後ろでブツブツ言ってるけど、気にしたら負けだよ

てな訳で、私は美味し……………基。非常に可愛い子達と親睦を深めに行きましょうか

「アゝルス。御招待、あり。」

「矢張り、来て頂けましたね澁さん。いらっしやい。今日は存分に楽しんでって下さい。」

但し、飽く迄も良識の範疇で御願いますね。」

「はいはい、大丈夫夫だって。ちょくちょくつつと可愛い子のあじむ……いやいや。」

少し、その若さの秘訣を調べるだけだから。」

「……………早くも激しく不安で不穏な科白を聞いたのですが。(…
……………少し早まったか?)」

何故か冷や汗を流してる変な子は放つといて。取り敢えずは自己紹介自己紹介と。

ちゃんと当たり障りの無い様な内容にしないとね。……あ、今はギャグじゃナイヨ?

「どもども、初めまして。私は櫻井澗っていうの。唯ちゃん兄妹が住んでるアパートの管理人で、

孝介君……唯ちゃんのお兄さんの元セフレなの。宜しくね」

「つて、うおーーーーーいっつっ！！！！！

行き成り、何っつって事を口走ってるんだ、アンタは!?!?!」

「おろ？ 孝介君。かがみちゃん達と駄弁ってたんじゃないの？」

「ええ、ええ。今の今迄話してましたよ……！」

そしたら、どっかの誰かさんが飛んでも無い事を言い出すから、飛び出して来たんですよ！」

「何と言う地獄耳。」「あんだけ大声で自己紹介してれば、誰にでも聞こえてますよ!?!?」

てへぺろ（・く） だが私は謝らない。

そんなこんなで、三年生と一年生、それに私。

と、みんな揃ったんでもう始まるかと思ってたんだけど、どうやらまだみたい。

何かアルスが、まだ来てない人達がいるからもう少し待ってくれて言うの。

もうすぐ来るからって言うし、何より実は今日は金曜日で明日は学校はオヤスミ。

しかも、今日は泊まりな上、みんな一応ちゃんと親御さん達に許可貰えたみたいだし。

時間もあるし、それならって事で待ってたら………いやいやもう、ね？

本当にビックリしたよ、あたしゃあ。肝が冷えたって言うか、心臓が飛び出るかと思ったね。

……え？　で何があったのかって？　んゝ………どうせだし、折角だし、ね？

貴方達もいつその事、ヤキモキしちゃおう　てな訳で。

じがにへくくのじゃー!

管理人の一日ver. 夕方（後書き）

如何でしたでしょうか？

行き成り、澗によって一年生達にアレを暴露されてしまった孝介。

果たして、彼に挽回のチャンスはあるのだろうか!？

そして、澗ですらも肝を冷やす程の事態とは一体!？ ……まあ、多分バレバレだとは思いますが。

さて。これからどんどん、フラグを立てて少しずつ回収していきま
すよ〜！

では。今話も御覧頂き、有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2682p/>

Happy Star's

2011年7月25日09時44分発行